
マジ レボ！ ~剣と魔法と革命と~

星峰 月輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジ レボ！ ～剣と魔法と革命と～

【Z-IPアード】

Z0366Q

【作者名】

星峰 月輝

【あらすじ】

「あなたを迎えてきたのよ」

銀月の夜、物語は突然現れた銀髪少女との出会いから始まる。

戸惑う俺をよそに、謎な美少女は強引にとある場所へと導くのだが

……。

なんとそこには異世界にある学園の女子寮、彼女の部屋だった！？

平和系異世界リュミシアルを舞台に紡がれる、ドタバタ学園生活＆魔法バトルファンタジー。

さあ、まだ見ぬ世界で新たな一步を踏み出しゃ。

Prologue 0 - 1 【始まりと運命の銀夜】

Prologue 0 - 1 【始まりと運命の銀夜】

凍てつく冬夜の風に吹かれた俺を銀の満月が見下ろす。今宵は皮肉にも今まで見たこともないぐらい綺麗な満月だ。

「ほんと、神様からの嫌がらせだなこりゃ」

なんとも言えない黒い感情で心が染まる俺を美しい月が嘲笑う。ざまあ見ると。

とある丘、木々が生い茂る道無き道の先を越えたこの場所を、いつぞやつて見つけたのか自分でさえ覚えていない。

ただ星と月があまりにも綺麗に浮かぶこの夜天を拝みに来るのは、いつになつても“此処だけ”が俺の居場所である証拠だろう。

悲しきかな、そんな大切な場所で俺はついにしてかってしまったのだ。

「う、寒いな。やっぱ制服の上にコレだけまずかつたかね」

マフラーと手袋はもう2日着けずにこのままだ。凍える風に指の先まで赤く染まっているのはそのせいだ。う。

両手に感じる刺激は寒さを通り越してもはや痛みである。

近くに座れそうな平らな机を見つけて腰を下ろし、太腿の上でそつと両手を摩擦する。

古典的なやり方だが暖かい。そんな小さなことで一人笑みを浮か

べてみた。

「いやいや、普通に笑つていられる状況じゃないぞ。何やつてんだよ俺は……」

戒める気持ちで軽く右頬をつねり、さらに捻つてグリグリしてやる。

もちろん自分でやつても全然痛くないので意味が無いのだが。

よし作戦変更だ。落ち着いて大きく深呼吸。

今置かれているこの状況を、最初からよくよく整理するために。

「すう、はあー、すう、はあー」

俺を苦しめる冬の空気はどうとか新鮮で美味しい感じる。そしてろくな感触がない両手を口の前に持ってきて、白い息を吐き出す。

うん、やっぱり落ち着くには深呼吸が一番かも。

「あ、冷静になつたとこひどく早速独り語りを始めようか。俺のことは置いておいて、まずは魔法についてお話しよ。」

この地球という星にはマホウと呼ばれる技術が存在する。魔術とも言われるそれは、この世界で起こりゆる現象を人為的に再現できるのだ。

例えば道具を使わずに火を作り出したり、電気を起こしたり。他にも違う場所へテレポートしたり、空を飛んだりなどと、とにかく色々できる。

もちろん人は魔法が使えないでも、日常生活に支障はない。

実際魔法を使わずとも豊かだった過去の歴史がそれを証明している。

だから魔法はあくまで“使えたら便利なもの”と言つのが相応しいな。

しかし数百年前から発達した魔科学によって世界は変わった。

ありとあらゆる魔法は魔法構成式フォーミュラによってシステム化され、各団の都市部を中心に現代魔法は急激に発展していったのだ。

それこそ、魔法が使えないと満足に生活して行けないよソレ。

ちなみにちやんとしたステップさえ踏めば子供でも簡単に魔法は行使できるようになつていてる。

必要なモノは人の生命力であるエーテル、空間に満ちている魔力、そして行使する魔法のフォーミュラ。

この3つを組み合わせるだけ。小学生レベルで教わることだ。

エーテルで魔力を統制し、魔法構成式を元に魔法を行使する、といつた具合に。

とにかく人間なら誰でも使える魔法ほど簡単で便利なものはない。結果的に魔法と魔科学の発展は人々の暮らしをより良いものに変えたのだ。

俺の住んでいる日本も、当然例外ではない。

それを前提にやつと俺自身の話へ繋げられ。

そんな素晴らしい世界で面白いことに“俺だけ”が魔法を使えない。

何十億人もいる人間の中で“俺だけ”な。

言い忘れたが御剣ミツルギ 拓磨タクマ、俺の名前だ。

名前のとおり日本人で都市部の中に住んでいる16歳。

魔法を使えないことの理由はいたって簡単。エーテルの生産量が極端に少なくなったこと。

「察しのとおり俺の作り出せるなけなしのエーテル量じゃ、魔力の制御ができずに魔法が使えないという具合だ。

しかしそうなった理由が未だによく分からんだけだな。
4年前の誕生日ぐらいに気付いたらそうなっていた。

詳しく思い出そうとしてもその辺の記憶は曖昧だし、なぜか酷い頭痛に襲われる。

まるで呪いにでもかけられたかのように。
もしくは今夜のように神様の嫌がらせかもしれないけど。

とにかくも、そんな俺の扱いを想像するのは難くないだろう。
比較的イレギュラーな俺の存在は、全世界に公表され嘲笑的となつた。

そりやそうだ。人類に1人の超欠陥人間だからな。

いや、そうじゃないか。

正しくは『人の姿した下等動物』だつたけか。まったく酷い話だ。

全国テレビで本当にそう取り扱わてたんだからな。

そんなこんなで友人はあつという間にいなくなり、両親には家の恥だのなんないと罵倒されるよつこ。

『何かヤバい黒魔法を使ったからそつなつたんだ』つていう当時の噂は今なお健在。

無論俺はそんなことほしていない、と信じたい。記憶ないけど。

それでも変わらず接してくれたのは慕つてくれる妹と付き合つが長い奴らぐらい。

だが中学に上がつて物心付いた妹は次第に俺を嫌悪するようになり、古い友人たちも俺を見限つて離れて行つた。

仕方ないといえば仕方ないんだけど、やっぱり寂しいな。

家や学校は生きるために最低限の世話はしてくれるが、やはり落ち着いた居場所にはできない。

そもそもこの世界に俺の居場所となる場所があるのかも怪しいものだが。

……もあるのだとすればこの場所ぐらいいだろうか。

さつきも言つたが、ここから見上げる星空は本当に最高だ。

だが今夜はあまりいい気持ちで夜空を見上げることはできない。なぜなら隣には、3人の男たちが息をせずに倒れているのだから。

・

転がる死体にはどこにも外傷がない。

当たつたのは鉛玉ではなく、実体を持たない魔力そのものだから

なのだわい。

「つたくお前らはいつも人を馬鹿にしすぎだよ」

返事が返つてこないのを知つていて俺は宙を睨んで語りかける。自分のしでかしたことを釈明するようにな。

「急に刃物を向けられたら、普通こうじちまうだろうがよつ！」

月と同じく白銀に輝く護身用の魔銃は見事にその役目を果たした。改造に改造を重ねて作ったこの魔銃は、ほんの僅かな魔力を装填するだけで強大な魔力弾を放てる。

「……なんでだよ

俺は人を殺した。自分自身の手で。

もちろん俺は人を殺すことで快感を得る異常者じゃない。それ人に向けて撃つたのはこれが初めてだからな。

間抜けな顔をして死んでる金髪の男を改めて見るが、どこからどう見てもやつぱり知らないヤツだ。

ただ脅かして面白がるだけのつもりだったのが、コイツらはここに向かっている俺の後をつけてきたらしい。

情けないことに後ろから声をかけられるまで気付かなかつた。

品のない声に振り返るとそれはもう見るからにチンピラだ。

わざわざこんな時間まで相手をしてくるなんて相当な暇人なのだわい。

相手にするのも嫌なので、俺は適当に聞き流してさっさとその場を離れようとした。

が、その味気の無い反応が癪にさわってしまったのか、この方々はいきなりナイフを取り出して襲ってきたのである。

後はもう説明する必要はないだろう？

少し魔力を集めて引き金を引くだけ。その作業の3秒後にはもう事切っていた。

それが數十分前の出来事で、どうじょうかと今に至るわけだ。

もしも4年前、力を失つていなければどうなつていただろうか。

俺は魔法が好きだった記憶がある。

友人と魔法構成式の暗唱を競いあうのが好きだったハズだ。
それだけじゃない。妹が、両親が、友人が、先生が、街の人も、
みんな大好きだった。

きっとそれはずっとそのまま変わらないはずだったのだろう。
そして今みたいに人に殺されそうになることも、殺すこともなかつただろう。

「……俺はもう、全部失くしてしまったんだな」

生きるための信念も、仲間も、本当に全部な。
でもそんなことに気付いたのは別に今の話じゃない。

誰かが1人、また1人と俺の元から消えて行くたびに。
1人でこの丘に足を運んで夜空を見上げるたびに。

「の悪意に満ちた世界で一歩ずつ歩み出すたびに

とつへこ氣付いてたさ。そんなことね。

「俺の人生、お先真っ暗。一寸先も闇ばっかりだよ

捻り潰してやりたくなるほどに綺麗で。

神様の嫌がらせにしか見えない銀月に向かって言い捨ててやった。

「そう、それはとても悲しことね

「 ッー?」

それに答えるよつに、不意に少女の呟くような声が聞こえた。
驚いて振り向くとやっぱりそこには一人の女の子が立つていて。
不自然すぎるぞオイ、何で女の子がこんな場所に。

少女は地面に倒れる男達を一瞥すると、今度は魔鏡を握る右手に
力をいれる俺の瞳を覗き込む。

「それにしても今宵の旅立ちには最高の銀月じゃないかしら?

溢れる月光を短い銀の髪に浴びながら、彼女は静かにそう告げる
のだった。

ああ、神様。アンタは相当俺のことが嫌いらしくな。

- Coming Soon Next Story ! -

Prologue 0 - 2 【異界への誘いと】

Prologue 0 - 2 【異界への誘いと】

「それにしても、今宵の旅立ちには最高の銀月じゃないかしら？」

そう言い放つと少女はこちからに歩き出す。

倒れる男達には全く興味を示さず、澄んだ紫の瞳には俺だけが映っていた。

なんだチャンペーンたちのお知り合いじゃないのか？

俺と同じ黒いローブを中途半端に羽織る彼女。

この辺りでは見かけぬ制服を、その黒衣の隙間から覗かせて。

妹よりも背の低い少女は揺れる銀髪で月光を誘う。

その月光ではっきりと顔を確かめるが、なんとまあ皮肉なこと。

凛々しいその顔立ちは美少女そのものだった。

「悪いけどそれ以上近付かないでくれるか？」

動けば撃つぞと。

俺はついに美少女に魔銃を構えていた。まるで悪者みたいに。

「……それは冗談かしら？ 笑つてあげるわ」

言い放つ俺に不気味な笑みを浮かべ、ゆつくつと。

少女は立ち止まる素振りを全く見せず、こちからに進み続ける。

……おこおこアンタの冗談は一向に笑えないぜ！？

「てめえ 本当に撃つぞ、止まれ！」

「なら、撃てばいいじゃない？」

田を見開き、声を荒げた俺の警告を鼻で笑つ。

そんな勇気があるのか？ と。

「 ザケンナヨツ！」

そんな安い挑発に乗せられてしまった俺は、辺りに浮遊するありつたけの魔力を装填してトリガーを引く。

もちろんすぐに『ああしまった』と後悔することになった。これであんな少女にまで手をかけることになってしまったのだから。

ほんの少し動けなるほどに加減すればよかつたのに。いくら魔力の制御ができない俺でも、それくらいはできたはずだ。

クソツ！

……本当に、俺は駄目なヤツだな。

奥歯を強く噛み締めながら、俺は銀髪の美少女からさつと田を逸らした。

どんなに後悔したところでもつ遅いのだから。

俺の放つた無色の魔弾は少女の左胸に一直線。

そして命中。

後はそこに転がるチンピラどもと同じように死ぬだけだ。

「 残念無念。あなたの負けよ」

そのはずなのに、到底信じられない声が。冷たい風に乗つて耳に届いた。

「あなたの扱えるどんな力でも、今の私には届かないのだし」「なつ！？ そんな」

そんな、馬鹿なことが…？ 視線を彼女に戻して驚愕する。

何事もなかつたかのように苦しげな表情は一切なく。それどころか軽口を吐き、無傷の体を披露して見せたのだから。

魔法壁で防いだのか？ いやいやいや……。

一瞬である魔力弾の威力を完全に無効化するほどどの障壁つてもしそうな『トイツ』は只者じゃないぞ！？

どんなに安く見積もつても国家魔導師クラスは確実だ。こんな少女がなんて信じがたいが、そう考へざるを得ない。今度はさつきとは違う意味で『ああしまつた』と思つた。

こんな娘を見せつけて、神様は俺にどうさせたいのだろうか。

そんなことを思考している間に、少女はすぐ目の前にいた。手を伸ばせば届いてしまつ距離にまで。

「くつ……」

言葉が出ない。こんなに寒いところのに額に汗を感じる。

「そんなに怖がらないで欲しいものね。別に私はあなたに危害を加えに来たわけじゃないわ」

落ち着いた少女の声に初めて、さっきから感じた不思議な感覚が恐怖だと気付いた。

「あ、あなたは何者？……俺をどうするつもりだ？」

俺は少しずつ冷静になり言葉を繋げていく。
それを聞いているのかいなかが、銀髪少女は俺の瞳をじっと見つめ続けていた。

「あなた、やっぱり覚えてないのね？」

彼女の口から問うの答えではなく、よく意味が分からぬ疑問文が返ってくる。

ハテナマークを浮かべる俺に一瞬少女は表情を暗くするが、すぐに顔を上げて言葉を続けた。

「私の名前は冬靈。あなたを迎えて来たのよ
「トウカ？」

全く知らない名前だ。って、それより凄い問題発言じゃないのか今のー？

怪訝な顔を浮かべて俺は少女の言葉の続きを待つ。

「ああ、”冬の靈”でトウカよ。由来は
「ちづえよそつじぢやなくてー」

何故か自分の名前について語り出したトウカを止める。俺が今訊きたいのは……。

「俺を迎えて「ひづり」となんだよ?」

「リリス学園長はあなたを“改变者の鍵”と言つたわ」

大変だつきから会話がキャッチボールじゃない!?

「すなわち私たちに必要な存在。だから私が迎えに来た」

「改变者、鍵? 」この娘は本当に何を言つてゐんだ?

トウカの口から出される単語でさらに頭が混乱してしまひ。

「何を言つてゐるのか分からないと言いたげな顔ね」

「うつ……、確かにそうだが当然の反応だと思つぞ」

だつてもう会話のドッジボールじやないか今の。
しかも俺の質問スルーされてるし。

「大丈夫。もつと詳しい説明は、“向ひ”で嫌といつほど聞くことになる」

「おい、だからどこの連れて行く気なんだ?」

「……そうね」

今度はちゃんと答えるよと再度質問する。
すると銀髪少女は、トウカはありえないことのりを指した。

「え、月?」

「クククと頷くトウカさん。んなアホな。

アンタは月から来たというのですか？

「あなたは何もする必要はないわ、そこに立ってるだけでいい。私の転移魔法と一緒に向こうまで飛ぶから」

「ちょ、ちょっと待て！俺はまだ行くなんて一言も」

「残念ながらあなたに拒否権はない。それに、まだこんな世界にいたいと思うの？」

「…ツ！？」

少女の凍るような言葉が俺の心臓を貫いた。

俺の動搖を知つてか知らずか少女は構わず続ける。

「あなたは言つた。全て失つてしまつた、一寸先も闇と。何か思い残すことでもあるのかしら？」

「…それは、でも」

「どうしても抵抗するなら、力づくでも連れていくわ。ちなみに私、かなり強いわよ？」

「わ、分かつた！ 行くよ、行けばいいんだろ！？」

再び不気味な笑みを浮かべる少女に、俺はそつ答える」としかできなかつた。

彼女の言つことは的を射ていたし、第一勝でないと確信していたのだから。

俺の返事に満足気に頷いた後、

「準備があるから少し待つて」と少女は満月に向かって何かを呟きだした。

足元に小さな白の魔法陣が展開するとこりを見ること、どうやら本当に転移魔法を詠唱しているようだ。

当に転移魔法を詠唱していよいよだ。

……マジで月に連れて行かれるのか、俺？

あれから30分ほど時間が経つた。

俺は先ほどまで座っていた岩に腰掛けて銀髪少女を見守っている。さつきから逃げる絶好のチャンスなのだが、なんだかとてもなく嫌な予感がするので実行に移せない。

だつてもし捕まつたら……。想像したくない。いひんな意味で白い溜息が出た。

その時、銀髪少女が『終わつたわ』と小さな声で呟く。何が終わったとはもちろん“行く準備”のことだろう。結局俺は逃げ出せずにトウカの元へ足を進めた。

「なあ、ほんとに月に行くつもりなのか？」

案外真剣に尋ねた俺を、トウカは呆れた顔をして睨んだ。

「あなたばバカなのかしら？ 月に酸素はないわよ」「いやそれは知ってるけど！？」

「何を勘違いしてるのかは知らないけど、目的地は月じゃない

うん？

「なんか話が違うな……。アンタさつき月を指差して頷いてたじやないかよ？」

「残念。それは月を、月光を利用するという意味でしたとさ」

「酷いジョークだな」

わざわざのは狂言だつたみつで、ビーフやら行き先は用ではなこらし
い。

とりあえずハハハと笑つておく。

「で、用じやないとすれば結局何処へ？」

アメリカの国際魔術機構、ヴァチカンの星煌庁。

他にも俺をオモチャにしたい魔術結社なんて腐るほどある。
一体この銀髪少女トウカはどこの使者なのだろうか。

「私たちの住む世界は地球とは違う次元体よ
「へえ」

コイツまた狂言を。

確かに月光にはかなりの量の魔力が附加されていると聞くけれど。

「次元体を超える転移魔法は莫大な魔力を消費するの」

「お、おい？　お前本気で……」

そう言つてトウカは俺の両手を握り、目を瞑つて魔法構成式の詠唱を始めた。

ちょっと待てよ。まだ俺は納得がいつていなぞ。

今の説明じや、まるで異世界にでも連れて行かれるみたいじゃないか！？

「冗談にしか聞こえない内容だが、そこにしか聞こえない。
こんなヤバい状況、普通ならこの手を降り切つて逃げ出すだろ？」

だが人間とは不思議なもので。

そんな恐怖心より俺の心の奥ではどこか嬉しさがあった。

そうかそうか、俺はやはり待ち望んでいたんだ。

こんな少女がどこか知らない世界へ連れ出してくれる日を。

だつてそうだらう？ 俺はとっくの昔に気付いてたんだから。

この世界に俺の居場所はどこにもなく。

助けの手は差し伸ばされず。それ求める手は届かない。

全てを失くして孤独にただ孤独、月光が降り注ぐ星空に嘆く。

そんな悪意に満ちた世界から逃げ出せる、これは神様が俺に与えてくれた最高のチャンス。

ハハハツ、なんだ神様アンタ実はツンデレだったのか？

「……開け、フィア・ポータライズ銀月の光扉」

詠唱を終えたトウカが最後に魔法名を唱えた瞬間、いつの間にか地面に描かれた銀色の魔法陣は光を放ち、俺の視界を完全に白く覆い込んだ。

この夜この瞬間、御剣拓磨は地球上から失踪した。

正確にはこの次元体から別の次元体、つまりは異世界へワープしたのだが。

全ての真実を知る者は地球上に誰一人存在しない。

『人間以下』の失踪は世界的に大きく取り上げられ、世界規模で搜索魔法が行使されたが当然その居場所は掴むことができなかつた。よつて数週間後、国際魔術機構は『御剣拓磨の死亡』を公表することになるのだった。

・
・

「ああ、着いたわよ」

彼女の声と同時に眩い光が消えたのを感じ、ゆっくりと目を開ける。

「なんだここ?」

最初に気付いたのは気温。

2月になりますます酷くなつた冬のそれを全く感じない。そして身に染みる冷たい風もその姿を消していく。

まだ目がはつきりしないのでよく見えないが、さっきまでいたはずの星夜の丘ではないようだ。

「なんだとは失礼ね。私の部屋よ」

だんだん視界がもとに戻るのも重なつて、この空間が小さな部屋だと認識する。

「おお、ぬいぐるみだらけだ

タンス、机、ベッド。

家具のあちこちに可愛らしく並べられたぬいぐるみ。

それは今想像した銀髪少女の自室のイメージとは随分違っていた。

「ちょっと、あんまりジロジロ見ないでよ」

握りつぱなしだった白く小さな手を静かに離し、トウカは目を細くして釘をさす。

「あ、ああ。悪い……」

いや女の子の部屋なら普通こんなものなのかもしけないが、俺にとつて彼女は未だ不審者かつ恐怖の対象なのだ。

いや、もつと恐ろしいところなのかなと。深くは言わないけど。そんな想像に反して割と可愛らしい少女の部屋に俺は困惑していた。

冬霞。
トウカ

彼女は俺を迎えてきたのだと言つ。

その理由も色々言つていたが、正直などこか意味不明だ。

もし彼女の説明を単純に信用すれば、ここは異世界といつていいなる。

次元を超えた地球とは異なる世界！

……今更だが実に胡散臭い話だ。

そもそも異世界なんて存在するのだろうか？

どこかのアニメやら小説やら、数百年前から人間が夢に描いてい

る世界。

正面にある桃色のカーテンの間から少し外を眺めてみる。外が暗いのでよく見えないが、どうもそういう雰囲気じゃない。

「「」、本当に異世界なのかよ？」

彼女の転移魔法を使って辿り着いたのは、日本のどこのドームもあるような普通の部屋だった。

「間違いないわ。」「はリュミシアル魔法学園第3女子寮」
しかしトウカは黒いローブ片付けながらそう言い切った。
躊躇いなく答えるその様子に信じてしまいそうになる。

「リュミシアル？ 聞いたことない学園だな。……ん？」

「」「はリュミシアル魔法学園第3女子寮よ」

「」「寧にリペートありがと。おかげで大変なことが分かつたぞ」

仮に百歩譲つてここが異世界だとしても、今の彼女の言葉には指摘せざるをえない文句があつた。

「『まだ言つた』とトウカは右手の人差し指と中指を俺の口前に添える。

「大丈夫、私は寮長。男子であるあなたに今夜限りの居住権を与えるわ」

『言つてやつたぜー』と言わんばかりのしたたり顔である。
お前寮長なのかなよ。つか寮長にそんな権限あるのか？

「そんないい加減な」

「今夜はもう遅いわ。とりあえず今夜はソリソリ寝なさい」

「は、えつ、ここですか！？」

「ええ、そのソファーと毛布使つていいから。じゃねやあ～

「お、オイツ！？」

トウカはそういう言い放つとベッドに身を投げる。

信じられない展開に慌てて聞いてただそうとするが

。

「スウ」

ね、寝ていらっしゃる……。『おやすみ』じゃねえよ。
つかそのまま寝たら確実に制服皺になるぞ。
こんないい加減なヤツに着いてきて本当に大丈夫なのだろうか？

ま、いいが。確かに今日はもう疲れてしまった。

彼女のお言葉に甘えてカーテンの前のソファーに向かつ。

「……ん？」

その時、心地良さそうに眠る少女の寝顔を見て立ち止まる。
あれ？ 僕コイツをどこで見た事あるような……。

そういえばひとつもコイツは。

『あなた、やっぱり覚えてないのね？』

そうだ、確かにトウカはそう言った。でも……分からん。
何か引っかかるけど思い出せない。

部屋の明かりを消してから黄色のソファーに横たわる。少し狭いが寝られないわけじゃないな。

トウカと名乗る謎の少女との出会い。

この少女に導かれるまま、無理やり連れ出された。

いや違うか、喜んで逃げ出したんだ。
本当に俺はどこまでも弱い。

そんなことを思いながらゆっくりと深い眠りに落ちる。
この夜から御剣拓磨^{オレ}の運命が急速に加速するなんて、夢にも思つ
はずがなかった。

・
・

これは2人が部屋に着いて数分後の出来事。

深夜の学園塔、その学園長室に1人の青年が現れた。

「学園長、冬霞^{トウカ}が彼の回収に成功したようです」

トウカと同じ銀の、そして彼女よりも若干長い髪。
背は高く、彼のメガネは整ったその顔によく似合つ。
彼は部屋の奥で窓から外を覗いていた黒髪の女性にそいつ告げた。

「ええ、無事に連れて来てくれたみたいですね

「はい、特に問題はなく」

「あなたたち兄妹とは4年ぶりの再会になるのかしら？」

学園長と呼ばれた女性は青年に向を直ると微笑つて微笑む。

「……明日はしっかりお願ひしますよっ。」

青年はあえて質問には答えず、代わりに大きな欠伸をする。もう時計の針は日を越そうとしていた。

「こんな時間までお仕事」「苦労様。副会長さん」

「あなたほどではありません。では失礼」

スマートにそう返して彼は学園長室を出た。

残された女性はそれを見送つてから、再び窓に近寄り外を眺める。

「よつこじ私たちの生きる世界へ、御剣拓磨クン」

彼女は静かにそう呟くと、今は眠れる夜の学園を見下す。透明なガラスの窓には彼女の優しい笑みが映つていた。

M a g i c a l R e v o l u t i o n

P r o l o g u e S t o r y E n d . . .

- C o m i n g S o o n N e x t S t o r y ! -

Ep.1-1 【男子禁制な場所から】

Episode 1-1 【男子禁制な場所から】

「……朝よ起きて。つか起きろっ」

誰かがそう言いながら俺の肩を静かに揺らす。

ゆっくり目を開けると、銀髪の美少女がそこにいた。
言わずとも昨夜に現れた冬霞トウカである。

大きな欠伸をする俺を横目で見ながら、彼女は「おはよっ」と挨拶をしてきた。

「おはよ。 そうか、昨日のは夢じゃなかつたか」

次第に寝起きの頭が回転を始め、改めて部屋の中を見回す。
桃色のカーテンは全開、薄くも暖かな朝の日差しが部屋の中に差し込んでいた。

異世界にも太陽は昇るんだな。

「私とのあんな素敵な夜を夢にしたいなんて酷いわ」「朝っぱらから変な言い方するお前のほうが酷いよっ！？」

タチの悪い軽口を突つ込みつつ、いい加減ソファーから起きて少女の横に立つ。

彼女は昨夜と変わらず制服姿だったが、不思議なことにシワが見られない。

ひょっとして人が寝ている間に着替えたのだろうか？

「何をジロジロ見てるのかしら？ 御剣拓磨」「ん、いや別に何も。 つてオイちょっと待て」

言葉の最後に付け足されていた名詞に違和感を抱く。

「名前、アンタに名乗った覚えは無いんだが」

そもそも彼女からは訊かれていないし、俺も自己紹介をするほど昨夜は落ち着いていなかった。

「クスッ、気になるね」

「そりやまあ、結構気になるぞ？」

正直にそう答えると、銀髪少女は俺の耳元へ口を近付けてきた。小声じゃないと話せない内容なのだろうか？ 俺は自然に目を閉じトウカの言葉を待つ。

「まだ秘密にしておくわ」

小声でもなんでもない普通のボリュームでそう呟かれた。こいつちは肩透かしを喰らい、思わず転びそうになる。

するなよ！ マジで気になるじゃないか！ ？

結局、なぜ彼女が俺の名前を知っているかは謎のままだった。話してくれそうにないので仕方なく諦め、また部屋を見回す。

「あつ、そういうえば……」

カーテンが開けられた窓を見て、確かめたいことを思い出した。

俺は透明な窓へ近付き、昨夜確認できなかつた景色を覗く。

「おおっ

「

深夜の闇に包まれていた世界は、今見渡す限りに広がつていた。
こいつの、どんな風に表現すればいいのだろうか？

まず最初に目に付いたのは巨大な建物、複数形だ。
ここから少し離れているように見えるが、それらは圧倒的な存在感で『ここが世界の中心です！』と血口主張していた。

つまりはそこまで圧倒的で立派な建物だつたのだ。
奥のほうには時計塔のようなものまで見える。

ここが学生寮ならば、アレはやはり学園と考えるのが妥当だらうか？

「あれがリュミシアル魔法学園よ。ってかいつ見ても無駄に大きいわね」

いつの間にか真後ろに立つていたトウカがそう教えてくれる。

なるほどなるほどやはり学園らしい。

そして呆れ氣味に彼女が呟くよに、無駄に大きい。

俺が通つてる総合魔法学校もかなりの規模だつたが、そんなもの比じやないぐらいだ。

「それに学園を囲むよにして学生寮があるわ。ここもその一つよ

「ふーん、ここ的学生はみんなそこに？」

「大体はね。たまに自宅から通つてるのもいるけど

彼女の話に耳を傾けながら、蒼く晴れた空と学園を眺める。見たことない蒼穹。そして壮大な学園。

「案外本当に異世界みたいだな。なんだか雰囲気が違う気がするよ」

窓外の景色は俺をそんな風に思わせるのに十分だった。
まったくどうして、こんな力に溢れている場所が地球にあるだろうか？

「ぐどい、何回もそうだと呟つてるわよ？」
「わ、分かったよ。信じるわ」

流石に鬱陶しく感じたらしいトウカにそう答えた。
ここが本当に異世界かは、外へ出れば分かることなのだから。

「……とにかく、これからどうするんだ？」俺
「子供がアンタは。そんなの自分で考えなさいよ」

ベランダの窓から離れ、俺がさつきまで寝ていたソファーに座る
銀髪少女。

呆れた顔の彼女を見て「確かにそうだな」と思つたが。

「ゴメン、ちょっと無理だわ。マジでどうすればいいのか分からん
当たり前だ。右も左も分からんのにどこへ行けど。

「ふふつ、冗談よ。あなたは私に着いて来ればいい」

澄ました顔をする彼女に『どうして……？』と訊いたが、

俺の心中を見透かしたように銀髪少女が先に答えた。

「行き先はリュミシアル魔法学園、その学園長室よ」
「はあ、なんでまたそんな所へ？」
「私にあなたをこの世界へ連れてくるよつたのは学園長だもの」

「コイツを俺のところに向かわせた人か。

何の目的でかは知らないが、黒幕っぽいのは確かだらうしな。

「よし了解、さつと行くぜ」

俺は大きく深呼吸してからそう言い放つ。

机に置かれたクマが抱えている時計は、ちょうど七時を指していた。

・
・

「……どうしたの？　お腹でも痛くなつたのかしら」

ドアノブを持つ少女は不思議そうに俺の顔を見て尋ねる。

俺は部屋の真中で立ち止まっていた。

それにはある一つの不安があつたからだった。

「ちげえよ。ここ女子寮なんだろ？　男が出歩いて大丈夫なのか気になつてな」

そう、何を隠そうここは女子寮らしい。

もしそうなら間違いなく男子禁制のハズだ。

男に人権はないのは考えるまでもなく、もし見つかって騒ぎにでもなれば……。

い、いと恐ろしや。

「もちろん普通は大丈夫じゃないけど、寮長である私の隣を歩けば問題ないわ」

いや不安すぎるし。だって俺が女子でも叫ぶと思うしな。
朝から女子寮に見知らぬ男が、例え寮長の隣を歩いていたとしても。

「つかこんなことでビビるな見苦しい」

「ちょ待て。だ、誰が、ビ、ビビビビってなんかいるかつ！？」

……全力でビビっていた。いや、だってねえ？

「なら、ほら。さつさと行く。時間の無駄は嫌いなの」

そんな俺の心配を完全に無視してドアを開けるトウカ。
……仕方無いか。どうせ俺に拒否権はないのだから。

なぜか玄関に並べられていた俺の黒靴を履き、彼女に次いで部屋を出る。

閉められた扉の上には『444』とあった。
日本じゃ不人気すぎる番号のゾロ目である。

……ひょっとしてワザとだらつか？

「ん~、トウカ？ 朝早くからどうしたの~？」
『 ッ！？』

変な考察をしていると、急に後ろから声が飛んだ。
寝起きなのかフリル付きの可愛らしいパジャマを着た少女。
少し癖のついた薄いピンクの髪がふわっと揺れる。

「え、ひつー？」

そして数秒後には狼狽気味な声を上げられていた。

女子寮に存在してはいけない男。

それを偶然目にしてしまったショックで、少女の眠氣は一瞬で飛
んでしまったようだつた。

「な、ななんんで、おおお男の人があつー？」
「げつ、ミアじやない……。アンタちょっと今は空氣読みなさいよ」

空氣読むのはお前だろ。つか何が大丈夫だオイ。
あーあどうすんだよこの状況。どうも2人は知り合いらしいが…。

「ちっ、ここの辺が潮時か。なるべくこの手は使いたくなかったのに
オイまだ部屋を出てから1分も経っていないぞ。
どう考へても早すぎるだろお前の潮時。
寮長様の横に歩いていれば大丈夫じゃないのかよ……？」

混乱する//アラしき名前の少女に舌打ちすると、トウカは俺の右

手を掴んで……。

「緊急事態ッ！ 今からここを出るまで全力で、走るわッ！」

「…………うつそおだらおつー？」

あらう」とか桃色少女を置き去りにして走りだした。

右手をしつかり握り締め、廊下の中央にある階段を一気に駆け下りる。

トウカの部屋の番号からして恐らくこれは4階だ。嫌な予感が……。

「ちょっとおま……、危なッ！？」

なにこの娘めっちゃ力強いし速い！？

男の俺が引きずり回されてるなんて。

「黙つて走る御剣拓磨。誰かに見つかったら大変よ？」

「もう見つかってるわバカッ！？」

部屋を出た時間が早かつたのが理由なのか、結局あの少女以外には誰にも気付かれずに寮から出ることができた。

そして足を踏み外して怪我をしなかったのは本当に幸運だと思う。ただ

「…………舌噛んだんだけど」

「か、完璧ね。騒ぎを起す前に出られたわ」

肩で大きく息をしながらそう言つ銀髪少女。

それと同じ状態かつ舌が痛い俺は、もう文句も言つ氣になれなか

つた。

その後2人並んで学園へ歩き出す。トウカによれば15分ほど歩けば着くらしい。

時折チラチラと視線を感じて見返せば、トウカは直ぐに目を逸らす。

「どうした?」と聞いてみると、「別に」の一点張りである。

最初からあまり良いものではなかつたが、この時の銀髪少女との雰囲気は少し気まずかつた。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.1-2 【リュミシアル魔法学園】

Episode 1-2 【リュミシアル魔法学園】

寡黙なトウカと石畳の道を歩くこと数分後。

既に俺達は学園長室があるという立派な学園塔に入り、その最上階の廊下をコツコツと歩いていた。

この階の下には学生会室や職員室があるそうだ。

つまり学園の中心部と言ったところだろうな。

だがそんな所にまで来ているのに、寮を出てから誰一人ともすれ違わない。

まあ寮を出たのが7時ちょっとすぎだったからな。

歩いて15分の距離なのに、そんな早くから教室へ向かうヤツはそういうのだろう。

時間がギリギリでも、いざとなれば転移魔法があるし あつ。

「なあ今氣付いたんだけど、どうして転移魔法使わなかつたんだ?」

今更ながらそんなことを訊いてみる。

わざわざ女子寮の中を全力疾走しなくて、それを使えば誰にも気付かれずにここまで来れたはずだ。

それもほんの一瞬でな。

「通学での使用は校則違反よ。一応決まりだから仕方ないの」

「は、なんでだ? 使ったほうが便利じゃないか」

トウカの口から出た校則違反の単語に疑問を抱く。
移動時間が短縮できるのだから学園も生徒もデメリットはないはずだろ?」

特に朝が弱い生徒には涙が出るほどありがたいものだ。

「そういうのに頼り切ると日常生活が疎かになるかららしいわ」

「あー、便利すぎるのも考え方のってヤツか」

「そゆこと。私だってできれば使いたかったっての」

確かにそれなら納得だ。俺がいた学校でも多かつたもんな遅刻者。

いざとなれば……、と頼り切つて夜更かしをする。

起床時間に起きない。時間がないのにダラダラと再度をする。

そして本当に『いざとなつた時』にはもう間に合わない。
転移魔法を使っても遅刻になつてしまつ。

結局は魔法の力を過信せず、健全とした日常生活を送るのが正しいというわけだ。

……ただそんな正しい生活を送つてきても、ソイツりより酷い扱いを受けてた人間がいるわけだがここに。

「そういえば、朝飯まだだな……」

鬱気味な思考になつてきたので別の話題に変えてみる。
つてそんなことを言葉にすると今度は急にお腹が空いてきたぞ。

「学園長と話が終わるまで我慢しなさいよ」

「それ何分で終わるのか知らんのだが……」

「学園長と話が終わるまで我慢しなさいよ」

「それ何分で終わるのか知らんのだが……」

『もつと詳しい説明は嫌とこつせび聞くことになる』 つて昨夜
言われたような。

いやでもすぐそこまで来てるわけだしな、学園長室。
話がそんなに早く終わるとは思わないけど、別に死ぬほど空腹な
わけではない。

お腹を軽く摩つて我慢することにした。

「さ、着いたわよ。心の準備はいいかしら？」

特に緊張もしないので俺は無言で頷く。

トウカはそれを一瞥した後、ゆっくり2回扉を右手で叩く。

「私は、ここに御剣ミシルギ 拓磨タクマ を連れて来ました」

そう言つてもう一度ノックすると、今度は扉の向こうから返事が
聞こえた。

「『』苦労様です。ああどうぞ、お入りなさい」

その声はどこか優しげな女性のものだった。女の学園長なんて珍
しい気がするが。

……そつて、いよいよ黒幕さんとじつ対面か。

「それじゃ私はここで」

「ん、なんだよお前も入らないのか？」

いきなり背を向けて歩き出した銀髪少女を引き止める。

「お入りなさいって言つて言つて言つて言つて言つて言つてなぜ……？」

「だつて学園長はあなたと2人で話をしたいらしいし。あつ」

トウカは振り返りそう叫びると、最後に何かを思い出したかのようにこいつ続けた。

「“カレー”か“焼きそば”どちらが好き?」

「はい?」

一体何がどうなつたら今そんな質問が出てくるのか。

無視しようと思つたが、結構真剣な顔でこちらを見つめるトウカさん。

仕方が無いので正直に答えておいた。

「……どちらも嫌いじゃないが、焼きそばの方が好きだな」

「おつけ、分かったわ。それじゃまた会いましょう」

銀髪少女はそう言い放つと背を向け、再び歩き出した。

横目で見えた少女の顔は、少しだけ微笑んでいるよつて見えた気がしたが。

うん、きっと氣のせいだろう。

「それじゃあ行きますか」

軽く両肩の埃を払つてから、扉に向き直りドアノブに手をかける。扉の上には“学園長室”と魔法で映しだされた文字が浮かんでいた。

その表記は間違えなく漢字である。

すまんトウカ、やつぱり胡散臭いと思うわ。

地球の、しかも日本の言語を田の当たりにしてそつちく。
込み上げる苦笑を抑えながら、俺は部屋の中へと進むのだった。

・
：

部屋の奥、蒼穹が映る大きな窓を背にその女性は微笑んで椅子に腰掛けている。

「リュミシアルへよひこや、御剣ミツルギ 拓磨クン」

タクマ

彼女はそう笑いかけると椅子から立ち上がり、その長い黒髪を靡かせた。

知らない相手に突然フルネームを呼ばれるのは2回目だな。

「初めまして、私はここの中園長をしているトウルシファナ＝リリスです」

「……どうも初めまして。御剣拓磨です」

「さあさあ、どうぞこちらへ」

微笑んだままそう言つと、学園長は右の指を鳴らす。

すると彼女と俺を挟む事務机の前に、1つの立派な椅子がどこからともなく現れた。

地味だがかなり上の空間操作系魔法か。何の媒介も使わず一瞬でやれるレベル。

「いや地球の上級魔道士の皆さんもビックリだな。

学園長はたくさんさんの書類が積み重なった事務机に両手を付き、入り口で立ち止まつたままの俺を大きな瞳で見据える。

「Jの人気が学園長ねえ……？ 何と云つかそんな感じには見えない。なんとなく自分より年上には見えるのだが、遠くても3歳程度だわ。なぜなら顔がほんのちょっと高いだけで、顔は同年代のものに見えるからだ。

よく見積もつて20代前半の女性だな、うん。
やはり学園長と言うには若すぎる気がするが。
そんなことを彼女を見ながら考えていると。

「まあ、若いなんて嬉しいですね」
「はツ！？」

美人な学園長にこの胸中を軽く見透かされていた。
おかしいぞ、名乗つてから一言も喋つてないはずだ。

「まあその辺はあまり気にしないで。とりあえず座つてくださいな」
「…………ははは」

じつやJの学園長、あの銀髪少女より手強い相手のようだ。
弓きついた苦笑いを向けて俺は用意された椅子へ歩くのだった。

「Jの世界で素晴らしい学園生活を、ですか……？」

…

「ええ、ぜひっ」

リュミシアル魔法学園。

今いのこがまさにその学園長室なのだが、お若い学園長様は熱心に俺を勧誘をしていた。

『もつと凄いんですよ』の学園はツ……』

そんな文句から始まって早15分。
立ち上がり熱弁する彼女の学園PRは今やっと終わつたところだ
った。

リュミシアルといつこの世界の名称がそのまま使われているこの学園は、由緒正しき人気校だそうだ。

学生数も多く賑やかで敷地も広い、魔法行使のカリキュラムもかなり充実していくらしい。

聞く限りは確かにいいところだとは思うんだけど。

「あの、一ついいですか？」

「はいはいなんでしょう？」

「俺、魔法が全然使えないんですけど……」

そう、どんなに学習環境が整っていてもエーテルなしの俺に魔法は使えない。

そんな人間が魔法学校に通つてどうする。落ちこぼれになるのは目に見えてるぞ。

「（大丈夫、冬霞ちゃんのおかげで君は少しずつだけど確実にエーテルを取り戻してきてる……）」

「え、今なにか？」

何か小さな声で学園長が呟いたような気がしたんだが。

「いえ何も。ふふ、心配いりません。私の見立てでは魔法なんて明日にでも普通に使えるようになると思いますよ」

「はいっ！？ いやいやいや！」

彼女から返ってきたとんでもない答えに狼狽する。

詠唱やら技術の問題ならともかく、俺は魔法を使う上で最も根本的な面で駄目なんだぞ？

どうやつたら一日でホテルの生産量が増えるところのか。

「それは わすがに冗談でしょ？」「

「そんなことはありません。キミを呼んだのはこの件なのですから」

俺の予想を否定し、学園長は少し真面目な顔でそう告げた。

この為つて、俺が魔法を使えるようになることだのうか？

「まあ詳しい話は君がもつと成長してから話しますけどね」

「……あなたも焦らすんですか？」

例の銀髪少女と同じだ。

しかし異世界に連れて来られた理由が何も分からぬままだと流石に不安すぎるわ。
ちょっとぐらりと教えてもらえないかな～？

相手が心を読めるのを思い出し、そう強く念じてみると、すると学園長は向かい側に腰を下ろしてこいつ答えた。

「一番シンプルな答えは最初に言つたはずですよっ。」

「おおひ、おやんと云ひたみたいだ。
ん、でも最初に言われたことといえば……。」

「まさか“素晴らしい学園生活を云々”ってやつですか

なんて適当な理由だ。気持ちは嬉しいんだけどなあ。

「そうですね。で、それらを踏まえてビリりますっ。
「……へ、どうするとは?」

「」の学園の生徒として新たな生活を始めるか、それとも元の世界
に帰りますか? もう、選んでください。今すぐ

「そんな

」

彼女がいきなり提示した選択肢に困惑。

そんなすぐ簡単に決められるものじゃないだろ。

いきなり連れて来られて、その理由も酷く曖昧なの。
しかも初対面の人間の言つことが信用できるか?

でも

。

もし、この世界で新たに歩き始めたら。

俺は変われるのだろうか?

あの腐敗した日々から。何も無い自分から。

手を伸ばせば手に入れられるのだろうか？
失った力を、何か大切なモノを。

僅かな希望すら無かつたあの世界とは違う。
ここが本当に異世界だといつになら。

俺は、じゅりの世界に賭けてみたいと思つた。

「 学園長、決めました」

椅子に座つたまま学園長の顔を見上げる。

そう、最初から迷うことなど何も無いじゃないか。

戻つたところで居場所があるわけじゃない。
しかも俺は無能なだけでなく、殺人までやらかしたんだ。

「俺は、御剣拓磨は、リュミシアル魔法学園への転入を希望します
「ふふっ、よく決断してくれましたね。ええ、キミの学園転入を許
可しますわ」

今までの過去も全部受け止めてやり直そう。
それで、新たな一步を踏み出してみよう。

きつとこれはツンデレな神様が俺に与えてくれた、逃すことのできないチャンスなのだから。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.1-3 【生徒証と桃色少女】

Episode 1-3 【生徒証と桃色少女】

ただいまの時刻は午前8時前。

ほとんどのリュミシアル魔法学園の生徒が登校を始める時間帯である。

俺はそんな生徒たちの一人となるべく、正式に転入の手続きをするため学園長室にいた。

「…………で、一体どういったものなんですかこの箱は？」

学園長から手渡された掌サイズの立方体。

無色なその全面を観察するが、特に変わったところはない。どういったモノか全く分からぬので、そう尋ねてみた。

「これは“リュミシアル・キューブ”という魔法具です。ほんの少しでいいので魔力を送つてみてくださいな」

「そうすると一体どうなるんです？ 嫌な予感がするんですけど」「そんなのやってみてからのお楽しみじゃないですか。それにキミが思つてるような危険はないから大丈夫ですって」

微妙に不安が拭いきれないのだけれど、話が進まないよつなのでとりあえずは信じることにしよう。

「……分かりました、やってみます」

“リュミシアル・キューブ”なるものを両手でしっかりと握る。

そして田を開じ、自分のどこか深い内にあるエーテルを呼び起します。

俺にはほんの僅かしかないそれを操り、なけなしの魔力を箱の中に送り込んだ。

『明日にでも魔法を使えるようになる』と学園長は言ったが、やはり今の俺が使えるのはいつもと変わらない貧相な量のエーテルだけだ。

正直この様子じゃ魔法なんて到底使えないだろうな。

この黒髪の美女は何か秘策でも持つてるのだろうか？

「拓磨くん、もう少しひらげていいですよ」

10秒ほどしてから学園長から声がかかる。

ゆっくり田を開けると、両手に持つ箱が白く光っているのが田に入った。

箱の中で何か魔法が発動しているのか、温かな熱を直の両手に感じる。

爆発しないか心配だな。

「それで学園長、結局これは何をしてるんでしょうか？」

数秒経っても光の収まる気配はなく、ずっと輝き続けていく。いつまで両手に持つていればいいのだらうか。

「何って、君の生徒証を作つてるんですよ」

学園長は光る箱を俺の手から事務机にそっと置きかえて、そのまま当然のことのようにそう続けた。

彼女の言葉だとこのキュークは生徒証を作るための魔法具だったようだ。

「生徒証はここでの生活に必要不可欠なので大切に管理してくださいね」

「そりやしますけど、そんなに重要なアイテムなんですか？」

「身分証も兼ねてますからね。無かつたら学園生活だけではなく衣食住も超ヤバいですよ」

「おおっ、かなり大変なシロモノみたいだな。生徒証……ね。ちゃんと失くさないようにしないと。」

「　　おっ、できたのかな？」

そう思いながら机の上に置かれた箱をじっと眺めていると、放つていた光が徐々に　その輝きを無くしていくのに気付いた。そしてついに光が収まつたのと同時に、箱上部からカードのよくな物の先端がスッと出てくる。

「よこしょっと。はいどうぞ」

「あ、ありがと!」わざわざ

学園長が箱から抜き取ったそれを両手で受け取る。……これが生徒証か。

薄い水色の生徒証には『タクマ＝ミジルギ』と俺の名前がしつかり刻まれていた。

イメージしてたものより少し大きくて質量がある。
この重さは紙やプラスチックカードのものじゃない。

何かの金属でできているのだろつか？

「それは企業秘密です。教えてあげません」

また勝手に心を読まれた上に、酷く馬鹿にされた気がする。

「それではまずそれで制服に着替えてみましょうか」

「…………はい？」

思いも寄らない事を言ひ出す学園長に、つい間の抜けた声を上げてしまつた。

そりゃやつだわ。ワケがわからない。

「ちよ、ちよっと待つて下れこよ。着替えるつて……」

「あら、キミがいた世界じゃまだいつこのまなかつたのかしら~」

「勘弁して下せこよ」

そんなセリフを聞くと改めて『異世界に来てしまつたんだなあ』
と思つてしまつ。

魔科学によつて発展した今日の地球でも、こんなカードで服を着
替えるなんて話は聞いたこともないからだ。

「制服だけじゃなくて私服も登録すればできるんですけど、まあや
の話は追々」

「…………本当にできるんですか？」

「できますとも。ひとつと同じように魔力を送り込んでみてください。
それがシステムの起動スイッチですので」

「分かりました。んつ……」

さうきと回じよう人に全神経を集中して魔力を送り込む。俺以外の人はもつとカンタンにできるのだろうけどな。

すると間もなく生徒証に水色の魔法陣が浮かび上がった。そして小さな魔法陣は小さな輝きを放ちながら“画面”を映し出す。

そこには『認証作業をしてください』と文字が出ていた。

「それでは着替える前に認証をしましょうか。タクマ＝ミシリギと画面に向かって詠唱してください」

どうすればいいか分からぬので、彼女の言ひとおり自分の名前を詠唱する。

すると認証作業はこれだけでいいのか、違う画面に変わった。
……なんかパソコンのデスクトップみたいだな。

「服の着替えはそのお洋服のマークです」

学園長のナビゲーションどおりに指を動かす。

といつてもアイコンを軽くタッチするだけなのだが。

学園長曰く“リュミシアル魔法学園高等部1年男子制服”がこれから着ることになる制服らしい。
内心ワクワクしながらその文字に触れた。

すると俺が着ていた地味な制服が青白く光り、すぐに収まる。同時に身体がほんの少しだけ重くなったような錯覚に陥った。

「うわっ、ホントに着替えられてる……」

しかしそれは錯覚ではなかつたようだ。

「うそ、よく似合つてますよ」

そう言つて学園長はまた指を鳴らし、今度は俺の真横に等身大の鏡を出現させた。

突然なことに驚きつつも、向き直りその中に映る自分を見る。

黒を基調にしたブレザーとズボン。

その隙間から見える白いカツターシャツに紅のネクタイ。ミースカートではないことを除けば例の銀髪少女が着ていたのと同じものだ。

「すういな……、便利ですねこれ」

「ふふ、他の生徒からもそう言われます」

学生証の機能と学園長の魔法の双方にたいそう感心していると、唐突に入口の扉がコンコンと規則正しく叩かれた。

「おはようございます学園長。あの、この用件とは一体……？」

「あら、ちよつどこことことに来ましたね」

扉の向こう側からるのは、どこかで聞いた気がする少女の声。俺が来た時と同じように学園長は「お入りなさい」と声を返す。

……なんか、ものすごく嫌な予感がするぜ。いや今回は劉とマジで。

「はい、失礼します」

ゆづくつと扉を開けて入ってきた女の子を見て、思わず「ああやつぱりな」と声が漏れてしまった。

薄い桃色の髪に肩の下あたりまでの短いツインテール。髪を結ぶ水色のリボンがよくその色に合っている。

髪型が変わっていても分かった。間違になくなっちゃった娘だ。

トトカと同じ女子制服に白いニーソックス。

学園長の前にいる俺を、ラピスラズリの瞳が捉えた。

「あ、あなたはさきほどのつ、び、じつじじじじじ！」？

すると少女は早朝と同じように見開いて混乱し出した。まずはいな、上手く女子寮でのことを説明しないと

「ええっとそれはだな……」

「落ち着いてくださいミアちゃん。私が説明しますから「ががが学園長！？ 私一体何がどうなってるのか……」

後ろにいたはずの学園長は気付けば俺の右隣に。そして俺と少女の間に歩いて口を開く。

「あなたのクラスでも流行つてゐるのではなくて？ う・わ・や」「う、噂つて『近くに転入生が来るかもしれない』ってやつですか？」

「そうですね。で、この子がその転入生

学園長はもう見慣れた笑みで俺のことを語りだすのだった。

・

「……それ、生徒会の私だつて知りませんでしたよ?」

「いやあつこつこ連絡するのを忘れてたんですよ」

「うう、どうせ私なんて存在感ないですよ……」

学園長が間に入つて今までの経緯、つまりは昨夜の晩からのこととを説明してくれたおかげで少女は上手く現状を把握してくれたようだつた。

それでもトウカの部屋、つまり女子寮に一泊したことだけはかなり動搖してゐみたいだつたが。

なんとかなつてひと安心し、息をついたところに学園長と話をしていた桃色少女が俺の前に近づいてきた。

「あの、私 ミヤナームル＝シアクウナつて言こます。そつときは取り乱してしまつて『ゴメンなさい』」

「いや大丈夫だ、えつとミヤナ……」

「ミヤナ……なんだつたけか。やべえ覚えられてない!?

「ミアでいいですよ。覚えづらこ上こ呼びづらこ名前だと自覚しますから」

「わ、分かつたよ。俺の名前は御剣拓磨、じゃないタクマ＝ミツルギだ。よろしく」

「タクマ君ですね。ええ、こちらこそよろしくお願ひします」

2人の話を聞いていた限り、彼女がここに呼ばれたのは理由は俺にあるよつだつた。

俺はこれから生徒会員さんやう教員たちに挨拶へ向かう必要がある。

が、いかんせん広いこの学園では迷子になつてしまつ可能性が高い。

そこで学園長は生徒会員である彼女を案内役として呼びつけたと いうわけだ。

準備がいいと言えばいいと思つのが……。

本人にその顔を云々ていなーいのは正直どうかと思つ。

「よかつたですね拓磨クン。転入早々お友達、しかも女の子がで きて」

「その言い方には何か棘があるみうに聞こえるんですけど?」

「そんなことあつませんよ。 わーとー もう8時を越えてしま いましたね」

そろそろ急げといつことだらう。壁にかかった時計を大袈裟に見 続ける。

「それではミニアちゃん、彼をお願いしますね。副会長さんには話が 通つてますから」

「了解です。それでは行きましょうかタクマ君」

「あ、うん。それでは学園長、いろいろありがとうございました」

「 そつそつ、最後に学園責任者として一言だけ」

部屋を出ようとすると、1つ言い忘れたと学園長が引き止めた。
長く黒い髪を靡かせ、優美な微笑を浮かべながら。

「今日からのキリ、リュミナルの祝福と加護とがあら」と、「
そんな彼女の美貌に、少し胸がドキッとしたのは内緒の話である。
終始笑顔のままだつた学園長に見送られ、俺は部屋を出るのだった。
た。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.1 - 4 【あなたに焼きそばパンを】

Episode 1 - 4 【あなたに焼きそばパンを】

「なあ、異世界なのにどうして言葉が通じるんだ?」

それは学園長の激しい勧誘に流されて訊けなかつた最大の疑問。そういう魔法が原因なのは間違いないだろうが……。どうも辻褄が合わない。

あの銀髪少女の仕業と考えるのが普通だが、初めて会つた時からアイツは日本語で話しかけてきた。

それにどのタイミングでもそんなことをされた覚えはないしな。

「思つてることより難しい話じゃないですよ。違う次元から来た人が何の不自由もなく私たちと同じ言葉が話せるのは、この世界に張られた“言語統括結界”的おかげなんです」

「ふうん、なるほどね。結界のせいだったのか」

俺個人にかけられていたのではなく、世界全体にか。

「ええ。タクマ君は自分の世界の言葉で話しているつもりでも、それは気付かないうちにこちら側の言葉に変換されてるんです。聞いたり読んだり書いたりするのも、全部同じようにですね」

「俺のいた世界じゃ到底できない技術だな」

今の日本、いや他のどの国も無理だろ。

地球を丸ごと覆うほどの巨大な結界、しかもすべての人間の言語に干渉するようなシロモノを作るなんて。

「そりいえばタクマ君のいたところって日本なんですね？」「

「ああそりだが……、何か知ってるのか？」「

「いえ、確かトウカもそこから来たって言つてたなあと思つて」

「　　アイツ、日本人だったのか」

なるほど、だから昨晚日本語が通じてたのか。

ん？　でもそうなると。

「おこミア、それじゃトウカも俺と同じ転入生なのか？」「

「はい、彼女が12か13歳の時に。だからもう4年も前のことですけど。それが何か？」

「い、いや別に。ちょっと気になつただけだ」

昨夜の銀髪少女の言葉と寝顔を思い出す。

やつぱりアイツは何か知つてるのかもしれないな。

4年前の消えた記憶を。俺の身に何があつたのかを。

今歩いている学園の中心塔は7階まであり、上の階へ行くには大きな螺旋階段を上る必要がある。

最初に学園長室のある7階まで上るのは結構大変だった。

一緒にいたトウカは「そのつち慣れるわ」と言つていたが。

ちなみに4階は他の学舎への連絡通路となつていてるそうだ。
通路と言つても直接繋がつてないわけではなく、それぞれが転移
魔法のかかつたゲートになつててるらしい。

「ここが生徒会室です。学園長の話じゃアキラ先輩　じゃなくて副会長がこの後のこと説明してくださるそつなので」

「副会長さんか。眞面目そうなイメージがあるけど、どんな人なんだ？」

「実はトウカのお兄さんなんです。とても優しくて知的な方ですよ」

アイツ兄さんがいたのかよ。いや別に文句はないけど。

「優しくて知なお兄さんか。それならリラックスして挨拶できるな」

「どうぞ安心してリラックスしちゃってください。それでは入りましょうか。時間もあまりないですから」

ミアは可愛らしく微笑んでその扉を開けた。

・
⋮

ミアに続いて部屋に入った瞬間、品がある心地良い香りが広がった。

その匂いの元を感覚で辿っていくと、すぐ横にある棚の上に整然と置かれた花瓶からだと気がつく。

鮮やかな赤紫色の花が生けられているが名前は分からず。
異世界にある花なんだから知らないのも当然だけどな。

「　来たか、待っていたぞ2人とも」

そんな中、落ち着いた雰囲気の男の人の声が響く。
田を向けるとそこには長身の男子生徒がいた。

何か神聖なもの感じる銀髪も、澄んだ紫の瞳も、怪しく感じるオーラも同じ。

なるほどな、」つやづつ見てもトウカの兄さんだ。

「どうも初めまして。今日から転入するタクマ＝ミツルギです」
「ああ、生徒会副会長のアキラ＝シラガネ、君を連れてきた冬霞の兄だ。いきなりの異世界に驚くことも多いだろうが、そのうち慣れただろう。なに、船と同じ世界から来た俺と妹がその証拠だ」

「は、はあ……」

副会長はそつまつと生徒証を俺に見せた。

俺が受け取ったのは違うオレンジ色の生徒証には、彼の名前が記されていた。

じゅやら銀髪兄妹はニアのまつとおり日本出身らしい。

「ちなみに漢字表記だとシラガネは白い銀、アキラは暁と書くぞ。
由来は――」

「い、いえ分かりましたから結構ですっ――」

「む、そうか。残念だ」

妹と同じくいきなり自分の名前の由来を語り出したので思わず止める。

それにしても白銀と書いてシロガネだなんて随分珍しい苗字だな。名前を覚えたところで生徒証を返すと、副会長は話を続ける。

「本来なら会長が君と細々した話をするはずだったのだが、まだここに来てないんだ」

「すみません2人とも。ヒルザお姉ちゃんは朝に弱くて……」

ミアは副会長の言葉を聞くと、こきなり頭を下げた。

彼女の口から出た“エルザお姉ちゃん”とは会長のことだらうか？よく分からなので訊いてみると、推察通り会長はミアのお姉さんらしい。

その名前は……、うんやつぱり長いから覚えてない。

とりあえず愛称がエルザさんとこうじだけは覚えておいで。

副会長が「こうじだから」と話を戻す。

“こうじ”とは会長さんが寝坊（？）でまだ来ていないとこうじだな。

「会長からの挨拶はまた次の機会にすることにして、今は俺が代わってその細々したことを説明させてもらひ、「……よ、よろしくお願ひします」

やつと本題とこうじか。俺は何をすればいいんだらうな？

「まず君が所属するクラスについてだが、すでに決めてあるんだ」

「あのオ……、タクマ君の転入の件もこうですけど、そんな話せんつせん聞いてませんよ私？」

「おつとすまん、ついつい連絡し忘れてしまつていたな」

ついわつわ見たなこんなやり取り。

ミアはこうじの扱いのキャラなのだろうか？

それにして棒読みするだらう副会長。

「もういいですよ私なんて……。それより、タクマ君のクラスはどうなんですか？」

「ああ、君や冬靈と同じ一年第2クラスだ」

「聞きましたかタクマ君、同じクラスだそうですよー。私は委員ですので、困ったことがあつたら何でも言つてくださいね」「わ、わかった、その時は頼らせてもらひつよ」

テンションが上がったのか、声の高さも一段階上がるニアを見てそう答える。

「それにしても今日いきなり転入生が来るって知つたら、きっと二組のみんな今日は一日中お祭り騒ぎですよ」

「そ、そつか。お祭り騒ぎか……」

お祭りでどんなクラスだよ。それだけ賑やかなのかな?

「 もうアに手をつけたよつね。純情な乙女を欲望のままに弄ぶ鬼畜神、御剣拓磨よ」

それは本当に一瞬の出来事だった。

透き通つていて、かつ理不尽な少女の声に俺は無意識に反応していた。

「ちげええええー? しかも何だよその最高にカッ 「悪すがれー! つ名はつー?」

そう突っ込みつつ後ろを振り向けば、案の定銀髪少女がいた。慌てる俺を尻目に、扉の前でニヤニヤするトウカ。またしても余裕のしたり顔を見せる。

「ちゅう」とした冗句じゃない。でも、そんなにムキになるなんて案子が通じないのはどうも。

「全くもつて冗談じやないぞ」

「全くもつて冗談じゃないぞ。マジで誰かが信じたらどうしてくれ るんだ？」

「知つた」とじゃないわね」

くつそくつそ！ しけつと流しやがつて。

あ、やべ本格的にお腹すいてきたな……」

銀髪少女の相手に気が滅入つてゐると、一気に空腹感が増しつゝそう呟いてしまう。

それを聞いたのかトウカラは俺の前まで歩いて来ると、右手に持つた白いビニール袋を目の前に差し出してきた。

「あなたの朝食を用意してきたわ。ありがたく思つて食べなさい」
「え?」

思いも寄らない言葉と行動に混乱するが、すぐに礼を言った。

「あ、ありがとうございます。これわざわざ買いに来つててくれたのか?」

「…………生徒会の仕事で仕方なくね」

トウカは氣恥ずかしそうに「仕方なく」と強調してくり返す。

もはつたビニール袋の中身を取り出すと
牛乳パックがあつた。
焼きそばパンと小さな

なるほど、あの時の問い合わせはこうじだつたのか。
もつとストレートに言えないものかね。

ま、悪いヤツじゃないよな。

さつさとニアの所に行つて何かを話す銀髪少女を眺めながら、俺はモグモグと焼きそばパンを口にする。

ん、焼き立てなのか？ 香ばしくて美味しいな。

「御剣、時間がないからそれを食べながら話の続きを聞け」

おつとせうだつた。今は副会長の説明を聞いてる最中だつたんだな。

耳を副会長の説明に傾け直す。

「君が所属する第2クラスの担任はクリスティーナ先生と言つ。それを食べ終わつたら俺と一緒に教務室へ挨拶しに行くぞ」

「え、今からですか？ この時間先生は忙しいんじや……」

「その先生が『連れて来い』と仰つてるのでな。問題ないだらう

うーん、クリスティーナ先生か。名前的に女の先生だらうか。

「クリス先生はとても可愛らしい方なんですよ！」

自分の担任の話だからか、副会長より先にニアが口を挟んだ。
可愛い？ 先生なら美人とか言つたほうが似合つと思うのだが。

「それなら会うのが楽しみだな。可愛くないよりは良いだらうし
「もう他の女に乗り換えるつもり？」
「…………ハハハッ」

ダメだ、やっぱりこの毒舌銀髪少女は俺の天敵らしい。

・
：

「そろそろ教室へ行くわよミニア」

「分かったわ。それではタクマ君、私たちは先に教室へ行つてます
ね」

「そうか、それじゃまた後でな」

時刻は8時半前。

足早に部屋を出て行く2人の少女を見送りながら
まだ温かいままの焼きそばパンを椅子に座つたまま食べる。

副会長から聞いた話だが、あの2人は俺と同じ年らしい。

正直2つぐらい年下だと思っていたので少し驚いた。
だって2人とも背が俺の肩と同じ高さぐらいなんだぞ?
俺の身長はともかく、な。

とにかく“人のあれそれを見た目で決めるもんじやない”って
のは本当のことだったらしい。

「ン、ゴクッ」

最後の一切れを口の中に入れ、牛乳で流し込む。

美味しく食べ終わつて椅子から立ち上がると、副会長がじつとこ
ちらを見つめているのに気付いた。

鋭い赤紫の視線を、知的に光るレンズ越しに。
オイオイなんか怖いぞ。いろんな意味で。

「あの、どうかしましたか副会長?」

「……いや、なんでもない。さあ俺達も職務室へ急いで。モタモタしているとHRに間に合わなくなってしまうからな」

「え、ああちよつと待ってくださいよつ！？」

早口でそう答え、副会長は颯爽に扉を開けて部屋を出て行つてしまつ。

空のビニール袋を部屋の隅にあつたゴミ箱に入れ、俺も急いでその後を追つのだつた。

それと同時にHRの予鈴だらつか、大きなチャイムが廊下に響いた。

普段なら耳に入ると氣怠くなつていたハズのその音は、不思議なことに心地良い。

それはまるで、これから学園生活の始まりを祝福するかのようだつた。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.1-5 【異世界に映る教室】

Episode 1-5 【異世界に映る教室】

学園新聞 *Sympathetic* シンフォニック

もはや生徒証としての役割の域を越えているカードから、その朝刊と夕刊が気軽に観覧できる。

内容のほとんどは見なくてもいいようなコラムがほとんどなのだが、今朝更新された記事は高等部グラナーリの生徒にとって非常にインパクトのあるものだった。

「 な、なんてこいつたあツ、転入生は男だつただとおオオツ！？」

机の上に行儀悪く座りながら、真剣にその記事を見て叫ぶ男子生徒がいた。

燃える炎のようにシンシンした赤毛は彼のシンボルマーク。姿形は普通の人間に見えるが、彼は竜族である。

「俺は可愛い女の娘がよかつたのにツ！」
「あはは……、残念だつたねラグナ」

そんな彼のもとに1人の男子生徒が近付く。

赤毛の少年に比べ背は少し低く、落ち着いた翠色の髪に琥珀の瞳。身嗜みを整えた彼は、着崩した制服を纏うラグナとは対照的に清潔感がある。

「テオ！ どうしてお前はそんなに普通のテンションなんだー？」

噂の転入生は甘い香りがする乙女じやなかつたんだぞ！？
「そんなこと言われてもなあ……。ボクはあんまり信じてなかつた
からせ」

そう、言わずもかな。

その記事の内容とはとある異世界人の転入についてだつた。
異世界人と聞けば目を丸くするような話だが、このリュミシアル
界では異世界人の存在が大して珍しくない。

そんな世界の学園に通う生徒たちを騒がせる理由が2つあつた。

1つは赤毛の竜人、ラグナ＝ヴォレリウスのように嘘の噂に騙さ
れたパターン。

恋を夢見る男子生徒たちの間では『転入生はすっげえ美人でかつ
清楚系らしい』という噂が交わされていた。
つまり誰かの願望が1人歩きし、都合の良いよう広まつたとい
うわけだ。

今朝事の真実を知ることになつてしまつた悲しき男子たちは、彼
のように失望の声を上げるか、静かに見えない涙を流すかのどちら
かである。

「クッソ 誰だよこんな非人道的な嘘を最初に言い始めたヤツは！
？」

「いや、見つけてどうすんのさ？」

「俺の“炎龍の鉄槌”^{ファイアフレス}をゼロ距離で喰らわせてやるー。」

「はあ……、ほどほどにしどきなよ」

ラグナの妙な執念深さに溜息をつく少年はテーオ＝ベリアルス。

落ち着いていて人当たりがいい優等生だが、実は強大な魔王の血を引く魔族である。

もつとも彼には父である魔王のように残虐非道なことをする悪い趣味はない。

むしろ平和な世界を望み、姉と共にこのリュミシアル界へと逃げてきたのだ。

「確かに転入生が女の子じゃないのはちょっとだけ残念だけじや、それよりもつと気になることがあるじやないか」

一方生徒を賑わすもつ一つの理由はこのテオが気にしている事と同じである。

この学園は異界から転入生として生徒を集めているのだが、それは『中等部に新入生として』という意味が普通なのだ。

高等部へ転入してくる例は珍しいし、かつ時期もおかしい。転入生が来る時期としては早すぎし遅すぎる。なんせ今はまだ2月の中旬なのだから。

よつて大半の冷静な生徒はこの噂 자체がそもそもデマだと考えていた。

それがビックリ、今朝のニュースによると真実だったたのである。学園中で『謎の転入生』と朝から大きな話題になっているのだ。

もちろんこの高等部1年第2クラスもその例外ではない。仲の良いグループや前後左右の席の生徒たちが集まって会話を交わしている。

憂鬱な月曜日の朝とは思えないほど賑わいだった。

そんな中、教室に背の低い2人の少女がドアを開けて入室する。それを見た数人の女子生徒たちは2人を囲み出した。

予想通り、と銀髪少女は目を細めた後面倒くさそうに口を開く。

「……なんなのよこの騒ぎは。朝からやかましいわね」

「トウカさんにミアちゃん！ 生徒会の2人なら詳しいコト色々知つてるんでしょ！？」

トウカの言葉を完全無視して女子の1人が詰め寄る。

他の女子たちも『教えてよ～』と徐々にその数を増やしていく。

『詳しく述べやつぱりタクマ君のことかな？』と小さなツインテールを揺らすミアはトウカに目配せする。

他に何があんのよとトウカは桃色少女の青い瞳を見つめ返した。

「ちょっと、2人とも勿体ぶらないで教えなさいよ～。背え高いのイケメンなの？」

「優しそう？ SかMのどっち系なのかだけでも教えて！？」

身を乗り出して質問をぶつける女子生徒たちを見ていると、この女子達の思考回路も男子達のそれと大して変わらないよう見える。結局はみんな転入生のそういうところに一番の興味が湧くのだ。

「別にイケメンじゃないし性癖もフツーよ普通。つかアンタら期待しちゃ。あんまり変なコト考えてると、そここの雑魚ドラマンみたいになるわよ？」

「あ～、そうね。確かにそんな気がするわ」

銀髪少女の言葉を耳にし、興奮気味な女子たちは落ち着きを取り戻す。

そして後方でテオと話していたラグナへクスクスと苦笑いを向けた。

「ちよッ、雑魚ドリゴン」と俺のこととかよ!? いくらなんでも酷すぎるトウカツちー!」

「本当のトド・じゅんか。去年10秒でトウカさんとボロ負けしたくせに」

「うげつ……、や、それは」

すかさず非難の声を挙げるラグナだが、トウカを取り巻いている女子の一人から追い打ちを受けてしまった。
それを言われてはぐうの音も出ないのだ。

「それは俺が弱いんじゃなくてトウカツちが強すぎるからだろ!?
「それでも10秒はないわ。トーナメントの過去最短記録更新しちゃったんでしょう?」

「ふつ……、やーい雑魚ドリゴン~」

銀髪少女は小悪魔のように目を細めて囁く。

「いよいよあんまり嘘でラグナを苛めないであげてよ。トウカさんが強すぎるのには事実なんだしさ」

流石にラグナを哀れに思つたのか、聞き手に回つていたテオが話に割り込んだ。

『俺の味方をしてくれるのはお前だけだ!』とラグナは目を拭う仕草をしている。

少し気味悪いと思つたが、もちろん彼はそんな余計なことは言わない性格だ。

「チツ、折角ソイツで色々鬱憤を晴らそうと思つてたのに」「いつも冗談きついなあトウカさんは。それよりさ

持ち前の爽やか笑顔でトウカの毒をやり過ごしてテオは言葉を続ける。

「その転入生の話、ボクも詳しく聞きたいんだけど」

「ん、なんだよお前さつきは興味なかつたみたいだつたのに」

「いやいや興味あるよ。これから長い時間一緒にクラスで過ごすんだからね」

いつの間にか復活いていたラグナに期待に満ちた顔で答えるテオ。そして一貫してくるミアに向かって『どんな人?』と尋ねる。ついでに挨拶したばかりなんですが、悪い人じゃないと思いまよ

「ミアさんがそういう言つなら間違いないだらうね。楽しみになつてきたよ」

「ま、歓迎ムードも悪くないけど、あんまりバカ騒ぎするんじゃないわよ?」

「そうだね、クリス先生に叱られないようには自重しないと」

銀髪少女の忠告どおり、今朝の教室はいつにも増して賑やかな声で溢れていた。

華やかな学園行事が終わつてしまい味気なく退屈な3学期。そんな時期に突如その姿を現すことになつた謎の転入生。

思いがけないスペースの登場に、生徒たちはさぞ心躍らされているのだろう。

・

転入生、つまりは転校生としてこの学園に通う。それは確かに俺が学園長と交わした契約である。全くもって間違いないのだけど。

「無理無理ムリッ！ 絶対そんなことできませんって！」

「スマンな。これも学園長からの指示なんだ」

「いきなりすぎですって！ 俺まだこっちに来て半日経っていないんですよ！」

「異世界だからってことで割り切れ。大丈夫なんとなるさ」

今は銀髪少女の兄兼生徒会副会長のアキラ先輩と職員室に向かっている途中だ。

生徒会室から出た後、溜息が出るほど大きな螺旋階段を再び下っていく。

ちなみになぜ会つたばかりの先輩に軽々しく下の名前で呼んでいるかというと、それがこの異世界リコミシアルの常識だからだ。

ファーストネームで呼び合つなんて当分慣れないことだろうが、

『“郷に入つては郷に従え” とは決して地球限定のことではない』と同じ日本出身らしい副会長が仰るのだから仕方が無いだろう。

だがその副会長が俺のことを御剣と苗字で呼んでいるのは一体ど

うこう事なんだ。

まあ、それは今は置いておいて。

「転入手続きしたその日から授業に参加だなんて、いきなりすぎて緊張しますよ！」

「この程度の逆境ぐらい跳ね返してみせる御剣拓磨」

「アンタ俺の置かれた状況を見て面白がってるだろッ」

「副会長様に向かつてアンタとはい一度胸だな、オイ、転入生クン？」

「……すんませんっス副会長様」

寡黙クール系だと思ってたが、意外とそのなんだ。
話しているとなかなか面白い人だな。

「あ、言い忘れてたが教壇の上で自己紹介イベントはもうあるからな」

「地獄の底へどんづん追い詰められてる気がする」

「これも経験だ。上手くクラスに馴染めるように頑張れ」

「そりは言いますけど……」

心援のお言葉をもらひたのはいいが、緊張と不安はようじつやう増していく。

なんせこの数年まともに人と関わらなかつたからな。

異世界の住人たちと上手くやつていける自信は正直あまりない。

実際に俺はトウカ、学園長、ニア、目の前の副会長でさえ言葉を交わすことに緊張してしまくっているのだから。

そんな中一つ下の階に着くと、職員室と表示が出ているドアの前に腕を組んでいる女性がいた。

「 む？ あれはクリス先生じゃないか。 いかん待たせてしまつたらしいな」

それを見た副会長の足取りが速くなつた。

その女性もこぢりに気付いたのか、その小さな顔をこぢりへ向ける。

どうやら彼女がクリスティーナ先生で間違いないようだつた。

深い紅に染まつた目に、腰まで届く金髪のツインテール。俺やトウカよりも背は低く、白いローブを羽織つていた。

整つた小顔は少女のものでとても教師のようには見えないのだが。

「すみません先生、少し遅れてしまひました」

「いや気にするな副会長。案内役に苦労だつた」

「はい。 それじゃ昼休みに迎えに行くからな。 いろいろ気合入れるよ」

「あ、はい、ありがとうございます。 また後で」

副会長はズレた眼鏡を片手で上げて、廊下の奥へ消えていった。眼前のクリスティーナ先生は「さて」と長い金髪を揺らして俺の目を見る。

「初めましてだな異界の少年。 私の名はクリス。 クリストイーナ＝ムーンライト。 魔族、吸血族の真祖にしてお前のクラスの担任だ。 ク里斯先生と呼ぶがいいぞ」

「 は？」

クリスティーナ、もといクリス先生は信じられないことを言い放つた。

聞き間違いではない。 魔族と吸血族というファンタジックな単語

である。

混乱する心の内を見抜いたのか、その少女は笑みを浮かべてさら
に続ける。

「なるほどなるほど。その様子では魔族を知らないようだな少年よ」「魔族つて……まさかあなたは人間じゃない?」

「ああそうだ。私は人族じやない魔族さ。そんなことより少年、貴様の名前を教える」

「タクマ＝ミツルギです。てか学園長から聞いてないんですか？」

「たとえ既に知っていても、本人が名乗るのが礼儀というものだろう」

クリス先生はニアの言つとおり小さくて可愛らしいが、実に大人びた口調だ。

「これは彼女の性格なのか？ それとも魔族とか吸血族の特徴なのだろうか？」

「生徒タクマ、貴様今私のことを『チビなくせに偉そうな喋り方する先生だな』などと失礼な目で見ていいだろうな、ん？」

「い、いえそんなことは全然ツ！ あれですよほら、魔族つてなんのかなあつて考えてたんです！」

チビとか偉そうとか断じて思つていながら、似てることは考えていたので必死に取り繕つた。

「本当だろうな？ まあいい、そのことは歩きながら話してやれ。HRが始まる前に教室へ行くぞ、着いて来るがいい」「分かりました。よろしくおねがいします」

この後クリス先生の話を聞いて、俺は知ることになる。
今までいた世界がどれほどちっぽけな存在だったのかを。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.1-6 【第2クラスの転入生】

Episode 1-6 【第2クラスの転入生】

職務室から学園中心塔の4階、連絡通路を越えて高等部^{ポータル}の学舎の中を歩く。

登校時間はとうの昔に過ぎていいのか、歩く廊下に生徒の影はない。

「 というわけだが、理解できたか生徒タクマ? 」

クリスティーナ＝ムーンライトはそう言つてこちらを振り返る。彼女はこれからお世話になる1年第2クラスの担任の先生だ。

クリス先生の問いかけに、俺は「うーん」と少し唸つてみせた。彼女の話を簡単に要約すればこうだ。

世界には優位種族^{グラントリー}というものが存在しているらしい。

強大な力を持つ霊長、すなわち人族、魔族、神族、竜族のこと。

ちなみに俺や白銀兄妹のような人間は人族に属されていて、あのミアは神族の天使族のようだ。

話を元に戻すが、優位種族同士は対立し戦争を起こすのが普通らしい。

しかしこの世界では全ての高位種族は『平等にして対等』[』]といふ考え方[』]が根づいている。

つまり“共存”して生活しているそうだ。

それに加えて異種族間の婚姻や交配が大昔から続いているため、『混血種』がかなり増えてしまい、今では種族区別 자체あまり意味を成さないのだとか。

「素晴らしいことだとは思つんですが、やっぱり信じられませんね」

頭の中で整理してもそんな答えが口に出てしまう。

当たり前だ、俺は人間しかこの目で見たことがないのだから。

魔族やら神族やらそんな単語を並べられても理解するには難い。

「まあ無理もないか。お前のいた世界には人族しかいないのだろう？」

「はい、ですから“何のファンタジーだよ！？”ってのが正直な感想ですね」

そもそも異世界に来ている時点でかなりファンタジックだけどな。そう考えてみると、異種族の存在は嫌でも受け入れざるを得なくなる。

「なるほどな。そう思つなら、貴様にとつてこの世界は新発見の連續になるだろ？」「それは……、楽しみですけど少し不安になりますね

俺の常識では有り得ない物、在り得ない者を連續で見せされたら心とか大切な何かが壊れそうな気がする。

在り得ない者。

例えば今俺の目の前を、長いツインテールを揺らしながら凛々しく歩む少女。

その後姿を見るに、やはり背の小さな可愛らしい人だが……。

「クリス先生は、その……、本当に魔族、吸血族なんですか？」

「さつきも同じこと答えた気がするのだが、正真正銘私は魔族、吸血族だ。と言つても、今は血を吸うことは殆ど無くなってしまったがな」

先生は自分が俺にとつて在り得ない者、人外の存在であることを改めて肯定する。

それには一切の躊躇いの様子がなかつたが、同時に奇妙なことを口にした。

『血を吸わない吸血族』

ここでは俺の常識はあまり通じないのかも知れないが、これは絶対おかしいだろう。

血を吸わないって、それはもう吸血族とは呼ばないのでないか。

血を吸わないんですか、吸血鬼なのに？

そう尋ねたいが、何か深い事情がありそなので声に出せない。

そんなムズムズした俺の気を読んだのか、先生は理由を説明してくれた。

「さつきの説明で分からんか？　ここは他種族が共存している世界なんだ。己の欲を叶えるために人を襲うわけにはいかないだろう？　で、でも吸血鬼にとつて血は大切な食糧だって聞いたような……」

「まあ確かに吸血は私達にとって命に関わる大切な行為だが、別に半年近くしなくても問題ないのさ」

「へえ、そなんですか。勉強になります」

そんな吸血鬼の生態は知らなかつたからな。

てつきり毎日 食事感覚で吸つているのかと。

『いきなり噛まれたりしないかな?』といつ心配は杞憂だつたようだ。

「だから、数ヶ月に一度若い生徒たちから血を提供してもうつっているぞ」

「え、ツ!？」

お、おいおいおいオイ。

結局吸つてんのかつ、しかも生徒から!?

俺は歩くスピードを極力落とす。先生から距離をとり首筋に右手をあてがつた。

それに気付いた金髪吸血鬼は立ち止まりニヤリと笑う。

「フツ、安心しる生徒タクマ、私は男の血をあまり好まんからな。それにせつつきも言つたとおり無理矢理吸うよつことはしないさ」

「お、驚かさないでくださいよ……」

「貴様が勝手にビビつてゐるんだろうが」

……返す言葉もないな。

クリス先生は早く行くぞとさつときよつスピードを上げて足を進め
る。

「ん? そういえば ここ……」

先生との充実した会話に夢中になつて気付かなかつたが、いつの間にか歩く廊下の先から賑やかな話し声が響いていた。

前方をよく見ると、1・6や1・4とドアの上に表示されているのが分かる。

「どうやら」1年生のHR教室がある階の廊下らしい。

……とこつことは、そろそろか。

その時大きなチャイムが響いた。

生徒会室を出る時に鳴つてたのがHR開始の予鈴とこつことは、これは本鈴だらう。

「いいタイミングに着いたな。さあここが第2クラスの教室だ」

クリス先生はそう言つて1・2の扉の前で足を止める。

その教室の扉と窓の隙間から生徒たちの談笑の声が漏れていた。内容は詳しく聞き取れないし分からぬが、きっと俺のことなんだろうな。

「…………うう」

「つてなんだ？ 緊張して返事もできないか生徒タクマ？」

「い、いえそんなことはなないですヨ？」

「動搖しまくりだなお前。ま、みんないい奴らだから心配するな」

クリス先生はしつかりしろと力強く俺の肩を叩く。
背が俺より低いから妙な図に見えるけど。

「では先に私が入るから、貴様は私の合図の後に入つてくるといい」「わわわ分かりましたっ！」

クリス先生が教室へ入ると、さわついていた教室の中がさらに大きくなつた。

うわあめつちゅ緊張してきたぜチクショウー

ああ～マジでどうしようか自己紹介。

言つことは何となく考えたけど、躊躇まずにちゅんと言えるか心配だ。

壁にもたれかかって大きく息を吐きかけた瞬間。

「よしよし、それではお待ちかねの転入生に登場してもうおつか。入るがいいぞ生徒タクマ」

「……ッ！？ げふっ、がふっ、げほっ！」

「おおおお、おまちゅっと早すぎるよ先生！」

びっくりして吐きついた息を飲み込んでしまった。

つか1分も経たないうちにお呼び出しデスカ？

少しごらい心を落ち着かせるための時間を稼いでくれても良いんじゃない！？

……でもまあ、こゝは覚悟を決めるしかないよな。なんとかなるよ、ね？

誰ともなく呟くと、俺は静かに扉を開け教室の中へ足を踏み入れるのだった。

：

ただいま御剣拓磨の緊張はピークに至る。

プレッシャーに押し潰されそうになるのを必死に耐えていた。

俺は教卓の前までゆっくりと足を進め、教室中を見渡す。木製とは違い少し高級そうな机に椅子。意外にも異世界の教室の中のつくりは、日本のそれと変わらないように見えた。

生徒の数もパッと見た限り40人ぐらいかな？ 50は越えてないと思うのだが。

これも平均的な日本の学校のクラス人数だ。

正直100人ぐらいだと覚悟していたので少し拍子抜け。

そうしているうちに何人かの生徒と目が合ってしまつ。

オイやめろそんなキラキラした瞳で見つめる俺の心が心が心が。

拍子抜けってのは撤回だな。ゆっくりと他の所へ視線を変える。

その先に見知った2つの顔を見つけた。トウカとニアだ。

「…………ん」「クスツ」

銀髪少女は相変わらず興味がないような無愛想な顔。

一方桃色少女は二二二二口してアピールをしてくれている。

……何なんだこの差は。

「それでは自己紹介を頼む」

つて いよいよ来てしまったか。クリス先生の合図に「はー」と答えて一拍。

気付かれないように深呼吸をして、俺は出来る限りの声を出した。

「初めてして、今日からこの学園に編入する事になったタクマ＝ツルギです。種族は人族の人間。分からぬことばかりですが楽しい学園生活を送れればいいなと考えているので、みなさんよろしくお願いしますっ！」

それは10秒もない簡単な自己紹介。

内容的にも短すぎるし自己紹介とは言えないかもしだいけど。これが俺の精一杯だった。躊躇ずに最後まで言えたことを誰か褒めてください。

その後クラスメートたちから起立した拍手を耳にして胸をなで下ろす。

最初の掴みはなんとか上手く行つたみたいだな。

「うむ、よかわい。お前らもすでに知つてると想つが、生徒タクマは異界の出身だ。同じ2組のお前らが率先して学園の施設や勝手を教えてやつてくれ。あと仲良くな

クリス先生のフォローがあつた後、前の席の生徒たちから『よろしく』と笑顔の歓迎を受けた。

もちろん俺も『ああ、よろしく』と返す。笑顔は引きつっているかも知れないが。

「後ろの席が一つ空いてるからそこが貴様の席だ

「はい、分かりました」

クラスメートたちに会釈をしながら後方の席へ向かつて歩く。
この中のほとんどが人間じゃないのか……。

誰を見ても人間にしか見えないんだけどな。

「ん、あれ？」

そんなことを考えながら、席のすぐ前まで来て足を止める。なぜなら空いてる席が2つ並んでいたからだ。はて、どっちに座ればいいのだろう？

「　左の席は別の人だよ。君の席はラグナ……、その寝てる赤毛クンの隣」

「そ、そうか。ありがとう」「いえいえどういたしまして」

先生に尋ねてみると、緑髪の男子生徒が察してくれた。その親切なクラスメートにお礼を言ってから右側の席に座る。

チラッと左隣を見ると、赤毛の男子生徒が机に伏していた。心地良く熟睡なさっている所を見ると、昨日は遅かったのだろうか？

「よしよし転入生が気になるのは分かるが、一旦前を向け前を」

自分の話を聞かず後方の俺に大半の視線が向いていたので、クリス先生は手をパンパンと叩いてから出席をとり始めた。と言つても、1人ずつ点呼を取るわけではなく前の席の数人に欠席者を確認しているだけだが。

「生徒ミリオムが遅刻と……。よし、朝のHRはこれで終わりだ。今日の午前中は全て魔法基礎だったか、頑張れよ」

恐らく開いている右隣の席の人の名だらけ。名前的には女の子かな？

チャイムが鳴ってクリス先生が教室から出て行く。すると入れ替わるように男の先生が入ってきた。

どうやらこの学園ではHRの後は休みなしに1時間目が始まるらしい。

確か授業の内容、魔法基礎って言つてたよな先生。日本にも一応同じ名前の科目があつたけど……。その内容とレベルが同じかどうかは分からぬ。

全然分からなかつたら嫌だなあ。

そんな俺の不安を他所に、朝の授業は始まるのだった。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.1-7 【クラスメートは異界人】

Episode 1-7 【交わる出会いと仲間】

「ああそりだな、どつちかって訊かれたら好きかもな」

「えっ、身長か？ 半年ぐらい前の身体検査じゃ、確か167だつたよ」

40分間の1時間目が終わった後の休み時間、案の定俺の席の周りには人集りができていた。

もちろんそれを無下にする勇気を俺は持ち合わせていない。

よつて今クラスメートからの質問を丁重にお答えしている最中である。

ちなみに心配していた授業の内容はあんまり難しくなかつた。幸いなことに魔法の実習はなくて、あくまでも論理だけだつたらな。

詳しく言えば水の魔法構成式の応用についてだつたのだが、話せば長くなるのでそこまで説明しないけど。

それより驚いたことが、生徒証の中に教科書やノート機能があることだ。

……もつゝire生徒証つてレベルじゃないぞ。

「え、SかMのどっち系か？ アンタそれ初対面の人にする質問かよー？」

女子生徒の1人がニヤニヤしながらえげつない事を問いかけてくる。

「いいジャン教えてよー。」の学園じゃそういうのを答えるのが信頼の証なのよ」

「口クでもない信頼だなオイ……。つで、そもそも俺はノーマルだ！」

「もう、転入生クンつたらシマんないの」

そういう面ならつまらなくて大いに結構だ。

大半の質問には答えてしまったので、だんだん下らないのが増えてきた。

今みたいな性癖とか好みのタイプとか云々。反応に困るからやめて欲しいんだけどなあ。

ま、でも日本での扱いと比べたら天と地の差はある。

俺のエーテル不足事情を話しても、誰も羨むようなことはしないからだ。

そしてみんな学園長と同じよう口元ひびき声。

『魔法なんて明日にでも使えるようになる』と。

「どうして？」と尋ねても勿体ぶられてしまうのだが、ここ今まで言われるからには信用してもいいのかね。

本当に魔法が使えるようになるのなら明日が楽しみだ。

「う、うーん……。なんだあ？ セツカからつるせえなあ……」

「お、やっと起きたかラグナ？ もう転入生来てるし1時間目も終わっちゃったぜ？」

俺の席の周りがかなり騒がしくなつたせいか、隣の席の赤毛が目を覚ましたらしい。

そういうえばコイツ、授業が始まつても普通に眠つてたな。

彼はクラスメートたちに笑われながら背伸びをする。

「んあ？」

横目でそんな様子を眺めていると、その男子生徒と目が合つてしまつた。

ツンツン赤毛は何かが弾けたように勢いよく席を立つと。

「おおっ、アンタが噂の転入生かい！？」

「うわっ！」

あつとこづ間に目を輝かせて詰め寄つてきた。

俺の顔、髪、足、手の先まで舐め回すようにジロジロと観察する

と、腰に両手を当ててこう口を開いた。

「俺の名前はラグナ＝ヴァーレリウス。ラグナって呼んでくれイ転入

生クン！」

「あ、ああ……俺はタクマ、タクマ＝ミシルギだ。こっちも好きに呼んでくれ

初めてまでの挨拶もなしに名前を交換し合つ。な、なんだコイツ。今さつきまで寝たくせしてめっちゃテンション高い。

クラスのムードメーカーか何かだらうか？

「よしよしタクマだな、よろしくな頼むぜい！ 女の子じゃないの

は残念無念だけどな。……もしかして、実は女の子だつたりする?」

「ねーよッ! 正真正銘男子だぞ俺は」

どうやらラグナは女子の転入生を『』所望だつたらしい。

その気持ちは分からんでもないがな。

俺もどうせ来てくれるなら野郎より女の子の方が気分は良くなる。

「ラグナ、まだそれを引きずつてるのかい?」

すると横から緑髪の男子生徒が苦笑いをして話に加わってきた。
さつき席を教えてくれた人だ。

「僕はテオ、テーオ=ベリアルスだよ。よろしくねタクマ君」

「ん、よろしく。さつきはありがとう。助かったよ」

「だから気にしないでつてば。全然大したことしてないよ」

改めてさつきの件の礼を言つとテオは手を頭に置いてはにかむの
だった。

「……なんだ、何の話してるんだお前ら?」

その時眠つていたラグナには、話の筋が読めないようだつたが。

3時間目が終わつた休み時間、転入生に質問タイムはついた。

まで続いていたのだが気合で乗り越えた。

・

「ふうん、ラグナもテオも転入生だつたのか

今は新たにできた席の近い友人、ラグナとテオの2人と会話をしていた。

ちなみにラグナは竜族でテオは魔族らしい。

身体的に人族オーレとどう違うのか全く分からないのだが。

「そうだよ。僕は4年前で、ラグナは去年の新学期にね」「他にも10人ぐらいはリュミシアル外の転人生らしいぜ」「ふうん、なんか微妙に多いな」

きつとその割合は、このクラスだけのものではないだろ？
そもそも異世界人の存在が当たり前なことが異常な気がするけど。

「そんなに外から人を連れてきて問題ないのかね、この世界は？」
「もう数百年前からやつてることらしいからね。別に問題ないみたいだよ」
「難しいことは気にすんなつてこいつた。あの学園長が計算してやつてることだからな」「

ラグナの口から漏れた単語に俺は反応する。

「学園長？ ああやつぱりあの人黒幕なのか」「
「ハハ、黒幕って言い方はどうかと思うけど、確かに学園長さんがここに連れてくる人を選んでるみたいだからね」

「つか目的が何か分からん。俺をここに連れてきても得はないと思うんだ」

「さあね、それは僕にも分からないな。でも君はここに来て良かつたと思えるはずだよ」

「……うん、それはどういう意味だ？」

「転入生は、ここに来る人はいつも“良くない事情”を抱えてるからね」

一瞬だけ、テオは鋭い目をして俺の目の中を覗き込んだ。隣のラグナはわざとらしく目を瞑つて腕を組んでいる。

「たしかに俺の魔法が使えない事情なんてまさにそれだよな」「でしょ？ この世界は、学園はそんな迷える少年少女を転入生として迎えてるのさ」

「テオ曰くこ^{チカイ}こは特殊な次元体らしい。
さつき先生が教えてくれたように、異種族同士が手を取り合つて
いる。

当然戦争は起こらず、豊かな街並が守られているわけだ。

そんな平和な世界は他に存在しない。
転入生は、俺たちはそんなセカイで過ごすこと許された1人であると。

「いや、ますますワケが分からなくなつたんだが……」「ま、深追いせずに“ラツキー”って思つておけば良いんだよ

テオはそう言つと爽やかな笑顔に戻る。
果たしてラツキー……、なのかねえ？

「アンタなら男が集まつて何の話してんのよ？」

「さつそくクラスに馴染めてますねタクマ君。良かつたです」

会話に集中していたからか、気付かないうちにトウカとニアが俺の後ろに立っていた。

2人揃つて様子を見に来てくれたみたいだ。

「お陰さまでな。んでお前は何しに来たんだトウカ？」

相変わらずなんとも言えない色の皿を俺に向ける銀髪少女に問う。今とのところ第一印象が最悪だからなコイツは。

「ちゃんと講義に着いていくか聞きたに来たのよ。分からないとこはない？」

「そうだな、2時間とも今のところは大丈夫だ」

「チツ、つまらん」

銀髪少女はわざわざ人の耳元で舌打ちをきました。

「これってケンカ売られてるのかなあ？」

「トウカ、悪い冗談はなしで。本当に大丈夫ですかタクマ君？」

「ああ本当だ問題ない。気遣ってくれてありがとな」

「安心しました。困ったことがあつたら何でも行つてくださいね」

めつちや親切な娘だし、話しても気分がいいなニアは。

「ま、せいぜい落ちこぼれないように頑張りなさいな」

……ビジヤの銀髪少女とは違つて。

その後チャイムが鳴り先生の姿が見えると生徒たちが次々に着席

する。

座りっぱなしでは腰が痛くなるので、俺も一度立ち上がりながら席についた。

「あれ、そういうばラグナは……？」

すっかり静かになつたラグナの方を見ると、

「 ぐう 」

爆睡なさつていた。さつきの腕を組んでいるポーズのまま。

「 オイ！ 起きろラグナ、授業始まるぞ、つかもう始まつてん。」「んあ？ いいんだよ別にいい、タクマつむじっかり授業聞いとけって…」

変なあだ名を付けられてしまった。そのまんまだけど。

「そんな堂々と眠つて叱られても知らんぞ俺は」

これ以上を説得を続けると、俺まで怒られかねないので引き下がつた。

ちなみにあまりの爆睡ぶりに先生がキレたのは言うまでもない。

そしてこの日俺は廊下に立たせる生徒を初めて見た。

しかも異世界でな。

そんな意外と面白い奴が多いこのクラスで過いかけたり、特に問題はなくすべての授業を終えた。

教科書ノートが特殊なこと以外は特に日本のそれと変わらない。いや、日本よりもずっと分かりやすかつたかな。……俺の気分の問題かも知れないが。

昼休みになるとクラスメートたちが食堂へ誘つてくれたのだが、俺は副会長を持たなければならぬのでまた今度案内してもらう約束をした。

生徒たちで溢れた賑やかな廊下を、教室の窓から身体を乗り出して見渡す。

俺の姿を見て手を振ってくれるクラスメートに答えながら副会長を待つのだった。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.1 - 8 【生徒会長様と男子寮】

Episode 1 - 8 【生徒会長様と男子寮】

『見てみるつて、あれが噂の転入生らしが…!』

そんな視線をビンビン感じながら副会長の隣を歩く。
正直めっちゃ恥ずかしい！

そんな俺の様子を察してか、銀髪メガネが話題を振る。

「それで御剣、授業の方はちゃんと受けられたのか？　この学園の
魔法講義はほとんど日本と同じレベルだから、一応問題ないとと思つ
んだが」

「あ、はい、その辺は大丈夫でしたよ。ちなみに自己紹介も
「それは良かつた良かつた」

副会長の話では生徒会室が落ち着いて話ができる場所らしい。
2人で整然とした生徒会室に入ると、俺は早速話を切り出した。

「それで副会長、お話つてのは一体？」

「朝の続きだよ。これから的新生活、まだまだ不安が残ってるだろ
？」「

まあ確かに、お金とか寮とかまだ結構な問題があるな。
寮は学園が用意してくれるんだろうが……。

「お金つてどうすればいいんでしょうか？　俺一文無しなんですけ
ど」

「言つてて悲しくなる」とだが、事実だし仕方ない。

「それは……。学園長説明してないのか。全くあの人は」

近くの椅子に適当に腰掛けると、学園長に向けてか溜息を吐く彼。その後学園長に代わって俺への金銭事情を説明してくれた。

副会長の話を纏めると、まず金銭面については気にしなくていいらしい。

何でも転入生の食費や生活費は学園側が面倒を見てくれるそうだ。もちろん月に支給される額は決まっているから、全てタダといつづけではないけど。

驚くべきことに通貨が硬貨や紙幣ではなくポイント制だとついでいる。

生徒証が財布代わりになつて物を購入できるとか。

「異世界つて普通にすごいですね」と感嘆な声が漏れてしまう。

「あ～、こんなことで驚いてちゃいかんよ。まだまだこの先大変だから」

「聞くの怖いんですけど、どうこう意味でしょうか?」

「具体的には伏せておくが、日本や地球では有り得ないことがこの世界にはあるし、起こるつてことや」

「めっちゃ不安になるんですけど、こいつの方!…?」

「ふふつ、割とわざとだったりするわ。精精楽しみにしておけ」

右手でメガネを持ち上げて一ヤツと晒す。

そういう嫌らしさとこの妹に似てやがるぜ。

「冗談は抜きにして、本当に身に何が起るのか不安すぎる。

一応同じ人間の副会長もトウカも生きてるので大丈夫だと思つが。

「と言うか、お腹空きません?」

昼食を食べたいと副会長にアピールして見せる。

朝食が焼きそばパン1つだけだったので結構キツい。

「それなら今、アイツに買いに行かせてるから大丈夫だ」

「え、アイツ?」

買いに行かせてるって誰に?

それを考える暇もなくバンツといきなりドアが勢いよく開かれた。

何事かと思いながら扉の方を見やると、
息を切らせた1人の美少女がそこにいた。

「ハアツ、お待たせしましたの。昼食を買つてきましたわツ!」

その人はあまり聞く機会がないお嬢様口調で。

大きく肩で息をしながら、本日のランチを運んできた。

・

「わたくし、生徒会長のエルジィルム＝シアクウナと申しますの。

今朝は寝坊をしてしまってご挨拶ができずに申し訳ないですわ
「い、いえ気にしてないですよ。ええつと……?」

「妹と同じで呼べりこむよつ？　エルザで構いませんわ」

ああ、確かにそうだった。ニアが朝にそう呼んでいた事を思い出す。

「そう呼ばせてもらいます、エルザ会長」

会長の方は既に知ってるみたいだが俺は名乗り返した。
今日とこう田舎ど田舎のフルネームを人に伝えた田舎記憶にない
な。

「そう、タクマね。ようこそソリューションシアル魔法学園へ……ってお決
まり文句は、少し遅すぎるかしら」

「無論だ、本来それは今朝言つべきセリフだからな」

副会長が呆れた声で答え、エルザ会長が買つてきたパンを口に入
れる。

俺もありがたくチョコレートパンをいただいた。

エルザ会長はニアのお姉さんだ。

髪型は学園長に似たロングで、色はニアのピンクより少し濃く鮮
やかに見える。

生徒会長らしく高等部2年生の中では首席らしい。

だが寝坊が多いのが玉に瑕と副会長は晒つた。

『なんでコイツが俺より優秀なのか分からん』と。

「そ、それは夜遅くまで勉強をしていたからですわー」

顔を赤くして抗議するエルザ会長。

「……………」

「……………、別に良いんじゃないですか？」勉強なり

「まあまあー、タクマはアキラと違つて優しいですわねえ！」

適当に誤魔化したつもりだったが、随分と真に受けられてしまつた。

「その考えは甘いぞ御剣よ！ 生徒の見本たる生徒会長、いくら勉学に励んでも日常生活が弛んでいては話にならん」
「まったく、これだから嫌なのです。アキラは頭が硬くて……」
「やかましいわ寝坊助会長め。 つといい加減話を元に庚さんとな。御剣、昼食を食べ終わつたら寮へ案内するぞ」

副会長はパンを口に含みながら新たな話題を切り出した。
寮か、どうやら話の本題らしい。

「え、副会長が案内してくれるんですか？ それに授業もまだあるんじや……」

「アキラは優等生ですから、別に一日授業を受けなくとも平氣ですわ

「おおさすがだ」

「まあな、副会長なんで」

白銀暁がわざとじりしく ふんぞり返つた。

それが原因でメガネがズれたのはいつまでもない。

・
・
・
・
・

昼休みの終わり、賑わう学園を抜け出して俺と副会長は静かな寮

の中を歩く。

高等部第3男子寮が俺の住むことになる寮の名前らしい。ちなみに銀髪少女トウカが寮長をしている女子寮の隣だ。

「ヒロがお前の部屋だ、田町たまりいにし悪くないと毎日」「

副会長に促されるままに生徒証をドアノブへかざす。
するとロックが解除されたこと知らせる機械音が小さく響いた。
……マジでカードキーにもなるのかコレ。

生徒証の多様さにつづく感心して部屋の中に入る。

ベッドや机、料理場に洗面所。

銀髪少女の部屋と同じつくりだが、当然のことながら誰かが使つている形跡はない。

「ヒロが

これから住む部屋か。

「今度の週末にでも誰か誘つて、街へ装飾品を買つてくれるといい」

「そうですね。確かにこのままじゃ地味ですしこ

「あ、その時はちゃんと俺も誘えよな」

「へへへ」

適当に副会長をあしらつて部屋の中を歩きまわる。

純白のカーテンを開けると、今朝トウカの部屋から見た時と同じように大きな学園が覗けた。

「意外に早く終わっちゃいましたね」

時計を見るがまだ14時にもなっていない。
特にすることもなくベットへ身を投げる。

制服がシワになるが気にしない。カードで着替え直せば綺麗なものに戻るからだ。

その後数時間、俺は副会長から他愛もない話を聞かされた。

地球には存在しないような魔法の話、
去年副会長が魔法決闘というものでホールザ会長に叩きのめされた
という話、
数百年前日本から来た人が日本食などの文化を残したという話、
この学園には男女ともに人気が熱いアイドルが活動しているとい
う話などなど。

実に3時間近く2人で話し込んでいた。……暇人すぎるだろ。

「ちなみに俺の部屋は最上階、5階な。何かあればいつでも来いよ
「ここって何階でしたっけ？」
「真ん中の3階だ。部屋番号は314な。忘れるなよ

314で円周率かよ。嫌でも覚えられるわ。

副会長を見送りに外へ出ると、けょつと帰宅してきたラグナとテ
オにばったり会った。

その時知った話だが、周りの部屋は全部同じ第2クラスの男子の
ものらしい。

しかも隣はテオ、向かい側はラグナということが判明。

夜 食堂で夕食をとった後、2人の部屋にお邪魔させてもらひた。

ちなみに夕食はフィーダンラとかいう肉料理の定食だつた。
それどう見てもハンバーグなんだけどな。
味は良かつたぞ、俺ハンバーグ好きだし。

テオの部屋はよく整理されていてメチャクチャ綺麗だつたのだが
……。

ラグナの方は何かもう色々と終わつていた。言葉に表せないほど
に。

頑張つて清潔な部屋の状況を維持しようとした自身に誓つた
だった。

その後日が越えそうになるのを見計らつてまた明日と解散。
生徒証の着替え機能で元から登録されていた適当な寝間着にチエ
ンジしへべッドに潜り込む。

「明日はどうなつちやうのかねえ

俺はこれから未来に想いを馳せながら扉を閉じる。

新品なのか、純白の枕がものすごく寝心地がよくて俺は早く眠り
に落ちるのだった。

・
・

深夜、静かな学園長室に2つの影があつた。

「呼んだか、リリス学園長

「ええクリスちゃん、大切なお話があるんですよ」

リュミシアル魔法学園のベテラン教師、クリスティーナ＝ムーン
ライトにそのような呼び方ができるのは、どこを探してもこの学園
長ただ1人だけである。

「もう200年は言い続けてるんだが、いい加減その呼び方はやめ
てくれないか？」

「別にいいじゃないですか、可愛らしいんですから」

「可愛い可愛いくないの問題じゃなくてな、生徒に示しがつかないだ
ろ？……つて言つても無駄か」

クリスは大きな溜息を吐いて、金の長い2つの髪束を揺らす。
「一体なんの用だ、と尋ねようとして止めた。

このタイミングで呼び出される事案はかなり絞られるからだ。

「ま、用件は何となく察しが付く。今日の転入生についてだらう？」

クリスはその中でも特に気になつているものを挙げた。

人族の、名をタクマ＝ミツルギと言つたか。

教師の彼女ですら今朝になつて初めてその存在を聞かされたので
ある。

例を見ない不自然すぎる異界人、転入生だ。

「大正解　実はあの子のチカラを引き出して欲しいんですよ」

「“ラファーゼ”の事か？　随分簡単に言つてくれるな……。期間
は？」

「3週間後には彼のチカラが必要になりますので、それまでに何と
か」

「フツ、上等だ面白い。明日からきつちり鍛えてやろうじやないか」「クリスティーナ＝ムーンライト、期待していますよ」

高密度エーテル顯現体。
ラファーザ

リュミシアル界だけに存在する “エーテル増強魔力” を攝取することでき手にできる最強の魔力媒介である。

「……ここで学園長、一つ訊きたいのだが」

部屋から出て行こうとするクリスは、何を思つてか立ち止まつた。深い紅に染まる吸血族特有の瞳は、黒眼の学園長を鋭く捉える。

「生徒タクマは何者だ？ ビうせただ才能を持つた人間だけではないのだろう？」

視線の先を微塵も離すことなく、静かに口だけを動かす。

これはクリスの純粋な疑問だった。あの黒髪の少年に神は一体何を期待しているのかと。

「さあ？ 何でしじょうねえ……」

少年と同じ漆黒の髪を持った“神”は悪戯っぽく笑みを浮かべた。それは数百年前、身も心もボロボロだつたクリスに向けられたものとよく似ていた。

この世界に導かれた時、確かに彼女は学園長にこう質問したのを覚えている。

『なぜ、私を助けた？ 誰に殺されても文句を言えない吸血族なんかを』

その時の答えと、今それは何となく同じ様に聞こえたのだ。

「あの時から相変わらず、貴女の考えることはよく分からないな
「ふふ、他の人からもよく言われています」

まるでホンモノの天使のよひに可憐に咲き出す学園姫。
クリスは再度大きな溜息を残してから学園姫を出るのだった。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.2-1 【魔法学園のダンジョン】

Episode 2-1 【魔法学園のダンジョン】

異世界リュミナルの朝2日目。

ベッドの上で俺は自身に起じた異変に1人驚愕していた。

「本当に戻ってる……。し、信じられん」

昨日まで欠片ほどしか無かつたエーテルが、熱く俺の中を巡っているのを感じるからだ。

溢れんばかりのエーテルを右手に宿し、殺風景な部屋の中にかざす。

すると今まですり抜けてしまい、触れる」とすら叶わなかつた魔力が自然にその手に集う。

……やべえ嬉しそぎて涙出そうだ。

「までまでこれ夢じゃないよな?」

俺はベッドから飛び降りて洗面台へ。

冷たい水でぞんざいに顔を洗い立てる13回、この事態が妄想の產物でないことを確かめる。

よし、これは現実だ。

いい感じに眠気が吹き飛んだところで試しに昨日授業でやつてた
“フローズンショット”の魔法構成式を編んでみる。

美しいホライズンブルーの魔法陣が足元に展開されたのを見て、自然に笑みが溢れた。

「マジカル魔法はきらめく～、ミラクル奇跡がときめく～」

喜びのあまり即興で歌つてみる。音痴で力オスなのは承知の上だ。
よつと両手の力を抜いて魔法が発動する直前にキャンセル命令を
出す。

部屋の中でぶちかますわけにはいかないし。

昨日学園長やクラスの奴らが言つたあの言葉を回顧する。

『魔法なんて、明日にでも使えるよつくなる』

それがまさか本当に本当だつたとはな……。

朝っぱらから感動しつつ、窓を開けて大きく深呼吸。

今度学園長に会つたらちゃんとお礼言わないといけないな。

どいつ理屈かは分からぬが、実際エーテルは回復して魔法を使えるようになったのだから。

そんなことを考えているとコンコンと部屋の扉が叩かれた。

「タクマ君、起きてる～？ 僕、テオだけど一緒に学園行かないかい？」

誰かと思つたら爽やかクラスメートのテオだつた。

どうやら迎えに来てくれたみたいだ。

まだ教室までの道のりを把握できぬ俺にとつてはありがたい
ぜ。

「オーケー分かった、俺も行くよ

朝の日差しが差し込む窓の前で再び大きな深呼吸。枕元に置いてあつた生徒証を起動させると素早く制服にチエングする。

鏡で身嗜みを整えてからドアを開けるのだった。

・
：

寮の食堂でサンドイッチを頂いた後、テオと2人で第2男子寮を

出て学園へ向かう。

まだ教室までの道順をよく覚えてないのでテオが先頭で俺がその後に続く形だ。

「高等部の学舎は学園で一番大きいから気をつけてね」

「そうなのか。それにしても悪いな朝から面倒みでもらって」

「いいのいいの、僕ら友達でしょ？ 生徒会の2人だけじゃなくて僕にも頼つてよね」

ああお友達、実にいい響きだ。

ちなみにもう1人仲良くなつた友人ラグナは放置してきた。

なぜなら彼は部屋の中で爆睡、呼んでも起きる気配が一切なかつたからである。

昨日の爆睡ぶりを見るに、思いつ切り遅刻しそうで心配だが。

「そういえば今日は何の授業があるんだ？ 昨日と同じってわけじゃないだろ」

「うん、違うよ。たしか今日はダンジョン探索の日だつたね」

「…………はい？」

だ、ダンジョンだつて？ なんだか頭が痛くなる単語が出てきたぞ。

「それはズバリッ、学園が作った“仮想迷宮”のことなんです！」
「ぬわッ！？」

どこからともなく突然ピンク髪の少女が現れた。
水色のリボンで可愛らしく形作られた、小さなツインテールには見覚えが。

「……ミアか、朝から驚かすなよ」
「えへへすみません。さつきから話しかけるタイミングを伺つてた
んですよ」
「普通に話しかればいいだろうが。で、そのダンジョンとやらで一
体何するんだ？」

「その時の授業内容にもよりますが、基本的に探索です。もちろん

中には魔物などの敵が設置されますから撃破しながらですね」

呆れて桃色少女に聞き直したが、返つてさらに混乱する。
だつてねえ、魔物つてさあ。

「オイオイ、そんな危なそつな入れて大丈夫なのかよ？」

下手したら生半端な怪我じゃ済まなくなるんじやないだろうか？
気付いたら頭からガツツり食い殺されちゃつてましたテヘッ

なんて悲惨なことになりかねないぞ！？

「そんな世界の終りみたいな顔しなくても大丈夫だよタクマ君。あくまでもダンジョンは仮想世界だからね、中で何があつても怪我したり死んだりしないよ」

「先にそれを言つてくれ……」

その仮想世界がどういつ仕組で構成されているのかは詳しく述べないが、きっと光の空間魔法の応用か何かだろう。

とにかく俺の嫌な想像は杞憂だつたようだ。

「最初はビックリするかも知れませんけど、慣れれば魔物の相手なんて楽勝ですよ。中等部ミッドラリーの女の子よりも弱いんですから」

「そ、そつなのか？ なら少し氣が楽になるな……」

昨日副会長から聞いた話だが中等部ミッドラリーとは日本風に言えば中学生と同じ意味らしい。

異種族でも肉体的、精神的にも同じ年齢年齢といつて間違いないとか。

同じように初等部プライマリーが小学生、高等部グラウンダーは高校生に相当するらしい。

そんな中学生、14・15の女の子よりも弱いつて逆じ狄つかと思つ氣がするが。

しかし魔物ねえ。スライムとかゴーレムか？ 他には、うーん……。

生憎そういうのが出てくるゲームには詳しくないから想像できな

い。

願わくはあんまりえげつないのが出来ませんよう。

いやだつてゾンビとかのいわゆる死骸系ゾンビックは生理的に無理ですし俺。おやべえ想像したら吐き氣が……！？

「ちなみに結構いますよ、その……、死骸系の魔物」

「ははっ、はっ」

遠慮がちに教えてくれたミアに俺は乾いた笑いしか起こらなかつた。

もうどうでもなれ。

その後3人でお喋りしながら教室へ到着。これでなんとか寮からの道のりは覚えたぞ。

先に来ていたクラスメートたちに挨拶しながら相手の名前を確認。記憶力は悪くない方なので、顔と声を合わせれば大体名前が出てくる。

「おひ、おはよう。ってあれ？」

自分の席の前まで来ると、昨日は居なかつた女子生徒が隣に座つていた。

生徒証で学園新聞を観覧しているみたいだ。

「あら……、あなたが話題の？」

話しかけようと席に着くと、先に気付いて向こうから声をかけてくる。

「どうも昨日から転入してきたタクマだ。よろしくな

「ミコオムよ。昨日はちょっと寝坊しちゃつてね」

「ちょっと? 確か昼休みになつても来てなかつたよつな気が……」

「あはは、バレちゃったか。本当は田が覚めたのお休みが終わる時間だったの」

『わすがに寝すぎだろ』と突っ込むと『隣のラグナよりはまだマシよ』と彼女はなぜか誇らしげだった。

ミリオムと話すことで、第2クラス全員の生徒と一緒にコンタクトを取れた。

俺を入れて47人。男子が24、女子が23人だ。

それにしても席の両隣が睡魔人だったとはな……。

・
：

そんなこんなでH.R、そして授業が始まる。ダンジョン探索の担当教師は我らが2組担任クリス先生だそうだ。ちなみにラグナはギリギリで教室に滑り込み遅刻を回避した。

金髪吸血鬼先生はバカを見る目で晒つていたが。

「それでは早速迷宮探索に入りたいところだが、その前に一つ決めねばならんことがある」

クリス先生は教卓の上に両手をついて話を切り出す。

「貴様らも知っているとおり生徒タクマは昨日転入してきたばかりだ。当然まだこのクラシックにも所属していない」

タクマといふ言葉を聞くに、どうやら俺の話らしい。

つてかまた知らない単語が……。

「おいらグナ、クラシって何だ?」

「んあ? ああクラシてのはな、じうじう授業で一緒に行動するグループのことだよ」

赤毛竜人はそう言いながら机に伏した体を中途半端にこちらへ向ける。

その中途半端に開けた目を見るに、まだまだ寝足りないようだ。

ラグナの説明だと、クラシとは活動班と言ったところかな。
そりや1人で魔物と戦うのはキツそつだもんな。

「 そこでだ。彼を受け入れてくれるクラシはいないか?」

それを聞いたクラスのクラシリーダーから一斉に手が上がった。
ふむ、どこに所属させてもらおうか 。

「失礼、クリス先生
「む、どうした生徒トウカ?」

銀髪少女は一人立ち上がると、先生の目を見て静かに口を開いた。
クラスがざわつき出すのを全く気にする素振りを見せずに言葉を続ける。

「学園長からタクマ＝ミヅルギの管理は生徒会がするようにと言わ
れました。よつて彼の所属するクラシは私の所にしてもらいたいの
ですけれど」

「……どうか、なるほど。そういうことなら仕方ないな」

クリス先生は「ううう」と頷いて銀髪少女の要請をうそり受け入れた。

銀髪少女は満足気にこちらへしたり顔をして見せる。

え？ どういふ意図なんだ今のー？

「ちょっと、トウカさんそれセコくない！？」

「そうだぜ！ 僕たちだって転入生と親交を深めたいんだが」「

「やかましい。これは学園長の意思なのよ、文句あるのかしら？」

トウカは次々に不満をたれるクラスメートを一蹴りして着席する。

隣の席でニアがうふふと笑っていた。

「そういうことだ生徒タクマ。お前の所属クランは生徒トウカの所に決まった」

「はあ、さいですか」

そもそも俺は一言も自分の意見を主張していないけどな。

ま、別にアイツのクランに入つても不都合はないからいいけど。

「そろそろ、生徒トウカのクランメンバーを教えておかないとな。生徒ニア、ラグナ、テーオの4人だ。覚えておけ」

「えつ、お前らなのかよー？」

隣でラグナは親指を立て、テオとニアは笑顔でこちらを振り向いて見せる。

クラスで一番仲良くなつた奴らばかりじゃないか。

「よしよし、それでは仮想迷宮へ向かうぞ。他のクラスは授業中だから静かに移動するようにな」

先生のパンパンと手を叩く音を合図で、クラスメートたちが次々に教室の外へ出る。

つか そもそも仮想迷宮ダンジョンって学園のどこのにあるんだ?

俺は迷わないようにクラスメートたちの後に続くのだつた。

- Coming Soon Next Story ! -

Episode 2 - 2 【こぞ、仮想迷宮へ】

Episode 2 - 2 【こぞ、仮想迷宮へ】

学園中心塔の4階には他の学舎や学園施設に転移できる連絡通路
がある。

その1つが仮想迷宮への入り口といつワケだ。

転移魔法が施されているポータルの中へ進むと、景色は巨大な円形ホールへと変わった。
床は色鮮やかなタイルで彩られ、壁と天井は純な白で覆い尽くされている。

「こじが仮想迷宮？ なんかイメージと違うな」
「まだですよ、こじはただの入り口ですから」

1人呟くと隣のミアに『違う違う』と苦笑されてしまった。
入り口と言われても、どう見てもこのホールは行き止まりだ。
他に繋がるような入り口はどこにも無いようだが……。

「よし、全員移動したな」

広すぎるホールを見回していると、最後に入ってきたクリス先生
が声を響かせる。

「今回の探索実習は魔獣フェンリルの討伐だ。フェンリルは大型の
人狼、^{ワーウルフ} 気を引き締めて挑むように。撃破すれば魔晶石を落とすから
戦利品として回収してくるようにな」

フーンリルは聞いたこと無いが、ワーウルフって……。
間違いないオオカミ男のことだよな？

俺なんかに処理できるのか大いに不安なんですが。

「顔、すんごく青くなってるわよ？ 御剣拓磨」
「だ、誰がビビってるものか！」
「……分かりやすい男ねアンタ」

うをお今のは完全に自爆、言い返せないぞ。
ジワジワ恥ずかしくなってきたので銀髪少女から目を逸らす。

「……………ん？」

逸らした視線の先のクリス先生は白衣の内ポケットから赤色のカード、よく見れば生徒証に似ているソレを取り出して何やら操作をしていた。

左手にカードを持ち、空いた右手で空中に映された画面をタッチ。その操作に慣れているのか、右手のスピードが半端じゃなく速い。

「なあラグナ、先生何やってるんだ？」
「何つて仮想迷宮を作ってるんだぜ」

俺の問い掛けに、まだ眠そうな顔をしている赤毛竜人から返ってきた答えはそんなものだった。
いや、言わんとしていることは分かるんだけどね。

「テオ…………」

俺は一番丁寧に説明してくれそうなテオに尋ね直す。

テオは『一応はラグナの言つとおりなんだけじね』と前置きして続けた。

「まず先生が持つてゐるカード、見れば分かるけど生徒証と同じものなんだ。もちろん生徒用とは違つて教師専用の機能が備わつてゐるだけ」

「その機能の中に、『仮想迷宮を管理する』つてのがあるんです!」

登校時と同じように、横からミアが口を挟んだ。

説明の途中だつたテオは『ミアさんには参つたなあ』と苦笑する。そんな彼の様子を気にせず、ミアは明るい笑顔のまま続けた。

「クリス先生は今私達が向かう仮想迷宮のフィールドの形状、魔物の種類と強さなどを設定していらっしゃるんですよ」「そんなことまでできるのか。すごいな」

魔物にしても仮想迷宮にしても、地球じゃ考えられん。

副会長やクリス先生が言つてた『驚くこと』とはこういうことか。
しばらくしてホールの虹の床に一つ、また一つと金色の魔法陣が展開されていく。

なるほど、これが入り口つてわけね。

10個目の魔法陣が出来上ると、クリス先生は『注目しろ』と声を上げた。

「前の時間にも言つたが、3学期も残り1ヶ月と数週間だけだ。2年生になつて痛い目を見ないよつにせいぜい腕を磨け。では開始!」

その言葉を聞いて次々にクラスメートたちが魔法陣の上に消えていく。

俺たち5人も顔を見合わせ、トウカの『行くわよ』の言葉を合図に進もうとするが。

「待て、生徒タクマとそのクラシメンバーよ

金髪吸血鬼に呼び止められた。
長いツインテールを後ろに払い、その紅い目を俺に向けて補足を始める。

「貴様は魔物を見るのも初めてだるうしな、一応は配慮しておいたぞ」

「えつ、配慮つてどういう?」

「ま、簡単に言えば弱い魔物しか湧かないようにな

え」と、つまりあれか。イージーモードってやつ。
やつたぜそれなら初めての俺でも安心。

つて待て待て待て。

「それって本当に大丈夫なんですか?」

いくら相手が弱いと言われてもな……。

「攻撃魔法、少しば能使るよになつたのだろう? ならば十分戦えるはずだ

「んな無茶な。てか何で知ってるんですか」

「昨日は塵程も無かつたエーテルがあからさまに増えているからな。
見れば分かるさ」

「エーテルって不可視なハズなんですけど」

「フツ、私のような強大な魔族の前では例外だがな」

この言葉で地球人の常識がまた一つ崩れ去りました。
やっぱり異世界つてすげえ。

「話を戻して、魔法の練習も兼ねてということだ。“自分の力”で魔物を蹴散らし、フェンリルを狩つてこい」

ん、なんか聞き捨てならない言葉が聞こえたような。自分の力で？

「ちょ、それってどういうことですか！？」

「そのままの意味だ。クラシメンバーに頼らずにな

え、じゃあなに一人で行けと？　さすがにそれは怖いですよ！？」

「じゃあ今回俺達とタクマっちは別行動つてことですか？」

「いや、貴様ら4人には彼のサポートをやってもらう。後ろから着いて行って、手は出さず、あくまでもアドバイスをしてやれ」

どうやら先生の話では俺一人じゃないようなので少し安心する。
1人で戦うのは変わらないんだけどな。

「それでは貴様らも行け。健闘を期待している

「……なんとか頑張ってみますよ」

『自信はないんですけど』と付け足して、最後に余った魔法陣へ向かう。

まず銀髪少女が俺に見本を見せるように魔法陣に足を踏み入れる

と、その華奢な体が眩しい光りに包まれ、ふっと消えた。

俺も彼女のすぐ後に続いて魔法陣に乗る。

直後 何かに引き上げられるような感覚がして、無意識に目を瞑るのだった。

ニアが最後に仮想迷宮ダンジョンへ潜つたのを見計らい、クリスは一人呟く。

「さあ、見させてもらひつぞ生徒タクマ」

その黒髪の転入生が、まずはどれほど戦えるのかを。

・

「ルリは……、洞窟ソレか？」

次に目を開けた時、明るく開放的だったホールはその姿を消し、代わりに薄暗い閉鎖的な空間が目の前に広がっていた。

サイドにある壁と壁の幅は大体5メートル。

規則正しく土壁にかけられたランプに怪しく照らされ、この空間が俺に抱かせるイメージはまさに洞窟ソレだった。

確かにここがダンジョンと言われば、納得できるしな。

「今回はそうみたいだね。他にも森の中とか火山地帯とか色々あるんだよ」

気付けば他の3人も転移してきたようで、再びテオが話し始める。

彼の説明に耳を傾けながら土壁に触れると、ゴツゴツしてひんやりした土の感触がした。

仮想空間とは言え、なかなか凝つてあるじゃないか。

「火山つてオイ。どんなのか想像できないな」

「まあそれは今度のお楽しみといふことで」

「さすがに火山は正直樂しみにはならないぞ」

暑いの苦手だしね。

いや、そもそも火山地帯つて近づいて大丈夫だっけ？

「無駄話してる暇はないわよ。さっさと奥へ進みなさい」

「そりや分かつてるけど、魔物がいるんだろ？」

「大丈夫大丈夫！ 殺り合つてれば自然に慣れてくれるぜ」

む、赤毛竜人が物騒だ。

「ほらタクマ君、さつそく魔物がいますよ！」

渋々前へ進もうとするより先に、ミアが敵を見つけたようだつた。

「えつ！？ ちよつ、ど、どこだよーー？」

「ほら、アソコです！」

息を飲んでミアが指さした方向に目を凝らす。
が、薄暗くてよく見えない。どこだ？

「なあ、ひょっとして……。アレなのか？」

数秒の後 それらしきモノを見つけた。サッカーボールより少し小さいかな。

砂っぽい地面の上に、水色の物体がモゾモゾと動いているのを。

『「ひこゆ、こゆーん』

なんかもう色々と凄い鳴き声を放っているのを見るに、間違いないだろ？

とにかくこっちには気がしていないうだ。

「なにあれすんじく可愛い」

予想と随分違う。本当に魔物なのか？
すぐ触つてみたい！ 腕に抱くとさぞ心地良いことだろ？

「見た目に騙されないで！？ 確かに僕もそう思つけどやー。」

「そ、そつか……。で、あの魔物は一体？」

「スライムよ。仮想迷宮ダンジョンの中で一番の雑魚敵

あ～、そうだつた。どこかで見た事あると思えば。

大昔のコンピュータゲームにいたなスライム。

確かにそのゲームでも一番の雑魚敵じゃなかつただろうか？

「よしタクマつち、まずはアレを倒してみよ！」

「りょーカい。とりあえずやってみるよ」

めつちや 可愛いけど敵なら話は別だ。

ラグナに応え、腰からゅうくり魔鏡を取り出し前へ出る。

2日前に3名様のチンピラを彼の世に送り届けた品だ。

トウカには障壁で防がれてカスリ傷1つ付けられなかつたけどな。

果たして魔物^{スライム}に効くのか不安なものが、やつてみないと始まらない。

未だこちらに気付いていない1匹のスライムに狙いを定める。だが、いざ引金に力を入れようとするとところで手が止まつた。

少しげらい工夫してみたい。そんな気持ちが俺の中にあつたからだつた。

そうだな、まずは単純に魔弾を無属性^{マナ}から火属性^{フレア}に変えてみよう。

『……火魔力装填』

ちょっと簡単すぎて工夫とは言えないかも知れないが、頭の中で火の魔力を集める構成式を展開、詠唱する。

ちなみに特定の魔力を集める構成式を“属性魔力装填^{エントチャント}”と言うぞ。属性魔法を使用する上では基礎の基礎だから感覚を掴んでおかないとな。

続いて小さく燃える魔弾を銃口の前に3つセットする。

テニスボールぐらいの大きさに肥大した炎球は薄暗い洞窟を赤く染め上げていく。

だんだん指先が熱くなってきた。もう十分だらう。

「行け^{G.}」

俺の合図と同時に緋色の魔弾が真つ直ぐにスライムへ襲い掛かる。

紅い尾を引く3つの炎球は短くも美しく感じられた。
水色のスライムは自分に向かってくる炎球に気付いて逃げようと
するが。

『ピギヤッчиー。』

「うわあ……」

何と言つたか……。逃げるスピードが遅すぎるぞスライムよ。
愛くるしい田をしていた水色魔物は嫌な断末魔を残して燃えてし
まつた。

なんだか妙な罪悪感が半端ないなつ！

豪快に発火していたスライムはやがて、赤の炎」と白い光の粉になつて霧散してしまつ。
果たしてこれで倒したことになるのか？

「ナイス一撃だつたぜタクマっちー。」
「なんか意外とあつさりだつたけどな」
「当たり前。スライムくらい誰でも素手で殺れるわよ」
「さいですか」

ならお前やつてみるよー」と言つてやりたいが面倒臭くなつそう
なので抑える。

しかしこの銀髪少女、マジで素手で潰しちゃつだな……

「うんうん、ホテルの魔力制御もちゃんとできてたよ」
「そうですね。この調子で進んでいきましょう」

テオとミアの2人からも激励を受けて、再びクラランの先頭に立つ。

『すう～、はあ～』と少し長めの深呼吸。

「よし、気合入れて進むか」

俺は白き魔鏡を構え、闇に溶けた洞窟の奥地へ歩き出した。スライムより強大な魔物を倒す魔法を、自分の頭から探しながら。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.2-3 【魔獣ファンリルの咆哮】

Episode 2-3 【魔獣ファンリルの咆哮】

薄暗い洞窟を探索し始めてから、あれこれ2時間近くが経とうとしている。

その間に処理した魔物は恐らく100匹を軽く越えているだろう。もちろんスライムだけじゃなくて他のも5種ほど見つけた。

ゾンビ？ ああしつかりいらっしゃたぞ。

直視するのが嫌だから颶爽と魔弾を叩き込ませてもらつた。

テオからの豆知識だが、ゾンビなどの死骸種の魔物は燃やすか光の浄化魔法を使わないと復活してしまつらしい。

なんとまあ恐ろしいことよ。

ゾンビの他には、まったく俺が想像もしなかつた魔物もいる。
例えば

『紫電の大槍、どりやあつ！』

気合の籠つた掛け声を合図にトリガーを引いた。

バリバリと危なそうな音が鳴る槍状の魔弾、俺の倍ほどある巨大で鬼のような魔物をいとも簡単に貫ぐ。

緑の肌をしたこの大きなのをオーガと言つらさい。

スライムと並ぶほど有名で、気性が荒くとても凶暴な肉食魔物のこと。

最初はその威圧感に腰が抜けるかと思つたけど、十五近く狩つて

いふと流石に慣れてしまつ。

「そろそろ終点に着いてもいいんじゃないか？」

「ええ、あと少しよ。 あ、またゾンビ」

『ああもつゝ、居すぎだろゾンビ！ 深紅の焰閃！』

銃口から放たれた紅いレーザーが徘徊するゾンビを焼き切る。何体も狩ってる内に見つけ出した一番効率がいい攻撃魔法だ。遠くまで届くからあんまりグロいの見ずに済むし。

「でもタクマ君、今まで魔法を使えなかつたとは思えないなあ」「私もかなり素質があると思いますよ。精度も結構なものですし」「え、そうかな？ まだまだ自信がないんだけど」

ミアが笑顔で褒めてくれるのでけよつと照れる。少し顔が赤くなつてないか心配だ。

「世辞といふことも分からぬのかしら御剣拓磨」「いちいち茶々を入れないと気が済まないのかお前はよつ」
「それが私、白銀冬靈」
「したり顔でかつ清々しく言つなー!？」

初対面の不信感はまだ完全には消えてはいなが、トウカとはそれなりに会話のキャッチボールができていた。

……できるよな？

「はいはい、ケンカしないケンカしない！ ほら、ゴブリンが湧いてるよ」

「クツ、覚えてろよ銀髪少女！」

「覚えておいてあげないこともないわ

トウカに色々言い返したい気持ちを抑え、水の魔力をエンチャントしながらゴブリンたちの前へ出る。

ゴブリンは亜人でオーガなどに比べると体も小さいが、他の魔物より知能があるため注意が必要らしい。

ざつと20匹、ハンマーのような黒鉄の鈍器を振りかぶつてこちらへ奇襲してくる。

『撲殺はちょっと遠慮願いたいぜ。氷結の跳弾!』

Frozen Impact

今朝使いかけた魔法を、今回は思いつ切り解き放つ。
ホライズンブルーの魔法陣から絶えず冷たい魔弾が生成され、前方のゴブリンへ大量に撃ち込まれていく。

狭い洞窟、土壁に当たった魔弾が跳弾を起こして“氷結の跳弾”
は逃げ場のない攻撃魔法となっていく。

『さつてこんなもんかな、氷碎』

Ice Shatter

そう唱えた瞬間、ゴブリンたちを凍り付けにしている水晶にパキ
パキと亀裂が走り、盛大に砕け散つた。

魔法構成式に少し工夫すればこのような応用も可能だ。

「……はあ、そろそろ疲れてきたぞ」

ゴブリン殲滅後、ダイヤモンドダストが浮かぶ道を進みながら首を回す。

かなり歩いたのに加え、魔法も行使したから尚更だ。

「そんなタクマっちに朗報だ」

「ほう、なんだ言ってみろ」

「あと2・3歩進んだら仮想迷宮最奥だぜ」

やつと魔獣フェンリルさんがいる場所の前まで来たらしい。

「ボスは雑魚とは違ってしぶといわよ」との銀髪少女の声に、俺は握る魔銃に力を込めて顔を上げ、足を進めるのだった。

・
：

入り組んだ造りになつてゐるらしい洞窟。

その最奥は大きく開けており、さつきまでいたホールに似ていた。もちろん薄暗くて湿気つた雰囲気は変わらないが。

「ボスがいるからボスゾーンね。随分安直な名称だ
『グウルルルアアア！』

「いつ……!? な、なんだ!?!?」

いきなり上げられた凶なる咆哮に立ち竦んでしまう。

殺氣に押し潰されそうになるが、その主を全神経を使って探す。

「見つけましたよつ！ 魔獣、人狼フェンリルです」

ミアが見つけた先、俺たちとは反対方向の位置に奴はいた。

「あ、あれがオオカミ男……」

実際オオカミを見たことはないが、コレは違うだろ。まず一本足で立つてるし。

「こちらを捉えた人狼の鋭い目には敵意が満ちていて、その威圧感は熊や虎を優に越えているように思えた。

「ちょ怖っー？　って、なんかこっち走つてくるー？」

どう見ても今までとは違う魔物の霸気にたじろいでしまつ。やべえ勝てる気がしないぞ！？

「いいから、さつさと行け」

「ぎゃ、うわあつー？」

銀髪少女に後ろから容赦なく蹴られて前へ押し出されてしまつた。ひ、酷すぎる。まだ心の準備ができてないのに！

「男の見せどこりだぜイタクマつち！」

「キミならで起きる、僕はそう信じてるよ」

「タクマ君ー　落ち着いて頑張つてくださいー！」

ギャラリーは完全に他人事だ！？　しかもしつかり障壁まで張つてやがる……。

『ヴァルオオオオ！』

「う、嘘だろオイ……」

さらに大きくなつた咆哮に、嫌々前方を見遣る。その先の人狼は、俺との距離をかなり縮めていた。

迫るスピードをさらに加速させ、不気味な赤に染まつた凶爪を振り上げている。

あんなもんの餌食になるなんて冗談じやないぞ！

「うひ、あぶねえー？ はあツー！」

そう言つてる間にフーンリルはあつとこう間に田の先に。大きなモーションで右腕を振り下ろしてきたところを素早く前に飛び込み、間一髪でかわす。

「喰らうえやッ！」

空振りして態勢を崩している人狼。

後ろに回り込めたチャンスを逃さぬべく、その背を思いつ切り蹴り飛ばしてリー・チを広げる。

『グウラアアー！？』

顔面から地面に叩き付けられたフーンリルは悲鳴を上げる。

所詮 魔物なのか何が起きてるのか分からずに混乱しているらしい。

「やへーと……。反撃だ」

一いちらのペース持ち込めたことで、だんだん恐怖心が薄れてきた気がする。

俺は本日絶賛大活躍の魔銃を構え、次の魔法の詠唱にかかる。正三角形の魔法陣が空中に描かれていく。

『氷の魔弾よ、眼前の敵を肅正せよ！

F reez e lazer
氷結の魔閃！』

ターゲットを倒れている人狼に指定し、氷結を狙う。

直進する二本のレーザー。

それらは同時にフェンリルへ直撃し、爆ぜた冷風が辺りに舞う。
後は“氷碎”^{（ヒュウシ）}を唱えれば……！

「 つてオイ、なんで凍つてないのつー？」

そればかりかダメージが全く通つてないようだった。
勝利を確信するにはまだ甘かったか。

やつぱり今までの雑魚とは違つた。

……クソッ、何が原因だ？

「 その人狼は魔力耐性を持つてるような。水魔法は効かないわ」
ホールの隅から銀髪少女がはつきり聞こえる声でそう言った。
アドバイス、なんだろうなコレ。

「先に礼を言つとくぞトウカ」

「……無駄口叩いてる暇があつたら勝負に集中するのね」

「フッ、分かつたよ」

俺は笑みを浮かべながら、ゆづくつと立ち上がりとする人狼に気付く。

さりにフーンリルとの距離広げるため、後方へ走る俺。

「ハツ、ハツ、ハツ……！ こんなもんか」

十分に離れたところで立ち止まり、フェンリルを見据えた。
そして新たな魔法構成式を展開する。

『土魔力装填、凶鋭なる石針！』

Enchanted Rock Edge

フェンリルの足元に巨大な魔法陣を出現させ、地面から岩の棘で
串刺しにする作戦だ。

迅速な魔力収束と詠唱を行い、一気に攻め立てた。

ドドドッと土魔法を使ったことで地面が大きく揺れる。
するとフェンリルが立っていた位置を中心に土煙が激しく上がり、
俺の視界を覆い込んでしまった。

しまったやうすぎたぞ。これでは視界が悪くてヤツの姿が確認できぬ。

一応魔法は決まったと思うんだけどな……。

「タ、タクマ君！ 前見てください、前を！」
「え、なにっ！？」

ズシッという嫌な音とニアの叫び声を聞いて、ゆっくりと前を見る。

「んなッ！？」

心臓が止まるかと思った。人狼の顔が目の前にあつて。

黒ずんだ茶色、毛むくじゅらの腕が俺の左胸に食い込んでいて。

「う、ああ……」

眼前の光景を目にして初めて痛みが広がる。
これは、ヤバい。どうする？

そんなことを考える間もなく、俺はフェンリルが貫いた勢いのまま後方へ投げ捨てられてしまう。

受身も取れず背中から強く落下してしまい、更なる痛みに襲われるが寝転がってる余裕はない。

「つう、いてえな。ハア、ハア……」

気合で起き上がり、ゆっくりと左胸を摩る。

今朝テオが教えてくれたとおり、血も出でないし怪我もしていない。

“仮想空間”じゃなかつたら確実に死んでたぜ。

ROCKY
考観するに、どうやら“凶鋭なる岩針”は綺麗に避けられてしまつたらしい。

投げられ宙に浮かんでいる時、フェンリルが無傷なのを確認したからだ。

ううん、ちょっと調子に乗りすぎたかな。

『グオオアアア！』

立ち上がった俺に、フェンリルは再び狙いを定め突進してくる。
「ちらはといつと体が重く、さつきまでのよひに上手く動けない。
長期戦は無理か。

『…………雷魔力装填』

「うなつたら さつさと仕留めてしまおう。

右手でまだ痛む左胸にそえ、左手で魔銃を強く握る。

『今度は決めさせてもらいうぞ。紫電の束縛！』

銃口の先、一本の紫電が走る。バチバチ、バチバチと。凶暴な人狼に触れ、その光が眩しく包み込んだ。

突進していたフェンリルは、電撃の拘束の前に倒れてしまう。俺はそれを確認し、トドメの魔法を詠唱し始める。

『貫けっ、紫電の大槍！！』

今日一番の大きさと威力を込めた魔弾を、藻搔くフェンリルの頭に撃ち込んだ。

・

「あ～、死ぬかと思つたあ！」

フェンリルが光りに包まれて消滅した後、俺はすぐさまその場にドサッと寝転がる。

ピリピリする左胸の痛みは引いたのだけれど、全身の疲労感が代わりに押し寄せてしまったからだ。

「途中危なかつたけど、初陣にしては中々だつたぜタクマっち

「私もそう思います！ 最後は格好良かつたですよ！」

「そりやどーも……」

4人がこちらに駆け寄ってきたので上半身だけでも起こした。
まだ少しほ立ち上がりそうにないけど。

「でもまだ終わつてないよ。魔晶石、回収しないとね」
「魔晶石……、こ、これか？」

テオに言われて思い出す。確か戦利品だつける？
フェンリルが消滅した場所から1つの宝石を拾い上げる。
透き通つた、見た者を魅了する蒼い宝石。

「それは水紋石ですね。加工して身に付ければ水魔法を使う際の一
テル負担が減るんですよ」

「この色と同じラピスラズリの瞳を持つミアが、笑顔で教えてくれ
る。

なかなか優秀な魔法アイテムらしい。

「…………ん」

銀髪少女が無言で俺を見下ろす。

何か言いたそつだが、何を言ひたいのかは分からぬ。

「それなりには頑張つたつもりなんだが

何か皮肉を言われる前に、努力はしたと伝えてみる。

「ま、とりあえずは及第点じゃない？ ねえ、クリス先生？」「ハハ、及第点か……。つて、クリス先生？」

意外にも認めてくれた銀髪少女に安堵するが、居ないはずの人物に問い合わせた彼女にハテナマークを浮かべる俺。

なんで今先生の名前を？

「………… 気付かれてしまっていたか。なかなかどうして鋭いな生徒トウカよ」「うわっ！？」

突如背後から聞こえてきた担任の声に、トウカ以外のメンバーが慌ててその方向へ目を遣る。

するとそこには金髪ツインテールの吸血鬼の姿があつた。

「ビビビ、ビうしてクリス先生がここに？」「いや、少し転入生の様子見にな」

急すぎる出来事にテンパるニアやテオ。いや、俺も十分びっくりしてるけどね。

「すべて見ていたぞ生徒タクマ。」苦労だつたな「あ、はい。ありがとうございます」

彼女は俺の前まで来ると、紅い目を向けて笑みを浮かべる。あまりにも優しく微笑んで言う先生に、俺は好意を覚えるのだった。

しかしこのファンタジックな俺の異世界学園生活。

それがさらに妙な方向へ展開していくのを、この時の俺は知らない。

もとい、大体1時間後には知ることになるのだが。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep.2-4 【ランチタイムの一「者面談】

「」注文はお決まりですか？」
Episode 2-4 【ランチタイムの一「者面談】

ウエイトレスが丁寧に水を置きながら笑顔で尋ねた。
メイド服に見えなくもないフリル付きの制服が輝かしい。
その姿に思わず魅入ってしまいそうになる。

「んー、えっと……。よし、それじゃあカツ丼定食で」「私はいつものを頼むぞ、もちろん大盛りでな」

生徒証から映し出されたメニューを見直してそう答える俺と、見
ずとも最初から決めていたらしい金髪ツインテールの少女。

「はい、かしこまりました。カツ丼定食と激辛ラーメンEnfer
n○大盛りですね」

「少々お待ち下さい」と一礼して席を離れる彼女を田代追いなが
ら、俺は『やつぱりおかしい』と心中で呟いた。

「どうした生徒タクマ？ 苦虫を噛み潰したような顔をして」
「いえ、ただ学食じゃなくてレストランに見えるなあって思つただ
けですよ」

普通学食にウェイトレスなんていないはずだしな。
つかそんな酷い顔してねーよ。
少しは難しい顔をしていたかも知れないけど。

「どうでも構わんだろう。小事こじでグチグチ言つた
「う、分かりました……」

完全に一蹴りされ、強引に納得をせしめてしまつのだつた。

もつ説明の必要はないだらうが、ここは学園中心塔にある食堂の一席。

時は正午を過ぎた昼休み。続々と学園の生徒が昼食田端にてに集い、このHariaの席はすでに満員状態だ。

ちなみに2階と3階のフロアは全てが購買食堂となつてい。
ミドラー グランタリー
中等部と高等部、両方の生徒が集まるのだから当然の広さといつたところか。

「それで、お話とは何でしようか？ クリスト先生」

カツブル席、俺の向かい側に座るのは我が担任だ。
迷宮探索の後『2人で話すことがある』と昼食を誘われ、今に至る。

残念ながらクラスメートたち親睦を深めるのは明日に延期となつたが。

「ふむ、单刀直入に伝えよう生徒タクマ」

少しの間があつてから、先生は表情を曇らして話を切り出した。
さつきまでは適当な談笑だったが、ついに本題らしい。
俺は周囲の声をシャットアウトして続きを読む。

「『』のままでは貴様、確実に留年だぞ」

冷ややかな声に、空氣と俺の背中どが凍つた気がした。
……な、なんだつて？

「そ、それってまさか……、あのRyu Neenですか？」

「イエス、あのRyu Neenだ。ふふつ」

表情を一変させ、今度は嘲笑つかのように呪文を復唱する先生。
『冗談でしょ？』と田配せするが、細い首を横に振られてしまつ。

「え、マジで留年…？ ちょっと待つてくださいよ！」

ただの面談かと思っていたら、随分と芳しくない内容ひじこ。
留年でオイ。まだ転入してから2日目なのにな俺。

「誠に遺憾で残念だ。またか私のクラスからな……」
「だから待てつてば！？ 『』のちびっ子吸血

「あ、あ、ん！？」

やべえつい口が滑つた！？

強く凛々しい紅い瞳を釣り上げ、キレ気味な声で凄まれてしまつた。

さすが吸血鬼、背はちっぢやにけど怖えな。

「……詳しい説明をお願いしますクリス先生」

俺はしょんぼりと頭を下げ、改めて質問する。

「ふんつ、説明も何も貴様が転入してきたのは昨日、3学期の真ん

中だぞ」「

「単位数が足りないのか!?　いやでもそれって学園側のミスでは

」

「そんなもん私が知るかっ。この時期に転入してきた貴様の責任だ
うづが

もう吐き捨てて、ゴクゴクと喉を鳴らし水を飲むクリス先生。

「うわあ……」

なんてこいつたい。学園長と話した時に気付くべきだつたな。
てか先に教えるよリリス学園長。留年なんてカツコ悪いじゃない
か。

ん、でも待てよ?

無理に2年生になるより、新しく1年生から学生始める方がむし
ろいいのか?

だつてホラ、この世界どころか学園のことさえ全然知らないし俺。
あえて1年遅らせた方が、学園生活はスムーズになるかも。
異世界から来る同じ環境の新入生だつているだろうし……。

「そういうことならもう留年でいいですよ。来学期から改めて頑張
りますんで」

かなり極論かも知れないが、思い切つて先生に伝える。
すると先生は フフフと不気味に笑いながらこいつ返してきた。

「勇者だなあ生徒タクマ。自ら後輩になり下がる道を選ぶとは
「え、後輩?」

「貴様は2年生となつた我がクラス一同に、『先輩』と付け足さればならないわけだ。いやあ結構結構」

嫌らしくクリス先生が晒い、俺の見落としを突く。
あー、そうだよな。その問題があるんだつたな。

IJの学園の生徒としては周りの奴らの方が先輩なのだけど、実際に名前に先輩を乗せるとなると結構キツイか。
とりあえず頭に浮かんだクラスメートに『先輩』と付けてみる。

「うわあメッシュチャ嫌だ！？ 特にラグナが」「んなつ！？ オイ聞こえてんぞタクマッちー」

数個のテーブルを挟んだ先から赤毛ドラゴンの声が飛んだ。
お前いたのかよ。……聞こえないフリ聞こえないフリ。

とにかく、やつぱり留年は嫌だ。いろいろ癪だし。

「まあな。そう考えるのが普通の判断だ」「それで進級するにはもう手遅れなんですか？」
「安心しろ、救済策はちゃんとあ

「お待たせしました」。カツ丼定食と激辛ラーメンInferno
大盛りになります」

「なツ！？」

言葉を続けようとする先生を遮り、ウェイトレスが料理を運んできた。

鼻を強く燻る、ものすごい香りと一緒に。

・

「貴様はオリハルコンを知つてゐるかな?」

「つて話題変わつてますけど、俺の留年^{リョウニ}云々はどうなつたんですか」「そう急かすなよ。ちゃんと関係あるからまずは私の話を聞け」

暗に「聞かないと見捨てる」とも言われている気がして、俺は静かに頷くことしかできなかつた。

「次元体によつて呼び方は様々だが、聞いたことぐらいはあるだろう? 貴様がいた日本だと確か……、緋^ヒ緋^ヒ色^{イロ}金^{カネ}だったかな」「いや、オリハルコンで知つてますよ」

確かに古い魔導書や小説にもよく出てくる金属だ。
つかヒヒイロカネとかマイナーすぎるだろ。

「俺の知つてゐる範囲じゃ、とにかく『テタラメな金属と聞きますが

』

オリハルコンは非生物でありながらエーテルを放つ。
魔力媒介物質として最高級のレアメタルだとか。

その点『神が与えし金属』とは良く言ったものだな。だけれど。

「あくまでも伝説の範囲で、ですけどね」

口に頬張つたサクサクのカツを噛み砕き確認する。

そう、そんな金属は伝説。今ではただの妄想。

仮に昔はあつたとしても現代の地球には存在しないハズだ。

「フフフなるほど云説か。まあそんなどりだらうな

クリス先生は血の色に染まつた激辛ラーメンを口に運んだ。
オプションの七味をかけずとも、デフォルトでその色はヤバいと思つ。

見てるだけでは汗が出るな。めっちゃ辛そうだ。

「 ハア、最高だな。お前も一口どうだ?」

「いいえ、俺まだ死にたくないんで」

即答、絶賛ノーサンキューである。

名前を完全に覚えてしまつた激辛ラーメンエッフェル。

先程ウェイトレスが運んできたメニューだが……。

香りといい色といい、どう考えても俺の口には合わないだらう。

「んで、そのオリハルコンが何ですって?」

どうして異世界で名称が同じなのか気になるところだが、美味た
るカツ丼を黙々と口へ運びつつ、先生へ話を振つた。
まだ俺の留年救済策には辿り着いていないし。

「ふむ、それより先にオリハルコンは存在すると教えておいてやろ

う

「ははは～先生。俺の世界觀が壊れていきますー。」

あまりにも軽く真実を告げられるので、なんかもう笑えてきた。
傍から見たらさぞ馬鹿な奴に見えるだらうけど。

「そつ気に病むな。異界に来た以上カルチャーショックは必然だ」「つまりこれからも壊れていくんですね。俺の世界観は」

クリス先生は「まあな」と捨て置いて、話を続ける。

「これからが本題だ。お前も知るよつて、確かにオリハルコンは最高級のレアメタルだ。しかしな、それを越えた魔力媒介物質が開発されたのだよ」

「……冗談じゃないなら、かなり凄いお話ですね」

ビリセ[冗談などでは断じて無いのだろう。

血饅氣に話す先生の田は真剣そのものだから。

「喜ばしことに本当だ。話をラフアーゼヒトリ

うん、やつぱり本当らしい。

俺は定食についていた汁物を啜り、初めて聞いた単語について思考する。

「ラフアーゼ、ねえ？ そんなものかまったく想像がつかんな。

「それってやつぱり金属なんですか？」

「違う。高密度Hーーテル顯現体、一言で言つと“Hーーテルの塊”だな」

「Hーーテルの顯現体！？ ちよ、そそそそんな馬鹿なつ」

さすがに無視できない言葉を聞いて、思わず大きな声を出してしまった。

落ち着けとチョップを喰らつてしまつが、頭は混乱したままだ。

なぜならエーテルは生命の魂から発生する靈的な物質。実体を持たず、体内から取り出すことは不可能なハズだからだ。だから“エーテルの顯現体”なんて……。ありえない、矛盾している。

「何がどうなつてそんなことが？」

「別に説明してやつてもいいが、貴様には難しそぎて理解には及ばないと思うぞ」

「じゃあ俺にも分かるようにお願ひします」

間髪入れずに無茶を要求してみせた。

「うなつたら無理矢理にでも理解してやる。

「つたく最近の若い奴はこれだから……」

「無関心よりは良いじゃないですか」

「小僧め屁理屈を。まあいい、分かつた教えてやります」

最初はブツブツ文句を垂らしていた先生だが、続けた俺の言葉に「上等だ」と笑みを浮かべ、口を開いた。

「まずエーテルに唯一干渉することができる物質がある。名をエーテル増幅魔力、ミシックと言つてな。それで」

「あ、ほ、最初から分かりませんつ」

「やる気あんのか低脳めつ！」

だつて専門用語っぽいの多くて頭に入つてこないし。しかも低脳つて教師にあるまじき暴言だなオイ。

その後先生からさらに分かりやすく教えてもらい、結局俺が理解

できたのは概ねこんな内容だ。

『//シックはリュミナル界特有のもの』

『//シックはラファーゼを生成するのに必要不可欠』

『//シックは魔法を使う」と自然に体内に取り入れられる』

つまりは魔力と同じような物で、対応する効果はラファーゼの生成って所だな。

先の迷宮探索で魔法を使ったから、俺も極微量の//シックを身体に取り入れて「ことになる。

「とにもかくも、高等部ではラファーゼを生成できているのが最低限必須でな。転人生の貴様も例外ではないのだ。この意味がお分かりかな？」

「つまりそれが留年救済策つてことですね。そのラファーゼとかいう魔力媒介の生成が」

「おお、じつじつことは理解が早くて助かるぞ」

「ここまで話が進むのに長い時間だったが、なんとか留年救済の方法が明かされたのだつた。

でも、そんな簡単にできるのかな？

「ちなみに去年転入してきた生徒ラグナは3ヶ月かかった

「えー、それだともう新学期始まっちゃつてますよね？」

なんせ新学期は後1ヶ月とちょっとだ。

ラグナがサボったとかじゃないと絶対に不可能な話になる。

「ああ、ヤツのスピードだと絶対に間に合わん。だから

「早急に今日から特訓を始めよ。後で仮想迷宮に来るよ」
「ちょっと、後でつていつですか？」

「少しほ自分で考える。午後の授業からに決まつていいだろ？が」

なんとなく予想は付くが、ダンジョンでじつ特訓するところのか。
不安でだんだん箸が進まなくなつてしまつ。

そんな俺を他所に、クリス先生は「遅れるなよ」と釘を刺してか
ら、

血にしか見えないスープを恍惚と飲み干すのだった。

……転入早々、大きな課題を抱えてしまつたもんだ。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.2-5 【午後2時間の実戦演習】

Episode 2-5 【午後2時間の実戦演習】

「あとつ、もうちょっとでッ、ゴールだなつ 「

その日の午後、俺は一人薄暗く寂れた洞窟を駆けていた。
言うまでもなく仮想迷宮の内部だが、午前中にクラシックメンバーたちと潜った形状とは違う。
サポート役がいないから迷つてしまいそうで不安だつたが、生徒証にマップを見れる機能があるので無難に進められている。

「……ハア、ハア、しつかし流石元気つついな

しばらく走り続けたところで、急に足の速さが落ちてしまう。
午前中の疲れも完全には回復していないし、さつき油断して思いつ切りダメージを喰らつちやつたからな。

『グアギルツツ！』

もうすっかり聞き慣れてしまったオーガの威嚇。

立ち止まって前を見据えれば、数体のオーガが道を阻んでいた。

「まだいるのかよ、もつ少しで終点なのに」

先ほど鋭い爪裂を受けた左足に力を入れる。

さすがに氣怠い気分になりながらも、魔銃を構えた。

俺は完全に復活したエーテルを駆使し、適当な魔力を集めにかかる。

頭に浮かべた魔法構成式は自動的に展開され、白銀の銃口へ小さな魔法陣を生み出し、無色の魔弾を装填させる。

「何だかんだ言つてあと一〇〇メートルぐらいだしな」

見える範囲の敵数はほんの5体ぐらいなので、属性魔力装填は特にしなくても大丈夫だろう。無属性、俗に言う無垢なる魔力だけで突破することに。

「 行くぞっ！」

魔弾を炸裂させながら足を踏み出すと同時に、ダンジョンに潜らせられる直前、クリス先生から聞いたことを思い出す。

なんでもラファーゼは一日一日で仕上がるような代物ではなく、かなりの量のミシック供給が必要だそうだ。

それには魔法を使しまくるのが唯一の方法らしい。

「だからって、実戦形式で魔法使わせなくてもいいだろ?」
「改めて文句を吐きながら、巨大なオーガへハツ当たり。

『 ブアッ ……』

もう最後の一匹となつたオーガを、ミサイルのような魔弾で容赦なく吹き飛ばす。

強く捻じながら宙を舞う緑肌の巨体。

焦げ茶の土壁に叩き付けられ、無様な断末魔のみを残し、呆氣無く絶命した。

本来なら生々しい死骸も一緒に残るのだろうが、この空間では死んだ即時に霧散する演出になつてゐる。

「よしよし、後はこのまま進むだけだな」

俺は魔鏡を腰にかけ直してそう呟くと、さつきよつ卑足になつて終点へ向かうのだった。

・

「はあ～、やつと終わつたか。もうクタクタだぞ」

都合の良い岩を見つけて腰掛け、大きな息を吐く。
ここは午前中に狼男と戦つた仮想迷宮最奥と同じ空間のよつだ。
もつとも、ボスモンスターはいないようだが。

「んで時間は……。うつわもう一5時半前じゃないか」

生徒証に表示された時刻を見ると、自然と頭を搔いてしまう。
午後の授業が始まるのが1・3時だったから、やっぱり2時間近く
はこの中にいることになるな。

午前中の分も合わせればもう4時間以上だ。結構タフだったんだ
な俺。

「だけどそろそろ授業も終わる時間だし、丁度いい頃だな」

ちなみに昼休み、仮想迷宮入り口へ向かっていた時の話。

廊下で擦れ違ったクラスメートに教えてもらったのだが、午後の授業は選択制らしく、人によって学ぶことが違うそうだ。

その内容も結構たくさんあるようで、午前中にある魔法講義や数学の応用はもちろん、ここに仮想迷宮を使ったハイレベルな実戦訓練もあるらしい。

「早いうとソレを帰還するか。これで終わりみたいだし

そう呟いて俺はよいしょと立ち上がり、生徒証を握り直した。

仮想迷宮からの帰還方法はとても簡単。
ダンジョンに潜っている間は、生徒証のトップ画面に『帰還』という項目が追加されている。

それをタッチすれば入り口へ戻るための構成式が展開され、魔法陣が自分の近くに作られる仕組みになっているんだ。
つまりはその中へ飛び込めばいいわけだ。

『甘いな生徒タクマよ。まだ一仕事残っているぞ』

「うわッ ！」

帰還とあるアイコンをタッチしようとした瞬間、ピピッと機械音が響き、続いて誰かの声が聞こえた。

いきなりのことでの心臓が止まりそうになる。

『おやおや？ なんだ驚かせてしまったか？』

「クリス先生。……まあ少しだけ」

正直かなりびっくりしたけど。

加えて驚いたのは、これに映像通話の機能まであったことだ。
つぐづく唯の生徒証とは思えない。寮に帰つたらもつと詳しへマ
ニコアル読んでおくか。

「それより、一仕事つて何ですか？ もう終わりだと想ひこんですけ
ど」

『ふふつ、最後の追い込みだよ。後もう少しだけ頑張つてくれ』

田を細めて尋ねてみると、先生はそう悪戯っぽく微笑む。

「はい？ これ以上一体何を頑張れと言つん
」

眼前の光景を田に、そこで言葉が停止してしまつ。

何も無い空間から突如白い光が生まれ、巨人の姿を形取つていく。
しかもその数は一つや二つだけではなく、次々に増えていき……。

氣付けば、俺を完全に取り囲むオーガの群れが出来上がつていた。
最初からボスゾーンに置いとけばよかつたのに、わざわざ人が到
着してから召喚するなんて。

「こんなの非道い、鬼畜すぎる。

「ええっと、つまりはこれらを片付けると
『その通りだ。ただし、華麗かつ颯爽とな
んー、できるだけ頑張つてみますわ』

苦笑して見せ、俺は静かに生徒証を胸ポケットに沈めた。
そしてすぐさま魔鏡にエンチャントを開始する。

『火魔力装填、ざつと30匹かね』

辺りを見回し、俺を囲むオーガの数を弾きだす。

結構キツイかも知れないが、ギリギリなんとかはなりそうだ。

密閉された仮想空間の洞窟。

相手の動きを待っていると、どこからか一陣の風が吹いた気がした。

思い違いではなかつたのか、一匹のオーガがそれを合図に咆哮を上げる。

野太いその声は、まるで激しい地響きを起こしているような、そんな錯覚を俺に覚えさせた。

「ささつ、かかるといよ。華麗に、颶爽と倒してやるから!」

言葉が通じる相手ではないのだが、いや通じない相手だからこそ、そんな他人に聞かれたら赤面してしまうような言葉を吐いてみる。

つて、先生に聞かれてるかも!?

『うむ、しつかりと聞こえたぞ。しつかりとな』

『そんなにしつかりを強調しないでください……』

心の中まで全部聞かれていましたとさ。

そんなよく分からぬやり取りをしている間に、右手に持つ魔鏡はエンチャントの影響で烈火に染まっていた。

それは次なる魔法構成式詠唱のスタンバイができた合図でもある。

その燃える赤は洞窟内に設置された微かなランプよりも強く輝き、だんだんと辺りの気温を熱くしていく。

『…………』

とても言葉では言い表せない叫びを上げながら、一〇メートルほど離れたオーガたちが一斉に動き出した。

相手に文明的な武器はなく、凶器はその豪腕な拳と爪のみである。

『ラストファイツ、深紅の焰閃！』

ノシノシと迫るオーガの首に標準を合わせ、呼吸を乱さぬようにステップを踏みながら引金に力を込めていく。

紅い魔法陣が銃口から展開されると、これまた紅い一本の線が放たれた。

その光線は先に立つ巨人を音もなく焼き切つてしまつ。決して見ていて気分がいいものではないが、もう慣れた。

「せいやつ！」

接近戦は無理なので、半径5メートル以内には近づかせたくない。右足を軸に全体をぐるりと回転、オーガを捉えでは光線を放つ。

流石に狩り慣れていたので、殲滅する時間は1分も必要としなかつた。

・
・

「うう、すんません……。なんか酔っちゃって」

ここは仮想迷宮入り口、虹床の円形ホール。

オーガたちを倒したその後、震える手でなんとか帰還した。

「そりゃあんなにクルクル回つてたらな」

クリス先生は呆れているのか、分かりやすいように溜息を吐く。
その視線の先には頭を抱え縮こまっている俺の姿があるに違いない。

華麗かつ颯爽に倒せたのはいいが、後でこれなら元も子もないな。

「そのままいいから聞け生徒タクマ」

広いホールには他の生徒もいるのか、話し声が聞こえる。

俺はお言葉に甘えながら、意識を彼女の声だけに集中させた。

「今日見ていて分かったのだが、お前はそれなりの才能があるらしい」

「そりやどりも。お褒めに預かり光栄です」

「まるで棒読みだな……。まあ冗談ではないから素直に喜べ」

とは言われたものの、『それなりの才能』がどれほど物なのか不明だ。

まあ『才能は皆無だ』と言われるより十二分マシだが。

「それでな、この調子なら案外早めに解決しそうだぞ

「解決つて……、ラフアーゼ生成のことですか？」

「それしかないだろ。私は早くて2週間後、来週末と踏んでいる」

「おお、それならなんとか留年は回避できそうだな。」

「だが勘違いしてもらつては困る。あくまでもこの調子なら、だ」
安堵の表情を作つて顔を上げた俺に、先生は何か思わせ振りな口調で話を続ける。

「んあ？ ビ、ビツコツ」とですそれ？」「

「毎日、最低でも2時間は魔法行使の時間が必要、これでお分かりかな」

「まさか午後の2時間、ずっとこれを続けさせりつもつじや……」「

「やはりこういう事にはすこぶる察しがいいな」

クスクスと嫌らしく呟つ。我がちびっ子担任。俺は心の中で声にならない悲鳴を上げ、呆然としていた。

「おつといかんな、H.R.に遅れてしまいそうだ。急べて生徒タクマ

『いつまでも蹲つてないで早く立たんかつー』と本日2度目のチヨップを受ける。なんか地味に痛い。

「……つたぐ、じつちはボロボロだつてのこ……」

「ん、何か言つたか？ どこか生意氣な声が聞こえた気がしたのだ

「いへつ！ 何もあつませんとも、何もね」

ゆっくりと立ち上がって両足を屈伸、口では適当に誤魔化す。

それでもヒリヒリとした痺れを感じる左足を引きずりながら、可愛らしく歩くクリス先生の後に続き、教室へと向かうのだった。

- Coming soon next story ! ! -

Ep.2-6 【得ようとするモノと】

Episode 2-6 【得ようとするモノと】

「聞いたよ。随分大変な課題を突き付けられたんだってね」

クリス先生のHRが終わりその放課後。
歓談に満ちた教室の奥、自分の席でボーッとしていた所へ、緑髪のテオが哀れみにも似た声でそう話しかけてきた。

「まあな。 つて、もつ広がってるのかよ」

彼が知ってるということは、このクラス全員も同じなのだろう。
教室に戻つてから浴びた妙な視線はそういうことだったのか。

もしかしたら他のクラスにも広がってしまつているのかも知れない。

確かに食堂で目立つていたけれど、噂つて怖い。光より早いとは本當だ。

「ちなみに昼休みの後ラグナが大声で叫んでたのを見たわよ」

右隣の少女がぐつすりと居眠りしている赤毛竜人を指差して微笑んだ。

周りの生徒も苦笑しているのを見るに、間違いないようだ。

「ははは、こやつめ！」

俺は乾いた声を漏らすと、生徒証を取り出す。

人物メモを起動し、ラグナの欄に迷うことなく『口が軽い』と記録してやつた。

全くつまらんことをしてくれるヤツだ。

「有益な情報をありがとミリオム」

「ふふつ、まあ頑張んなさいよ。じゃ また明日つ」

ミリオムはそう言い放つて手を振り、颯爽と教室から出て行く。今朝知り合つたばかりだけど彼女は中々話しやすい娘だ。何か人を惹き付けるオーラを持つてるようだに感じる。

「ああて、これからどうするかねえ……」

大きく背を伸ばして身体をストレッチ。すべきことを思考する。

そうだな、適当に学園内をうろひいてみるのがまず無難だろうか。一応全体のマップは昨夜確認したが、実際に田にするのもいいだろつ。

……果たして迷わなければいいのだが。

「　　呑気に言つてる場合かしら？　もつ少し焦るべきよ」

「ツ、焦つたといひでどうすりやいいんだよ」

唐突に後ろから響いた銀髪少女の声。

内心飛び上がりそうになるが、何とか自然に返して見せた。

「コイツは人を驚かせるのが趣味なのか。

俺は首を後ろへ捻り、凜々しい冬霞トウカの小顔を見据えて続ける。

「それにクリス先生も真面目にやつてれば問題ないってさ」「へえ、そうだったんだ。ならそこまで心配する必要はなかつたみたいだね」「

トウカより先にテオが安堵の声を漏らす。

『そういうことだ』と銀髪少女へ目配せすると、彼女はつまらなげかわいに舌打ちを返してくれるのだった。

……やっぱり俺は「イツが嫌いだ」。

「みんな集まつてビーフかしたんですか?」

そんな中、今まで他のクラスメートと談笑していたミニアが「ひからへ向かつて来た。

「ん、いやちよつと。大したことじやないよ」

留年云々はともかく、やり取り自体に何も面白っことはない。俺の言葉にミニアはよく分からぬといつた顔をこちらに向ける。

そんな彼女を見て、俺はあることを思い起こした。

「せうだミニア。せつやく訊きたいことができたんだけど」

「あ、はい、いいですよ。何でもビーフ」

別にテオやトウカでも問題ないが、クラス委員も務めているらし
い彼女に尋ねる方が確実だわ。

「その、ラファーゼの事なんだけどな。具体的にどんなものなんだ?
?」

クリス先生はオリハルコンを越えた魔力媒介物質、エーテルの塊だと言っていたが、正直どんなものか想像できない。そもそもどんな形をしているのかさえ。

ミアはほんの数秒唸つてみせた後、可憐な顔を上げて口を開いた。
「そうですね、形状は普通の魔力媒介と同じようにたくさんあるんです。近接武器に魔法銃、杖だつたり。他にも腕輪や指輪とかもありますよ」

「なるほど……。形は普通なんだな」

突然の質問にも関わらず丁寧な説明してくれたミアに感心しつつ、俺は真剣に彼女の話へ耳を傾け続ける。

「ラフアーゼは1人につき1個しか生成できないと定義されています。どんな形状の物ができるかは、ランダムなので分かりませんが」「うん？ それだと扱えないのでできた場合はどうするんだ？」

俺の場合だとアレだ、近接武器だな。
剣とか槍とかできても困るぞ。使ったこと無いし。

「その心配はいらぬいわ」
「…………とおっしゃると？」
「確かに何ができるかは不明だけど、必ず“本人にあつたもの”ができるの。本人に不適性なラフアーゼなんて、過去にも例が無いそういうだから安心しなさい」

俺の新たな疑問にしたり顔で解説なさる銀髪少女。

一方途中で話の主導権を取られたミアは少し不機嫌そうだった。

「まあ何にせよ、俺ならやつぱり魔法鏡だろ？」「

「いや分からぬよ？ もしかしたら大剣やハルバードを振り回すことになる可能性だつて、十分捨て切れないんだからね」「

両手に剣を持って振るうモーションをして微笑むテオ。自分が同じようにやっている姿を彼に投影してみる。

……なんかすゞくシユールだ。

剣圧も全然無くて使えこなせない俺が容易に想像できるが。

・
：

しばらくした後、俺は教室から離れ、呆れるほど広い学園敷地内を散策していた。

テオやミアに『案内したい！』と意気込まれたけれど、一人で冒険してみたい気分に駆られてたのでそのまま別れたが。

「む、中に入つてみるとつくづく『カイ闘技場だな』

そんなこんなで辿り着いた先が、高等部学舎の屋上から覗けた巨大な円形闘技場。

人がたくさん座れるギャラリー席まで完備されている。

学舎階段の踊場で見かけた副会長を捕まえて話を聞くに、ここは入学式などのイベント会場に使われるらしい。

闘技場だけあって戦闘、決闘の場としても機能しており、放課後には自由解放されて実戦形式の組手ができるそうだ。

「ふう…… 少し休憩するか。ん、ごくり、『ぐく』

2階のギャラリー席へ上がり、適当に腰を下ろす。
エントランスで買った紙パックのオレンジジュースを飲みながら、
激しい歓声で溢れる闘技場1階を見下ろした。

教室2つ分ぐらいの広さのコートが30個ほどに分けられており、
その中で多くの生徒が激しく動き回って真剣勝負をしていた。

彼らが手に持つ武器が恐らくラフアーゼなのだろう。
本当に両手剣やハルバードを振り回している奴もいる。もちろん
人に。

オイオイ危なすぎるだろっ！？
もし当たつたら怪我じゃ済まなく。

『隙ありつ、激昂の火炎弾！』

「ブゥッ　　！？　え、ちょ、アイツなんてことを…」

言つてる傍から、誰かがファイアボルトを相手の顔面へ直撃させ
た。

思わず口に含んでいたオレンジジュースを吹き出してしまつ。
きたねえ……。

それは置いておいて、今のはヤバいだろ。

俺は身を乗り出して地面上に倒れ込む男子生徒に目を凝らす。
当たつた奴死んだんじゃないのか？

「あつちいなチクショウめ、今度はこいつの番だぞー。」

「なななっ……」

今度は酷く間抜けな声を上げてしまつ。だつて、顔面大火傷を負うはずなのに。

その男子生徒は元気に立ち上がつたのだから。

しかも苦痛の表情こそ浮かべるが、その顔に傷ひとつ無い。

「一体何がどうなつて?」

俺は混乱する頭で隣のコートへ目を移した。そこには。

「拙者斬られたでござるッ、拙者斬られたでござるッ!」

左脇腹を強く押え込みながら絶叫している忍者衣装の生徒がいた。どうやら相手の片手剣にスパッと斬られたらしい。が、ここから見るに血飛沫は全く飛んでいないようだ。

つか何でアイツ忍者の格好してるんだよ。

「……もしかして何かの魔法が効いてるのか?」

立ち上がって辺りをよく観察してみると、闘技場自体に何か強大な結界魔法が掛けられているのに気がつく。

「なるほど、ダンジョン仮想迷宮と同じ効果になつてるんだな」

この中にいる限り、どんなことがあっても負傷しない。
少しばかり考え込んだ後、俺はそんな結論を出した。

そんなに難しく考えなくても予想できることだけど。

やはり光魔法の超応用だらうが、どんな魔法構成式で発動しているのか興味が湧く。

地球じゃ光と闇魔法はあまり解明されていなかつたからな。

……この異世界にはまだまだ俺の知らない魔法がありそつだ。

なにはともあれ、危険がないと分かれば安心して観戦できる。
俺は静かに座り直し、再び1階の生徒たちを眺めた。

「ん、あれは？」

その中に俺のクラスメートの姿が田に付いた。名前は確か……、
なぜか忘れてしまつたけど。

まあクラスメートAとでも呼ぼうかな。

彼が相手をしていたのは、俺や彼と同じぐらいの背丈の女子生徒
だった。

「どおうりやあああ！」

クラスメートAは大きな掛け声を出して相手へ迫る。

火魔力をエンチャントした赤く燃え上がるブロードソード。
物騒すぎるそれを容赦なく振り回して女子生徒に斬りかかる。

「アテューリア＝ローズハート、覚悟オツ！」

「甘いっ、そんな斬撃簡単に捌けるわよ？」
はあツ

そんな名前で呼ばれた女子生徒もまた、物騒な大鎌を構えていた。身の丈ほどあるそれで迫る焰刀を華麗に受け流すと、体勢を崩したクラスメートAの隙を見逃さず、的確に反撃を叩き込んでいく。

「え、うわっひぎこ！？」ちよ、ちよっタンマタンマー。」

『ひきい』ってなんだ『ひきい』って。

「あははー、そう言われて待つわけが無いじゃないねえ？」

2人でよく分からぬ漫才をしながらも、クラスメートAは徐々に壁へ壁へと追い詰められていく。

「いや、それでお終いだよ！」

それはほんの一瞬のこと。

不規則な大鎌の軌跡が、赤のブロードソードを捉えた。

「ぐうッ……、ま、参りました」

後方に弾き飛ばされてしまった己の武器を見て、クラスメートA

は悔しそうな声で白旗を上げたのだった。だが、反撃されて1分も経たないうちに。

周りのギャラリーから拍手が湧き、少女は満足気な笑みを浮かべる。

「すげえ、めっちゃ強いあの娘

俺は感嘆の声を漏らして、ブラウン調の髪色の女子生徒を見る。その髪はクリス先生と同じように、長いシンテールに結ばれていた。

「ええ、彼女は一年生の中でも最上位クラスの実力者ですか？」

「ツ！？」

漏らしたその声に、いきなり誰かが答える。
驚いてその主の方を見遣ると。

「H、エルザ会長ー？」

「クスッ、」機嫌ようつタクマ。やつと氣付いてくれましたね

知らないいうちに、華やかな生徒会長様が隣に座っていた。

・

「そういえばわざわざ学舎で副会長が探してましたよ、会議がどうのこのとか」

「べ、別にお仕事をサボってるわけではありません。少しばかりの休憩を」

鮮やかな桃髪を靡かすエルザ会長は、微妙に視線を逸らして答え
る。

絶対ウソだ、副会長は走って逃げ出したと言つてたぞ。

「それで偶然、1人で座るあなたを見かけたのですから」

「それはそれはわざわざありがとうござります」

何に対しての『ありがとうございます』なのか、自分でもよく分からぬが。

自称休憩しに来たらしに会長さんの話によると、さきほどの女子

生徒の名前はアテューリア＝ローズハート。

俺と同じ1年生で生徒会にも所属している成績優秀者らしい。

「彼女の持つてた大鎌、あれつてラフアーゼなんですか？」

俺の問ひに会長は少し田を大きくして答える。

「やうですけど、あなた……。まだこの世界に来て間もないのに、もつラフアーゼのことを知つてゐるのね」

「いやええと、それはですね、とある事情がありまして」

「事情、ですか？　ふふつ、どういう事情なのか気になりますわ」

会長の反応を見るに、どうやら俺の留年云々話はまだ上級生クラスにまで広がっていないようだった。

いづれはこの人にも知られてしまうのだからと、俺は思い切つて身に起こつてゐる事情を告白するのだった。

「学園長もクリス先生も、無茶なことを仰りますわねえ」

やはり1ヶ月で生成するといつのは相当キツイ話なのだろう。話を聞いたエルザ会長は軽く溜息を吐いてこすりながら向き直る。

「せういえば、ラフアーゼはどうして顕現をせるんですか？」

思つたまま気になつたことを質問してみる。
やはり特別な魔法構成式と詠唱が必要なのだらうか。

「いえ、別に特別な詠唱はいりませんわ」

実際にやつて見せてくれるひしひへ、会長は立ち上がって瞳を閉じる。

「感覚ですでの言葉にしていりますけれど……。ひへ、体内にあるエーテルを一気に収束させて」

言葉の途中、音もなく会長の右手に光の塊が宿つた。
仄かな桜色の煌きを帯びた、それは細身の長剣。

「これが、わたくしのラフアーゼですわ」

美しきさる神剣を持つて微笑む会長に、思わず息を呑んだ。
そして確信する。この人は、強い。

「……なんか間近で見ると凄い威圧感を感じますね」
「それは誉められているのかしら？」
「感心してるんですよ。凄いなあ、って」

これは本心だった。

初めて見た神剣に、俺は心を奪われていたに違いない。

「さて、アキラも待つていいでしょうし、そろそろ生徒会室に戻りますわ」

それからしばらく談笑した後、会長はそう告げて席を立つ。

「あ、そうですか。いろいろありがとうございました」

「いえいえ、困ったことがあったらいつでも生徒会室に来なさいな」

そして俺の前を通り過ぎる、すれ違いさまに一言。

「そうそう後もう一つ、あなたが手にするワフアーゼ。わたし、この田で見るのを心待ちにしていますわよ。頑張りなさい」

そう言い残してエルザ会長は闘技場を後にした。

その後姿を田で追いかがら、俺は彼女に小さな思慕を抱くのだった。

それから更に時は過ぎ、気付けば空模様はすっかり黄畠色。元に。賑わっていた闘技場もだんだん生徒の数が減ってきた。

「俺もそろそろ帰りますかね。色々調べたいこともあるし」

俺は「ロッセオのエントランスへ降り、来た道を一人で引き返す。数多く立ち並ぶ施設塔と高等部学舎を抜け、夕焼けが落ちる前には男子寮へと戻ることができたのだった。

眠りに付く直前だが、この3日間のこと改めて整理しようと思う。

銀髪少女、トウカに導かれた先は確かに異世界だった。

興味深いことに魔法や技術が地球より大きく発展しているらしい。

しかも吸血鬼みたいな魔族や天使のような神族、スライムみたいな魔物まで存在していて結構ファンタジックな世界だ。

それでいて種族対立や戦争も起きていない、誰もが望む平和な理想郷。

そんな世界へ連れて来られた翌日、俺はトウカの通う魔法学園へ転入することになった。

腐敗した過去と心から抜け出して、変わらうと思つたから。

いろんな人と出会つて初日から友達もできた。

幸せな気持ちになつて、実は今でも感動が止まらない。

そして今日、なぜか枯渴していたエーテルが復活していて、魔法の行使が4年ぶりにできるようになつていた。

しかし喜んでいるのも束の間、厳しい進級課題を突き付けられてしまつた。

それで 。ああ、だ、ダメだ睡魔が。

まとめるど、まだまだ謎や不安はいっぱいある。

……けれどきっと大丈夫だろつ。

前へと進む最初の一歩は、もう踏み出しているはずだから。明日はもつと頑張るつ。この新たな世界で。

Chapter 1 End . . .

1

End

•
•
•
•

キャラクター紹介 01

Magical Characters | Chapter 1 |

ここまで簡単な登場人物まとめです。

⋮

【リュミナル魔法学園 高等部1年】

主人公、所属クランメンバー

タクマ＝ミツルギ（御剣 拓磨）

種族種目：人族、人間族 性別年齢：男性、16歳
出身次元体：地球、日本

「黒髪黒眼、旬な学園転入生、不安と希望とを抱えて」

不安を感じつつも、どこか楽しんでいる節がある主人公。
魔法の知識はそれなりにあるが、やっぱり戦闘経験が少ない。
彼の異世界魔法学園生活の明日は一体どこへ？

トウカ＝シラガネ（白銀 冬霞）

種族種目：人族、人間族 性別年齢：女性、16歳
出身次元体：地球、日本

「銀髪少女、掴み所なし、クールときどき小悪魔」

主人公を連れ去った張本人で、なんだか掴み所のない少女。幸か不幸かこれからも縁がありそうだ。いろいろ怪しい娘だけど、その真意はどこにあるのか。

ミヤナールム・シアクウナ（ミア）

種族種目：神族、天使族 性別年齢：女性、16歳
出身次元体：リュミシアル

「桃色ミニーツインテール、小動物系少女、いつも優しい」

長く覚えづらい名前には自覚があり、ミアと名乗っている。初対面の主人公にも強い好感を与えるなど人が出来てているようだ。きっとお嫁さんしたい女子生徒ランキング1位だろう。

ラグナ・ヴォレリウス

種族種目：竜族、竜人族 性別年齢：男性、推定150
出身次元体：不明

「ツンツン赤毛、バカ氣味竜人、ムードメーカー」

竜族は長生きで人間のおよそ10倍と言われる。
簡単な話、彼は年寄りどころかまだまだ若く主人公たちと同じぐらい。

美少女転入生をご所望だったが、颯爽と裏切られた人。

クラスに1人ぐらいは こんな奴いた方がいいかも知れない。

テーオ＝ベリアルス（テオ）

種族種目：魔族、魔人族 性別年齢：男性、16
出身次元体：不明

「爽やか緑髪、魔王子息、世話焼き気質」

名前はテーオともテオとも両方で呼ばれている。
寮では主人公の隣部屋なこともあります、進んで面倒を見ててくれる。
しかしこんな好青年が魔王の息子とは皮肉なものが。

第2クラス担任、クラスメート

クリスティーナ＝ムーンライト（クリス）

種族種目：魔族、吸血族 性別年齢：女性、不詳
出身次元体：不明

「金髪ツインテール、ちびっ子担任、真祖の吸血族」

ベテラン教師でどんな分野にも精通している超天才。
子供体型にコンプレックスを抱いており、指摘されると……
『激辛ラーメンInfeno』が好物らしく、毎日食べている
ようだ。

ミリオム＝ハイソール

種族種目：魔族、不明 性別年齢：女性、16歳
出身次元体：不明

「右隣のクラスメート、社交的な女子生徒」

偶然にも主人公が転入してきた日、寝坊をキめていた少女。全然出番ないけど、きっと彼女には何かある。

それは意外にもこの先の物語に大きな影響を与えるかも知れない。

【リュミシアル魔法学園高等部 上級生】

生徒会役員

エルジイルム＝シアクウナ（エルザ）

種族種目：神族、天使族 性別年齢：女性、17歳
出身次元体：リュミシアル

「生徒会長、学年首席、お嬢様口調」

妹ミアと同じく名前が覚えづらいと自覚し、エルザと名乗る。寝坊したり抜けている所もあるが、基本的に天才気質。それにも思慮分別のあるお嬢様って素敵。この人はどう違う？

種族種目：人族、人間族 性別年齢：男性、17歳

出身次元体：地球、日本

「生徒会副会長、クール眼鏡」

見たままの堅物ではなく、話すと意外に面白い人。生徒会幹部として主人公をサポートしてくれる。どうでもいいが嫁の尻には敷かれてしまいそう。

【その他の人物】

学園関係者

トウルシフアナ＝リリス

種族種目：不明 性別年齢：女性、不明

出身次元体：不明

「学園長、艶やか美人、おつとり口調」

黒髪、腰まで伸びる長いロングヘアのお姉さん。その正体はリュミシアル魔法学園の学園長。

誰がどう見ても黒幕。何かを知ってるし、しようとしている。

・

Ep.3-1 【羽休めをするのなら】

Episode 3-1 【羽休めをするのなら】

生きる世界が違えば、物の言い方が変わつてくるのもまた然り。

「だ～か～らあ、違うつとの。用火水雷風土日なんだつてば
「いやいや木と金はどう行く行つたんだよ……」

長いブロンドの髪を揺らす少女の喋りを聞くに、この世界では木と金の曜日はそもそも存在しないらしい。

無属性以外の7つの属性魔力が曜日に対応しているようだ。

「雷曜日で風曜日ねえ。ははっ、案外早い世界観崩壊が来てしまつたな」

1年は12ヶ月、1ヶ月は4週間、1週間は7日と聞いて地球とほぼ同じだと安堵していたのだが、まさかここで反撃とは。

「でもこれどこの世界でも常識じゃないの、ねえ？」

冷めた笑い声で頭を抱える俺にて、どこか自慢気に語っていたミリオムはさらにそう追撃してみせる。

「えつ何、それだと最初から知らなかつたのは俺だけなの？」

俺と同じリコミシアル界外出身のクラスメートたちが頷くのを見ると、木曜と金曜を採用していたのは日本ぐらいだけだったようだ。そうか、それじゃあ昨日が木曜日だと想つて生きていたのはこの

世界で俺一人だつたというわけか。

確かにWednesdayやFridayなんかは北欧の神様の名前で、漢字の七曜は元々中国の五行説なんだつたけか？まあそれは別にいいとして、月火水雷風土日はめちゃくちゃ違和感がある。

慣れるにはしばらく時間がかかりそうだ。

とにもかくにも今現在の状況を説明しよう。

クリス先生との面談から早3日が過ぎ、本日は金曜日改め風曜日の午後。

適当なクラスメートたちに誘われ食堂でランチタイム中だ。

もつとも、もつ食べ終えて談笑を交わしているのだが。

「んで、タクマさんよ。どうなのクリス先生の特別補習は？」

冷水を喉に通した男子の1人が新たな話題を振ってきた。
ちなみに先日闘技場コロッセオで見かけたクラスメートAである。
名前は……、あえてこのまま通そうかな。

そんなクラスメートAの言う特別補習とはもちろんアレだ。
午後の洞窟ダンジョン巡り、そして魔物さんとの激しい戯れ。
つまり魔法を使して淡々と進む迷宮探索である。

「あー、ぶっちゃけ辛いです……」

火曜日に心配していたことは杞憂にならず、俺はやはり酷い地獄を見ていた。

証拠にこの台詞を吐いたときの田、きっと死んでいたに違いない。

だつてあの午後2時間の実戦演習。

田を追う」と先生が設定する魔物が強くなつていくのだから。

属性魔力装填エンドチャントしていない魔力弾はほとんど効かなくなつてゐし、魔物の持つ弱点属性を狙つて攻撃しないと効率的に擊破できない。しかも出現する敵数も確実に増え続けているといつ。

この急な難易度の上げ方は、より多くの魔法を使わせマジックの吸収をより促進させる為だと先生は言つただが……。

ええハイ辛いですとも。そりや死んだ田にもなりますよ。

いくら仮想迷宮の負傷しない仕組でも、精神的な疲労感は増すばかりだ。

183

「弱音を吐かないの、諦めたらそこで留年よ」

「いつ、お前力入れすぎだッ！？」

「氣合入れると言わんばかりに背中を叩かれてしまった。1パーセントの遠慮も無く思いつ切り。良い音なつたぜ。」

ヒリヒリする背中をさすりながら別のこと思考する。たしかにここで挫けるわけには行かないと。

留年ダメ絶対。

一刻も早くラフアーゼを生成できるようにならなければ。

「まあまあそんな切羽詰らざる。少しは心に余裕持たないと
「いやアンタが言つてもぜんぜん説得力無いよ。ミリオム……」

俺の目の前に座すミリオムの呑氣な声に、近くの女子が突っ込みを入れた。

そしてそのことについては俺も激しく同意である。

ラグナもそうだけば、ロイツら授業中に寝過ぎだ。
それに加えて2人ともイビキまで提供してくれるもんだから、おかげさまでこいつちはなかなか講義に集中できやしない。

昨日さすがに我慢できずに文句を言つたのだが、2人揃つて……。

『「めぐ、（西脇り止める）無理っぽい』だとぞ。

もう色々諦めて、席替えの日が来るのを心待ちしている。

「失礼しちゃうわね、私だつてやるときはやるわよ~?」

怒つてるのかいなかが判断しかねる声で、生徒証の画面をタッチ操作しているミリオム。

この娘はさつきから一体何をやつてているのだらうか?

「ほいほいハイ、送信つと

「つをお、な、なんだ

「?

彼女がそう呟いた途端、手元にあった俺の生徒証から機械音が漏れる。

何事かと思つて起動させるとメールを一件着信していた。

送信者はミリオム、何かファイルが貼り付けられていくようだが……。

「何を送ってきたんだよ？ 相手が田の前にいるのに」

「いいからっ、見てみなさいって」

「わ、分かったよ。見ればいいんだろ見れば」

眠り姫とは思えない彼女の気迫に押され、渋々俺は画面をタッチしてメールの中身を開く。

件名：ノイローゼ氣味な転入生クンへ

本文：私からスペシャルなプレゼントを進呈しようッ！

ミリオム＝ハイソールに感謝するように

+ファイルが添加されています

誰がノイローゼだ。ほんのちょっと疲れてるだけだっての。
そんな突つ込みを入れつつ、短くシンプルなメッセージに田を通していく。

スペシャルなプレゼントねえ。やっぱじこの貼付けファイルだよな？

「あ、怪しそうだな……」

思わずそんな声が漏れてしまった。

軽く唸りながらチラツと送り主に田を向ける。

その視線の先に覗けた彼女の瞳は『早く開ける』と強い念を放っていた。

ますます怪しい。が、周りの奴らからも押され俺の右指は半ば強制的に画面に添えられてしまつ。

埒が明かないので仕方なく人差し指で透明な画面をタッチ、貼付けファイルの展開をコマンドするのだった。
どうか嫌なことになりませんようこと願いながら。

・
：

“解析完了、ファイルを展開します”

それから10秒もかかる内にそんなメッセージが通知される。

「んあ、ええっと、これは……」

続いて虚空に映し出された小さなフレーム。

そこに浮かび上がったのは、なんとも派手で可愛いらしい女の子の写真だった。

ウエーブのかかったライトパープルの長い髪、そして華美な衣装。片手にベースギターを持ってピースサインをしている。

あと周りの背景が無駄にキラキラと輝いていた。

「あのオ、これは一体どひうとまじょうか？」

見覚えのない少女の写真を指差し、俺は当然の疑問を呈する。

『えッ、知らないのー?』

するとみんな一齊に揃つてそう叫ぶのだった。

……お前ら打ち合わせでもしてきたのかよ。

「お願いだからもう一つこの田で見るのやめてくれ！？」

話を進ませるため、早々に突つ込みを入れてみせる。
あんまり下手に弄られ続けると頭が痛くなるからな。

「あはっ、ゴメンゴメン。お約束だと思ってね」

「そんなもん大いに結構だ。で、結局この娘は何者なんだ？」

ウェイトレスから手渡されたデザートのミルクプリン。
銀に輝くのスプーンで口に運んだ後、俺はそっけなく返して本題
を突く。

「ふふん、それは私が教えてやろう。しつかり聞けイツ転入生！
「どうでもいいけどきなりテンション高いなお前」

端の方にいた一人称私の眼鏡男子が息を荒らげ出した。
声もなんか高くなってる気がする。何を興奮してるんだコイツは。

「彼女は“*Candy Kiss*”所属のスーパーアイドル、アイ
リスちゃんだ」

「……アイドル、アイリス？　ああ、なるほど、そういうわけね

写真の少女の華美なコスチュームとギター、そして彼の言い放つ
たキーワードとが以前に聞いたことに結び付いた。
確か初日の男子寮で副会長が話してくれたんだっけ。

発展途上という異世界の幻想は既に打ち碎かれ済みだが、この世

界には芸能プロダクションまでも存在するそつた。

俳優に歌手、アイドル。それらも当然のように存在している。

そしてこのアイリスという若手アイドルは、なんでもアイドル業界でトップクラスの実力者らしい。

透き通るような凜々しい喉声とフレンドリーな性格が良いのだとか。

「それに合わせて彼女はモデルとしても活躍しているぞ。スタイルが抜群だらう?」

「た、たしかにこれは……。なかなかどうして凄いな」

露出気味な衣装のせいもあって、大きめな胸がかなり強調されている。

背丈も俺と同じぐらいでとてもナイスバディに見えた。
写真からじや本当の姿は詳しく分からぬけど。

「お、転入生がけしからん」とを考へてゐる

「　　ッ!? ゴホッ、そそそなことない!」

やはり俺は簡単に顔に出てしまうタイプらしい。
いや、今のは口が声が漏れてただけか!?
……どっちにせよ気を付けないとな。

「君も彼女の神曲の数々を聴いてみるといい。虜になるが、フフッ」

「そ、そうか、俺もなんか興味が出てきたよ」

不敵に笑う眼鏡男子にそう答え、俺は正面の女子生徒に向き直る。
ブロンド髪の彼女に訊かなければならぬ疑問があつたからだ。

「んでミツオ、」のアイドルさんの画像がスペシャルプレゼント
なのか?」「

「やうだけどちょっと違つわ。だってそれ、唯の写真じゃないんだ
から」「

「はい?」

間抜けな声を漏らす俺に彼女はよく見てみると促す。

よく田を凝らすと、右下に小さく記された文章を見つけた。

『春休み直前アイリス独占ライブコンサート』

Candy Kiss社 2階ライブホール、17:00から開
演。

ライブ終了後にはアイリスとの握手会もあります!・

これはもしかしてライブの宣伝なのだろうか?
つか開演日は今週の日曜日、明後日じゃないか。
俺は田を細め、煌めくアイドルの姿を眺める。

「ちよ、これよく見たら入手困難なライブチケットじゃねーか!?」

するとチラシと覗き込んだ隣のクラスメートAがそう声を上げた。

「え、チケットなのかこれ? 僕には宣伝ポスターにしか見えんぞ
「お前の田は節穴か!?」ここに入場券つて書いてあるだろ?がよ
なるほど、そうなると確かにスペシャルプレゼントだな。
あ、ホントだ。見過ぎしていた。

「そそつ、今週末こここのライブでも行つて羽休めしてきなよ」「それはありがたい話だが……、いいのか俺が貰つて？ レアモノじゃないのか？」

「いや用事があつても、その日行けないのよ私。だからキニヒニ、ね？」

どうやら彼女なりに氣を使つてくれたようだ。
ならありがたく受け取つておくのがいいだろ？。

「だからさ、私の居眠りも大目に見てよねっ」

待て待てそれとこれは話が別だろオイ。
可愛らしくウインクする彼女を見て、俺は何も言えず溜息をつく
のだった。

昼休みも終わり間近、仮想迷宮ダントンジョンへ向かおうとクラスメート達から
別れる。

その時ミリオムが待つたと声をかけてきた。

「言い忘れてたけど、そのチケット5枚分あるから」「なんだ5枚もくれたのか？ どうしてそんなに……」「い、色々あつたの。そのことはいいから気にしないでっ！」

少し慌て氣味に答える彼女は何かを誤魔化しているように見えた
が、あまり深く切り込まないのが大人というヤツだろ？。
俺は静かにミリオムを見据えて言葉の続きを待つ。

「それでさ、残りの4枚でアンタが世話になつてるとウカたち

を誘つてみたら?」

「アイツらをか。まあ確かに面倒をかけてるしな」

彼女の提案を受けて『良いかも知れない』と一人頷いた。
ここは街の案内役も兼ねて後で誘つてみるとするか。

「ありがと、そうするわ。あとこれはいつか埋め合わせさせてもう
うぞ」

「あはは、それより先に進級できるように頑張んなさいよねー」

ははは、言いやがるな『イツ。

しかしライブコンサートか。明後日が楽しみだな。

俺は少し軽い足並みでその日の特別補習へ向かうのだった。
もちろん、その後ろでホツと胸を撫で下ろした彼女のことなど気
付かぬまま。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.3-2 【街探索のお誘いを】

Episode 3-2 【街探索のお誘いを】

酷く不気味に、そして大きく開けた迷宮洞窟の最奥。

俺と1人の人物は宙に浮かぶ偽りの灯りにその影を映されていた。

『今度こそ、光魔力装填!』

土臭い、これもまた偽りの空気を肺に取り込んで。
教わった構成式を頭に描き、俺は魔法名を呟くように詠唱した。
その声を合図に銀に輝く俺の魔銃は聖なる光を宿していく。

その日の特別補習はいつもより30分ほど早く終わっていた。

何が原因かと訊かれれば困ってしまうのだが、
恐らく俺にも魔物の重要器官や弱点属性を発見する能力が備わつ
てきたからなのだろう。

数日前に比べるとオーガもゴブリンもアンデッドだって、遙かに
速く、そして効率的に撃破できていた。

別に自惚れているわけではないけれど、少しは強くなつたということか。

そう考えると素直に嬉しい。

「そうだ、いいぞ生徒タクマ。先よりも魔力がかなり安定している、
そのまま詠唱しろ」

そんなわけで時間がかなり余ってしまったので、俺は仮想迷宮の中である魔法をクリス先生から指導してもらつていた。

『其は祝福と加護、光の聖母。悪しき闇を断遮する光盾となれ』

分かりましたと首を縦に振り、俺は続けて呪文を口にする。今までの魔法なら魔法名だけで発動できていたのだが、今回はそういうわけにも行かないのである。なぜなら。

これは地球で解明されていなかつた魔法学の1つ。

空間を支配すると言われている、すなわち光魔法なのだから。

『障壁展開、エーテルバリアッ！』

最後にそんな魔法名を唱えると、白き光輝の障壁が銃口の先に展開された。

30分間挑戦することおよそ50回目。

先までならすぐに粒子となつて霧散していたその聖盾は……。

「ふはあッ、ハア、成功ですかねコレ？」

「ん、まあ形はな。どれ、耐久度の方をテストしてやるうじやないか」

クリス先生はそう告げると人差し指をこちらに向け、ニヤリと笑みを浮かべると魔法名を必要としない単純な魔法弾を一発放つた。

グルグルと螺旋の軌跡を描き、白き魔弾は間もなく俺を捉える。直後強い閃光が走り、光の障壁^{ワード}がその凶弾を拒んだ。

が、さすが教師と言つたところか。

「うわあッ！？ ちよ、魔導力が強すぎますって先生！？」

「ふん、この程度防げないなど障壁の意味が無いわバカタレが」

予想より魔弾に込められた魔力が多く、そして威力がとてつもなく強い。

魔銃から展開された障壁に尋常じゃない圧力がかかる。

このままでは我が担任が放つた凶弾を打ち消せる気配は全くなかつた。

「う、くう、ヤバい。このままじゃ……」

右手だけでは耐えれそうにないので左手もグリップに添える。より多くの光魔力を送り込み、この障壁を維持し続けるためにだ。

そんな機転の甲斐あつてかやつと魔弾の圧力が徐々に弱まつていく。

やがて魔弾の霧散に成功するが、同時に俺の障壁も消えてしまつていた。

同時に俺は重い息を吐き力なく地面に膝を付ける。

その一部始終を観察していたクリス先生はこちら見つめて口を開く。

「よくやつたと言つてやりたい所だが、やはりまだまだ甘い。要鍛錬だ」

「……はい、努力します」

彼女の口から出た手厳しい指摘に自然と頭が下がった。

「参考書なら生徒証から山ほど見れるし、分からないうことがあつたら私に聞け」

「そうさせてもらいます。結構興味がある分野ですから」「ふつ、良い心がけだ」

障壁結界魔法。

思えば防御面を全く考えずにダンジョン探索をしていたからな。こういう補助魔法は用意しておいた方が良いだろう。

「しかしエーテルの質が種族によつて違つなんて知りませんでした」「前に言つただろう？ 貴様にとつてこの世界は新発見の連続になる、とな」

「ホントそうですよ。次は一体何が来るのかと考へると怖すぎます」

エーテルバリアを教わる時、俺は同時にそんな真理を知つた。
地球上において人間が長年悩み続けていたことの答え。

それは光と闇魔力をコントロール出来ない理由であつた。

それはエーテルの質が種族によつて違うということ。
これを言い換えると、『種族によつて制御できる属性魔力が違つ』
ということだ。

詳しく説明すれば神族は光魔力、魔族は闇魔力に強い適性を持っているが、逆に言つと人族と竜族はそのどちらもあまり持つていな
いらしい。

つまり人族である人間は簡単な光闇魔法しか行使できないのだ。

だから人族以外の種族が存在していなかつた地球では、必然的に光闇魔法の発展が進まなかつたというワケだ。

が、俺は人間にも関わらず光魔法の応用であるエーテルバリアを行使できた。

それにはきちんとした理由がある。

なんと体内に吸収したミシックによつて強化されたエーテルは、種族に関係なく属性魔力を制御できるようになるのだという。つまりここでは誰もが8つ全ての属性魔法の行使が可能なのだ。

……やつぱりこの世界はすごいな。

「おーい、さつきから何を呆けてるんだ？ 私は先に戻つておくぞ」
「へ？ あ、はい」

「自分も一緒に」と声を続けて先生の方を見遣ると、すでに帰還用の魔法陣だけを残してその姿は消えていた。

少しぐらい待つてくれてもいいのではないか、先生。

・

時は過ぎ夕暮れ時。

俺とクランメンバー4人は一緒に学生寮への帰路についていた。

ちなみに本日の放課後は教室で先程のエーテルバリアの練習をしていた。

クラスメートたちに手本やアドバイスを貰いながら頑張ったおかげ

げで、なんと詠唱を使わずに魔法名だけで発動をせられるまでに上達したんだ。

第2クラスの皆様協力ありがとうござります。

「お、あれは

「

学園中心塔1階にあるエントランスの壁に作られた長方形の世界地図。

巨大な螺旋階段を下った直後、目に入ったそれを見てふと立ち止まる。

そこには現在地である学園を中心に一つの大陸と周辺の島々が広がっていた。

地区ごとに色分けしてあって、その中に街の名前などが記されている。

ちなみにこの学園は『ヴェルエス』という地区、街に所属しているようだ。

「しかし何回見ても知らない大陸と地名だな

「なによ今更。散々ここが異世界だつて思い知らされてるクセに」

感嘆交じりにカラフルな地図を見上げていると、すぐ後ろに続いていた冬霞トウカが耳元で小さく囁いた。

「いやいや絶対慣れるわけないし、気後れもするだろ普通

銀髪少女の声に俺はそんな言葉を返し、振り返って彼女を見据える。

魔科学技術。

もつともこの数日間、たくさんの人たちとの会話を通じて得たそんな情報は、ここが地球とは違う異世界だと実感させられるには十分なものだったが。

「……ふうん、そう」

しばらくの間が空いた後、トウカはそう小さく呟く。
そして同時に向けられた俺の視線からそっと目を逸らすのだった。
一体何を考えていたのだろう。

「おーい、そんなところで何をブツブツ言つてゐるんだ？」

微妙な空氣の中、少し遅れてラグナたちも螺旋階段を下つてくる。

「アンタが馬鹿で阿呆でヘタレドーナンだつて話をしてたのよ、ふ

「いやしてないから。変な嘘吐かないでくれませんっ！？」

田を細めてクスクスと晒つ銀髪少女を咎める。
何をどうしたらそんな虚言を吐けるのだろうか。

「お、俺、確かにバカでアホだけど、ヘタレは言つ過ぎなんだぜ…

ほら見ろ赤毛竜人が萎んでいくじゃないか。
つか馬鹿で阿呆なのは認めるのかよお前。

「トウカさん、また人を貶めるようなこと言つて つて、事実か
も？」

「んなつ 「

ラグナ、テオにまで裏切られる。

その光景を見て俺とミアは田を見合させて苦笑するのだった。

「あ、そうそう。明後日の休日に街へ行くつもりなんだけど、案内役頼めないか？」

寮の手前で俺は突然思い出してそう告げる。
いかんいかん、完全に誘い忘れていた。

「あら、それ明日に私たちから誘おうと思つてたんですよ」
「あ、そうだつたんだ。悪いな気を使わせて」
「いいんだよ。紹介したいお店とかも色々あるからさ」

俺をヴェルエスの中心街、つまり繁華街へ休日に案内しようとしたのを、どうやらミアとテオの2人で前々から計画してくれていたらしい。

ありがたいことだ。

「ちなみに私も行くわよ。アンタの世話は生徒会の仕事なんですね」「はいはい、さいですか

理由の雑誌はともかく、銀髪少女も着いて来てくれるらしい。

「んで雑魚ドラゴン、どうせアソタも来るんでしょう?」

そう言つて赤毛竜人に鋭い視線を向けるトウカ。

ちなみに『雑魚ドラゴン』とはラグナのあだ名だ。

無論こんな失敬すぎるあだ名で呼ぶのはクラスでこの銀髪少女だけだが。

「いや俺はいいわ。休日も寝て過ごすって決めてるんでね」

何をどう思つているのか誇らしげな笑みを浮かべるラグナへ、俺たち4人から白い視線が向けられる。

一体お前は人の何倍を寝て過ごすつもりなんだと。

「そつかラグナは来ないのか。うーん、それだとチケット一人分余つちまうな……」

「ん、チケット？ タクマ君、それ何のことですか？」

俺の独り言を耳に入れたミアがくいくいっとブレザーの裾を引っ張る。

「あ、いや、今日の毎にミリオムから貰ったんだよ。これ

他の奴らも気になつていてる顔をこちらに向けていたので、俺は生徒証を起動させて綺羅びやかなライブチケットを黄昏色の空に浮かべた。

「お、オイ、それ200枚も売られなかつたレアモンじゃ……」

パツと口を大きく開けたラグナがワナワナと言葉を紡ぐ。

あからさまに驚いた言動したのはコイツだけだったが、他の3人も少しば動搖しているようだった。

つか200枚しか売られなかつたって初耳だぞ？
その内の5枚も手にしていたなんてどんなマジックを使ったんだ
ミリオムは。

「まさかアンタ、ナニかでミリオムを脅し　」

「してないよ！？　変な邪推しないでくれませんっー！？」

恐ろしいことを口走りそうになつた銀髪少女を止める。
もうほとんど言つてしまつていたが。

「とにかく、5枚分貰つたから皆で行こうかなつて考えてたんだよ」

しかしラグナは部屋に籠つて熟睡なさるそつだ。
仕方ない、後でアキラ副会長でも誘つてみるか。

「ハハハッ！　アイリスちゃんのライブを見られるなら、行くしか
無いぜえ！」

「別に無理して来なくていいんだぞ？」

「ゴメンなさいタクマ様俺も連れて行ってくださいお願いします」

夕暮れのオレンジ色に、無駄に形とキレどが良い土下座が溶ける。
その光景に第3男子と女子寮前の時が止まるのだった。

「つて、人通る前で土下座すんな！　俺が何か患者に見られるだろ
うがー！？」

何だこの意味不明な空氣は。

誰も突つ込みを入れないので仕方なく俺が動く。

「ふむふむ、Candy Kissの2階ホールで17時から開演ですか」

一方何事も無かつたかのよつて、ミアは俺の生徒証をその小さな右手で持ちライブの詳細を確認していた。

意外なことにトウカも興味深そうにそこへ混ざる。もしかしてファンなのだろうか？

「 それでは明後日の10時ぐらいにて集合しましょつ

ミアは少し思考してから、ラピスラズリの瞳をワインクさせて時間指定する。

その時間からだと大体6時間は街を探索できるだろつ。

「聞いたかいラグナ、起きなかつたら放つて行くからね？」

「起きる起きる！ アイリスちゃんのために早起きするぜー！」

俺を案内するために起きろよ。

突っ込みたいことは他にも色々あるが抑えるのだった。

「ま、アイリスの生ライブなんて滅多に見られないし。……楽しみね」

別れ際に聞いたそんな銀髪少女の言葉だと、びつやけり彼女もアイリスのファンなのは間違いない。なんだか意外だけど。

ミアとトウカの2人を女子寮へ見送ると、俺たち男も自分の部屋

へと戻るのだった。

しかしヴェルエスの街か。どんな所なのか少しは調べておかないとな。

うん、日曜日が楽しみだ。

- Coming soon Next Story ! -

Ep・3・3 【ゲートを飛び越えて】

Episode 3・3 【ゲートを飛び越えて】

そして迎えた日曜、待ちに待つたヴェルエス街探索の日。異世界の街と聞くとつい数千年前の中世ヨーロッパを想像してしまいがちだが、やはりそんな夢は無情にも現実が押し潰してしまう。

昨日適当に見つけた街の写真にはコンクリート製の建物で溢れていた。

そもそも恐ろしく魔科学文明が発展しているのは明確なのだから、この世界が地球よりも劣っているわけがないのだ。

「ん~と、まだ2人は来てないか。って、流石に15分前だし当たり前だよな」

男子寮前の道へ出て辺りを見回し、俺は1人そう呟いた。
陽だまりの中、心地良いそよ風が全身を撫でる。
よかつた。今日もいい天気になりそうだ。

「おはようございますタクマ君」「何でアンタ一人なの？ テオと雑魚ドラゴンは？」

しばらく蒼穹を仰いでいると、いつの間にか2人の可愛らしい女の子が声をかけてきた。

「あ、うん、おはよ。アイシングルサマーベル来ると毎回

ニアとタトゥーに普段と変わらぬ挨拶を交わしていくと、
俺はあることに気が付いて口を開く。

「 やっぱりみんな私服持ってるんだよな

そう、2人とも俺が今まで見てきた黒のブレザーコートでは無かったのだ。

ニアは純白と紅色とを基調にした清楚な印象を持たせる服、
トウカは黑白のフリル付きの可愛らしい服を身に付けていた。

「ふふっ、似合ってるかしら?」

「まあな。随分可愛らしき服じゃないか。似合ってるやで」

クルリと一回転して不敵な笑みを浮かべる銀髪少女にそう答える。
なんだったかなこうこうファッショニ.....。『シッククローラー
だけ?

ニアにも似合つてるとフォローしてから自分の衣服について思
考する。

元から生徒証に登録されていた服装は制服と寝間着だけだった。
別にそれでも困らないのだが、皆私服を着ている中に俺だけブレ
ザー姿というのはやはり寂しい。
街に行くついでに適当に購入しておこう。

「あ、そういうえば街に着くまで魔物とか大丈夫なのか?」

魔銃に手を添え、俺は2人へ真剣な眼差しを向けそんなことを訊いた。

学園であれほど魔物の討伐を訓練させているのだ。
よほど現実に出現する魔物は危険なのだろう。

するとしばらくの間が空いた後、2人の少女はクスクス笑い出した。

「な、何笑ってるんだよ？　こっちは真剣に言ってるんだぞ」「クスッ、あはは、すみません。そうですよね、知らないんですよ」

前屈みになつて両尻を擦るニアは、トウカに両配せして説明を促す。

同じく表情を緩めていたトウカは顔を上げて口を開いた。

「安心しなさいな。人に危害を加える魔物は数十年前に隔離されてるの」

「へ、隔離？」

銀髪少女の言葉に俺は一瞬目を丸くする。

「そりよ隔離。色々問題があるそうだから絶滅はさせてないらしいけど」

「うわあマジかよそれ。全然知らなかつた」

予想外の真実に拍子抜けするばかり。

そしてニアからの更なる補足。

隔離されている場所は海を隔てた別の大陸のため、

俺達が魔物にエンカウントする確率はゼロなんだ。

てかよく考えれば別に驚くことじやないか。

とつこの昔に対策が取られてているのは当然だ。

……ん、でも待てよ？

「実際に戦う機会がないのに、なんで魔物と疑似対戦なんかさせてるんだあの学園は」

「ふむ、単に魔法が上達しやすいからではないでしょうか」

「そうね。たしかに明確な『敵』がいた方が全力で殺れるし」

人の悪い笑みを浮かべながら物騒なことを言い放つ銀髪少女。言つてることは間違つてないのだが、いかんせん可愛らしいその容姿にそぐわない。

なんだか複雑な心境だ。

「つと、待たせたな3人とも。おっ、今日も快晴だぜ」

「ホントだね。先週は雨が降り続いてたからその分が回ってきたのかも」

寮前のベンチに座つてまたしばらく空を仰いでいると、そんな声を上げながら男子2人が男子寮から出てきた。テオもラグナもカジュアルな服装がよく似合つている。

「よし、これで5人揃つたな」

そう呟いて手元に取り出したナビを見遣る。

確認したところ時刻はちょうど10時を回ったところだった。

集合時間ピッタリである。

「ええ、みんな揃いましたし、早速向かいましょうか」

そんなニアの言葉を合図に、俺達はヴェルエス繁華街へと出発するのだった。

・

「なあ、どう見ても学園だと思つんだけどな」「」

もう通い慣れつつある並木道を抜けて。

俺がクランメンバーたちに導かれた先は、学園中心塔のエントラ
ンスだった。

「ハハハッ！ なぜここに連れてこられたか知りたいかタクマっ

ー

「よしそうかお前ライブ行きたくないんだなよく分かった」

「うわわわ……」と赤毛竜人は押し黙る。

「雑魚ドリゴンの相手なんぞしなくて結構よ。時間の無駄だから」「分かつてゐる。んで結局どうしてここに来たんだ？ まさか学園の中に街があるってオチじやないだろ？」「

扱いの酷さに視界の端に萎んでいく赤毛の姿が見えるが、
アイツのフオローはニアに任せとおこう。

「あはは、やすがにそこまで広くないよ僕らの学園は

苦笑いを向けながら突っ込むテオ。やつぱりそれはないか。
しかし残念ながら俺が他に思い浮かぶことはないし、お手上げだ。

表情だけで皆に説明を促すと、銀髪少女が一人話を切り出した。

「……転移魔法の使用が規制されているのは前に話したわよね」「ああ、覚えてるわ。だから使わずにわざわざ徒步通学をしてるんだよな」

初日にそんな話をしながらトウカと廊下を歩いたのを覚えている。理由は確か魔法に頼り切つて怠けないようにするためだっけか。

「そう。だけどある特定のエリア間は転移魔法の行使が許可されているの」

「話が見えないぞ。それは別に今学園にいる理由にはならないだろう」

「チツ（人の話は最後まで聞きなさよバカ、低脳……）」

舌打ちと小声の悪口しつかり聞こえてるぞオイ。

「いいかいタクマ君。代わって僕が続きを説明するね」

トウカとの空気が悪くなつたのを感じたのか、テオが横から口を挟む。

うん、いつ見ても爽やかな美男子だ。

「その転移魔法が許可されている場所のことを転移駅、ゲートって言うんだけど」

彼の説明によると、ゲートは開けた広場や大きな施設に指定されているらしい。

結構たくさんあるそうで、ヴェルエス地方の中でも50を越えるのだと。

そこまで聞いた俺は「あつ」と声を上げると、表情を緩めて笑みをこぼした。

「なるほどな、このエントランスがその^{ゲート}転移駅なわけか」

「」明察。だとすればあとは簡単だよね。どうしてここに来たのか

テオの促すとおり、もつ答えは十分に絞れる。

恐らく学園から中心街まではそれなりに距離があるので。

だから転移魔法を使おうとのこの学園内ゲートまで来たというわけか。

「ふふっ、事情は上手く呑み込めたようですね。……と言つか、これも先に教えておくべきでしたか」

悪戯っ子のようにペロリと舌を出して微笑むミア。

桃色のミニツインテールが可憐に揺れる。

正直えげつなく可愛い。すげえ破壊力だ。

「ん、大丈夫だよ気にしないで。それよりそろそろ行かないか?」

「そうだぜ、寮を出てからもう20分は経つちまってるからな」

悟られないように視線を動かしながら次の行動を提案すると、いつの間にか復活していたラグナが元気よく賛同してくれた。

「それじゃ転移の構成式を組み立てるから行き先の座標を教えてくれ」

基本となる魔法構成式を頭に浮かべ、4人の特に誰ともなくそんな声をかける。

式に少し数字を代入するだけだから1分もかかるないだろう。魔法が使えなかつた頃でも式の組み立てだけは必死に練習していたしな。

「……つて、何またニヤニヤ笑つてるんだよお前らは」「あ、いやゴメンゴメン！ 悪氣があるわけじゃないんだよ」

反応がないので視線をやると言葉のとおり顔を緩める4人の姿が。テオが弁明するが、涙まで出るような笑い顔でそう言われてもな……。

「ゲート転移駅での転移魔法はコレを使うのよ」

「また生徒証の機能なのか」

「そ、だから普通の転移魔法に使う構成式と詠唱は不要よ」

横から見慣れた1枚のカードを揺らす銀髪少女を見て溜息をつく。

「使い方は簡単。『ゲートアクセス』と行き先の駅名を詠唱するだけ」

「ちなみにこれから向かう駅の名前は『ヴェルエス中央庭園』です。」

「」

「さう言つてニアは手本を見せてくれる。」

『ゲートアクセス、ヴェルエス中央庭園へ』

「おおつ！？」

その一言を放った直後、落ち着いた光が地面に広がった。形成された円形の魔法陣を読み解くに、きちんと転移用の式が埋め込まれている。

転移魔法を発動するには普通2分はかかるしまつのこと。

「めちやくちや早いな。少し驚いたぞ」

「あはは、文明の進化に感謝だね」

気付けば他の3人も足元に同じ小さな魔法陣を展開していた。銀髪少女は『早くアンタもやりなさいよ』と鋭い視線を向けている。

『よし、ゲートアクセス、ヴェルエス中央庭園へ』

胸ポケットの生徒証に手を触れ短い詠唱を終える。

それを合図にクラシメンバーたちは魔法陣の中へ。俺もすぐに駆け足を滑りこませた。

すると光の粒子が俺を包み、視界まで白く覆い込むのだった。

・

「ふうん、なかなかビリして思つたより綺麗な所じゃないか」

この場所を一言で言い表すなら『噴水広場』^{（ファウンテン）}が相応しいだろうか。ザザーッと水飛沫の心地良い音色が心を落ち着かせる。

「名前通りこの広場はヴェルエス地方の真ん中にあるんです。ミニアットスクエアからは少し離れていますけど」

小さな歩幅で可憐に先頭を進むミニアが口を開く。

彼女の提案で庭園の中を軽く散策してから街へ向かうことになった。

ちなみに『ミニアットスクエア』とはヴェルエス中心街の通称だ。

「このまま抜けた先がフラワー・コード。あっちには商店が並んでるわ」

「反対方向には確か魔法決闘ができる広場があつたよな」

結構な人が行き交う中を進みながら庭園内を散策する。

他の人の服装や庭園の景色は日本のそれとやはり変わらない。何も知らないでいたらここが異世界だなんて思いもしないだろう。

『んこいやーっす』

「…………んあ？」この声つてまさか……」

どこからか、不意にクセのある鳴き声が俺の耳をくすぐった。

それは日本人なら誰でも一回は聞き覚えのある鳴き声。

思わず立ち止まり、その姿を捉えようと五感のアンテナを張り巡らす。

『こいやーっす』

もう一度発せられた鳴き声の方に視線をやると、緑の茂みからソイツはこちらを伺っていた。

「うわあやつぱり猫か。てか異世界にも普通にいるんだな」

「その子はとても可愛らしくて、白毛の子猫だった。

脅かされなごよみひへり歩み寄り、屈んでよじよじと頭を撫でてやる。

子猫は逃げずには『ふにゃーん』と皿を締めつけシクス。ふかふかと柔らかな感触はなんとも至福の心地を俺に与えた。

「はつはーん。わつかせうか、タクマつむけお猫様がお好きだったのかあ

「あ……いや、えと、『れはその』

耳元で嫌らしく囁くラグナの声で現実へ連れ戻される。やべえ俺今どんな顔してたんだ！？

「そりやあもう初めて見たわ。アンタの蕩けきつた至福顔」「ああ聞こえない聞こえないッ！」

ヒ、言ことつもふわふわの猫耳から未だに右手を離せない。やはり猫は俺ことって少し特別な存在なのかも知れないな。

前の世界で孤独や辛い気持ちを紛らわしてくれたのは……。アイシヒ、突然居なくなつた俺のこと心配してるかな。……ん、こや止む。日本のことそもそも過ぎた話だ。

『うわやつぱり』

ああでもやつぱり気になる！？

眼前の白猫に、日本へ置いてしまった友の姿が霞んだ。
果たしてタイチもミーナもミューも元気でいるだろ
うか。

「前から思つてたんだけど、タクマ君つて意外と表情豊かだよね」

「ふふっ、私はとても魅力的だと思いますけど」

「つか何でいきなり泣きそうな顔になつてるのよ？」

何やら後ろでクラシックメンバーたちが話していたようだが、
この時の俺はそれを気にしているような余裕はなかつた。

「おっ、タクマっち、後ろに面白い生き物がいるぜい」

白猫に勝手ながら『シロ』と名前を付け可愛がつていると、
不意にラグナのそんな声が俺に降りかかつた。

「ん~、面白い生き物？ ひょっとして赤毛ドリコンのこと

軽口を叩きながら後ろを振り向く。

『ブルルウ、フヒュルルツ』

「んなつ、ええっ！？ ななんなんじゅあコイツはッ！？」

そして、眼前的生物を見てそんな叫び声を上げてしまつ。
ソイツは白馬のようで、頭から角を生やしていて。

これ見よがしに立派な2枚の白翼を羽ばたかせていたのだから。

ユニコーン、ペガサス。そんなファンタジックな単語が脳裏によ
ぎつた。

- Coming

Soon

Next

Story

!

-

Ep.3・4【ミリットスクエアへ行こう】

Episode 3・4【ミリットスクエアへ行こう】

どこか神聖な印象を抱かせるコニコーンとペガサス。いつの昔だったかその違いについて調べたことがあった。確かにコニコーンは一角獣、ペガサスは翼の生えた馬だったと記憶している。

無論、どちらも現実には存在しない神話上の幻想動物だ。が、あくまでもそれは地球という一つの次元体の中の話にすぎないのであって。

「ファンシート
愛玩動物のコノスス？」

さつき名付けたシロを抱き上げ、耳に入ったミアの言葉をそのまま漏らす。

腕中の白猫は『ふしゃーつ』と眼前の天馬を威嚇していた。

「そう、コニコーンとペガサスのハーフですよ。ほら、だから翼も角もあるの」

『ブルル、ヒュルルーン』

薄い青の混じったたてがみをミアにつぶふと撫でられると、コノススは甲高い鳴き声を上げてその場に落ち着いた。そして俺の顔を覗いて自慢気にその白翼と角を魅せる。

「へえ、ホントだ。お、この羽根もふわふわじゃないか」

うーんよく見ればとても頭が良さそうな顔をしているな。
ひょっとして人の言葉も理解できるのかもしない。

「まあ割とね。『おいで』って言つたら寄つてくるし」

そう言いながらテオも反対側の片羽に優しく触れた。
つといけないけないまた独り言を垂れ流していたようだ。

「つかコイツもしかして野生なのか？」
「ちげえわよ。ちゃんとこの庭園で飼育されてる子。限りなく放し
飼いだけど」

こんなに大きな馬を！？ 酷くずさんな管理だなオイ。

心の中で銀髪少女の答えに盛大な突っ込みを入れてしまった。

「その証拠にちゃんと『レコンキスタ』って立派な名前もあるわ
『よしそのふざけた名前の発案者をここに連れてこい』

確かにスペイン語だつけ。絶対この天馬に関係ない意味だぞ。
……ちょっと響きが格好いいから、か？

その後の道中でミアから聞いた話、愛玩動物はペットと同じような感覚のようだ。
家族や使い魔のように大切に扱われているらしい。

果たして馬をペットと呼べるのかは分からぬが。

「しかし猫は知ってるくせにコノススは見たことないなんてな
『猫と幻想動物と一緒にしないでくれ。頭が痛くなるから』

珍しいラグナの皮肉をそう一蹴りして足を進める。

「この世界じゃファーナイトと一括りなのかも知れないが、こちらから見れば違和感ありまくりなのだ。

下手をすれば魔物と勘違いしてしまいそう。

「ちなみに魔物の定義は『人に致命的な危害を加える生命体』よ。もちろんファンナイトはその枠に属していないわ」

「なるほど、ね。分かりやすいと言つか何と言つか

銀髪少女の補足を耳に入れて一人納得する。

そうなるとサメとかライオンも魔物にカテゴライズされそうだ。あ、それだといつか仮想迷宮にもそういう野獣が出現するかも知れないな。

「あら、あんな所にも可愛らしくファンナイトがいますよタクマ君」

嫌な想像をしていると先頭を歩くミアが不意にそつ手招きした。一体どんな奴だろうと彼女の元へ小走りして田をやると。

『ピース、ピース！』

なんかいた

「…………はははっ、は

顔のついた丸い球体が飛び跳ねながら変な鳴き声を！？
突っ込みどころが満載の光景に、俺はただ乾いた笑いを漏らすことができなかつた。

「この世界、まだまだ知らない生物がたくさんいるそうだ。

すっかり懐いてしまったシロと別れて花畠の道を歩く。いつまでも腕に抱いているわけにもいかないしな。それにまたこの場所へ来たら会えるだろう。

心地良いフローラルな香りに誘われてか、その花道を歩く人も多かった。

「見えるでしょあの大きなゲートアーチ。あれが庭園西側の出入口よ」

促された視線の先には確かに巨大な逆H字のアーチが。

ほんわかと暖かな日差しが注がれる花々との風景と重なり、心地良い欠伸を誘う。

「やつとか。めちゃくちゃ広いな！」学園ぐらにはあるんじゃないのか？」

「そうですね、この辺じゃ一番大きな^{ゲート}転移駅かと。

他にもお祭りやイベントの会場になることも多い場所ですし

なるほど、中央庭園の名は伊達ではないということか。
繁華街へのアクセスも悪くないようだし、これだけ人が集まるのも頷ける。

「この先の住宅通りを真っ直ぐ抜ければミリットスクエアに入るぜ」

「そうか、いよいよなわけだ。楽しみだな」

頭の上で手を組みながら口笛を吹くラグナに答え、俺は随分と現

代風な異世界の街並を想う。

うーん、まずは何の店から入る？。

・
：

中央庭園から北西に伸びる大通りを歩くこと10分。

俺たち一行は間もなくヴェルエスの中心街、ミミットスクエアへと足を踏み入れた。

さすがヴェルエス地方の中心に位置する商業エリアと言つたところか。

数多くの食料品店、魔法具店、書店、ファッショն店、喫茶店などが並んでいる。

中には地球と変わらないような大型のショッピングモールまで建っていた。

大通り沿いをしばらく散策した後、ニアの案内で若者向けのエリアであるアーケード街へ。

そして流されるまま最初に入った店はとあるブティックであった。

「うふふ、似合ってますよ。この新作ジャケットも購入決定ですね」

なんだか「機嫌なニアはそう言つと一枚の紙をジャケットから引き抜く。

これは商品カードと言つて、売り物のデータを記したものだ。会計するときに必要らしい。

「はい、それじゃこれが最後だよ。試着よろしく」

「おつけ了解。って、俺自身で服を選んでない気が……」

「そう小声で突っ込みを入れつつも、テオが持つてきた衣服に生徒^ナ証^ビをかざす。

すると普段どおり制服に着替える時と同じような感覚が全身を巡り、ふと正面の合わせ鏡を見れば黒髪の自分が知らない服装をしていた。

言わずもかな、この魔科学利器を使つと一瞬で着替えができるのだ！

……うん、やはりこの世界の魔科学技術の高さは何かおかしい。他にも言語結界や仮想迷宮のことも合わせて考えてみると色々ベルが違うすぎる。

「と仰りますが、実はそこまで難しい技術じゃないんですよ。じく基本的な魔術を組み合わせてシステム化してあるだけですから」

感嘆の声を漏らしていると隣でミアがそう微笑んだ。
確かに魔科学とはそういうものなのだが……。

その組み合わせを発想できる能力こそ俺はずいぶんと思った。

「おっ、なかなか様になつてるじゃねーかタクマっち

「あらあら本当、馬子にも衣装とは本当ね。クスッ」

少しの間テオとミアの3人で談笑を交わしていると、自分の服を行つたラグナと冬霞^{トウカ}が戻ってきた。

「今ひとつでも聞き捨てならない台詞が耳に届いたんだが」

強いて言えば銀髪少女の口から。

「羽毛が美しければその鳥も美しきってね」

「何の意図で類語に言い換えてかつしたり顔なのかは知らんけど、絶対友達少ないだろお前」

「はん、残念ながらアンタほどじやないわ」

「言い返せない！？ くつそ微妙に真実じゃねーか。
代わりにギロリとトウカを睨むとクスクスと冷笑が返ってきた。
とてもとても悔しいです。」

「はいはいそこケンカしない。タクマ君、自分で精算しておいで」

「うぐ、分かった。これ渡すだけでいいんだよな」

「うん。後は店員さんがやってくれるよ」

前々から思つていたが、テオは空氣の変え方が上手だ。
特に対トウカのいざこざには手馴れているようだ感じる。

「ふう、これだけあつたらしばらく服には困らないだろう
な」
「どうも～、毎度ありがとひびきやしま～す」

結構広い店内の中央に設置された橢円状の会計カウンター。

俺はそう呟きながら商品カードと生徒証を店員に手渡す。

営業スマイルの男性店員は慣れた手付きで魔法陣を紡ぎ精算作業

へ。

「その制服、お姫さん本校の生徒さんかな？」

「え、本校？」

いきなり店員さんが話しかけてきたので少し身構えてしまつた。つかあの学園あんなに広いのに分校まであるのかよオイ。

「だつてそれ本校の、リュミシアル魔法学園の制服でしょ。制服のままこの店にいらっしゃる生徒さんは久しぶりに見たものでね」

「ああ、やうなんですか。実は」

『「」しないだ』の世界に来たばかりで他に服がなかつたからなんです』

と、言いつとじて止めた。なぜならもう精算作業は終わつていたからだ。

それに言いつとそれでまた変な話の流れになりそつだし。

「またのお越しをお待ちしております」

両手で差し出された生徒証をこちらもまた両手で受け取り、店の外で待つていたクランメンバーたちの所へ駆け寄る。

「よしよし、ちゃんと一人でお買い物できたようじやないか」「馬鹿にしそぎだろお前。俺をいくつだと思つてんだ」

軽口を叩くラグナをあしらつてナビを起動させ、早速購入した衣服の中から適当に選んで着替える。ついでに確認した時刻は正午を過ぎようとしていた。

「なあミア、ランチはどこで食べるか決めてあるのか？」

「へ？ あ、はい、フィオミスという大手の料理店に行こうかと」

いきなり話を振られたミアは一瞬ビクッとピンクのマニシインテールを揺らすと、

すぐに笑顔の表情を整えてその料理店の名を声に紡いだ。

フィオミス？ どんな料理を取り扱っている店なのだろうか。

・
：

アーケード街を抜け、大通りへと戻ったすぐの所にそれはあった。構えるのは『フィオミス』と丸っこいロゴ文字が大きく刻まれた看板と少し広めの建物。

そこから漂う美味しいそうな匂いは、いかにも料理店といった雰囲気を醸し出していた。

休日と昼時が重なつたためか、なかなかどうして繁盛しているようだ。

テーブル席へ案内されるまで数分待たされたが、

その後もまだまだ空席を待つ人たちの姿が絶える様子はない。

「ここ」のメニューは学食のそれと大して変わらないんだけど、とにかく安いんだ

キンと冷えた水に満たされたカップをそれぞれ口に運ぶと、席の方に座っていたテオが最初に話を切り出す。

「安いつて値段がか？ どれくらい

・

「『わつと』に酔よ。破格すぎて涙が出るわね」

俺の問いに向かい側の銀髪少女はそう答え、配置されたメニュー表を差し出した。

「ふうん、確かに三割とはなかなかだな。どれどれ……」

よつとランチメニューの冊子へ手を伸ばして中身を覗く。
そこには座腹をくすぐらせるような料理の『写真』がお洒落に飾られていた。

……ほお、カツ丼定食が300円なのか。学食のが400円だから確かにお得だ。

「なるほどね、いつも安価だと確かにこの繁盛具合も納得だな」「今日はまだマシな方ですよ。日によっては学食以上に混むそいつですから」

辺りの客を見回してから『アハニコヤかにそり告げる。

まあ、納得。何より安いし、食費を浮かせたい人たちはありがたいのだらう。

「ええっとそれから、タクマ君は?」

「ああ、俺は『フイオミス特製日替わりランチ』で」

せつかくなので『』でしか食べられないようなメニューを注文しておぐ。

内容は『写真を見る限り、多分グラタンだ。きっとぱりと断定はできないが。

まあ人気メニューらしく、きっと美味しいただけるだらう。

ウーハイターは『かしこまりました』と一礼して店の奥へと姿を消す。

「なんか今の店員さ、俺より若く見えた気がするんだが」

「学生のアルバイターだよ。こいつら店は学生も多く雇ってるからな」

「ま、私たちのクラスから働きに来ている生徒はいないみたいだけどね」

ラグナとトウカの言葉にそうだったのかと納得し、他の店員を眺める。

「うむ、この安価のワケはここにあるのかもしないな。

学食の人はアルバイトじゃなくて、ちゃんとした食品企業の社員だそうだし。

「そう言えばよタクマつち、この後どこか行きたい」「とかねえのか？ 昨夜熱心にマップ見てただる」

「えっ、行きたいところか？ うーん、そうだなあ……」

そんなこといきなり訊かれてもあまり思い付くものが無いから困る。

大雑把な街の雰囲気を見てみたかっただけだからな。

で、しばらく思考した後に俺が口にしていたのは……。

「強いて言えば家具屋かね。インテリア類も少しは揃えたいし」

観光地でもなんでもない、ただのショッピングの延長だった。

いやだつてや。欲しくなるだろ？ ソファーとか。

「ふふっ、ア解しました。昼食の後はインテリア店へ向かうことこ
しましょウ」

そう笑みを浮かべ、ミアは手元に届いた紅茶を啜る。

『私にも選ばせてくださいね』とラピスラズリの瞳が語っていた。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.3-5 【アイドル アイリス】

Episode 3-5 【アイドル アイリス】

「おいタクマつち、オマケの景気付けにこっちのも一つ買っちゃおうじゃないか」

「いられーよ！？ それだけで部屋が埋まるわ！」

4人ほど腰掛けられそうなソファーアに手をかけているラグナへ叫ぶ。

何が悲しくてそんなデカいもん買わなければならんのだ。

「よいしょっと、これで念願のソファーゲットだな。次は……」

隣の白いソファーの商品カードを引き抜いて呟く。
ちなみに頑張れば2人座れそうな大きさだ。うん、こんなので丁度いい。

「最後に残しておいたカーペットか。爽やか系の色が欲しいかな」

天井に『敷物』とボードに吊るされたコーナーへ足を進めていく。
フィオミスで昼食を探った後、やってきたのは大型のショッピングモールだった。

専門の小売店だけではなく娯楽施設も併設されているそうな。
今は3階のインテリアを主に取り扱っているエリアに来ている。
そこが思ったより広くてかつ商品も多くて。

「（もうかれこれ2時間ぐらいは経つよな）」

みんな最初の方は一緒に品選びを手伝つてくれていたのだが、いい加減飽きてしまつたよつとそれぞれ適当に店内を徘徊している。

「ええ、私も派手すぎない色がいいと思います。だから、ええつと……」「いいのがあつたら教えてくれ」

はいと頷くと桃色の髪に小さな指を絡ませ、ミアは小さく唸りながら商品棚を覗く。

そこには20センチ四方のサンプルが色鮮やかに並べられていた。

「あつ、これなんかどうですか？　いい感じの模様ですよ」

しばらく適当に商品を探つていると、少し離れたところから少女の声が飛んだ。

どれどれと近寄つて皿をやると、それは水色と白のチョックだつた。

「なかなかいいかも。よし、これに決めるわ」

ありがとうとミアに礼を言つてから、

10枚ほどになつた束の商品カードを片手に会計場所へ向かつた。

結局最後まで隣で手伝つてくれたのはミアだけだったな。
冬霞トウカとラグナはもちろんテオまで自由行動中なのに。

「それでは本田の20時頃に商品をお届けさせさせていただき

ますね」

「あ、はい、よろしくお願ひします」

空間転移魔法を使った商品の配達はどいつも無償のサービスらしい。

日本ではかなりの手数料を取られるのに。

……これも魔科学技術の進歩と考えてもいいだらうか。

店内の端に設置してあるベンチへ腰掛け生徒証を起動させる。それにしても今日は随分とたくさんモノを買つてしまつたな。よく考えてみれば特に必要じやないモノも……。

全部置けるかね、10畳もないワンルームだといつのこと。

「ええっと、ううわ今日だけで10万近く使つてしまつたぞ」

ナビから虚空に映し出されたお金の残高を見てうな垂れる。学園から結構貰つているとは言え、荒遣いしてしまつたかな。

「問題ないわ、やつこのを買わせるために支援金が出てこるわけだから」

「……やつか、ならいいんだが。つかお前どうしたんだソレ?..」

いつの間にか隣で冬霞トウカがアイスクリームを舐めていた。仮にもこれはインテリア店ではなかつたのか。

「買つたに決まつてるでしょ。隣のコーナーが食べ物屋なの

あげないわよと田を逸らして答える銀髪少女。

忘れていた、ここはショッピングモールだったな。

それからしばらくするとミアがラグナとテオの2人を連れて来て。

「インテリア類も制覇できたようだし、今日のお買い物はこれでお終いかな」

「ああ、今のところ必要なものは全部買い揃えたぞ」

/// リツトスクエアでの長い長いショッピングは幕を閉じた。

「よしよし、それじゃあ最後は今日のメインイベントだな！」

この赤毛竜人、普段よりもテンションが高い気がする。
そんなに楽しみにしてたのかライブコンサート。

「なあテオ、ライブ会場まで距離はどれくらいなんだ？ 間に合いでそう？」

「うん、時間的にもまだまだ余裕があるよ。ここからすぐ近くだし
ね」

「ですからもう少しモール内を見回っていても大丈夫かと」「
ん、分かった。それじゃあ隣の店で少しあ茶して行こうか」

トウカのアイスクリームを見ていたらなんかお腹空いてきたし。
ライブまではしばらく美味しい休憩時間としよう。

・

大手アイドルプロダクション、Candy Kiss社。
キャンディーキッス

事務所にスタジオ、おまけにはライブホールまで揃つていいとい

う。

「はい確認しました。ビーナスライブコンサートをお楽しみトライ
いませ」

生徒証にデータとして入っている5枚分のライブチケット。
手早くその認証作業を終えた女性スタッフは、整ったお辞儀をして扉の中へと促す。

「うおっ、やっぱり前の席はコアなファンどもが占領してやがるな
……」

我先にとライブ会場へ飛び込んだラグナがうぐぐと唸つた。

「別に最前席で観る必要ないでしょ？ 少し遠い感じのところ
のほうが気が楽よ」

「え、そうだね。熱気でやられちゃうだつだ」

俺とミアも頷いてステージから近くもなく遠くもない適当な席に陣取る。

しかし意外と広いなこの。普通に1000人ぐらいこは収容できる
のではないだろうか。

「来るのがまだ少し早すぎましたかね。開演まであと30分ありますよ」

「確かに30分って微妙な時間だな。何して待つてよ？」

「そりゃ妄想して気分を昂ふらせるのや。常識だよ転人生
クン」

「えっ？ あ、アンタは……」

不意に前から現れたのは見知った顔と声。

以前アイリスのことを熱心に語っていたクラスメートだった。

「お、オイ、なんでお前がこんなといいんだよ！？」

「愚問だなラグナ。私も参加するからに決まっているだろ？」

クイツと光る眼鏡を持ち上げて笑う一人称私男。

うわあアキラ副会長とジユアルが被つてやがる。

「さすがクラス一番のアイドルオタクね。アイリスのライブ全制霸する気？」

「もちろんだ。彼女のためなら私は講義も喜んで辞させて頂くつもりだぞ」

「……呆れたわ」

得意の嫌味も効かず、かつ迷いなく言い切られて溜息をつく之力。

「タクマ＝ニツルギ、私から言つのも何だが今夜は盛大に楽しむといい。

「なんせ彼女の歌は……。いや、それは実際に聴いてみてからのお楽しみだな」

「な、なんだよ歯切れが悪い。気になるだろ」

「クククツ、なあにあと数分で分かるさ」

アイドルオタク眼鏡男子クラスメートは嫌らしい笑み浮かべると、結局は何も教えずに颯爽と最前列へと戻つていった。

「いや、何しにこっち来たんだアイツ？」

そして数分後。予定された時刻通りにライブは始まった。

『ういーっす！みんな、今日はよく来てくれたわね』

ステージの下から元気よく登場した一人の少女。

薄く白い霧とカラフルなスポットライトがその姿を演出する。

「（あれがこの世界のトップアイドル、アイリスか）」

鮮やかなライトパープルの髪がゆらゆらと揺れて。

パンフレットと同じ艶やかな衣装に身を包むその少女は、遠目ながらも息を呑むほど綺麗だつた。

あー、こりゃ歌なしでも人気出そうだわ。

『今日は張り切つて10曲以上歌っちゃうから、存分に酔い痴れて頂戴っ！』

マイク越しにこれまたお茶目な声が会場へ響き渡ると、観客たちが次々にうおおおっと歓声を上げる。

ラグナも大声でそれに混ざつていたが、俺を含めた4人は軽い拍手だけを送つていた。

『さあ、時間がもつたいないから早速飛ばしていくわよっ！一曲目、“Lover Stars”』

ワインクを決めてクルリと一回転すると、激しいメロディーが流れ出した。

彼女の歌声と曲の旋律に合わせて、色鮮やかなペンライトが揺ら

される。

一糸乱れぬその動きは訓練でもされたのかと突つ込みたいほどだ。

『~~~~~』

あれからアイドル様は連続で5曲ほど歌つて踊っているのにまだまだ元気そう。

会場の熱氣とボルテージをぐんぐんと現在進行形で上げ続ける。

……それにしても。

彼女の歌が始まつてから、俺の身には小さな異変が起きていた。さつきから妙に身体の中がそわそわするのだ。

なんとも言えないこの不思議な感覚。一体なんなんだ？

「効いてきたみたいね。彼女の呪歌の効果が」「は、呪歌だつて？」

横から小さな声で怪しく囁く銀髪少女に、俺も同じく消え入るような声で訊き返す。

いきなり何を言い出すんだコイツは。

「呪歌には魂を癒し精氣を与える力があるの。気分の昂りはそのせい」

いや、歌つて普通そういうものではないだろうか。つかそもそも。

「呪歌つて何なのさ。魔法か？」

「魔法じゃなく稀代な特殊体質らしいわ。先天的の、ね。

そして普通の歌声とは格が違つ。精神安定、疲労回復。その効果は目に見えて歴然よ」

そりや「J利益のあるJだった。産まれながらの歌姫つてか。

「なるほど。んじゃさつきアイツが言い含めていたことって、その呪歌のことなんだな」

「そういうことでしようね。ま、隠すほどのことでもないと思つけど」

「ははっ、確かにそうだな。普通に教えてくれればいいのに」

苦笑を浮かべてから再びステージの方に集中する。
つて、ホール内のボルテージがまた一段と上がっている気が……。

「（随分なスタミナと精神力だな。あの娘も、ファンも）」

眞面目に感心しながらも、俺はライブを見続けるのだった。

『　　はい、みんなお疲れさんっ。楽しんでくれたかな?
　このあと一階のエントランスで握手会あるから、ちゃんと来なさいよ～』

そう言い残して舞台の奥へ姿を消すアイリス。
すげえなあの娘、歌もトークも完璧じゃねーか。

これに美貌も合わせて考えれば業界トップなのも当然だ。

「……ん、ああ、もう2時間も経つたのか」

大きな欠伸をしながら盛大に拍手を響かせる。

薄暗かつたステージにも照明がついて、視界が眩しくなった。

「やつベえマジ最高すぎるよアイリスちゃん……！」

「うん、僕も久しぶりに生で見れてよかつたよ」

クラシックメンバーたちも満足しているようで良かった。

俺もなんかスッキリしたというか、気分が良くなつたというか。明日ミリオムにお礼言つとかないとな。

「ねえ、それで握手会行くの？ 他の観客たちはもう行っちゃたわ

よ

「えつ？」

うわマジだもう誰もいねえ！？ 行動早すぎだろファン。

ホール内は俺たち5人を残して静まり返つていた。

「せっかく来たんだから行こうか。もつとも最後尾だらうけどね」「そう、だな。行ってみるか」

まあ握手なんてすぐに終わるだらうし、そう時間も取らないだろう。

う。

で、10分ほど待つた後にいよいよ回ってきた俺の順番。

「おっ、キミ、最近話題になつてゐる時期外れの転入生でしょ。本校

の

「ツ！？ あ、えつ、はい！ なんなんでござりますか！？」

他の奴らは軽い挨拶だけだったのに、なんか別のこと話をしきかけられた。

私タクマ＝ミツルギ、盛大に取り乱しています。

「ふつふ～、私は何でも知っているのだよ」

白慢氣に豊満な胸をお張りになるアイドル様。
やべえぞなんかよく分からんが盛大にやべえ。

「（なあ、タクマっちって実は煩惱の塊なんじゃないのか？）」「（……明日からアイツのあだ名は煩惱鬼神エロカイザーね）

何やら不穏なヒソヒソ声が聞こえるが今は気にしないでおけ。
そしてテオトニアの苦笑がすんぐく痛いです。

「つと、あんまり長い話は他のファンに悪いわね。それつ、握手
しましょ」

「ああ、はい」

差し出された柔らかい右手を握る。つて、あれ?
なんかいきなり静かになつたなこの人。

「あの……。どうかしたんですか？」

「えつ、いやなんでもないなんでもない！ それより、これでアン
タも立派な私のファンなんだからね。次のライブにも絶対来なさい
よ

「は、はい、喜んで。また来ます

雰囲気が変わったような気がしたが、思い違いか。

外へ出るとも、口は落ちていた。けれども街灯に照らされているので明るい。

街並を歩く人は瞬間と変わらずにまだまだ多いようだ。

「こんなやうひ俺のアイリスちゃんに『アレ、アレしゃがって』

「そそつそそそなことないッス」

「嘘。そればかりではなく胸のあたりを舐めるように見ていたわね」

一番近いという転移駅へ足を進める中、俺は盛大な攻撃をくづつていた。

確かにね、見惚れましたよ。でも仕方ないじゃない。

「なあ、どうせだし晩飯もこっちで食べていかねーか？」

「駄目だよ、寮でちゃんと用意されてるんだから。

それに早く帰らないとタクマ君の部屋の模様替えに待ち合わないでしょ」

あ、そうだ20時には業者が部屋に来るんだった！

その前に食事を済ませて部屋にスタンバイしていないと。俺たちは雑談を交えた駆け足で帰路に着くのだった。

今日、あの日からちょうど一週間が過ぎようとしている。寒い銀月の夜は姿を消して。導かれたのは調和の理想郷。知らない魔法と技術、価値観、食べ物、街、そして人。

良い意味でも悪い意味でも、ちょっとぴり刺激的なこの世界は。そう、とっても居心地がいいし何より楽しい。

もう連れて来られた理由なんて。考える必要はないのかもしれないな。

・
・

あれから数時間経つた21時。
タクマ
拓磨の部屋の模様替えが終わった頃。

「うむむむ……」

遅い時間に女子寮へと戻った1人の少女は、ベットに転がりながら深く思考していた。

「ちやんといつもどおり全力で歌つたはずなのに、どうしてなのよ
う」

彼にかかった呪いは解け切れていないのか、と。

普段の彼女には考えられないほど元気のない声を漏らす。

「やつぱり、それだけ強力な呪いだつたことよね。うべべべべ

そもそもどういう呪いなのかも分からぬ。

さつき手を握つてみてもその解析は上手くいかなかつたのだ。

意味もなく歯をギシギシさせてベットから起き上がる。
かくなる上は情報管理局に問い合わせてみようと考えついた。

「あー、でもやっぱ今日は疲れたかも。また気が向いてからこじょ

が、そう呟いて呆氣無く止めた。生徒証を机上に戻して再びベッドへ潜り込む。

「ちと早いけどもう寝ちゃお。最近寝不足だつたし」

言ひやいなや旦を瞑つて数分後。

久しづりに彼女は日を越えるまでに眠りについたのだった。

そして結局のところ彼女の計画は失敗した。

もつとも今日という日がタクマにとって羽休めの楽しい休日となつたことについては、

十分に意味があつたと考えて間違いないだろう。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.4-1 【彼の姉はトラブル報道部員】

Episode 4-1 【彼の姉はトラブル報道部員】

明けた月曜日の朝。嬉しいことに今日の空模様もまた快晴であった。

もつとも俺がこの世界へ来てから雨の日は一度もなかつたのだが。そう考えてみると、雨の降つてゐる風景も見てみたい気持ちになる。

「よおミコオム、お前がくれたチケットのおかげで昨日は楽しめたぞ」

自分の席へ座るついでにぼあつとじていた隣の女子へ声をかける。長いブロンドの髪を持つその少女、ミリオムは振り向いて挨拶を返した。

「ああ、おはよ。そうみたいね、しっかり格好いい服まで買ひやつて」

「……あ、うん? どうしてそんなこと分かるんだ」

つむれこなと突つ込もうと思つたが、すぐにおかしこと感じて詫き返す。

だつて昨日会つてないし。彼女が俺の買つた服を知つていゐはずがないのだ。

「つまえつと、それは……。や、そつこれつ、これ見てたからー!」

田を丸くしたミコオムは慌てて生徒証から何かを起動させる。

続いて虚空に小さく浮かんだのは。

「これって学園新聞の観覧画面だよな」

「そりや、昨日のアンタの様子が今朝の記事に上がつてたの
え、ウソ、昨日のがか！？」

ミコオムの言葉に思わず狼狽した声を上げてしまつ。

なぜなら俺にはそんなこと全く知らされていないのだから。

ちなみに学園新聞といつのはこの学園の報道部が作つてある情報誌だ。

なんでも名前はシンフォニックといつらしき。

朝刊と夕刊があつて生徒証から記事の観覧が可能になつてゐる。

その記事の内容はこの学園内での出来事や情報、近辺の店舗の宣伝など。

他にも適当なコラム記事とかあつて結構ボリュームにつぱいだ。
見ていていい意味で暇つぶしになる。

「うわあほんとだ。思いつ切り書かれまくつてるな

んで、問題の記事は『編入生の休日』といつタイトル。

昨日の朝から昼飯、買い物の様子まで丁寧かつリアルに綴られて
いた。

「ほり、ここにバツチリ写真が載つてゐるわ。他にもとこかじり
ね

「……ひでえな。これはさすがに勘弁してもらいたいぞ」

格好良くもなんともない俺の写真を指差してミコオムが微笑む。

頭が痛くなりながらも数えてみると、その数なんと20枚越え。

つか気付けよ俺、こんな真正面から撮られてるぞ。
いやでもそんな怪しい人は見かけなかつたような。俺が鈍すぎるのか？

「それにしても、本人に承諾も得ずこんな記事を作つてもいいのかよ」

もつとも俺が気にしてるのはこの点である。

以前報道部から取材を受けて記事を書かれるることは度々あつたのだが、
今回のようにパパラッチじみたのはこれが初めて。正直少し不快だ。

「あ～、それはこの記者さんが今までと例外だけね。まったく、
この人は怖わよ」

「うん？ なになに、2年のテミス＝ベリアルス、先輩か」

ミリオムの言葉に不穏なものを感じながら担当記者の名前を口に出す。

あれ待てよ、この名前どこかで聞いたような？

・

「タクマ君、ミリオムさん、2人ともおはよつ

しばらく黙り込んでいると、少し遅れてテオが朝の挨拶をかけてきた。

つて、さつき朝食時にも会つて挨拶したと思つただけだな。

「別にいいじゃないか何度も挨拶して。減るもんじやなし」「あ、うん、そうか」

何と言つか、コイツも変わったところあるよな。

「それで2人で何の記事見てたの？ 面白いのでもあった？」

「それがさテーオ、またアンタのがやらかしてるわよ」「み

「えつ！？ ちょ、ちょっと見せてね」

ミリオムに氣の毒な調子の言葉を投げかけられると、テオの雰囲気が変わった。

穏やかだった顔がだんだん曇つていいくのが手に取るよう分かる。しかも小刻みに震え出して。な、なんか黒いオーラが滲み出てるぞ！？

「ど、どひしたんだテオ……？」

あまりに様子が変なので記事を黙読するテオへ声をかける。

「これやつたの姉さんだ」「うん、なんだ？」

低く小さな声でテオが何かを呟く。

そして言い直した次の言葉は、俺の耳にしつかりと伝わった。

「このテミス＝ベリアルスって記者さ、僕の姉なんだよ……」「はい、姉って？ ユアシスター？」「イエス、マイシスター」

何か知らんけどこの世界つて英語も通じるんだよな。
アルファベット表記の名称も多いし。って、今はどうでもいい話
か。

「ああどこかで聞き覚えがあると思つたらこいつことだったわけ
ね」

なるほどと大きく頷く。ベリアルスが一緒だつたんだな。
テオから以前姉がいふとだけ聞いていたが、こんな形で再び聞く
ことになるとは。

「あんまり教えたくなかったんだよ。この人ウザいから
「お前の口からそんな言葉が出るなんて……。一体どんな人なんだ」

妙な興味が湧き、思わず振りなアイコンタクトを送つてみる。

「そう、一回会つてみる？ どうせまだ近くにいるんでしょ、姉さ
んっ！？」

伝わつたようで、そう声を上げ鋭い視線を教室中に張り巡らすテ
オ。

え、今この中にいるのか。まだ少し早い時間なので教室には10
人ぐらいしか居ない。

それにその10人も全員クラスメート。テミス先輩なる人物はい
ないようだが……。

「あつ、そこだなッ！ ハアツ」

すると見つけたと言わんばかりに端の窓際めがけてチョップを繰

り出す。

いや、そこには何も無いぞ？ と突っ込もうとした瞬間。

「うと、危ないじゃないのテオ君つたら。それ当たつたら痛いわよ？」

「うえつ！？ ななんだ！？」

その何も無い空間からあるはずのない女性の声が響いた。当然びっくりして取り乱す俺だが、落ち付いてとミリオムに肩へ手を置かれる。

「姉さん、いつも言つてるけど少しばしは自重して。友達が困つてるから」

「ちえ、つまんないの。せつかく張り付いてたのにな」

だんだんと、悪戯な言葉だけを紡ぐ人物の姿が浮かび上がる。透明人間がその形と色を取り戻すように。これは、闇属性の魔法か。

「にしても、私のステルスをこうも簡単に見破るなんてね。エルザやクリス先生でも手間取るのに」

そして間もなくその人物は完全に実体化した。

テオと同じ翡翠の髪、それを長く伸ばしてポニー・テールに結び。琥珀色の目をニヤリと釣り上げ、悪戯な笑みをテオに向ける。

「不本意だけど姉弟だからね。なんとなく分かっちゃうんだよ」

それに負けじと弟の方も怪しい笑みを浮かべて言い返す。

さすが前いた世界じゃ魔王子息をやってただけはあるな。怖ええ。

「トオ君たらシンシンこいやつてまあお姉ちゃん悲しいわ。ま、今それは置いといて」

「うーん…」

「うわ、目が合つてしまつた。会わせて同時に語る。絶対絡まる」と。

そして氣付いた時にまもうグッと距離を詰められていて。

「どうも編入生のタクマ＝ミシルギ君。私の名前はテミス＝ベリアルスです」

「は、はあじつも。衆むことお世話になつぱなしで」

流されるまま言葉を返し、軽く頭を下げる。

間近で見て氣付いたがテミス先輩は俺より少し背が高いようだ。

「高等部2年生、学園報道部所属、そして次期部長候補の一人。ま、いわゆるHースつてところかしら」

しばらぐ立派なテミス先輩の自己紹介が続いて。

それが終わつてから俺は無断取材の文句を彼女にぶつけた。

「ですから、取材する前か後で一言声をかけてもらえば文句言こませんよ」

「キリの自然体を追つて見たかったの。先に言つたら氣にしちゃうでしょ？」

そして帰つた後は記事を書くのに必死だったから連絡できなかつたてわけ

「「」おんのぉ屁理屈を……！」

見苦しい言い訳をする先輩に後ろでトオがキレかけている！？

「し、しかしあいつやって撮ったんです？ 一度もそんな気配は感じなかつたんですけど」

もう無断取材のことは捨てて話題を変える。

一応これも気になつてることの一つだからな。

「今使つてたブライング、姿を消す闇魔法ね。それだけよ

「カメラは……。やつぱり生徒証ですよね」

「じ明察。でも普通のナビと比べたら報道部の方がずっと質機能は
上よ」

そう由々櫻に自分のナビを取り出しつゝかうに向けるトニス先輩。
なるほど、専用に改造してあるってわけね。

「つーことで、今朝の一枚いただきまーす」

あつ、しまつた油斷した！ あまりにも様子が自然だつたから。
つか念じるだけで撮れるのか、しかも音もなしとはまあ……。

「ちよつ、もう、いきなり撮らないでくださいよー」

「やあだタつちゃんそんな眉間にしわ寄せぢや。もつと笑つて笑つ
て」

う、うぜえ……。とは言えず胸の中に抑えて残念な笑顔を作る。
つかタつちゃん呼ばないでなんか虚しくなるから。

「姉さん、もうここ加減に……」

やべえテオの黒い邪気が増幅しつぱなしだ。
早くこの先輩を何とかしないと、非常にひじくなことが起きる予感が！？

「 テミス先輩、あまりこの教室で騒ぐようでしたら、また学生会からペナルティを『えますよ』

そんな感じで焦つていると、思わぬ人物から助け舟が入った。
物陰からすうっと銀髪少女こと冬霞トウカが姿を見せたのだ。

どうでもいいけどよく考えれば「イツもステルス属性っぽいよな。
「うげえ、またうつれーのが出たわねえ。アキラと似て生真面目な
んだか」

その顔を見た瞬間バツの悪い顔をして俺から離れるテミス先輩。

「まあ兄妹ですもの。んで、さつさとお引き取り願えます？」

「へえへえ分かりましたよキラークイーン、トウカちゃん」

そして促されるまま廊下側へ歩き出す。

つかキラーキーンで。すゞこいつ名だなトウカよ。

「それじゃあタッちゃん、また美味しいネタ期待してるわよん。バイ
イビ～」

「（バイビーって死語だよな……）」

これは流石に言葉に出てしまつ。だつてねえ、バイビーで。

右手を教室の生徒全員へに振りまき、疾風の如く廊下へ去るトミス先輩。

結局あの人の中で俺の呼び名はタツちゃんに確定してしまつたら
しい。

・
・

「度々」めんなさい、愚姉がまた」迷惑を……」

その後テオが大きく頭を下げていた。目尻には涙が浮かんでいる、
ようにも見える。

黒いオーラは完全にその姿を消していく、普段どおり落ち着いた
様子だ。

……いろいろ苦労してるんだなコイツも。

「本当に」めんタクマ君。今度は絶対に謝罪させるから
「べ、別にお前が謝ることじやないだろ。それにあんまり氣にして
ないし」

なんだかともいたたまれなくなつて優しい声をかけるのだった。

「災難ねえ2人とも。ま、中等部の頃からあの先輩はあんな感じだ
つたけど」

「まるで嵐みたいな人だったな。確かにありや怖いわ」

「この学園のトップ争うトラブルメーカーよ。弟はこんなに聖人君
子なのにね」

さつきミロームが言つていたことの意味を理解する。

あのブラインドという闇魔法、気配すら感じることができなかつ
た。

そりやエルザ会長やクリス先生まで手間取らせるつて自分で言つ

てたから当然か。

「いつ影から見られても、恥をかくような行動だけは慎まないとな」

なんせ今あの先輩のターゲットは俺のようだし。

あーあ、またいらない厄介ごとが増えてしまった。

「無駄無駄、良い子ぶつてもいつかボロが出るわよ」

「気が滅入ること言ひつな。月曜の朝から憂鬱にさせないでくれ」

クスクスと晒う銀髪少女をそつあしらつて椅子に座り直す。
こうなつたら現実逃避。HMRまで寝させてもらひおつ。

「……いつか絶対に、僕が姉さん矯正してやるんだからッ！」

溜息と合わせて意氣消沈する俺とは対称的に、
魔王の息子さんは熱い炎を瞳に灯してガツツポーズを組むのだった。

まったく、爽やかな朝の雰囲気はどうへ行つてしまつたのやら。
俺の異世界学園生活2週間目はこうして幕を上げるのだった。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.4・2 【グリーンスタッフポート】

Episode 4・2 【グリーンスタッフポート】

テオの姉、テニス先輩が起こしたパパ活チ事件から一月が過ぎて。

「なあニア、俺は少々尋ねたいことがあるんだよ。どうか聞いてくれ」

「あいり向でしょ。どうぞ遠慮せず言つてみてください」

ピンク髪の少女はそう言ひ放つと立ち去る俺のすぐ横へ並ぶ。今見て気づいたが、今日のリーシングインテールを結ぶリボンは黄色らしい。

「……これは一体どこなんだ。少なくとも初めて見る場所なんだが」

数秒の間があつてから俺はそんな言葉を紡ぎ出した。

その答えは予め知つていて。が、どうしても口に出せなかつたのである。

蒼穹に満ちた空、そこに浮かぶ綿飴のような白い雲。それはいい。問題はその素晴らしい天氣の下、見渡す限り視界に広がる若葉色であった。

「どうだと言われましても、仮想迷宮ですよ。草原型の」

戸惑つている俺を見て楽しんでいるのか、クスクス笑みを零しながら答えるニア。

あ、うん、そだね。どう見ても草原ですよねー！

「草原、だよなあ？ 洞窟じゃなくて」

若葉色の正体。そう、それは草である。

足を動かすたびにシャリシャリと音を鳴らすあの草だ。それらが一面に広がっているのである。どうでも。

ピクニックでもできそうな野原だなあと景色を仰ぐ。

そんな俺の後ろ、少し遅れてダンジョンに入ってきたテオが口を開いた。

「初めての探索実習の時に言つたじゃないか。フィールドはたくさんあるって」

「た、確かにそんなことも聞いたような記憶が……」

だんだん思い出してきたぞ。森の中とか火山地帯もあるんだっけか。

しかしクリス先生も一言ぐらい教えてくれればいいのに。

「転移してからのお楽しみなのよ。どんなフィールドなんか分かるのはね」

「とんだお楽しみだな」

じつちは逆に愕然としてしまったよと銀髪少女の目を見つめ返す。普通に先週までと同じ洞窟ダンジョンに転移すると思い込んでいたからな。

そりや呆氣にとられてしまつだらつ。

狭くて薄暗かつた洞窟から打つて変わつた開けて明るい草原地帯。

果たしてここにはどんな魔物さんが出現してくれるのだろうか。

・
：

今から遡ること數十分前。本日は火曜日、午前中は探索実習である。

朝のHRが終わった後、我々組の面々は仮想迷宮のエントランスへと集まっていた。

「クリスせんせつ、今日ははどんな感じのプランなんすか？」

「うむ、本日もシンプルに魔物の掃討をしてもらひ。ターゲットはオーガ＝ソーサラーだ。迷宮内に20体ほど設置してあるので全て撃破するよ！」

ホール内の少し高い位置に立ち、クリス先生は大きな答えで男子生徒へ答える。

もちろんその言葉は他の生徒達に対しても当てられたものだ。

「オーガ、ソーサラー？」

金髪の吸血鬼先生の声を聞くのと同時にそんな咳きを漏らす。オーガといえばあの緑色の鬼みたいな魔物。先週から結構な数を相手にしてきた。

威圧感はこの上なく凄まじいが、実際はそこまで強くない。

それはいいのだが、ソーサラーってなんだろ？

「ソーサラーは魔法使いつて意味。つまりオーガ＝ソーサラーは魔法を使うオーガのことよ」

「へえ、やうだつたのか。魔法使いのオーガ……って、え?」

横から飛んできたトウカの補足。

ついノリで納得しかけてしまつところだったが。

「ちょ、ちょっと待てオイ、そもそも魔物つて魔法使えんのか?」「ええ、少しばかりの知性があればね。もつとも魔物が使う魔法なんて高が知れているけれど」

しつと答える銀髪少女の言葉に耳を傾けつつ頭を捻る。

……想像できないぞ。あんなのが魔法構成式を組み立ててゐるところなんて。

「くおらまだ私の話の途中だ口を閉じろっ!」

長いツインテールをブンブン振り回しながら喝を入れるクリス先生。

ちつこい背丈だけになんとも微笑ましい光景だな。口には絶対出せないけど。

「ゴホンッ、他の魔物も多く跋扈しているので中々ハードだと思え。あと言い忘れたが最後にはボスモンスターを仕留めてくるようにな」といふがボスモンスターがどんな奴なのかは教えてくれないんですね。

「ところでクリス先生、僕たちは今日もタクマ君のサポートですか

？」

「ああ、そうしてくれ。」の一週間鍛えてやったが、まだまだ不安だからな。ふふつ」

テオの質問に口元をニヤリと歪めて晒す担任。ひでえ。

「もちろんクラシックメンバーからは言葉のアドバイスだけだぞ。前回と同様お前一人で魔物を狩れ」

「え、ちょっと！？ ハードなんですよね、大丈夫なんですか？」

「愚問だ生徒タクマ。ちゃんと他のクラシックよりはレベルを下げておいてやるわ」

「そつは言われてもなあ……。

無事にこの午前を乗り越えたとしても、午後からもまたダンジョン潜りだし。

「なんだか火曜日嫌いになつたかも知れません」「はて、何の話だ？ いや、そんなことより生徒ラグナよ」

察してください」という俺の声はスルーされ、先生の視線はすぐ隣へ。

「貴様、最近居眠りばかりで口クに講義を受けていないそうじゃないか？ 他の教師一同から苦情が来ているぞ」

「ギクギクッ！？ そ、それはその……」

凍つく眼つきと声に、顔を青くして言葉を濁す赤毛竜人。
うわあなんかいきなりヤバい雰囲気っぽいぞ。

「そこでだ。お仕置き、いや教育的指導としてだな。貴様だけスペ

シャルな仮想迷宮へ案内してやるつ、「

「うをえつー？ すんませんつ、もつサボりませんかうつー？ そ、

それだけは勘弁ツー！」

「はつははつ！ 戯言は向いりで聞いてやるわ。ひと、それじゃお

前たち、気張つてこいよ～」

「いやああああつ――」

自分より遙かに高いラグナの首元、そのネクタイを首輪のように
グイグイ引っ張りながら。

ワインクを決めてクリス先生は一つと魔法陣の中へと消えてしま
つた。

いやいや怖すぎるだろー？ スペシャルなダンジョンって何！？

「天罰が下つたわねえ。口頃の行いが悪いから

いやだわあと微笑むミロオムへ、お前も同罪だろつと突っ込みざ
る得ないのだった。

「こう」とがあって。今ここにラグナは居ないのである。
恐らくキツい折檻を受けているのだうが、自業自得だな。

「それで何だつけ、オーガなんちやらを倒すんだよな」

「オーガ＝ソーサラーね。大体2時間しかないんだから、さつさと

始めなさいよ」

「へえへえ」

トウカに言われるがまま魔法銃を取り出し歩み出す。
うーん、パツと見渡す限りじや魔物っぽいのはいないようだが。

「あ、一体見つけたよ。ほらあそこラベスクだ」

思った傍からテオが声を上げる。

ラベスク？ 聞いたこと無い名前の魔物だな。
どれどれと指差された方向を見やると

「うげ、ちょなにあれ大トカゲ！？ き、気持ち悪う！？」

「肉食の中型魔獣ラベスク。ビースト魔獣種の中では有名な魔物ですね。噛まれたらすつじく痛いですから、気をつけてください」

笑顔で説明してくれるニアに苦笑いを向けつつ、田でラベスクを捉える。

紫やら緑が混じった肌。不気味というか氣味が悪いというか。

「俺ああいうの苦手なんだけど」

「つべこべ言わずに、さっさと仕留めてきなさい」

「 いてつ、蹴るなよ……。 ってうわ寄つてきやがった！？」

尻餅を付いた体勢から立ち上がり、ノシノシと迫る大トカゲを魔銃で……。

「ん、あれ？ ま、魔法銃どこ行つた？ 嫌な汗が首筋をつた。

「オイこらでめえトウカ、お前が遠慮無く蹴飛ばすから銃落とした
じゃねーか！？」

瞬時に理由が浮かび、振り向いて銀髪少女をキッと睨む。
アレがないと瞬時に強力な魔力弾を撃てないんですが。

「得物を手から放したアンタが悪いわね。それにわざとじゃないし」

は、反省の色が全く見えない！？
あんにゃるニターニタしやがつて……。

『グアブルツ』

「うがツ、いたいいたいいたい痛い！？」

しまつた後ろ向いてたら右足に噛み付かれた！
ダンジョン内じゃ怪我しないから安心だけど、それでも灼けるよ
うに痛い。

「ちよ、誰でもいいから助けつ

「あら大変

どうしてそんなに」機嫌な声色なんだよニアは。
全然大変だと思ってるようには聞こえん。

「トウカさん、100パーセント君のせいなんだから……」「
つたく世話の焼ける。いろんなの蹴り飛ばしてやりやいいのよ」

頭を抱えて呆れるテオの言葉に促されたのか。

『ブア

ツ』

「んなつー？」

いつの間に隣に来た銀髪少女は、そつ言い捨ててキックを叩き込
んだ。

吹っ飛びラベスクの腹部には何故だか『穴』が空いていて。

「はい！」上がりく。得物を使つまでもないわね

「は、いやいやいや！？ お前どうやって」

地に落ち光の粒子となつて消え行く大トカゲ。

つまりは仕留められたという意味だが、明らかにおかしい。

蹴り一発、身体に穴を開けて殺すとか……。

「そんなの魔法を使つたに決まつてんでしょう。ホラこれ
「……芸が細かいなお前」

つま先を軽く上げ俺に向ける。そこには、先の尖った氷柱が生えていた。

確かにこれで蹴られたら穴も空くハズだ。

「大丈夫ですかタクマ君？　はいこれあなたの魔法銃」

「あ、ありがとミア。つたく誰かさんのせいでいきなり酷い目にあつたよ」

両手で差し出された白銀の魔銃を受け取ると、俺は聞こえるようにそう呟く。

「はて、誰かさんは一体どなたなのかしら？」

こいつよもまあ抜け抜けと。

惚けた顔をする銀髪少女に俺は呆れ、テオとミアは苦笑を向けるのだった。

：

それからまた數十分ほどの時が過ぎて。

「しつかし」「イツらじびして俺しか狙つてこないんだよ?」

「ふむ、先生がそうプログラムしたからでしょうね。私たちをターゲットにしても意味ないですし」

つづづく意地の悪い担任だ。

青の魔法陣を片手で紡ぎつつ頭の片隅では嫌味を浮かべる。

『でも、もう慣れたから別にいいけどなつ。氷結の跳弾ツ!』

10体近くのラベスクをギリギリまで接近させた後。

そんな魔法名を唱え、冷氣の魔弾で一網打尽にしてやる。間もなく氷漬けになつた大トカゲを次の魔法で粉碎した。

「へえ、お見事お見事。やつぱり先生のスバルタは効いたのかな?
前よりもずっと質が上がつてゐるじゃないか」

「そりやどつも」

魔銃を握る右手を下ろし、その一言だけを返して目を逸らす。
そんなに真顔で褒められると無性に照れくさい。

「あつ、やつと見つけたぞ。確かにそれっぽい格好だな」

逸らしたその先に、いよいよ探していたターゲットを捉えた。

オーガ＝ソーサラー。姿形はオーガそのもの。
だが身に付けている物が少し違っていた。

魔力媒介のつもりなのか、魔石を埋め込んだ木杖を片手に。
ご立派にロープまで羽織っちゃって。まさに魔法使いだ。

ツー』

睨み合っていると相手から動き出した。

やかましい咆哮を上げ魔法の杖らしき物を振り上げる。

「分かつてゐとは思うけど魔法使つてくるみたいよ

「ああ、そういうじいな」

オーガの紡ぎ出した魔法陣に視線を注ぎこみ、その解析を試みる。

……ファイアボール、小型魔力弾2発、直線軌跡。

おお、確かにすんごく単純な作りだな。

どんな攻撃が来るのか容易に想像がつく。

「じゃあこっちも迎撃させてもらひますよつと

魔銃を構え、魔法構成式フォーミュラを脳内で展開する。

同時に空間に霧散する魔力を集めて魔銃へ装填。

ファイアボールよりも威力の高い、あの魔法を紡いでいく。

『ツー』

一足先に相手さんが咆哮と共に魔弾を解き放った。

予想通りの赤い火の玉が真っ直ぐ俺の方へ飛んで来る。

もちろん、予想通りだから慌てない。むしろ一矢口と口が歪んだ。

『もうひとつ、ファイアボルトツ

高らかにその魔法名を読み上げ、笑みを浮かべたまま引き金を引

く。

ファイアボールの火の玉とは少し違う、先の尖った魔力弾。その数はオーガの放ったのより一つ多い3発だ。

先の2発が相殺し合い空中でバンッと小さな爆発を起こす。そしてほんの数秒後。今度は同じような爆発音と共に、オーガの断末魔が響くのだった。

「ふう、ぶつつけ本番なんとか上手くいったな」

まずは一匹目を倒したことに安堵し、大きく肩を回す。とは言え、あと9匹始末しないといけないんだよな。

「言つとくけど、今日アンタが相手してた魔物は中等部生でも倒せるレベルだから」

「うん知つてたけどね。でもそれを口にするのは野暮つてやつだぞ」「せつかく気合入れて倒しても嬉しくなるだろ?」

『グルル、ギャショウウツー!』

「……うーん、少しごらじ休む暇はもうえないものか」

そう吐き捨て、遠くの方から迫る魔獣の咆哮に耳を澄ませる。のどかな草原に似合わない随分と殺伐とした鳴き声だ。

そんなことを考えながらスーザーと呼吸を整えると、俺は広範囲型の攻撃魔法を紡ぎ始めるのだった。

Ep.4・3 【緑野のストーンパーク】

Episode 4・3 【緑野のストーンパーク】

フィールド内のほとんどの魔物たちは俺の攻撃に散っていた。もう迷宮探索が始まつてから一時間半を過ぎようとしているのだから、当然といえば当然だが。

そして今、俺はとうとう10匹目となる最後のオーガ＝ソーサラーと対峙しているのである。

「サンダー・ボルト、ねえ。お前らは初級魔法しか使つ氣がないのか？」

胡散臭い衣装のオーガが編み出した魔法陣を読み解いて。言葉の通じない魔物に意味もなく語りかけながら、俺も対抗魔法を展開する。

最後くらい味のある攻撃が来ると期待していたのだが。

『Crimson Phazer』
『深紅の焰閃！』

わざわざ相手の安い攻撃を見て避けるのも面倒なので、速攻で仕掛ける。

銃口より放たれた紅い一閃は、巨体なオーガを焼き切るには十分だった。

気色悪い異形の掃討もやはり慣れてしまえば楽なものである。

「つしゃ、これでオーガ＝ソーサラーは全部倒したよな」

無数の光弾と魔法陣とを紡ぎ出してくれた魔鏡を腰に戻して呟く。

「この世界に来てからお世話になつてしましなじだな。

「ふふっ、お疲れ様です」と言いたいところですが、まだ最後に一戦残つてますよ」

「うつ、そうだったな。まだボスモンスターを倒さなくちゃいけないんだ」「

近寄りながら話すニアの声で我らが担任の言葉を思い出す。

前回のフェンリルとは酷く苦戦になつたが、今度は一体どんな化け物なのだろつ。

「ああそれは僕にも分からぬかな。こればっかりは先生の気分だし」

「（……果たして氣分で決めていいものじゃないと思つんだがな）」
すぐに分かるし問題ないよと笑うテオの前で小さな声を漏らした。この探索実習にカリキュラムはないのか。

「うとうわわっ、な、なんだこれ地震ッ！？」

ボスモンスターを捜す前に休憩をとつていると、いきなり地面が大きく揺れた。

同時に風が吹き乱れ、草木がびびりと怪しい音を鳴らす。

「どうやら今回のボスモンスター、オーガ＝ソーサラーを倒すと出現する仕掛けになつていたようね」

田を丸くして慌てる俺とは対照的に、冬霞トウカは冷静に状況を分析し

ていた。

すげえな「イツ」んなに地面揺れてるのに立ちかよ。

「え、なに？ それじゃあこの地震と突風はボス登場の演出なのか？」

「ええ。だつてほら、前をよく見てみなさいよ。召喚の魔法陣が輝いていて。

促されるままに正面に視線を送ると、確かに淡い光を帯びた紋章が輝いていて。

うをあなんかヤバそうな魔物が出てきそうな雰囲気だ。

「う、眩し」

魔法陣から溢れ出す光は徐々に強さを増していく、その奔流が一気に俺の視界を奪う。

クソッ、一体何が出てきやがるってんだ！？

・

それはそれは随分と立派な石像であった。

俺より少し高い2メートルほどの、人の体をモチーフにした灰色の石の塊。

遠目からでもよくわかるほど分厚くて硬そうだ。

「あれが今回のボスモンスターか？ なんか思つたよりショボいのが出てきたな」

地震と光の奔流が収まつて、気付けば魔法陣のあった場所に平然と立っていたソレ。

田を見開いたまま最初に声に出たのはそんな台詞だった。

「確かに見た田は迫力に欠けますけど、あれは中々に強いんですよ
「どういうことだ?」

「エーテルを放つ魔石、有名所ではオリハルコンなどですが、それ
らをコアにして生まれた魔法生物です。他の魔物とは違つて強い魔
法を使えますし、何より知能が高いんですね」

無表情な石像に苦笑を向けながらニアが解説をしてくれる。
つまりは今までとは違う強敵らしいということだ。

「さて、それじゃさっそく当たつて砕けてきてもうおうかタクマ君
!」

「おう、任せとけ! って、砕けちゃ駄目だろつー!」

テオの冗談に突っ込みを入れてから前へ駆け出す。
右手にはしっかりと白銀の魔法銃が握られていた。

『 ブガルウラ ツ』

トリガーを引いて牽制の魔弾を数発撃ち込む。

頭やら腹やらに無属性の魔力弾がめり込み、石像は奇声を上げて
後方へよろめいた。

「これで倒れてくれれば楽なんだけど、流石に虫が良すぎるよなあ

瞳を赤く灯し、唸り声を張り上げる相手を田にしてそう呟く。
やはり大したダメージは与えられていないようだ。

そう判断すると俺は急いで後方へ下がり距離を取る。

ミアの言いようでも一筋縄じゃ倒せそうじゃなかつたからな。
何とかしてあの石像の重要器官と弱点属性を見つけないと。

『激昂の火炎弾、氷結の跳弾、紫電の大槍ツ

Fire Bolt Freezing Incendiary Gun

属性の異なる3つの構成式を並行作業で組み立て、相手が攻撃体勢に入る前に颶爽と魔法陣を紡いでいく。

威力は二の次に、発動までのスピードをなるべく縮めるべく集中する。

『^{G.O.} 行け』

10個ほどまでに複製された魔法陣から順に射撃を開始。赤の螺旋が宙を舞い、銳氷の雨が降り注ぎ、紫電が石像に直撃していく。

このド派手な攻撃、言つまでもないがこれまでの人生の中で俺の全力である。

というよりもそもそも地球でこんな魔法を戦争以外で使つたら拘束されてしまうだろう。

『ツ』

どこから出しているのか声にならない咆哮を上げて。

巨体な石像は遙か後方へぶつ飛ばされた。これは効いただろ、うん。

「これで終わつたかな」

腰に手を回して吹き飛んだ石像の転がる場所を見つめる。

「どうでもいいがあんな炎や雷の魔弾をぶつけたのに草原から火が上がらない。

やつぱり作り物の空間なだけあつてそこまではリアルに作られていないのかな。

「いや、まだ消滅はしていないみたい。もう少しダメージ『えれば倒せるとと思うよ』

「ん、そつか。それじゃあトドメをさしてくるわ」

後ろからテオのアドバイスを聞き、俺は石像のもとへ足を踏み出す。

「……そんな上手く事が運ぶとは思えないけどね。私には

そんな銀髪少女の囁きを耳に入れないで。

・

で、その忠告を聞き逃していた俺はしつかり石像の反撃を受けていた。

10メートルほどまで近づくといきなり魔法をぶちかましてきたのである。

「うつぐついー 結構速えなーの魔法ー！」

疾風の如く、螺旋の軌跡を辿りながら迫る風の刃。

障壁魔法を張るより前に、俺はすぐさま横つ飛びに身体を跳ねさせる。

倒れ込むと同時に横田をやると、そのまま立っていた地面の草は切り裂かれて宙を舞っていた。

……ナイス判断だぞ俺。立ち止まつていたらミンチだった。

『ウガア ッ』

「くっ、また来るのかよ」

安堵する暇なんぞ『えんわと言わんばかりに同じ魔法陣を紡ぐ石像。

一方の俺は奥歯を噛みつつ右手を正面に突き出す。

『E tether Barrier エーテルバリアッ！』

その手から半透明な光盾を開発させ、足を動かさないまま防御の体勢に入る。

にしてもこの魔法、実際に戦闘で使うのは始めてだが。防いでくれるよな？

そして間もなく無数の魔弾が放たれて。

ビュンビュンと良い音を鳴らす風の刃は再び俺目がけて飛んできた。

あああやつぱり怖ー！ もし障壁を素通りされたらと考へると…

…。

しかしそんな心配は杞憂だったようで。

風の刃はすべて光の壁にぶつかり消滅してしまった。

「はあ、なんとかミンチになる痛みを味合わずに済んだな」

障壁を解き、今度こそ大きな息を吐いて胸をなで下ろす。相手を見やるとガス欠を起こしたのか、魔法を放つ様子は見られなかつた。

「まさかもう終わりなのか？ 急に静かになつちやつて……」

などと半笑いで突つ立つてゐる。

『ガガガア ッ！』

「うをつ、なんだなんだあ？」

石像の目の色がもつと濃い緋色に染まり、熱い咆哮を響かせる。危険だと判断し銃を構えたところで、ソイツは動き出したのだ。

俺は今の今までこの石像は動かないものだと思い込んでいた。たとえ動いたとしても、かなりのスピードだろうと。が……。

『 ッ』

「んなつ、走つてきたあー？」

今までのは遊びだと言わんばかりの全力疾走。

右腕を振り上げ、もの凄いスピードで殴りかかる。

「 うッ！？ オイオイ石像には似合わないスピードじゃねーか。中に入つてんの？」

ほとんどゼロレンジと言つてもおかしくない距離で。

意味不明な言葉をぼざきながら、俺はギリギリのところまで打撃をかわしていく。

以前対峙した人狼フェンリルよりは遅い動きだが、威圧感が半端

ない。

『 ッ 』

「 があ、つるせん耳元で叫ぶな！？ つてつわ危な

地響きのよつた重低音に頭を揺さぶられ反応が遅れる。

すると直後お腹に大変よろしこ具合の衝撃が走り、俺は華麗に宙を舞つた。

まるでアニメや映画のワンシーンのよつこ。

「 あら、並たつちやこましたね。つていうかとても痛そうですよ今の」

「 うそ、結構モロに入つてたよ。まあ怪我はしないから安心だけど」とトオはそんな会話をしているのだ。

芝生のクッションの上でなんとか受身を取り、俺は寝転がつたまま空を仰いだ。

いやー、痛い。お腹すんじゃ痛い。

出るはずの血も吐き気もないけどせつぱり痛い。

もしこれが仮想迷路ダンジョンじゃなくて現実世界のことだったら、俺は…

…。

「 だつせえわね御剣 拓磨。まさかギブアップなのかしら」

一人ネガティブな思考をしていくと、傍らでもう聞き慣れた少女の声が響いた。

少し毒が入つていてるけれど鈴のよつて綺麗な声。

「うわせよ。ただちゅうと休憩してるだけさ」

わざわざ人の顔のすぐ真横に立つ銀髪少女に強がりを返す。
つかトウカさん、アンタその位置は色々とマズいのではないか?
非常に言葉で説明しづらいのだが、その、ね。見えてます。

「~~~~~ッ！？ 見るなッ、死ね！ そして何も言わず忘れな
さいッ」

「ゴメンナサイ」

皿を背けようとしたところで氣付かれた。

珍しくも羞恥に染めた顔で釘を刺されるが、その言葉はかなり重
く可愛らしかった。

忘れます。水縞ストライプなんて私は見ていません。

「……ったく、心配してやつて来たっての。とにかく休憩時間は
終わり。今度はちゃんとトドメを食しなさい」

「あつ、そうだアイツはーーー！」

その言葉を耳にすると、俺は急いで体を起こして石像を探す。
早く迎撃しないことまたやられるーーー？

「つて、あれ？」

巨体な石像はひりひりに追撃するビンカ、なぜだか悶え苦しんで
いた。

よく観察すると、その体のあちこちひりひりバリバリと電撃が走っ
ている。

これは、雷の拘束魔法か。一体誰が？

「テオは相変わらず甘いわね。先生から手助けするなって言われてるのに」

顔に出ていたのか、トウカは俺の疑問に呆れた顔で答える。

その言葉でテオのいた場所を見やると、緑髪の少年はしたり顔で親指を立てていた。

はははっ、グッショブだぞテオ。

「心を鎮めて、よく探して狙いなさい。あの『ゴーレムの重要器官を』^{ゴア}」

俺は黙つて頷くと、トウカの言葉とおり石像へ強い眼光を送る。そしてすぐに見つけた。エーテルの塊なのだろうか？
漠然としてだが、石像の右胸に何かエネルギー体のようなもの集まっている。

「右胸、だよな？」

「クスッ、あなたがそう思つのならばね

「曖昧な答えだねえ。ま、自分の感覚を信じるけど」

そんなやりとりに2人して口元を歪ませた後、俺は立ち上がりて前を見据えた。

もうそろそろいい時間だ。決着を付けなければなるまい。

『雷魔力装填、やっぱり最大威力の魔法で仕留めないとな

指定した属性魔力を手元に集めるエンチャント。

チャージ、すなわち魔導力の増幅に繋がるので以降はより強大な魔法行使が期待できる。

『いけえつ、紫電の大槍ッ！！』

よくよく考えてみれば、前回のフェンリル戦もトドメはこの魔法だつたか。

まあファイアボルトやフリー・ズリコシエットに比べると威力は格上だからな。

それに加えてエンチャントの効果も上乗せなので破壊力は十分だろ？

『ガアツ』

本当にただただ一方的な光の槍が、魔弾が狙つた位置へと命中する。

石像の断末魔も耳をつんざく雷音が搔き消して。

人の形をしたそれは、見るも無残な石塊へと姿を変えた。

「これでやっと終わつた、か」

碎け散つた石像の残骸を蹴り飛ばし、頭部だつた場所に腰をおろす。

今回は本当にハードだつたな。一日で使うエネルギーを使い果たしてしまつた感じだ。

「（とは言つても、午後からはもう一回ダンジョン巡りなんだよなあ）

鬱憤とした気分の腹いせに、立ち上がって本日世話になつた石像の首を蹴つた。

が、痺れるような痛みが右足に返つてきたのは言つまでもない。しかもそのバカ丸出しな行動の一部始終は3人の少年少女に見られていて。

俺は恥ずかしくてただ苦笑いするしかなかつた。

- Coming Soon Next Story ! -

Episode 4 - 4 【トラブリング デリバリー】

「黒っぽい空から降り注ぐ炎の槍、炎った紙が溶けるように歪む地面……」

壮大な草原での迷宮探索が終わった次の日の朝。

男子寮の食堂で、俺は赤毛竜人が昨日味わった恐怖体験を語っていた。

「足を滑らして水に落ちたと思ったら、その色が真っ赤でな

「真っ赤って……。おい、それってまさか血？」

「俺つちも最初はそう思ったさ。だが違った、それはな

「そ、それは？」

牛乳の含んだカップを口元へ持ち上げたまま俺は息を呑む。赤色の液体なんて、他にトマトジュースぐらいしか浮かばない。

「激辛ラーメンEnferのスープだつたんだ！ いやあ、口

に入った瞬間マジで死ぬかと思つたぜ」

「……なかなか予想斜め上な真相だな」

俺も一度だけ見たことがあるがそのラーメン、我が担任の大好物である。

とてつもなく辛く、頭がどうにかなってしまいそうなほどの中出来なのだとか。

聞いた話ではクリス先生しか注文する客はないらしい。

「辛いなんてレベルじゃねえよ。あのちびっ子吸血族の味覚は逝っちゃつてるね」

ラグナよ、俺のいた世界には“壁に耳あり障子に耳あり”といふ言葉があつてだな。

と口に出そうとして止めた。俺も偉そうに言える口ではないのである。

「ま、とにかく地獄だつたんだよ。あのお仕置きダンジョンは」「その地獄体験記を朝っぱらから聞かされる俺の身も考えてくれ」「昨日は精神的ショックが強すぎて話す元気もなかつたんだぜ」

そう言われば確かに昨日の午後、無駄に静かだつたなコイツ。俺も俺で2本連続のダンジョン探索に滅入つていたから気にかける余裕がなかつたが。

「んで、結局反省はしたのか？　まさか昨日の今日で居眠りはないよな？」

「流石にバカな俺つちもそこまで愚かじやねーよ。今日は真面目に講義を受けるぜ」

「ほあ……」

残してあつた野菜を勢いよく口の中へ挿き込み、綺麗な顔を作るラグナ。

「へえ本当に改心したんだ。……それほどまで昨日痛め付けられたか。

「せ、行こうぜタクマつち。今日も楽しい楽しい学園へ！」
「なに一人でテンション上がつてんのお前？ 少し寒いぞ」
「えええつ、ノつてくれないのオ！？ つか何その冷め切つた目と

声ー?「

ギヤーギヤー騒ぐ赤毛男をさらりと追い越して食堂を出る。

今日はまじしく寝坊しちまったからな。ま、たまにはゆっくり登校するのもありか。

「（にしても、確かに学園へ行くのは楽しいな。恐らく環境が180度違うからだらうけど）」

「んあ、何か言つたかいタクマッち?」

「あ、いや何でもない独り言だ。それよか時間がやべえ。さつれと行くぞ」

時計を見やると門限まで15分を切つていて。

それまでにHRのある学舎に入れないと遅刻となつてしまつ。とてもじゃないがのんびり徒步通学している余裕はないだらう。

「うげげっ、ちょっと急がねーとな。居眠りもそうだが、遅刻するわけにもいかねえ」

「だな。朝から怠いが駆け足で行ひつ」

運悪く今日の田舎しが夏並みに強かつたことを、この時の俺たちは知らなかつた。

・

そんな朝からあつといつ間に時は過ぎて放課後。
ブレザーブレザーブレザー姿の学生たちの雜踏に紛れ、俺は適当に学園敷地内を散策していた。

「あの野郎何が真面目に講義を受けるだ。開始たつた10分でダウンとは……」

今日もまた一段とやかましかったイビキを思い出すとそんな文句が漏れる。

お隣りのミリオムはやると思っていたが、改心したはずのラグナまで。

バレてまたクリス先生にブチ殺されても知らねーぞ。

「ふむ、中等部ミドラーの学舎か。高等部グラニダーとほとんど一緒だな」

特にどこに行こうとも考えずに歩いていたので、気付けば場違いな場所へ辿り着いてしまった。

俺より一回り小さな少年少女が田の前を通りすぎていぐ。

ま、別に用も無いし引き返すか。寮でダラダラしてよつと。そんな具合に欠伸をしていると、後方から唐突に一人の女性の声が飛んだ。

「おっ、これに見ゆるは崖ハマつぶち転入生タッちゃんじゃない」

「……はははつ、サヨナラ～」

振り向いた先の顔を見るや否や、俺は颯爽と足を進める。正直関わりたくないんだよなあこの人とは。会うの2回目だけだ。

「まあまあそつ言わずにいい。少し先輩の話を聞いて行きなさいつ！」

だがしかし早足で追い付かれ、がっしりと力強く肩を掴まれてしまふ。

「くつ、先に言つときますけど取材はお断りしますよ。トミス先輩？」

「それはまた次の機会。今はちょっと別の頼み」とがあるのね」「……聞くだけは聞きます。受けるかどうかは置いておこなですが」

仕方なくそう答えて緑髪の先輩に向き直ると、彼女はよしよしと笑つていて。

「なあに難しこじじやないわ。コレをアキラ副会長に渡しに行つて欲しいの。今すぐ」

「へえ～。つて、そんなの自分で行けばいいじやないですかつ！」

差し出された茶色い封筒を丁重に押し返して突つ込みを入れる。

「今私のスクープアンテナがビンビンなのさ。逃せない事件が起つているの」

「んで、近くにいた俺に仕事を押し付けようといつわけですか」

「分かつてゐるぢやない。それじやヨロシク～」

「あ、ちよつ！？」

無理やり封筒を握られ、軽快なバックステップで距離を取られる。

『あ、その中身は見すりやダメだからね。ではスクープの元へいざゆ
かん、不可視の消影ツ…』
「くう、しまつた逃げられたか……」

ガクツと片膝を地面に落としてうな垂れる。
なにやらまた厄介なことに巻き込まれてしまつたな。

「まあなんだかんだ言つて『届けるナビ』、今どこにいるんだよメガネ
副会長様は」

銀髪少女トウカの兄こと白銀暁。

夜になれば男子寮で絶対に会えるが、どうもこの封筒は今すぐには届けなければならぬ品らしい。
はてさて一体どうしたものか。

「あのミツルギ先輩ですよね？ 副会長さんなりもつと生徒会室に
いると思こますよ」

「あ、どうも」親切にありがとづく

事の一部始終を見ていたのである。

少しばかり頭を捻つていると、苦笑を浮かべた中等部の女子生徒
がそう教えてくれる。

「ん、それにしてもどうして俺の名前を？」

「先輩は時期外れの転入生としてここ最近話題になつてましたから。
学園新聞にも載つてましたし」

「な、なるほどね」

さつきからのチラチラした視線の正体はそれだったわけか。

そうだよなあ。3学期の末に転入してくるなんて不可思議すぎる
もんな。

「あ、あの、ラファーゼの生成試験頑張つてください。私応援して

ますから」

「やうだな、留年しないよつて頑張るよ」

最後に進級試験への激励を貰つてから、俺は生徒会室へと足を進めるのだった。

なかなかに可愛い子だったけど、名前訊き忘れたな。

・
：

それから数分ほど。長い長い螺旋階段を上がって、やっと生徒会室の前へと辿り着いた。

「スンマセン失礼します、アキラ副会長はいらっしゃいますかね？」

時刻は16時過ぎ。まだ副会長がここにいることを願つて扉をノックする。

すると中から聞き慣れない少女の声が。

「ん？ あー、副会長ならちょっと席を外してくるけど、多分すぐに戻つてくると思うわ。中で待つてなさいよ」

「あ、そうですか。なら少しのお邪魔させてもらひますね」

その声に安堵し遠慮無く扉をくぐる。

「どうぞどうぞ。つて、アンタもしかして2組の転入生じゃないの？ トウカや副会長と同じ世界から来たつていう

「え？？」

意外な声がする方を見やると、一度だけ見覚えのある少女がいた。ブラウン調の髪色に腰まである長いツインテール。間違いない。一週間前闘技場で無双してた女子生徒だ。

「タクマ＝ミツルギ君。人族人間の16歳、でしょ？」

「そ、そうですけど」

「そんな驚いた顔しないで。私は生徒会に入ってるのよ。アンタのことはそこいら辺の生徒よりもよく知っているわ」

田を通していた書類を机の上に置き、椅子から立ち上がり微笑みかけてくる。

この人の名前なんだつたっけか。顔はしっかり覚えてるんだけどなあ。

1週間の出来事だつたし、その後色々あつたから覚えてないのは仕方ないかも知れないが。

「ええっと、名前伺つていいいですか？」

「うん私？ アテユーリア＝ローズハートよ。リアって呼んで頂戴。クラスはあなたの教室の向かい側、第1クラスよ」

ああ、思い出した。確かにそんな名前だつたな。
しかし向かい側のクラスだつたとは驚きだ。

「それで、そんな転入生クンが一体何用なのかしら？ 副会長にお話？」

「いえただこれを知り合いから渡すように頼まれまして」

そう言って少し質量のある封筒を胸の高さまで持ち上げる。
うーん、重くはないけど一体何が入っているのだろうか。

「なるほど、要はこき使われたと。あ、今さらだけど敬語はいらな
いわよ。同じ年だからね」

「ん、そうか。分かつたよ」

「さあさあ突立つてないで適当に座つてなさい。お茶ぐらい淹れる
から」

「」を使われている」とは、「もつとも。

何も言い返さず、促されるまま会議机の一席に腰を降ろすのだった。

「へえ、リアさんは混血種なのか」

さつぱりとした味の熱い紅茶。ほのかに花の香りがするそれを頂いてしみじみ言う。

2人で雑談を交わしているとリアさんの種族の話題になつたのだ。

「あら異世界から来るとやつぱりそこが気になるのかしら」「まあ割とな。今までお目にかかる機会がなかつたからさ」

お伽話に出てくるような人外が、まさか本当に存在していたとはつい一週間前まで知らなかつたからな。

ついでに言ひうと異世界の存在も。

「でも気にするこたあ何もないわよ。天使も魔人も竜もエルフも、人間と大して変わんないしね」

「ああ、それはここでの生活でよく分かつたよ」

中には奇人変人もいたが、それは人間でも変わらないだろう。

「んで私の話だけど、混血種ってなんだか分かつてる?」

「聞いた話じゃ2つ以上の違う種族の血を引いてる人の総称、だつ
け」

「ふむ、まあそれくらいは常識として分かるわよね」

その反対に1つだけの種族の血を引いている、つまり俺なんかは純血種ということになる。

「Jの世界の割合では混血種が圧倒的に多数派。といつJとを以前クリス先生から聞いた。

「Jのリコミシアル界以外じゃ真逆らしげどね。種族対立とか激しいみたいだし」

「なるほど。そういう世界じゃ混血種は忌み嫌われそうだな

例えば神族と魔族が対立する世界じゃ、そのハーフはどういう側にもいられないだろう。

異世界事情に疎い俺にでもそのくらいは容易に想像できる。そういう意味でも種族対立のないこの世界は理想郷だ。

「……ごめんなさい。ちょっと暗い話になっちゃったわね

少しばかりの沈黙があつた後リアさんが口を開いた。

俺は静かに首を横に振つてから部屋にかかる時計に目をやる。生徒会室に来てから15分近くが経つていた。

「会長も副会長もそろそろ返つて来ると思うんだだけ

「ただいま戻りましたわっ！ って、あらあらタクマじやあります。もしかして遊びに来てくれたのですか？」

「生徒会室は遊び場所じゃねーよ。やるなら闘技場コロッセオにでも行け」

ドンッと激しく扉を開け放ち、2人の先輩方が部屋の中へ。

「どうもここにちはよ。エルザ会長、アキラ副会長

席を立つて俺は学園生トップのお2人に頭を下げる。

「ふふり、『」きげんよつ。もつ学園生活は慣れましたか？」

「はい。大体のことは1人でできるようになりました」

「それは良いことですね。それでここへは一体何をしに来たのです
？ 私たちを待っていたようですが」

長く鮮やかな桜色の髪を揺らし、相変わらず上品な口調で語りかけてくる会長。

手元にあるティーカップを見て察したのか。俺が待っていたことはお見通しだった。

「はい、副会長にこれを。テミス＝ベリアルスといつ先輩から預かつてまして」

「（げつ、もしかしてアレは……！？）そつ、そうかあ！ わざわざいじ苦労だつたなあ御剣拓磨！」

「…………へ？」

テミス先輩の名前と封筒を持ち出すと副会長の様子が急におかしくなつた。

声色は高くなり、何かを誤魔化すように引きついた笑顔を浮かべている。

正直、不自然極まりないですよ。

「ま、いいか。ではこれを

「

怪しいものを感じながらも両手を伸ばして封筒を差し出す。

「ちょっとひねって？」

「あつ

すると横からエルザ会長の手がスッと伸びてきて。

「ギャアアツ！？ なんでテメエが平然と受け取つてんだよ！？」
「中に何が入つてゐるのか検閲ですわ。どう見てもアキラの様子が変
ですか」

会長はさう言つて捨てると言爽と会議机の上へ封筒の中身を漏らせ
る。

「ん？ 」「これは……？」

中から出でたのは数十枚の現像された写真と書類だった。
一枚一枚撮られている人物は違つようだが全て学園生のようだ。

「な、なんか全員メガネかけてる気がするぞ？」
「本当ね。これも、こっちも」

しかも書類には名前、在籍クラスなどが載つていて。
総評すると“メガネかける生徒の資料”って所だらうか。

「これは一体どういう事なのかしらあ、ア・キ・ラ？」
「どういう事も何もちよつとしたリサーチだ！ 他意はないつ！」
「こんなリサーチがあつてたまりませんわあつ！」

鬼の形相をしたエルザ会長と顔を青くしたアキラ副会長。
怒号の勢いで2人は生徒会室から飛び出してしまつた。

「……つまり、どうことだつたんだ？」
「分かつてゐるのは、副会長がどうじゆつもない眼鏡フェチだとい
うことよ」

「ああダメだ、頭痛くなつてきた」

再びお茶を啜るべく席に着く。

これは推測だが、眼鏡フェチらしい副会長。

恐らく彼がテニス先輩にメガネ学園生の写真と個人情報の収集を依頼したのだろう。

「くう～、酷い徒労だつた」

「でも私と出会えたんだから、一応良かつたんじゃ、ない？ 美味しいお茶も飲めたでしょ？」

「そう、だな。それを考えると」

同情の笑みを向けてくるツインテール少女を見て思つ。
確かに、あながち全てが徒労だつたというわけではない。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.4・5 【魔法決闘はお手柔らかに】

Episode 4・5 【魔法決闘はお手柔らかに】

「 そういうわけだ、さつさと闘技場^{プロレス場}へ向かつよつに」

そう朝のHRを締めくくり、クリス先生は颯爽と教室を後にする。何が『そういうわけ』かと言つと、3組のイングレッド先生が体調不良でお休みなんだと。

その先生は我がクラスで火と土の魔法論理を担当しているオッサン教師。

筋肉質なのを自慢していたし、実際丈夫そうな人に見えたんだがな。

ともかく、その影響で本日は特別時間割が設定されたというわけだ。

「魔法決闘^{デュエル}か。いつかはやると思つてたけど、果たして俺と同じレベルの奴はいるのかね」

もちろんレベルが低いという意味でな。

対人戦なんとしたことがないから正直不安すぎる。

「うおい転入生、よかつたら俺とバトルしようぜつー！」

「ん、ああお前か」

これに見ゆるはクラスメートA。とは心中以外では決して言わない。

「経験ないから絶対弱いぞ俺。つて、まさかそれを狙つた新手のイジメか！？」

「ちげえよ！ 純粹にアンタの実力がどんなもんか知りたいだけさ」

「……実力ねえ」

軽い冗談を吐いてみるが、さらに真剣な顔で勝負を挑まれてしまった。

うーん、弱いって言つてるのにな。でも、一応やってみないと分からぬか。

「そこまで言つなら別にいいけ

「あ、何抜け駆けしてんだテメエ！」

別段断わる理由もないでの勝負を受けようとするが、今のやりとりを見ていたらしい別のクラスメートの声が飛んだ。

「そうよ、転入生クンの相手は私が先にしたかったのに…」「ええっ！？ ちょ、ちょっと待てよお前らー！」

なぜかそんな言葉を並べ、人の机の前へ群がり出すクラスメートたち。

どうやら皆俺との魔法決闘がお望みのようだった。

「何回も言つけど俺は魔法決闘の経験ないんだぞ。前の世界でもな

思わず席を立つて突っ込みを入れる。

そもそも俺は魔法を使い始めてからまだ一週間ちょっとしか経っていないのだ。

コイツらの実力は分からぬが、少なくとも俺よりは上なのは確実なわけで。

「ふつふふ、それだと尚更俺らが鍛えてやらねえとな。同じ2組の先輩として」

「そのとおりッ！ と周りとクラスメートたちも歪んだ笑みを浮かべる。

……どうやら俺には勝負を受ける他に選択肢がないらしい。

そして早く早くと急かされながらコロッセオへと移動した。
楕円状に造られた巨大なそのスペースは、クラス一同50人にでも広すぎるほど。

観客席には当然誰も居らず閑散としているが、関係なしに数十個に分かれたバトルコート内で決闘が始まる。

俺は適当に決めた5人のクラスメートと組手をすることになったのだが……。

「どうした転入生、それで終わりか？」

4人と戦つて4連敗と、それはもう手酷くやられていた。
今が5人目、最初に声をかけてきたクラスメートAなのだが、正直これも勝てる気がしない。

『どうやつしやいつ、氷結の跳弾ツ！』

まだいけると数メートル先に剣を構える相手へ射撃する。

「よつこらせつと、甘い甘い。こりゃもつ觀念するしかねえな？」
「クソッ、こんな簡単に……」

「これで何回だらう。乱射された魔弾の嵐を越え、ぐつと距離を詰められる。

相手はギラギラ光るブロードソードを片手に余裕の笑みだ。

「ふんっ、まだ終わってないッ！」

隙を見て最後の抵抗。油断している相手へ魔力弾を一発放つ、が。

「つととー、不意打ちたあ危ないねえ。もう少し遅かつたら被弾してたよ」

「うげっ

」

横斜めに飛んで魔弾をかわすと、クラスメートAはブロードソードを高く振り上げる。

直後放たれたのはトドメの袈裟斬り。完全に一本技ありだった。

「ん~、筋は良いんだけどなあ。お前さん全体的に動きが遅えんだよ

「あつたたた、仕方ないだろ初心者なんだから

『つか最初から弱いって言つてだら』と言い訳するが、それで少し物足りなさそうな顔をするクラスメートA。

そんな顔で差し出された手を取り立てる。

お馴染みの結界の効果でお互い擦り傷すら一つも付いていない。体が焼けるような痛みはいつになつても慣れないのだが。

「んで、どうなさるよ？ 続けて誰かとやるかい？」

「冗談言え、休憩だ休憩。あと作戦会議をな」「ははっ、いい案が浮かんだらいつでも勝負受けてやるが〜」

「うむせーと笑い飛ばし、俺は石畳のコート内を後にした。

・
・

「こやははは、いやあお見事な惨敗劇ですな大将…ドンマイドンマイ

イツ！」

「貶すか慰めるかどっちかにしちゃ!?」

対戦コートを離れるや否や、ミリオムが悪戯な笑みを浮かべて肩を叩いてくる。

反応に困るじゃないか。あと誰が大将だ誰が。

「しかしさかここまで実力差が圧倒的だとは……」

ちよっかいをかけてくるミリオムを無視してその場に腰を下ろし、眼前で行われているクラスメート同士の魔法決闘を見て呴く。

前々から気になつてはいたが、今日実際に打ち合つてみて良くなかった。コイツら強い。

「（第一に地球人と比べて戦闘能力が高すぎる）」

こんな気軽に攻撃魔法や武器を行使できるシステムを開発してあるんだ。

バトル慣れしていないわけがない。俺らとは戦闘経験値として大きな差だろう。

ダンジョン探索とかでも毎週身体を鍛えてるんだろうしな。

ちなみに1人女子ともやつたが、やっぱり俺より遥かに強い。

「（そしてラファーゼ。この魔力媒介は反則級だ）」

それは数週間後に進級課題として俺が生成しなければならない品。どういう理屈かはよく覚えていないが、何でも自らのホテルそのものが魔力媒介となっているらしい。

魔力を操るエーテル自体で構成されているため、魔法行使との相性が最高なのだ。

俺の魔法銃が編み出す魔法を、ラファーゼ持ちはその半分の時間でやつてのける。

「なんなんじや……。

「うん、どう考へても勝てる氣がしないよ」

溜息と諦めと共にそんな結論が口から漏れた。

少なくとも今の時点で相手にできるレベルを遥かに越えている。実力差を埋めるにはまだまだ修業が必要のようだ。せめて俺もラファーゼを手に入れないことにはお話にならない。

「じゃあさタクマ、次は私としょりよつ。たぶん私クラスで一番弱いから」

1人遠い目をしていると、まだ隣にいたミリオムが勝負を挑んできた。

「んー、別にいいけど……。そんなお前にまで負けたら俺は一体？」
「紛うこと無き2組の最弱王ね。か弱い女の子にも負けちゃう」

つをおなにそれ絶対負けられない！？ 最弱王とか格好悪すぎるぞ。

今勝負が終わったばかりのコートへ足を進め、10メートルほど離れてミリオムと対峙する。

白銀の魔法鏡を右手に俺は準備完了だ。

「んじゃ、私は少し下準備をしますか」

「下準備？」

『見てりや分かるわよ。ランスダプトッ！』

意味深な言葉を吐きつつ何やら魔法名を詠唱するミリオム。

何の魔法かは知らんが肉体強化系の魔法だと厄介かも。つか勝負が始まる前に使うとか狡い。

「下手な小細工はするんじゃ って、な、なんだよお前その格好！？」

由に由で忠告の言葉を紡いでいると、突然起しつたありえない光景に俺は声を荒らげる。

なぜなら彼女は、ミリオムは。なんとなんと、“変身”していたのだから。

変身。そう変身だ。それくらいしか言葉が浮かばない。

「ふつふーん、驚いた？ きっと初めてでしょう、人間以外の姿を見るのは」

「……そつか、お前は確か。魔族のサキュバスだったな」

先端がスペード状の尻尾と背中から小さく覗かせる黒翼。

そんなモノをしたり顔でこれ見よがしに見せつけてくるプロンド
髪の少女。

その姿と俺の中のサキュバスという人外のイメージが、ピッタリ
と合致した。

「似合つてゐるじゃないか。その尻尾と羽根」

「あれれ、あんまり驚いてない？ もつとびっくり仰天的なリアク
ションが見たかったのに」

「アホ、そんなレベルとうに追い越して目眩が起きてるんだよ」

そう頭を抱えて苦笑しながら、俺は視線を闘技場内のクラスメー
トたちへと送る。

「お前だけじや無さそうだな。その尻尾とか羽根を持つてる奴」
「ええ、この世界じやこつこつのは隠すのが常識だから。トランス
ダプトって変身魔法を使うと人間の姿になれるのよ」

しつと答えられるが、突つ込みどころがつつある。

どうして隠すのか。そしてなぜ変身するのが人間の姿なのか。

「納得いかない顔ね。ふふつ、別に教えてあげてもいいわよ？」
「勿体ぶるな。こつちは割と真剣に気にかかるんだよ」
「へえへえ」

彼女の口から出たのは随分と単純な理由だった。

まず翼や尻尾などを隠しているのは単に日常生活で邪魔になるか
ら。

そりやそりやううな、特に羽根なんかつけてたら通行の邪魔もい
いところ。

んで次、なぜ人間の姿に変身するのかといつ話。

これも単純な話で、人間が他の種目に比べて一番特徴がなくシンプルな姿だつたかららしい。

人族人間には尻尾も獸耳も翼もついてないからな。ただそれだけ。

「わかった？」

「ああ、一応は。だがどうして今その変身を解いたんだ？ 何か意味でもあるのか？」

今のミリオムの説明じゃ特にメリットはないよな。

「1つはアンタを驚かして動搖させるため。2つ目は」こっちの姿の方が強くなれるからよ。ほんのちょっとだけど」

「……お前、見かけによらずしたたかだな」

ミリオムの考え方おり俺は完全にペースを乱されている。
当たり前だ、いきなり目の前の女の子に尻尾と羽根が生えたら誰でもそうなるだろう。

「（ほんの少しだけ強くなるつて言つてゐるが、それも本当かどうか分からぬ）」

実際はかなり身体能力が上がつてるかも知れない。油断は禁物だ。

「ままた、細かいことは気にせず始めましょつよ。テオ、開始コール頼んだわ」

「おつけー。タクマ君、多分負けやつと思つけど頑張つてね。それじゃ決闘開始ッ！」

「てめえ縁起でもないことを言つくなよつ！？」

妙に真実味のある不吉な予言と共に、付近にいたテオは対ミリオム戦のコールをかけた。

・

「最弱王は嫌だからな。本気で行くぞ」

」

開始早々、俺は空中に霧散する魔力を一気に魔法銃へと集める。集める属性にはこだわらず、とにかくすぐに攻撃魔法を撃てるようだ。

「考えたじやん。先に使える魔力をキープしておくなんて」「ああ、こうでもしないとお前らには対抗できないからな」

なんせ相手は俺の数倍の速さで攻撃することができるのだ。攻撃が見えてから対抗魔法を練つていては間に合わない。

「さあーじつは準備できたらぜ!!コオム、わざとお前も戦闘体勢に入つたらどうだ?」

即発動できる魔力と数個の魔法陣を孕んだ魔法銃。

白銀のそれを右手に構え、数十メートル離れた所に立つ少女へ呼びかける。

「ふふつ、キミの準備が終わるまで待つていてあげたのよ

「そりゃご親切に

笑顔でそう告げてからミリオムは右手に一筋の光を発生させる。

光が収まつた彼女の手には、指揮棒のよ^{タクト}うな小杖が握られていた。

「なるほど、それがお前のラファーゼか。それもなかなか可愛いと思つぞ」

魔力を集める先端がハート型になつており、少女らしさを醸し出している。

さつきまで戦つていた相手は皆剣やら槍やら物騒なのばかりだったのに。

「（あの形状だ、とりあえず近接戦にはならないだろう）」

近接戦が苦手な俺にも、攻撃魔法の打ち合いなら隙を突いて勝機はある。

『可愛いからつて舐めちゃダメよん。魔火の矢ツ！』

F i r e B o l t

動向を窺つていると、先にミリオムが動いた。

高らかな声と共に虚空でタクトを振り回し、赤の紋章を自身の周囲へ紡いでいく。

「ぐつ、やつぱ速いな……」

だがさつき戦つた奴らよりはまだ遅い。手際よくやれば十分対抗できるだろう。

『炎の槍よ迎え撃て、激昂の火炎弾ツ！』

勢いよく真横へ駆け出つつ、同じ火の攻撃魔法を展開する。

追尾性の低いファイアボルトは真正面に立たない限り直撃するこ

とはい。

互いの魔法陣より火の槍がそれぞれ発射され、激しい魔法戦が繰り広げられていく。

「けつ、結構頑張るじゃない。アンタって近接戦じゃなかつたらそれなりなのねつ！」

「やつ、はつと。」明察、お前が射撃タイプで助かつたよ

「それは果たしてどうかしらつ！？」

火の槍を撃ち、また飛んでくるそれをステップでかわして。暑くて熱い空間で刺激的かつ楽しいダンスを舞う。

いや、あんまり格好つけた表現はしていられないな。

攻撃発動速度は明らかに相手の方が上。このままではジリ貧だ。

『Frozen incchet
（氷結の跳弾ツ！）』

そこで場の流れを変えるため、ファイアボルトと重ねて別の攻撃魔法を静唱する。

魔力弾の数ではこちらの方が多いし、一発ぐらいはかすってくれるかもしれない。

「きやつ、うひゃんつ
！？」

奇襲の氷弾をかわしきれずにはリオムは悲鳴を上げる。

太股や胴体に貫通する魔弾に顔を歪めるが、実際痛みはかなり軽減されているし怪我もしないから安心だ。

ただ相手、しかも女の子の子の痛がる表情を見ると物凄く罪悪感が湧くのだけれど。

だからといって攻撃の手を止めるわけにはいかない。

散弾系が有効と見た俺はさらにフリーズリコシェットの魔法構成式を紡いでいく。

「うぬぬぬ小癪な……。こうなつたら、えいつ！」

サキュバスの少女は小声で何かを呟くと、華麗なジャンプで大きく空へと舞い上がった。

最初は背中の黒翼で飛んでいるのかと思ったが、どうやら飛行系の魔法を使っているらしい。

「タクマ、あなたに飛行魔法は使えるのかしら？」
「構成式は知ってるけど習得はしてないな」

飛行魔法には数多く種類があるが、どれもコントロールが難しい。死亡事故も多いので日本では使用に資格が必要なほどだ。俺も練習すれば習得できるかも知れないが、今すぐには彼女と空を飛ぶことは叶わないだろう。

「ふーん。それじゃあ私が断然有利なわけだ」

ニヤリといつもの小悪魔的な笑みを浮かべ、すうっとタクトをこちらへかざしてくる。

マズイな、完全に形勢逆転されてしまった。彼女の言つとおり地上と上空での戦力差は明らかだ。

「クツ、どうすれば……。つて、ん？」

奥歯を噛み締めながら対策を思考していると、ある重大な事実に

気付いてしまった。

「お前、そんなニースカートで飛んでて恥ずかしくないのかよー?」

あまりにも堂々と飛んでるからこの瞬間まで気付かなかつたが……。

丸見えだ。俺だけではなく周りのクラスメートたちにも。

「ああ、だいじょぶだいじょぶこれ見せても大丈夫なヤツだから」

するとそんな一言で流されてしまった。なるほど、テニスのアンダースコート的な。

まあ流石にそれくらいは考えてるよなコイツも。

「それに、私より自分の心配をしたほうがいいんじゃないの~」「な、なんだつて?」

心配して損したと息を吐くとすると、非常に嫌な予感のする言葉を放たれる。

そつと彼女の方を見上げると、眩い日の光をバックに向うかの攻撃魔法が展開されていた。

それも、かなり強力な。

「ちょ、お前にいつの間にそんなモノを!?

『いやー今の会話中にこいつそりとね。さつ、貫け! バスター・ライティング! ニングッ!』

「や、ヤバい!?

H、Hーテルバリ

咄嗟に腕を突き上げ魔法障壁を張りつとするが、やはりほんの少し遅くて。

バチバチと鳴る紫電の刃が、見事に俺の胸を突き抜いた。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.4・6 【銀髪少女との対峙】

Episode 4・6 【銀髪少女との対峙】

優しい陽射しが包む朝の闘技場内に、目立つて調子の良い少女の声が響き渡る。

「こやはははは、さあさあ大人しく参りましたと言ひなさいっ！」
「んなつ、くうつー？」

一瞬の不意を突かれたが運の尽き。

電撃の痛みに蹲っていたところを更なる魔法で追撃されて。
現在背中の上をミリオムに馬乗りされ抑え付けられている、といった状況だ。

「くつそぜんつぜん動けねえ……。お前少し重いんじやないか？」
「ちよつ、失礼しちゃうわね。拘束魔法をかけるだけなんだから
つ」
「つと失敬それはスマンかつたな」

笑いながら謝りつつも、俺は彼女に見えない所で渋い表情を作る。
軽口を叩きつけて隙を作らせようと思つたのだが失敗だ。
重心をさらに強くかけられてしまい、期待とは見事に真逆の行動
を取られてしまう。

「タクマ、あんたはもう完全にチェックメイトなのよ。観念なさいな」

人の首筋を細い指でなぞりながら、うふふと妖しい声で語りかけ

てくる。

くそ、確かに反撃はもう無理か。すでに魔法銃も手から離れてしまっているし。

「ま、反抗するなら言いたくなるまでいじめあげちゃうケド?」

人の悪い少女の声に、嫌な汗が体中からタラリタラリとつたうのを感じた。

「わ、わかったよ。参りました俺の負けでござります」

後方へ首をゆっくり捻り、しみじみとした声で白旗を揚げる。
無論跨っていたサキュバスの少女はニヤリと口元を歪ませ、スピード状の尻尾を満足気に揺らしていた。

く、悔しい……。

こうして対ミリオム戦も俺の敗北という結果で幕を閉じ、俺はめでたく2組最弱王の称号を受け継いだのであった。
うん、まったくもって不名誉な話なわけだが。

「や、そんなに落ち込まないでくださいよタクマ君。現時点であなたが負けるのは仕方のないことなんですから」

闘技場の端で一人黄昏れていると、慰めに来てくれたのか隣にニアが腰を下ろす。

彼女はまだ誰とも戦っていないのか桜色の髪に乱れはなかった。

「わかつてゐる。だけども、やつぱりこれは男のプライドって奴がだな……」

初めての慣れない魔法決闘、使用武器の性能差も大きかったが、それでも女の子にまで負けるというのは結構メンタル的に大ダメージだ。自分が情けないというか何というか。

「ふふっ、あなたも男の子というわけですね」

「……笑うなっての。あれでも割と本気で勝ちに行つたんだから」

「そうとも手は抜いていない。俺は正真正銘全力だった。
だからこそ、いつも呆氣無く負けてしまったことが悔しいのだ。

「でもま、いい経験にはなったかな。さてと

ゆつくつと立ち上がり制服に付いた埃をぱつぱつ払う。

「あら、どちらへ？」

「水分補給にジュース買つてくるよ。ミアも来るか？」

「あ、いえ、私は先ほど行つてきたばかりですから」

そう申し訳なさげに手に持つ缶ジュースを見せられる。

残念だと捨て台詞を残し、俺は苦笑したまま闘技場のエントランスへと向かうのだった。

俺の見えないとこから、1人の少女がその一連の様子を窺つていたのを知らないまま。

・

俺以外には誰もいない閑散としたエントランス。

その片隅にある自販機の1つから炭酸飲料水を購入した。

「ゴク、ゴクンッ、っはあ、生き返るねえ」

ベンチに腰掛けその場で一気に喉へ通す。初めて買った商品だけどなかなかどうして美味しい。適当に選んだものだが当たりだつたな。

うんうんと頷きながら至福の一時を過いでいると

『授業時間中にティータイムとは良じ身分だなあ、生徒タクマ?』

唐突に聞き慣れたサディステイックな声が飛んだ。

「ぶツ　　！？　ガハツ、ゴホツ、ゴホンッ」

やばいクリス先生だ!?　と全身が震えた瞬間、思わず口に含んでいたシュワシュワする液体を気管へ侵入させてしまう。咳き込み涙目になりながらも、俺は弁解をするべく声の方へ振り向いた。

「違つんですよ先生!　これは決してサボっているのではなく水分補給を　つて、アレ?」

目をやつた先には想像していたのとは違う少女の姿があった。長い金髪のツインテール吸血族ではなく、短い銀髪のショートカット。

いつも毒付いた言葉と嫌らしい笑みを浮かべているアイツだった。

「な、なんで冬霞ヒツカが?　今克里斯先生の声がしたんだけど……」「ちょっと声色を変えてみたの。みんなにはすぐ似てるって好評なのよ」

「つまりはお前の悪戯だったんだな」

白魔話をして始める銀髪少女を制し、俺は攻撃的な笑みを彼女へ向ける。

心臓に悪い。そしてまだ苦しがつてゐる俺の気管に謝れ。

「クスッ、まあそんなことは置いておいて少し話があるのよ。大切な」

「また下世話はジロークじゃないだらうつな？」

銀髪少女は首を静かに横に振ると、俺の隣に座つて話を切り出した。

「私が迎えに行つたときのこと覚えてるかしり?」
「そりやな、あんな衝撃的な出来事忘れたくても一生無理だと思つぞ」

もう随分と昔のことの時に感じるあの銀月の夜を思い出す。
幸か不幸かこの銀髪少女、白銀冬靈と出会つてしまつた夜。そしてこの世界へと導かれた夜でもある。

俺の歪んだ人生がさらに歪んだあの日を忘れられるわけがない。

「そういえば確かお前、俺の魔力弾を涼しい顔で無効化してたよな
「あんなショボいの別に私じゃなくても防げたわ。それこそ中等部の生徒でもね」

「……そうかい」

だが俺はそのショボい魔弾で人を殺してしまつてゐるのだ。
自信を持つて言える不可抗力だったが、やはり今でもなんとも言

えないモヤモヤが続いている。

「今だから教えてあげるけど、アンタが殺したと思つてるチンピラ、あれ人じやないのよ」

「なつ！？」

それはあまりにも唐突だつた。そして耳にしたこぢらは驚きのあまり呼吸を忘れる。

心を読まれ、かつ到底信じられない言葉を不意に叩き付けられたのだから。

「な、何を突然言い出すかと思えば、あれはどう見ても生身の人間だつたぞ」

「まあ普通信じじないわよね。いいわ、証拠を見せてあげる」

「証拠だつて？」

そう言つと疑いの目を向ける俺から少し距離を取り、トウカは赤紫の瞳を細める。

『踊れ、ダンタリオンの幻影』

魔法名だらうか。ただその一言だけを紡いで指を鳴らした。

直後彼女のすぐ右横に黒い魔法陣が浮かび、怪しいを光漏りす。半信半疑のままその様子を窺つていると。

「ばつ！？ そ、そんな、まさか本当に前が……」

その魔法陣の中から姿を現したのは、紛れもなくあの夜に俺が殺したはずのチンピラだった。

と言つても襲つてきた3人の中のリーダーらしい金髪男だけだつ

たが。

「コレは人工精霊。ホムンクルス感情はないけど私の念じたとおりに動いてくれるお人形よ」

銀髪少女が口にしたホムンクルスといつ単語。

日本で使われていた式神と同じだな。だが果たしてこんなリアルに作れるもんだったか？

俺の知ってる話じやせいぜい小動物に似せられる程度だったような……。

「んつ、なるほどそうか。この世界の魔法技術を使っているんだな」「ご明察。闇の幻影魔法をベースに構成しているわ。あなたも2週間あれば習得できるんじゃないかしら」

「そうだな、興味もあるし今度先生に相談してみるよ。それよりも

「

ロボットのように動かないチンピラを一瞥し、今度は銀髪少女へ鋭い視線を向ける。

結局、彼女がこんなものを使って俺に近付いてきた理由がわからない。

「とりあえず騙したことを謝つておくわ。こんなことでもしないと

あなたが私に着いて来てくれるか分からなかつたから

「……地球との踏ん切りを付けさすためにやつたってことか」

「ちりが質問するより先に発せられた彼女の声である程度のこと

を悟る。

つまりはこのホムンクルスを使って、さも俺が殺人を犯したように勘違いさせたんだ。

俺の心を、この世界へ持つて来やすいよ。

「怒ってる？」

「そりゃ少しさな。でもやっぱり感謝もしてる、かな。やり方は汚いが結果地球から逃れたのは正解だつたし」

この世界に来て俺のホテルは復活したし、魔法も使えるよつになつた。

それだけじゃない。たくさんの人たちと出会えることもできたのだ。

「ただ、どうしても気にかかることがあるが」

「何かしら」

「お前のことだよ。白銀冬^{ホワイトスノウ}」

「なぜお前が迎えに来た？ 他の異世界出身の奴の話じゃ、迎えに来るのは外世界統括機関^{ギルド}って組織の人だそうじやないか」

この世界は異世界から優秀な人材を引き抜いてるのだが、それを担つているのがギルドという組織だそうで。

他にもいろいろ活動しているそうだが、それは置いておいて話を戻そう。

あの夜俺のもとに現れたのは眼前の少女。つまり、ただの学生である。

「私が学園長に頼んで得た例外よ。あなたを迎えて行くのは私。そう4年前に約束したもの」

「4年前の約束、か。やっぱりお前はあの夜より前に俺と縁があるんだな？」

「クスッ、薄々は気付いていたはずでしょう？ 記憶は綺麗に飛ん

でるみたいだけね」

トウカは否定しない。俺の記憶がないことも既に知っているようだ。

なら、これからいつべきものはただ一つだ。「

「教えてくれトウカ。4年前一体俺に何があった？　そして、お前と俺はどういう関係だったんだ？」

彼女の右手を両手で包み、目を見て真剣に問い掛けた。

「……それはまだダメなの」

数秒だけ躊躇つたあとそう告げられてしまつ。

どうしてだ、俺が知つたらそんなに不都合なのか？

「だけれど

「え？」

「ほんの少しだけなら、あなたに真実を見せてあげられるわ

」

どうこうことだと訊き返す暇もなく、トウカは空いている左手に光を収束させると、静かにそれを俺の額に触れさせた。

・

「な、何をしたんだ？　別に何も起こらないんだが」

「狂つたあなたの感覚を元に戻しただけ。これであなたは事の異常さを認識できるはず」

失敬な、誰が狂ってるか。しかも一体何の異常だよ。

「簡単なことよ。地球は、日本は、果たして魔法が使えないくらいで差別される世界だつたかしら?」

少女の口から出たその質問。果たして答えはなんだろう。きっと、さつきまでの俺なら間違いなくイエスと答えていた。だが……。

「うっ、な、えつ! ? あ、あれ?」

俺の頭の中に浮かんだ答えは、ノーだつた。

あの世界で、地球で、日本で。魔法を使えない程度でみんな酷い差別を受けるわけがない。

特に人権運動が活発だつた日本じゃむしろ俺は保護対象のはず。

ありえないのだ。全世界から俺一人がバッシングされるなんて。なんでだ、どうして。俺は今の今までこの異常さに気付かなかつた!?

「分かつたでしょ? 地球の人間とあなたの感覚は狂わされていたの。この4年間」

「く、狂わされてたつて、一体誰がそんなことをつ! ?」

「あなたを迎えに行く前に殺したわ。ま、そのことは今考えなくていい」

彼女のゾクツとする言葉遣いに背筋が凍る。

あの夜と同じ恐怖感を抱いて言葉に詰まっていると、突然。

さつきまで渋い表情を覗かせていたトウカが、不敵な笑みを浮か

べていつ詮つた。

「どうしても眞実が知りたければ、奪い取つてみなさい。あなたの力で」

「……ど、どうこう意味だよそれ？」

「要はこれ以上のことを知りたくば、魔法決闘にて私を倒せ。といふことよつー。」

いやいや、声を張り上げてそう言われても……。

どうしてそんな結論に辿り着いてしまうんだ。

「もひにこや、お前じやなくてアキラ副会長から聞くよ」

呆れて大きな溜息を吐き、もつと早い解決策を選ぶことにした。あの人は「イツの兄さんなんだし、きっと詳しく話が聞けるだろう。

「甘いわね、そんなのどうくに口止めしてあるに決まってるでしょう」

「おこおこマジかよ」

一番現実的な突破口を防がれてしまつていた。

「フンッ、なら上等だ。やつてやるひじやないか。魔法決闘」

「あんたミコオムにすら負けてたじやない。今の力で私に勝てると思つてゐるの?」

「うう、そ、それは……」

無理、だらうなあ。さつきクラス最弱になつたばかりだし。それに加えて多分「イツは恐ろしく強いんだろつ。

身に纏つてゐる雰囲氣とこいつがオーラとこいつが、とにかく弱そうには見えない。

「…………ま、そういうわけで楽しみにしているわ。あなたと激しく美しい、一緒に戦踊を舞える日をね」
「大切な話つてのはそれだけか。俺は混乱しただけだぞ?」「それでいいの。その謎を紐解くために、あなたは必ず強くなってくれるから」

さう背を向けて闘技場内へ戻つて行く銀髪少女。

小ちなその後ろ姿を見送りながら、俺はぎりぎり彼女に届く声で言つてやる。

「さうだな。いつか本当にお望みビアツ、お前を倒してみせんや。白銀冬霞」

その言葉に銀髪少女は一瞬だけ歩みを止めたが、振り向かずすぐに行つてしまつた。

どう考へても理不^レ可の上ないの。滲み出るはずの不安や怒りよつむ。

この時なぜだか妙に嬉しく、そして俄然やる氣の湧いた俺がここにいた。

少し彼女の毒にあてられすぎたのかも知れないな。

Ep.4-7 【それでも進む時の中で】

Episode 4-7 【それでも進む時の中で】

夕暮れに空はだんだんとその色を失い、教室は薄い茜色へと染まつていく。

そんな空間の端、俺は静かに田を開じて深く思考していた。

もちろん午前中に交わした冬^{トウカ}靈とのやり取りをある。

少し間を置いて考え直してみても、やはり謎が多くさるのだ。

一体誰が、何の目的で俺や地球人たちの意識に干渉したんだ？なぜ学園長やトウカはそこまでして俺をこの世界へ導いたんだ？そしてトウカとアキラ副会長は、俺とどんな関係にあつたんだ？

「（……ダメだ、わからない。あんなのじゃ全然足りないよ）」

大きな溜息を吐いて机に伏し、元氣のない黒髪をボサボサと搔きむしる。

少なすぎるのだ。俺の持っている知識量だけでこれらの謎解きをするのは不可能に近い。

「あ、あのっ、タクマ君、私の声聞こえますか？」

今のところ魔法決闘でトウカを倒すのが唯一の道なのだが、やはりそれも厳しいだろう。

なぜなら俺の戦闘スキルも魔力媒介も最弱レベルなのだから。この世界の奴らと対等に戦えるまで成長するには、果たして何ヶ

用かかるのや。」

「ど、ど「しましょ」つ、返事が返ってきません……」

「ああ、こりゃ重症かもな。ミリオム、てめえが変身までしてしゃり出るからだぞ」

「私のせいだつて言いたいわけ！？ 私はただ尋常に勝負しただけなんだからつー！」

はあ、本当にどうしよう。昨日までは昔のことつて振り切れてたのに……。

やつぱり氣になる、知りたい。複雑な俺の周りの世界は一体どうなつてしまつているのか。

「つて、ん？ どうしたお前ら、いつかひや」「元

騒がしいなと顔を上げたところ、よく見知ったクラスメートの姿が写った。

なぜか泣きそうな顔になつてゐるヒトと、口争いをしてゐるワグナとミリオムだ。

「いつからつて、HRが終わつてから今までずっとたゞ。やつぱり気付いてなかつたのか？」

「あ、ああスマン、少し考え方があつてな。つこ上の空だったみたいだ」

「やつぱりつー！ どおりで私たちが話しかけても完全スルーだったのね」

呆れた目をする赤毛竜人とサキュバスを苦笑いで誤魔化しつつ自分に呆れる。

思えば確かに、さつきから話しかけられていたような氣はしてい

たのだ。

「それで、一体何を考えていたんですか？　かなり深刻な様子でしたけど」

「えつ、べ、別に大したことじや……」

「つまらないことではここまで上の空にはならないと思つんですけどねえ」

小さなミニーツインテールを揺らして怪しむニアを見て、一瞬トウカとのことを話そうと思ったが、結局口には出せなかつた。

なんせ俺自身まだこの件の全容は把握しきれていないのだから。

「もへ、どうせ今日の魔法決闘のことを見に病んでいたのでしょうか？」

「ま、まあ大体はそんな感じだな」

トウカとのこと以外は見透かされていた。いや、誰でも分かるよな。

「朝に言つたじゃないですか。あなたが今負けるのは仕方のないことだつて」

「そうだぜ。逆に超初心者のタクマつちが勝つちまつほうが大問題だ」

「うつ、そうかもしれないけど……。ん~」

うなだれながらチラツと横目で突つ立ていたミリオムを捉える。
それでも、普段のほほんとしているマイツに負けたのはかなり悔しい。

「へえ、そんなに悔しいんだ。私に負けたコト」

「か、勝手に言つてろつ！」

「うふふ、拗ねられちやつた～」

嫌らしげー一ターダと微笑む少女から、そつと視線を外して俺は帰りの支度を始めるのだった。

・

そして少し黒みのかかった空の下の帰り道。

寄るところがあるらしいミリオムとは別れたが、代わりに途中で会つたテオと合流し、ニアとラグナの4人で帰路に着いていた。

「そういえばラグナ、前から気になつてたんだが、お前つてドラゴンなんだよな？」

「おつよつ。ま、正確に言えば火炎竜族ボルケーノドラゴンだけどな。それがなんだつて？」

ボルケーノって確かに火山だっけか。なるほど、言われてみれば髪の色とかもそれっぽい。

「いや、今日のミコオムみたいにお前も変身とかできるのかなつて」

魔法決闘やトウカの件はもちろん、やはりこれも非常にインパクトのあることだった。

羽根とか尻尾とか獸耳とか、とてもとても興味深い。

ましてや竜人として人間の姿をしているドラゴンの本当の姿なんて尚更だ。

「当然できるけど、こんな人通りの多い所や狭い場所じゃ無理だぜ。

いい迷惑だ

「そ、そんなに本来の^{ルーラー}お前は大きいんだ？」

「個人によつてピンキリだけどな。それでもみんな小さな民家ぐら
いの大きさはあると思うぜ」

おおつ、じりや俺のよつた地球人が想像してたドラゴンと同じ
っぽいな。

今はどこからどう見ても人間そのものだが。

「へへっ、まつ、もういつわけでお楽しみはまた今度な。近いうち
に見せてやるよ」

「楽しみにしてるわ。……あ、背中とか乗つてみてもいいか？」

「おひ、いくらでもいいぞ。ただし、昼飯ぐらじおじつてくれたら
の話だけどな～」

金取るのかよ。なんて現金なヤツなんだ。

心の中でそう呆れつつ、今度は視線を右側に歩く2人に移す。

「んじゃあニアとテオはどんな感じなんだ？ 確か2人は天使と魔
人だったよな」

「あら、今度は私たちに探究心の矛先が向けられちゃつたみたいで
すよ。ふふつ」

可愛らしく笑うニア。天使族である彼女のイメージは白い翼や輪
つかなどだろうか。

魔人のテオは……。ん~、なんだろう。よくわからないかな。

「僕らは君が期待してるほど珍しい姿じゃないと思つよ。ちょっと

羽根が付いてるだけだから」

「いや、俺にとつてはそれだけでもかなり珍しいんだけど……」

乗り気ではないテオへ『見てみたい』とさうに強い眼光を送つてみる。

「いいじゃないですかテオ君。別に減るものではないんですけど」「もう、仕方ないなあ……。僕はあんまりあの姿になるの好きじやないんだけど」

「ははっ、夕飯のおかず何か分けるから頼むよ」

別にいらぬ」と断れてしまつが、結局は渋々やつてくれるそうだ。

石置の道の端で足を止め、俺とラグナは少し距離を取つて2人の変身の様子を見守る。

『トランスマスター』

間もなく2人は静かに聞き覚えのある魔法名を詠唱すると、一瞬だけ眩しい光の奔流を作り出す。

反射的に目を閉じ顔を背けていると、同時に強大なエーテルと魔力の渦が身体をよぎるのを感じた。

「…………」

ゾクッとする悪寒に思わず目を見開くと、そこには。

「ハイ、お望みどおり変身を解いたよ。これが魔人族ブリマスと天使族エンジェルの姿だ」

「お、おおっ！ すげえな、めちゃくちゃ綺麗な翼じゃないか」

ミリオムの小さなものは違い、輝くテオの黒翼は4つに分かれていって。

そこには魔族という単語から想像できる邪悪な気配は一切なく、とても立派で格好良く見えた。

「えへへっ、今みたいに褒めてもらえるのなら、たまには開放してみるのもいいかもですね」

天使族、ニアの翼はテオのものと同じく大きな4つの羽根に分かれていた。

意外にもその色は予想していた純白ではなく、彼女の髪の色と同じ桜色だったが。

とにかく2人が持つ大翼は想像していたものよりずっと流麗だった。

うん、少し我がままを言つてでも見せてもらつた甲斐はあつたな。

「魔人族の羽根は大抵黒色が多いんですけど、天使族の羽根は個人によつて違うんです。大抵髪の色で決まるそうですよ」

「ちなみに混血種族の奴はランダムで特徴が出るそうだぞ」

「ふーん、やっぱり俺の知らないことつて沢山あつたんだなあ……」

異世界での常識を授けてもらひながら歩いていると、あつという間に寮の前まで辿りついてしまった。

もちろんテオとニアの2人はとつぐの昔に人間の姿へと戻つている。

「ふふっ、それでは皆さんまた明日。では」

「ああ、また明日な」

小さく一礼をして女子寮へと姿を消すニアを見送り、俺達も部屋へと戻るのだった。

「（探してみれば他にも面白い姿をしている奴がいるかも知れないな）」

後で食堂にいる男共にでも見せてもらおうか。
ま、尻尾や獸耳とかは女の子が付けている方が目にはいい気はするのだが。

・
・

夕飯も風呂も終え、特にすることもなく暇を持て余す午後10時過ぎ。

寮の2階にはかなり広めなレクリエーションルームがあり、この時間帯はここで過ごすのが大半の寮生の日課となっている。

「そういえばあの芸人も消えたよなー。最近全然見えねえもん」

「あんな寒いギャグばっかしてたら消えて当然だつーの。それよりこれを見ろ、今日もアイリスちゃんは最高だぞッ！」

「へえへえ。あつ、そういうやまたアイリスの新曲出るんだってな」

生徒証から情報番組やバラエティ番組を見たり、いつもどおり他愛も無い話をしたり。

どこから仕入れてきたのか大量のお菓子持つている先輩からお掛けを頂いたり。

とにかく全体的から見れば、今日もこのリュミシャルは平和らしい。

「やつこえばや、やつきの変身で思い出したんだけど

」

塩味の効いたスナック菓子を頬張りながら、はつとじてトオは話を切り出す。

「トウカさんや、寒は茜髪を伸ばしてたんだよ

「くつー!？」

それは忘れかけていた銀髪少女の話題。

その不意な登場に俺は思わず素つ頓狂な声を上げてしまった。

「なんだテオ、それ俺っちは初耳だぞ。 つてことは、中等部の頃の話か?」

「うん、確か2年の夏前ぐらいだったかな。長い上品な髪だったんだけどねえ……」

近くにいたラグナが混ざると、縁髪の少年はしみじみとした声でそう眼を閉じる。

「それを今のショートヘアにしたわけか。なるほど、そりや確かに変身だな」

髪は人の印象を決める要素の1つだしな。

彼女の髪がどれだけ長かったかは知らないが、いきなり短くしたのは大きなイメージチェンジだったらしい。

「でもどうしてだ? その言い方じゃトウカたちの髪型は似合つてたんだろ?」

「それがさ、魔法決闘とか魔物と戦うのに鬱陶しいからだつて

おじおいそんな理由で切つたのかよ。後ろに結ぶとか他にも選択肢はあつただろう。

「ははつ、そりやトウカつちらしげな。さすがキラークイーンだぜ」「わうだよね。思えばあの頃からトウカさんは強かつたよ」

「…………ん?」

甘く冷たいジュースを口に運んでいると、2人の会話に違和感を抱いた。

「なあ、稀に臨アウカの」とキラークーンって呼んでるけど、アイツつてそんなに強いのか?」「

そもそもキラーキーンってなんなんだ。

どう考へてもあまり穏やかな称号ではないようだが。

「…………ありや強いつてレベルじゃねーぞタクマつち。あの小悪魔は最強だ」

「も、もひとつ具体的に教えてくれ。それだけじゃ大雑把すぎやない

少し含みを持たせるようなラグナの答へに首を傾げ、次の言葉を待つ。

「具体的ねえ。そうだなあ、成績も戦績もこの学園の学年首席なんだよ彼女」

すると隣から耳を疑いたくなるようなテオの言葉が届いた。

ちょ、ちょっと待て。学年首席つて、500人近くいる1年生の

トップってこと……？

「それに加えて去年の魔法決闘大会じゃ、圧倒的な実力で一年の部優勝さ」

「魔物だろうが人だろうが、9割の相手は瞬殺されるぞ。んで、付いたあだ名がキラーキーンだぜ」

「んな、なな……」

したり顔でクスクス笑う銀髪少女の姿が目に浮かぶ。

やべえなにそれ聞いてないぞトウカ！　お前そこまで強い奴だったのかつ！？

「ち、ちなみに対等に勝負するにはどれくらいの実力が必要なんだ？」

頭を抱えながら恐る恐るそんなことを尋ねてみる。

「うーん、上級生や大人でも彼女に勝てる人はかなり少ないとと思うよ」

「ああ、勝てそうなのはエルザの姉貴があのちびっ子吸血族かねえ」

あの天才生徒会長様と鬼畜教師レベルにならないと無理なのか。だ、ダメだ、本格的に目眩がしてきたぞ……。

「ん？　どうしたんだいタクマ君？　顔色が悪いよつに見えるんだけど」

「いや大丈夫だ。気にしないでくれ」

「言つとくけどアイツとだけは決闘すんのやめとけ。心が折れちまう」

何かを見透かしたような赤毛竜人の声と目は珍しく真剣で。俺はコクリと頷いてから別の話題を振ることしかできなかつた。

トウカよ、どうやらお前と同じ位置に立つにはまだまだ時間がかかりそうだ。

そんな声にならない俺の嘆きを嘲笑つかのように、異界の夜は更けていくのだった。

越えなければならないまた別の障害を、これでもかと携えて。

M
a
g
i
c
a
l

R
e
v
o
l
u
t
i
o
n

C
h
a
p
t
e
r
2
E
n
d
·
·
·

- C
o
m
i
n
g
S
o
o
n
N
e
x
t
S
t
o
r
y
!
-

キャラクター紹介 02

Magical Characters | Chapter 2 |

ここまで簡単な登場人物まとめです。

⋮

【リュミシアル魔法学園 高等部1年】

主人公、所属クランメンバー

タクマ＝ミツルギ（御剣 拓磨）

種族種目：人族、人間族 性別年齢：男性、16歳

出身次元体：地球、日本

「黒髪黒眼、旬な学園転入生、前向き主人公」

稀に他人をからかうたりする癖があるも基本的にはまともな主人公。

魔法の才能はあるが、現在の実戦順位では最底辺クラスだと判明した。

たくさんの課題を抱え込みつつ、今日も彼は異世界リュミシアルでの学園生活を満喫することに。

トウカ＝シラガネ（白銀 冬霞）

種族種目：人族、人間族 性別年齢：女性、16歳
出身次元体：地球、日本

「銀髪少女、キラーキーン、底知れない少女」

よりいつそう謎が深まつてしまつた不思議系メインヒロイン。過去に主人公と縁があり、彼の知らない秘密を知つてゐるようだが……。

実は学園高等部の1年生首席で、学力も戦闘スキルもトップクラスの天才少女。

ミヤナールム＝シアクウナ（ニア）

種族種目：神族、天使族 性別年齢：女性、16歳
出身次元体：リュミシアル

「桃色＝ニーツインテール、小動物系少女、健気な天使」

健気で面倒見のいい天使族の少女。

天然系に見えるが実はかなり鋭い感性の持ち主のようだ。
本来の姿になると背中に桜色の翼が出現する。

ラグナ＝ヴォレリウス

種族種目：竜族、火炎竜族 性別年齢：男性、推定150
出身次元体：不明

「ツンツン赤毛、バカ氣味竜人、ムードメーカー」

好きなものは睡眠と女子である少し頭の残念な竜人。

他にも生活指導対象、成績不振な問題児だがなんとか学園生活を送っている。

普段は人間の姿だが、本来は大きく雄々しいあのドラゴンである。

テーオリ・ベリアルス（テオ）

種族種目：魔族、魔人族 性別年齢：男性、16

出身次元体：不明

「爽やか緑髪、魔王子息、世話焼き気質」

日々主人公の生活をサポートをしてくれる知的な魔人族の少年。これからも世話になることが多いかも知れない。
人間への変身を解くと背中に4つの黒翼が出現する。

クラスメート、他一年生

ミリオム＝ハイソール

種族種目：魔族、サキュバス族 性別年齢：女性、16歳
出身次元体：不明

「右隣のクラスメート、サキュバスな眠り姫、ハイテンションガール」

主人公に興味を持つてているのか近くにいることが多いサキュバス

の少女。

魔法決闘ではクラス最弱だつたが、初心者の主人公を打ち倒す実力は持っていた。

人間形態を解くとスペード状の尻尾と小さな黒翼が現れる。あとよく寝る。

アテューリア・ローズハート（リア）

種族種目：混血種族 性別年齢：女性、16歳
出身次元体：リュミシアル

「茶髪ツインテール、真面目系少女、生徒会役員」

初めて登場した混血種の少女で、生徒会役員を務める優等生。嫌味のない口調や雰囲気から育ちの良さを感じさせる。同じ生徒会のトウカやミアとは友人らしいが……。

【リュミシアル魔法学園高等部 上級生】

生徒会役員

エルジイルム＝シアクウナ（エルザ）

種族種目：神族、天使族 性別年齢：女性、17歳
出身次元体：リュミシアル

「ハイパー生徒会長、学年首席、お嬢様口調」

天才なのが会議にはややサボり癖のあるお嬢様系生徒会長。年下にはお姉さんぶつたり見栄を張ることがある。

アキラ副会長にはそれなりの好意を抱いているらしいが……。

アキラ＝シラガネ（白銀 晓）

種族種目：人族、人間族 性別年齢：男性、17歳
出身次元体：地球、日本

「生徒会副会長、クール眼鏡、眼鏡フェチ」

トウカと同じく主人公について何かを知っているらしい人物。エルザ会長に手を焼いたり焼かれたりしている。

眼鏡をかけている女性を見ることに至福を感じているらしい。

他上級生

テミス＝ベリアルス

種族種目：魔族、魔人族 性別年齢：女性、17歳
出身次元体：不明

「緑髪ボニー・テール、ミスピパラッチ、トラブルメーカー」

自称報道部エース、次期部長候補なテオの姉。

物事にとてもアグレッシブな性格で、トラブルを起こすこともしばしば。

今日も彼女はスクープを求めて学園敷地周辺を飛び回る。

【その他の人】

学園関係者

クリスティーナ＝ムーンライト（クリス）

種族種目：魔族、吸血族 性別年齢：女性、不詳
出身次元体：不明

「金髪ツインテール、ちびっ子担任、真祖の吸血族」

1年第2クラスの担任だが、特に担当教科は持っていない。
毎日午後の授業時間を使ってひ弱な主人公を鍛えている。
主人公の進級試験は彼女が担当するらしいが……。

トウルシファアナ=リリス

種族種目：不明 性別年齢：女性、不明
出身次元体：不明

「謎多き学園長、艶やか美人、おつとり口調

2章では登場していないがきっと主人公のことを見守っていたはず。

普段は学園長室で書類を片付けていることが多いらしい。

その他の人

アイリス

種族種目：不明 性別年齢：女性、16
出身次元体：不明

「薄紫ロングヘア、スーパーアイドル、発育満点」

CandyKissプロに所属しているリュミナル界の人気アイドル。

透き通るような凛々しい唄声とけしからん美貌（胸）の持ち主。どこかの学生なのは確実だが、本当の正体を知る者はファンの中にも居ないようだ。

・
：

Ep.5-1 【越えるべき課題】

Episode 5-1 【越えるべき課題】

初めての魔法決闘から数日^{デイリー}の時が過ぎた土曜日の朝。

いつもは教室でクラスメートたちと雑談を交わしているはずのこの時間帯に、俺は教務員室にいた。

正確にはその広い空間の端。まるで一服するために作られたようなスペースにある。

「…………ん」

視線をチラッと横へずらしてみれば、たくさんの教師たちが忙しく動いている。

その光景を田で追いながら、俺は田の前に用意された白いカップを口元に触れさせた。

「（ズズツ、ん、えつ？　なんじゃこりや、変な味だなあ）」

予想と違った味と風味に顔をしかめつつも、構わず喉へ通す。不味くはない微妙な味なのだが、分かるのは初めて味わう奇妙な飲み物だということ。

紅茶に近い気もするが果たしてどうなのだろう。

「ふはあ、呼び付けたくせに待たせてすまんかったな生徒タクマよ」

「あつ、おはよ／＼ぞひこますクリス先生」

ローブのような白衣を纏い、長い金髪を2つに束ねたちつこい少

女。

その声を耳に入れるや否や傾げている首を戻して朝のあいさつを交わす。

同じ白いカップを手にしてこるのを見るに、どうやら彼女も同じものを飲んでいるらしい。

「つむ、おはよ。では早速だが」ひして呼び出された理由はわかるかな?」

このクリス先生から呼び出しの連絡をもらつたのは昨夜のこと。メールにて『明日の8時10分に職員室へ来い』とだけあった。理由は明記されていなかつたが、大体の予想は付いている。

「はい。進級試験のことですよね?」

「ふふつ、よしよしあやんと覚えてはいたようだな」

どうやら迷つていたらしい。ま、そりゃ覚えてもらひだらう。その試験のために、俺は毎日あなたからハードな鞭を打たれ続けてきたのだから。

「……ラフアーザを生成すればよかつたんですね。やり方がよく分からないのですけど」

いつまでも満足気な笑みを浮かべている担任へ話の続きを促す。

「それを今から説明しようとしていたのだよ。ま、もつとも魔法のように明確な数式や呪文があるわけではないがな」

「ええ、知り合いからも“感覚的なもの”とだけは聞きました」

「その通りだ。身体に巡るエネルギーを片手に集め、さらこそそこから外へ押し出す

「

そう言葉を紡ぎながら、クリス先生は横へ伸ばした右手へ光を収束させる。

光の粒子は色を赤く染め、やがて一本の長い槍へと姿を変えた。

「言葉の上では簡単だが、やはり慣れるまでは厳しいものがあるだろつな」

担任はニヤリと顔を歪ませて顯現させた物騒なものを見散させる。その紅い瞳は『お前もやつてみればどうだ?』と語っていた。

「そうですねえ。もし今できたら楽なんでしょうけど」

たった今先生がやつたように右手を伸ばす。

そして目を閉じ、身体に流れるエーテルを感覚で捉え、その手へ集めていく。

こうやって集中している間に、少しエーテルとラファーゼの話をしよう。

まず生物の生命力と定義されている原初の力。それがエーテルだ。そして唯一魔力をコントロールできる力もある。

それによつて人は魔法を使えるし、また生命活動をしているのだ。

一方ラファーゼとはこのリュミシアル界が開発した魔力媒介。エーテルを体内から取り出し、そのまま物体化させたものがそれだ。

魔力を制御するエーテルそのものが媒介になつてゐるため、普通材料にされている魔石や金属よりも相性がいい。

そんな大層なもの作るのが俺の留年を回避する唯一の道らしい。
そう、つまり時期外れの転入生である俺への進級課題なのだ。

で、今それを試しに実践しているのだが……。

「ぐうぬうひ、右手に集めたのは良いんですけど、これを探し出す
つじじうさればっ！？」

とてもとても苦戦していた。

右手にかかる不可思議な圧力に表情を歪ませる。

「そのままで。体の外へ押し出す。まあそこが感覚で難しいところ
なんだが」

「ちよ、適当すきますよっ！　はあ、はあっ、ぐぬぬ……」

理不尽なアドバイスに仕方なく従つて、必死に溜まったエーテル
を押し出そうとする。

ぐつ、なんか変な汗出てきたけど拭つている余裕などない。

そんな頑張りのおかげか僅かながら小さな光が右手に集うが。

「　　あいたッ！？　い、いてえ……」

同時に俺の集中力も切れてしまい、直後ビリツと痺れるような痛
みが襲つた。

恐らく力をかけていたエーテルの反動か何かなのだろう。

「ふん、まあ世の中そんな都合良くな行かないということだな」「ええっ！？　やらせておいてそんな言い方は非道いですよ、まつ

たく

最初から期待していなかつたかのよくなちびっ子担任へ非難の声を上げてやる。

「はて、私は一言もやれとは言つていないぞ？」

「いやいや思いつ切りそんな目をしていたじやないですか」

惚けないでくださいと残つていた謎の飲み物を一気飲み。ううつ、やっぱり御世辞にも美味しいとは言えない味だ。

「ほお、お前それがいけるクチか。やっぱり変人だつたな」

「……どういう意味ですかそれ？」

聞き捨てならない台詞に俺は鋭い眼光を担任へ放つ。

「これは私が氣に入つてゐる紅茶なのだが、誰に淹れても不味いだの泥水だの大不評なんだよ」

さ、流石に泥水とまでは行かないと思つが……。
つか紅茶で呑つてたのかコレ。

「中には戻した奴もいたな。まったく、この上品な味が分からんとは可哀想な奴らだよ」

「事情はわかりましたけど、何で俺が変人呼ばわりされないとけないんですかっ！？」

「普通の人は一杯飲んだだけでダウンする。だがお前はそれを全部飲み干したときた」

クククと嫌らしい笑みを浮かべて空になつたカップを指す金髪少

女。

ひ、非道い。変人扱いはまた別として、そもそもそんなものを飲ませるなんて。

俺は運良くそこまで不味いとは感じなかつたが、少し味覚が違つたら大変なことになつていたんだ。

「クククツ、まあ変人というのは冗談としてだ。話をもとに戻そ

くそ、文句の一つも言わせないつもりか。

試験の話に戻ればこのことで口を挟み辛くなる。

「ラフアーゼ生成のやり方だが、今お前が試した方法で合つていてる。僅かながらエーテルが外に漏れただろ?」

「本当にちょびつとでしたけどね。本当にあと数日で作れるようになるんでしょうか?」

「問題ない。私の熱心な指導のおかげでお前は十分に器を満たす身体になつたはずだ」

「ね、熱心な、指導……」

ほとんどは仮想迷宮に送り込まれただけで、直接魔法を教わったのは数回しかないような。

「ゴホンッ、とにかく最終段階まで来たのだよ。後は仕上げをするだけさ」

「仕上げ? それってどういづ?..」

俺の白い視線を咳払い誤魔化して、気になる一言を吐いた担任へ尋ねる。

「そうだな。单刀直入に言えば、私と魔法決闘をしてもうう

「…………く？」

思ひも寄りない言葉に間抜けな声を漏らしてしまつ。
どういふことだ？ なんで先生と決闘することだ？

「簡単なことさ。お前ををこれでもかと痛め付けるんだよ。意地でもラフアーゼを顕現させなければならぬほどにな」

「えつ、なんですかその体育会系のノリはつ！ 今的方法をもつと反復練習するとか」

「魔法とは違つて感覚的なものだから、練習して習得できるとは限らん。しかもかなりの時間が必要になるだろ？」

な、なるほど、たしかに3学期といつタイムコマニッシュトまでもう数週間しかないのだ。

それに失敗した時に返つて来るあの激痛。毎回耐えられそうにない。

下手をすれば倒れてしまふかも知れないだろ？

となれば、必然的……。

「先生にボロボロにされるしかないとですね」

「そつ嫌な顔をするな。もぢろん結界の中でやるから怪我はさせん

いや、でも痛みは味わうことになるでしょ？

そんな誇らしげに言われても全然安心感が湧かないぞ。

「とにかく実施日は来週の水曜の午前。授業はバスで、HRが終わつたら直接私と闘技場「ロッヂ」へ向かうぞ」

「…………わ、わかりました」

「ふふつ、楽しませてくれる」とを期待している。生徒タクマ

ゾクツとする咳きを耳に入れながら、俺は朝の教務員室を抜けるのだった。

・

「 ここへいどがあつたんだよ。ん、モグ」

その日の昼休み。今日の昼食は食堂ではなく天気のいい屋上ですることになった。

広げている弁当やパンは学園塔の購買通りで買ってきたものだ。

「なるほど、では来週が正念場になるのですね。ふふつ、頑張ってください」

今朝のことを簡単に話しあると、ミアがそんなエールを送つてくれる。

可憐な天使の笑みは今日も健在のようだ。

「ありがと。だけど頑張つてどうにかできることなのかねえ。かなり不安なんだが」

「そうね。少なくとも今までの迷宮探索なんかよりずっと痛い目に遭うと思つわ」

「あ、あんまり怖い」と言わないでくれよ……」

対照的に銀髪少女はいつもどおり人の悪い台詞を吐く。

今思つたのだが、こうこうこうとこり彼女は少しクリス先生に似ているかも知れないな。

ちなみにあの日以来、このトウカとの距離は特に変わらないでい

た。

「 もうこえぱ、お前、ひまひひせひてラフアーザを習得したんだ？」

炒飯のようなパラパラしたご飯を呑み込んでから、眼前の3人へ口を開く。

前にも誰かに訊いたような気がしたが、もう一度でも揃はしないだひひ。

「 じひやつてつて、別に特別な訓練はしてないよ。強いて言ひなら氣付けば作れるようになつたつて感じかな」

顔を見合わせるとテオが代表してそんな言葉を返す。

むむむ、やはりどこかで聞き覚えのある曖昧な答えだな。

「 あ、でもそれは数年この世界で生活していたら話だと思ひナビね」

「 そんなことだひとは思つてたよ。はあ、やはりぱつ先生の言ひつとおりにしないと駄目なのか……」

あの人と魔法決闘なんて嫌すぎる。私もそも決闘になるのかすら怪しいものだ。

おどき話のなかでも吸血族はかなり強く描かれていたからな。

というかそもそもあの人教師だし。

「 ふんつ、少し痛いぐらいで留年しないで済むんならいいんじゃないの？ 怪我もしないんだし。楽なもんよね～」

「 お前関係ないからって無茶苦茶言つてくれるなよつー！？」

心無い銀髪少女にそう白い視線を返してやるが……。

本当にどうでも良さそうな顔で蒸しパンを頬張つていらっしゃつた。

「うそ、いつか絶対にギャフンと言わせてやるぞ。」

「はいはこどりどりー 落ち着いてタクマ君、そしてトウカさん
は煽らない」

黒い雰囲気に包まれそうになつたところで魔王様の仲裁が入る。
俺は馬かと「う」突つ込みも言つ元氣も起らなかつた。

落ち着いた色の石畳と木々の緑、そして名も知らぬ色鮮やかな花々。

暖かな日差しを浴びながら、たくさんの学生がその道を歩くのが
覗けて。

あれからしばらくの後、俺は落下防止の為に張られた透明な魔法
障壁越しに一人外を眺めていた。

この屋上に上つたのは初めてではないが、このゆきくつと景色を
見下ろすと新鮮な気持ちになる。

「（にしても、今日も相変わらずいい天気だなあ。おつ、綺麗な鳥
も飛んでる　）」

見上げた蒼天を駆ける青い子鳥に、この前同じく空を舞つていた
ミリオムの姿がふと頭によぎつた。

そういえば、この世界は日本と違つて飛行魔法の年齢制限がない
んだつけ。

高等部生なら皆使えるみたいだし、近くに留得しておかないとな。

「アンタ、あと10分で昼休み終わるわよ。そろそろ戻つた方が
っつて」

そんなことを考へていると、後ろから銀髪少女の声が響いた。

「ちょっと、何ボーッとしてるのかしら。面白い物でも見つけたの
？」

「あつ、いや別に。ただ空見てたら飛行魔法使えるようになりたい
なって思つただけだ」

呆れ気味な表情を作るトウカへ考へていたことを正直に話す。
ミリオムでも習得していたのだから、どうせコイツはさぞ余裕な
のだろう。

「……それなら、教育係に相応しい奴がここにいるわよ?」

『私はできるわ』という皮肉が飛んで来るかと思ったら違つた。
少し間を置くと、銀髪少女は後ろを向いてその赤紫の眼光をテオ
へと向けたのだ。

えつ、テオがか? それってどういづ……?

奥でははと小さな笑い声を漏らす彼に、俺は訝しげに首を傾げ
る。

そして視界の端、天空を舞う青い小鳥はもつと高く蒼穹へ舞い上
がっていた。

Ep.5-2 【この蒼天を駆けたくて】

Episode 5-2 【この蒼天を駆けたくて】

開けられた窓から穏やかな風が吹き込む放課後の廊下。教室から出た俺とテオはコソコソとその道を進んでいく。目指している先は学園中心塔4階、仮想迷宮の入り口だ。

「しかし本当に驚いたな。テオがそんな有名人だったなんて」「そんな、ほんのちょっと顔を知られているだけだよ」

またまた『謙遜を。そのちょっとが凄いことなんだらう』。照れてはにかむ緑髪の男子生徒へ心中でそんな突つ込みを入れる。

さきほどの中休み、銀髪少女トウカの提言で俺は彼に飛行魔法を教わることになった。

といつにもちやんとした理由がある。

それは少し遠い話から始まるのだが、まあ聞いてもらおう。

『このリコミシアル界には魔法を使ったスポーツが数多く存在している。』

地球ならば怪我人死人が続出すようなものばかりだが、この世界にはそれを防ぐ空間結界がかなり発達しているため安心してプレイできるのだ。

例えばその中でも最も分かりやすいのは魔法決闘だ。結界がなければただの殺し合いであって、スポーツにはならない。他にも球技やら格闘技やらいろいろあるみたいだが、今は置いて

おいて話を戻そう。

そんなスポーツの中に飛行魔法を必須で使うものがある。

大空疾走^{ブルーム}といつ名前で、簡単にいえば飛行魔法で競うスピードレースらしい。

コースは仮想迷宮に作られているため、もちろん事故で怪我をしたり死んだりすることはない。

そして、なんとテオはそのスポーツの選手、しかも大会の常連入賞者なのである。

つまり彼は飛行魔法のプロフェッショナル。

教えてもらうにはこの上ない熟練者だろう？ それが理由というわけだ。

ま、別に教師の誰かに教わっても良かつたのだが、彼との方が楽しくできそうだしな。

「つかなんでそのこと黙つてたんだよ？ 今日だつてトウカが教えてくれなかつたら俺知らないまだつたじやないか」

「べ、別に隠してたわけじや……。なんか自慢みたいでしょ？ 自分から言つたら」

「まあ確かにそう取れなくもないな」

もつともな意見である。そりや自分からは言い辛いか。

「ま、とにかく今日はよろしく頼むよ。テオ先生」

「うん、任せて。絶対飛べるよ！」にしてあげるからさ」

さう爽やかにワインクを返してくれるのを見ると、やはり自信はあるようだ。

わざわざ時間を割いてもらひのだから、こちらも気合を入れて頑張らないと。

そんな決意を胸に、仮想迷宮入り口へのポータルをぐぐるのだった。

入った先は独特の雰囲氣のある色鮮やかなホール。中にはもうたくさんの中学生たちが迷宮へと繋がる魔法陣へ飛び込んでいた。

「早く来たはずなのにやたら混んでるな。皆そんなに魔物を狩るのが好きなのか？」

「あはは、まあいい運動にはなるからね。それにストレス発散にも」「な、なるほど」

そんな会話を交わしながら受付へ向かう。

仮想迷宮は放課後の間解放されているのだが、その運営は生徒会が担っているらしい。

役員に言つて、ダンジョンを作るナビを借りる仕組みになつているのだ。

「あら、誰かと思えば転入生クンとテオじゃない」

「うん？ あつ、リアさん」

受付にいた数人の生徒会の面々の中から、一人見知った顔の少女が声をかけてきた。

以前生徒会室で紅茶を駆走してもらった彼女だ。

あの時と変わらず長い茶髪のツインテールを靡かせている。

「あ、あれ、2人とも知り合いだつたのかい？」

「ええ。つい最近縁があつたのよ」

少し驚いたような声を出すテオヘリアちゃんはナビを手渡しながらそう答えた。

そのやり取りの様子を見るに、どうやら2人も顔見知りのようだが……。

「へえ、中等部の時のクラスメートだつたんだ」

実際に尋ねてみるとそんな事実が分かつた。

ちなみにトウカやミニア、ミリオムも同じクラスだつたそうな。

「そゆこと。だからあなたの面白い情報もたくさん入つてくれるのよね~」

「ど、どうことだよそれ？」

「ふふつ、例えばこれから飛行魔法をお勉強する、とかかしい

えつ、なんでそのこと知つてんのこの人？

悪戯な笑みを浮かべる少女へハテナマークを浮かべている。

「どうせトウカさんから聞いたんでしょ？ それ以外に発信源ないし」

「あら、テオにはバレちゃつたか。まつ、そういうことよ」

彼女の言葉に髪の毛を搔いて溜息を吐く。

またアイツが元凶か、あの性悪銀髪少女め。

「んで、リアさんがわざわざそれを俺に言つてきたつてことは何か

意味あるのか？」

「鋭いわね転入生。そうよ、君のためにちゅうとサービスをしておいてあげたの」

「サービスだつて？」

少し得意げな顔をしている彼女の視線を追う。

その先はテオが手にしているナビへと向けられていた。

「あつ、ホントだ。もうエリア設定されてるよ」

「つてことは、まさかサービスつて、先にダンジョンを作ってくれたつてこと？」

「大正解。飛行魔法には最適のエリアなのよ、そこ」

白慢気にそう言い放つリアさんに軽く礼を言つてから、俺とテオはダンジョンへと転移するのだった。

わざわざ仕事中に用意してくれるとは……。
うーん、生徒会の仕事つて暇なのかねえ？

・

「…………で、どこなんだよここには」

魔法陣へ飛び込んだ先に広がっていた景色に1人そんな言葉を漏らす。

見渡す限りスカイブルーな背景色とまるで果てのない空間。

そこかしこに半径2メートルもない浮島があつて、その下にはフワフワと浮かぶ白い雲が。

恐らく高所恐怖症の人が見たら卒倒するような光景だろ？

「どうかの浮遊島エリアを作ったみたいだね」

特に驚いたような様子もないテオの言葉にもう一度景色を見渡してみる。

浮遊島、天空に浮いている大地と島々。

どうこの原理でこうなってるんだよ。完全にファンタジーじゃないか。

何だから言つて今までのは地球にも探せばありそうなエリアだつたのに。

今回のこれは、明らかに洞窟や草原を凌駕していた。

「つか落ちたりしたらどうなるんだよコノ」

「試してみたらいいんじゃないかい。えいっ」

「え、その声リアさん？ つてつわあつー！」

楽しそうな声の茶髪ツインテールに背中を強く押されてしまった。いや、そもそもなんでアンタまでダンジョンの中に入つてきているんだ！？

そんな突っ込みや悲鳴を上げる暇もなく、俺の体は重力に従つて頭から落下していく。

「（ひつ、こへり）仮想迷宮でも地面に墜落したらヤバいんじゃ……」

怪我はしないと言つても、それなりの痛みは感じる仕組みになつてこる。

多分、いやかなりのダメージを受けることになるのではないだろうか？

体中に受けた風の抵抗に田を見開くと、そんな恐怖心を抱いた。が、なぜか急に「ううう」と吹き付ける風が止んで。

同時に体がフワッと浮いたような奇妙な感覚に包まれた。

「あ、えつ……？」

ゆつくつと田を見開くと、また不思議なことに緑の芝生に寝転がっていた。

あ、あれ？ ここは地面じゃないか、一体どうなってるんだ？ 混乱する頭で体を起こしてみれば、田の前にニーチコリと微笑む突き落とした張本人が。

「ほり大丈夫だつたでしょ。落ちると途中でここに戻つてくれるようにならてるの」

「だからって、いきなり突き落とさなくともいいだろうつー？」

彼女の言葉で状況を理解し、咄嗟に非難の声をぶつける。まったく、どこかの銀髪少女のような真似をしてくれるな。

「そ、そんな怒らないでよ。言葉で説明するより早くと思つたから、ね？」

「ね？ ジゃない。下手をすれば高所恐怖症患者になつてたわ。

「それで、どうじて着いてきたんだ？」

「そんなの面白そだからに決まつてゐじやない。ああ、生徒会の仕事なら大したことないし大丈夫よ」

いやそこまで聞いてないけど。つかやつぱり暇なんだな生徒会。

「 よし、じゃあ早速始めようか。タクマ君これ持つて」

そんな俺とリアさんのやり取りに苦笑いを向けながら、テオはそう言って一本の長い杖を手渡してきた。
どうやら空間魔法を使って取り出したらしい。それ今まで持つてなかつたからな。

「 うん。ええっと、なんなんだこれ？」

「メートルはありそつな漆黒の杖を両手に受け取り、何なのか尋ねる。

よく見れば先端に丸い翡翠色の魔石が埋め込まれていた。

「スカイロッド。飛行魔法をサポートするための魔法具だよ」
「飛行魔法のための魔力媒介？ ってことは、これに跨つて飛ぶわけだな」

「そういうことさ。いきなり素手で飛ぶのは難しいからね。ま、君なら数時間でそれなしでも飛べるようになると想つけど」

『わあ乗つてみて』と彼に知られるままロッドに跨つた。
お尻を付ける場所は少し広くなつていて、とりあえずは座りやすい。

「じゃあ次は魔法構成式だ。安定感のあるやつを用意しておいたよ

せりに彼は生徒証を起動して、そこから紋章とボルトが記されてい

る画面を見せてくる。

俺はロッドに跨つたまま顔だけを寄せてその式を頭に並べた。

「（なるほど、やはり飛行魔法らしく風の魔力を使つみたいだな）」

「うん、大丈夫だ。全然難しいフォーミュラじゃない。

せいぜいファイアボルトやフリーザリコショットと同じレベルの

魔法だわ！」

「どうだい？ わからぬ所とか問題はないかな？」

「お、多分行けると思うぞ」

「そう良かつた。それじゃ発動させてみてくれるかい」

了解と返して、ロッドの先端を握る両手に力を込める。

『まずは、風魔力装填……』

飛行魔法を使用する前の最初のステップ。

大気中の魔力の中から風属性のそれを集め、身体へと纏せて。

『安寧の風、飛べない小鳥に其の翼を授けよ、アーレクラージュー！』

覚えたばかりの式を頭に展開させ、記してあつた呪文をそのまま詠唱した。

そしてロッドを握る両手から集めた魔力をその中に浸透させていく。

それと同時に翡翠色の魔石から小さな輝きが放たれて。

「お、おお、飛んでるー？」

「ワッショとロッドが浮かび上がり、ほんの数十センチほどで地面の間に隙間ができた。

「よしよし、ちゃんと成功したみたいだね。後は君の感覚でコントロールできるはずだ」

「やうなのか？ やつてみるよ」

頼りなくふわふわ浮かぶロッドに鳥を任せ、浮遊島の上をゆっくりと旋回してみる。

なるほど、頭に浮かべた方向とスピードで飛べるようだ。

「ん、案外簡単にできるもんなんだな……。もう少し苦戦するかと思つてた」

そんな言葉を漏らしながら、ロッドを二人の前で静止させる。

「これで終わつたわけじゃないよタクマ君。まだまだや」「やうよやうよ。せめてこいつは飛べるよつにならなことない！」

「えつ、なに？」

横からそんな声を放ち、リアさんが媒介を使わずに飛行魔法を発動させる。

そして瞬く間に数十メートルの高さまで舞い上がって行つてしまつた。

まあ確かに、飛行魔法といつぐらひだからあのくらいには飛ばないとダメか。

「追いかけないのかい？ いい練習になると思つんだけど」

「あ、ああ。わかつてゐる……」

ただ見上げているだけの俺に尋ねてくる「オカホツ答へ、渋々両手に力を込める。

怖いなど弱音を漏らすわけにも行かないし。

俺はリアさんのいる天空に狙いを定め、飛翔の命令をロッドにて下した。

すると見る見るうちに高度が上がりていき、浮遊島に立つテオが小さく見えてくる。

蒼穹から吹き付ける風も強さを増していく。

「（うう、やっぱり結構怖いかも。人間って本能的に高いところ手だしなあ）」

下を一望して震えながらも来たわね。どう初めて空を飛ぶ気分は？」「最高な心地だよ。よって決してビビってなんかいないぞ俺は」「…………トウカの声とおり、分かりやすい男だわアンタ」

ぐつ、分かっているとも。今俺の顔が引きつっている。

「ま、それは別にいいとしてさつさと慣れなさい。スカイロッドべりに軽く扱えないと素手じゃ飛べないし」

「そりやせうだけど、そんなすぐには無理だよ

少し高いところで短いスカートを揺らすリアさんにそう返す。この高さで静止しているだけでもうこいつぱこいつぱになのだ。

「それじゃあ慣れるよ！」訓練しないとね。ていつ！」

するところなじリアさんに強めのトライペインを喰らわせられてしまつ。

「いってー!? ちょっと、いきなり何すん

「ふふん。悔しかつたら私に追いついてくることね～」

片手を伸ばして捕まえようとするもすり抜けられる。

振り向くと舌を出して挑発する茶髪ツインテールの姿が。

「なるほど、上等だッ！」

妙なやる気になられた俺は、同じく一ヤリと口元を舐ませてロッドに力を込める。

次の瞬間、天空に俺という軌跡が軽やかに描かれた。

「……あはは、リアさんに指導役取られちやつたな。でも大丈夫か、初期段階は彼女に任せても」

そんな光景を下方の浮遊島から見上げていたテオは、苦笑してそう呟くのだった。

Ep.5-3 【自信を持つて】

Episode 5-3 【自信を持つて】

無数に散らばる浮遊島と果てしなく高き蒼の世界。
夢のよひでそうではない、そんな空間を俺は駆けていた。
蒼穹より吹き付ける風に短い黒髪を撫でられながら。

「 じりゅうせえーっ！」

そんな掛け声を合図に頭の中で加速の命令をロッドへ下す。
同時に翠の魔石は光を放ち、魔法杖はそのコマンドを静かに受け
入れた。

ビュンビュンと風を切る音とその抵抗がだんだんと激しくなつて
いく。

この空飛ぶロッドに跨つてから、かれこれもう數十分は経つただ
らつか。

リアさんの“空中追いかけっこ”は未だに続いていた。

「ふうん、結構追いかけて来られるよひになつたじゃない。成長し
た？」

急加速で迫る俺の気配を察してか、少しスピードを落としたリア
さんが一いち方に田をやつて尋ねる。

彼女の長い茶髪ツインテールは流れる風に大きく揺れていた。

「ま、お陰でまだな。これの扱いには大体慣れたよ」

不敵な笑みと汗とを浮かべながら言葉を紡ぐ。

落下に似た急降下、ジョン・コースターのような宙返り。そんな複雑な軌跡を描きながら空を舞う彼女の後にはそれはもう大変だつた。

見よう見まねでやつてみたが、軽く10回はバランスを崩して墜ちてしまつたからな。

だがやはり人間やつてやれないことはない。

何十回もトライしている間に体が自然に覚えてくれる。そして……

…

「油断したなリアさん。」これで捕まえたぞつ

「ひやつー？」

その証拠が今この状況。

ロッドを彼女の横へと並ばせ、右手を伸ばし、小さな肩に力強く触れる。

リアさんは可憐らしき悲鳴を上げると口元を壓めて視線をこちらへ向けた。

「ふふつ、やるじやない。これなら次の段階に行つても問題なさそうね」「次の段階つてロッドなしか？ 素手で飛ぶなんてちょっと不安だな……」

「なに弱音吐いてんのよ。これからが本番だつてのこ

そう、ここまでは前半戦。ゴールは媒介なしで空を飛べるようになることだ。

テオ曰く、ロッドを使つてなせるよつになれば簡単に習得できる

らしいが。

日本じゃかなり難しいと言われていただけに、やはり少し気が引けてしまつ。

そんな一抹の不安を胸に抱きつつ、最初にいた少し広めな浮遊島へ降り立つ。

追いかけてこを下から観戦していたテオは、ロッードに跨る俺を見てにつこつと微笑んだ。

「いやあお帰り。下から見てたけどしっかり鍛えてもらつたみたいだね」

「まあそつらしいな。思わぬ助つ人のおかげで気付いたら自然にマスターできてたよ」

そう横田でツインテール少女を一瞥して黒のロッードをテオへ返す。

「へえー。なら転入生クン、素敵なお礼を楽しみにしてるわね」

「えつ、なにそれ今ので受講料取り立てるつもりなのか！？」

「あらあら本気にしないで冗談よ。じゃ、私はそろそろ仕事に戻るから、続き頑張りなさい」

リアさんは小悪魔な表情を浮かべると芝生の地に魔法陣を紡ぐ。そしてこちらが礼を言つのも待つてくれないまま、その光へと消えてしまった。

「（ええーっと、暇じゃなかつたのか？ 生徒会の仕事……）」

結局どうちなんだと突つ込みたい。

初めて会つたときは落ち着いた雰囲気でお嬢様っぽい感じの人だ

と思つたが、今日の少しひメー^ジが変わつたかも。

無邪氣なミリオムと不敵な冬^{トウカ}霞^{カスカ}を足して割つた、みたいな？

ま、それはどうであれ今度会つたらちゃんとお礼を言つておこひ。

「 よし、それじゃあ早速続きを頼むよテオ」

「 あ、うん。別にいいけど休憩はしなくていいのかい？」

「 そんなに疲れてないから大丈夫だ。それに鉄は熱いうちに鍛えておいた方がいいだろ」

やる気に満ちた眼光を送り、少し得意げな顔をしてみせる。今ならロッドを使つた飛行の感覚が鮮明に残つているからな。

その応用である“媒介を使わぬで飛行”も案外上手い具合に成功できるかも知れない。

加えてこの仮想迷宮^{ダンジョン}が使える時間はあと数時間しかないのだ。それまでには習得できるように気合を入れないと。

・

「 魔法構成式^{フォーミュラ}はさつき詠唱してもらつたのと同じだよ。ただ魔力を送り込む場所が違つだけ」

向き合つテオがそう説明しながら実際に手本を示す。

すると爽やかな緑髪を靡かせる彼の全身へ、優しい風の魔力が収束していくのが分かつた。

なるほど、ロッドではなく自分の体に魔力をエンチャントするわけか。

『行くよ、アーレクラージュ。』

そして魔法名を唱えると、穏やかな笑みを浮かべる彼の両足がフワッと地から放れる。

「……こんな感じ。空中での動きは君がセッキロッドを使ってた感覚と同じさ」

「うん、分かつたやつてみる」

方法を理解した俺は早速目を閉じて魔力のコントロールに集中する。

体内のヒートルを駆使し、空中に霧散するそれを体に纏わせるのだ。

ちなみに魔法自体はさつき行使したのがまだ持続しているため新たに詠唱する必要はない。

「タクマくん、そんなに力は入れなくていいよ。リラックスしてね

「あ、ああ……」

「そうそうその調子。後は魔力が霧散しないように安定化させりゃけだ」

テオのアドバイスを受け止めながら、徐々に魔法を発動へと近づけていく。

右手の甲には金色の小さな魔法陣が浮かび上がり、微かな光を漏らしていた。

よしよし、いい感じじゃないか。

「なあ、そろそろ行けそつな気がするんだが

「やつだね。僕も」れぐらいで十分だと呟つよ。され、飛んでみて

テオの言葉に頷き、その場で軽く小さなジャンプをする。
先ほどリーアさんとの追いかけっこで研ぎ澄まされた飛行の感覚
を抱きながら。

すると

。

「……わっ、いきなり成功！？ なんか普通に飛べたぞ？」

「あはは、そりや構成式もやり方も感覚も間違つてないからね。成
功して当然さ」

「そ、それはそうかもしれないけど」

左右前後に軽く飛行のテストをしながら「一んと唸る。
なんというか、その、あれだ。拍子抜け。

何回も言つが、日本での“空を飛ぶ魔法”は年齢制限があるぐら
い難しくて危険なのだ。

数年間命懸けの訓練をしても絶対に習得できるとは限らない。
そんな魔法を、俺は1時間も経たない間に習得してしまったこと
になるのだから。

「え？ んー、たぶんそれは君がいた世界の魔法構成式がイマイチ
な出来だったんだよ。不完全な構成式じゃ当然不安定な魔法しか行
使できないからね」

呟くよりは疑問を漏らすとテオがそんな言葉を返してきた。
なるほど、確かにそう考えれば納得できる。

どうりでこの世界じゃ中等部の生徒でも簡単に習得できるわけだ。

「それでどう？ ちゃんと上手くコントロールできるかい？」

「ああ、大丈夫だ。飛翔も静止もちゃんとできぬよ」

改めてこの世界と地球との差に感心している間に、もう十分に飛行魔法をコントロールできていた。

加速したり宙返りしてみたりすると、「へへ」と気持ちがいい。

「それはよかったです。よし、じゃあ練習がてらもう少し高く飛んでみようか」

まるで自分のことのように喜んでくれる彼の提案を受ける。10秒もかからない内に高度を上げ、数えきれない浮遊島を一望できるところまで来た。

ロッードに跨っていたときは恐怖心で見る余裕もなかつたが、今もう一度見下ろしてみるとなかなかの絶景だ。

「はあー、幻想的な景色だなあ。現実にもあればいいんだけど」

「へつ？」

目を細めてそう感嘆の声を漏らしていると、隣のテオが素つ頓狂な声を上げた。

あれ、俺は今何か変なことでも言つただろうか？

「あの、タクマくんも、もしかして浮遊島って現実には存在しないって思つちゃつてたり？」

あー、分かつた。分かつたぞ。理解してしまつた。

苦笑を浮かべるテオの顔と言葉から考えて、もう確実だ。

「その物言いはあるんだな、浮遊島」

「う、うん。そりやもう盛大にね」

互いに小さな汗を額に浮かべてそんな言葉を交わす。

参つたな、こんなファンタジックな光景が現実にあつたとは。

……いや、それ以前にそもそもここは異世界だつたか。

「ほりーーー。この大きい大陸がそれさ」

ナビ 生徒証の機能にある世界地図とガイドマップ。

その南東にある、大きく“ミラルム”と表記されている大陸をテオが指差した。

地図を見るにこの学園のあるヴェルエス街より数倍は面積があるよつに見える。

「これが浮遊大陸ミラルム……」

そのエリアをタッチすると何枚かの大きな写真が虚空に浮かぶ。無論それらはすべてその大陸の風景であった。

それは島ではなく大陸。

何がどうなつているのか、明らかに巨大な大地が浮いているのだ。その浮遊大陸の周りにはたくさんの浮遊島も写っている。

「すげえ、高い建造物もいっぱいある。上には普通に人が住んでるのかよ」

俺は夢中になつて地球には存在しなかつた“浮遊大陸”的ガイドや写真に目を通す。

隣の空中に浮かぶテオが苦笑しているが今は構わないだろう。

『リュミシアル南東の海洋に浮かぶ浮遊大陸ミラルム。賑わしい街並が続いているが、一方で自然が非常に豊かであり“空中庭園”とも呼ばれている。また過去は天界であったため、古代神族の城塞や遺跡が数多く存在する』

すらすらとそんなガイドを読んではいるが、一つ気になる単語が出てきた。

「……なあテオ、ここに書いてある天界って何のことなんだ？」
「え？ あつ、そうか、君はその辺のこともよく知らないんだったね」

トントンと俺に肩を叩かれたテオが一人納得して口を開く。

「天界っていうのは簡単にいえば神族の住んでる国のことだ。同じように魔族は魔界、人族は人界、竜族は竜界だよ。もつとも今この世界じゃ全部一つにまとまってるけどね」

「へえ、そうだったんだ」

ということは、昔はこの平和な世界にも種族対立があつたわけか。やっぱり戦争とかが勃発していたのかな？

ま、その辺はまた人に尋ねるか歴史書でも見ておこう。

青空の中で寝転がるようにしてガイドの続きをやる。

『よつて随一の観光エリアとされている。また一年を通して地上よりも気温が涼しく、夏には避暑地としても最適』

文字の横には白を基調にした神秘的なお城と本当に涼しそうな常緑の空中庭園の写真が添えられていた。

おおつ、すごいな。なんだか行きたくなってきたぞ。

「あはは、^{ゲート}転移門を使えば一瞬で行けるよ。それこそ国境なんてないからね」

「そうだったな。よし、余裕ができたら行ってみるか」

「あつ、そういうばニアさんの実家つてミラームにあるらしいよ。今度お宅訪問していいかって訊いてみたり?」

実家つておい。なんだ、あの娘は遠路はるばるこの学園に入学してきたのか?

ガイドを見る限りミラームにも大きな学校はあるはずだけど……。

「君は気付いてないかも知れないけど、リュミシアルつて世界そのものの名前が付いてるとおり、トップレベルの進学校なんだよ□□。僕たちみたいに異世界から来た転入生は別だけど、元々この世界の生まれの人は入学試験を受けないといけないんだから」

疑問の色を浮かべる俺を察してテオは少し真剣な顔で言葉を紡いだ。

おいおい、ずっと大きな学園だとは思っていたがまさかトップ校だつたとは。

「そ、それは知らなかつたな。つか俺らは入学試験受けなくていいつてのはどうして?」

「異世界からわざわざ連れてこられるんだから、基本的にハイスペックなんだよ異界生は。だから試験はバスで、適当な学校に入学や転入ができるわけ」

「んー、異界生がハイスペックねえ……」

田を細めて再びむむと唸つてみせる。

確かにこのテオやトウカは頭よれやつだし、実際に優等生だ。が、同じ異界生でも講義をいつも寝過ごしてゐるリオムとリグナは余りそつには見えないぞ？

「そ、それはあの2人がサボつてゐただけで、やる気を出せりゃあひとつ凄い、はず。……うん」

「テオよ、視線がめちゃくちゃ乱れてるぞ。
どうやらあの2人に関してだけは例外のようだな。

「と、とにかく、基本的にはみんな輝くモノを持つてゐる。君もその異界生の端くれなんだから、ちゃんと才能はあるわ」「果たして本当にそうならいいんだけどな」「嘘は言つてないよ僕。実際に飛行魔法、短時間でちゃんとマスターできてるじゃないか。もっと自信を持つて…」

セツハーロウと見ていて嬉しくなる笑みを向けてくれる。

「……そつだな。ありがと、何かよく分からんけど来週の試験頑張れそうだ」「ははは、タクマくんなら絶対合格できるさ。まあ少しは痛い目に遭うだらうけどね」「ト、トウカじゃないんだからお前まで怖こいつはなよー…。」

少し黒い声に非道いぞと突っ込みながら思考する。

「（この世界に来て最初の壁だな）」

せつかくクラスにも馴染めてきているのだし、やまつ留年はしたくない。

テオやトウカの言つとおり辛い戦いになるのだろうが、何としてでもこの進級試験を乗り越えなければ。

頑張るつと改めて気合を入れてから、手元にある生徒証^{ナビ}で現时刻を見やる。

「もう夕方が。いい時間だ、撤収しようぜ」「おつけ了解、お疲れ様だつたねタクマくん」「お前じゃ。今日は本当に助かった、ありがと」

そんな礼の言葉をかけてから浮遊島エリアの仮想迷宮^{ダンジョン}を離れる。魔法陣で転送された先のホールに付くと、早速受付にいるリアさんへナビを返した。

「ふうん、無事に成功したんだ。ま、最初にやつた私の指導のおかげよね」

彼女にも報告してお礼を言つと、少し恥ずかしそうにどこかホッとした表情を浮かべてくれる。

世話になつた2人には今度昼食代でもお^じらないといけないな。

割と真面目にそんなことを考えながら、茜色の光が差し込む帰り道を歩いていた。

Episode 5 - 4 【進級試験を突破せよー】

Episode 5 - 4 【進級試験を突破せよー】

ついにやってしまった進級試験当日の朝。

「う、これは不吉だとしか言えないぞ……」

今日の天気は少し雲行きが悪いようで、灰色に染まつた空が薄暗い。

この世界に来てから初めて見る空模様である。
いつも無駄に晴れていたのになあ。よりによつてこの日は曇るなんて……。

「あ、おはようタクマくん ってなんか元気なさそうね？」
「お、お、お、運命の日にそんな辛氣臭い顔すんなつーの。も、と氣合入れわつて！」

ぼんやりと教室の窓の外を眺めていると、何人かのクラスメートたちにそんな声をかけられる。

「辛氣臭い顔で悪かったな。うちはフレッシャーで押し潰されそうなんだよ」

天気もまるで狙つたみたいに暗いし、と重い息を吐いて言い返す。

どうして清々しい気分になどなれよつか。
それどころか緊張と不安が高まっていくばかりである。

「た、確かにいつもより空が暗いとは思つが考へすぎだろ。杞憂つてやつだ」

「果たしてそつなりいいんだけど」

小さく唸る俺に気にするなとクラスメートAが笑いながらバンバンと肩を叩く。

つか痛い。くそ、なんだか余計に心配になつてきただぞ。

「あら、辛氣臭い間抜け面。朝っぱらから嫌なモノを見てしまつたわ」

窓から離れて自分の席へ向かおうとするが、今度は透き通るような少女の声が飛んできてる。

クラスではちっちゃめの身長に赤紫の瞳と銀の髪。

反射的に振り向いて見ればその主が嫌らしい笑みを浮かべていた。

「ぐつ、お前こそ朝から不快な」挨拶だな。冬霞さん。

「わかつて言つてるわ。ちなみに一応は本当のコトよ、鏡でも見てみなさい」

「そんなに酷いのか俺の顔は……つてそつじやないー。」

ブンブンと顔を横に振つて銀髪少女から目を逸らす。

まったく、朝っぱらから嫌なモノを見てしまつたのはこちらの方だ。

「挨拶はそれだけか？【冗談以外の用がないなら俺は行くぞ】

どうせ無いのだろうし、そう言葉を紡ぎながら足を動かす。

が、2歩ほど進んだところで右の手首が温かく柔らかな感触に包

まれた。

なんだと驚いて目をやればトウカがその小さな手で握つていて。

「待ちなさい。少しアンタに伝えておく」とあるわ

「待ちなさい。少しアンタに伝えておく」とあるわ

鋭い眼光を見るに、どうやら今回は「冗談ではないらしい。妙な緊張感に唾を呑みゅつくりと俺はトウカへと向き直る。

「もしアンタが今日の進級試験に落ちてしまつたら、大変なことになる」「そりゃそうだ。留年なんてして誰かさんの後輩に成り下がつたら毎日苛められそうだし」

「ふん、そんなチンケな問題じやないわ。もっと大変なことよ」

割と真面目に考えていたことをバッサリと否定される。

本当に俺にとつては大変なことなんだけどな……。

「じゃあ何なんだ。そのもつと大変なことやらを教えてくれよ」

嫌な予感がしながらも話の続きを促す。

すると周りに聞こえないようにするためか、トウカは俺の耳元に顔を寄せ。

「とつても簡単なお話。留年なんかしてこれ以上私と実力差が付けば、アンタは一生私に勝てなくなるわ」

小さな小さな声でそんなことを囁いた。

なるほど、それは確かに大変なことじやないか。

魔法決闘で彼女に勝たなければ、俺の消えた記憶と一緒に謎は闇

の中のままなのだか。

「そうだな。ははっ、絶対合格しなきゃならん理由が増えたよ」

「ふふっ、それでいい。だいぶマシになつたわ」

天気なんて関係なく頑張らないといけないなと笑つていると、吹き出すように銀髪少女が小さく咳く。

何がマシになつたって？

「アンタの顔よ。さっきのはせっかく来た福が逃げるほど酷かつたもの」

そ、そんなにか？ 確かに少し元気が無いような顔だったかも知れないが……。

背を見せて去つていいくトウカを見送りながら、マシになつたという今のがどんなものだろうかと想像する。

もちろん明確な答えが出るわけもなく、早々に朝のHR開始のチャイムが響くのだった。

「 今日も特に連絡事項はないのでHRはこれで終了だ。今日も一日大切にな」

靡くのは2つに束ねた長い金のツインテールと純白のローブ。

トウカと同じくちつこい背をした吸血族の担任はそう告げて俺に目配せをする。

真紅に染まつた瞳から届いたメッセージは“来い”といつシンブルなものだった。

「おっ、転入生様の」出陣だぞ！ 通られるその道を開けろ下衆どもめ～」

よこしょと重い腰をあげるとクラス中から激励と冷かしが混ざったような声が飛び。

なんだらう、この嬉しいのに苦笑いが浮かんでしまう現象は。

「正念場だぜタクマつち。サクシと吟格しまえ……ぐがあまあ適当にやつてりゃなんとなるわよ。すう～」

席の両側から半分寝ているワグナとミリオムの応援が聞こえる。笑みに歪んだ口元と半開きの瞳は覗けるが、お前らにいつく時べらい体を起こしてくれよ。

視線と声援が向けられるままクリス先生の待つ廊下へ出た。

「さて生徒タクマ。運命の日だが気分はどうかな？」

「はい。正直さつきまでかなり不安でしたけど、アイシラのおかげで何とか頑張れそうです」

小さな笑みを浮かべて静かに教室の扉を閉める。

「ククツ、それはいい。なかなかどうして期待してよせりうじやないか」

「ええ、留年はしたくないですからね。アイシラの後輩になるのも嫌ですし」

「そうか。よし、それでは早速闘技場コロッセオへ向かおつ

少しそんな会話を交わしてから移動しようとすると、急に閉めたばかりの扉が激しく開かれる。

ビクッと体を震わせてなんだと振り返れば、中からよく見知った顔が姿を覗かせた。

「ミア？ どうしたんだよそんなに急いで」

トウカやクリス先生と同じ背に桜色のミニシインテールを揺らして。

ミアのいきなりの登場に先生と困惑していると、小さな汗を頬に浮かべたその天使はこちらを見据えた。

「い、いえタクマくんに大切なメッセージを伝え忘れていたので。2組全員からの伝言です。あなたが合格すればとっても楽しいご褒美を用意する、だそうですよ」

それだけ言うといつもの可愛らしい笑みを浮かべ、颯爽と教室の中へと戻つて行つてしまつ。

な、なんだつたんだ？

「楽しいご褒美つて一体何でしょうね？ もう少し具体的に教えてくれればいいのに」

「ふふつ、合格してからのお楽しみといふことだな。ちなみに私も何なのかは知らんぞ」

「そ、そなんですか。うーん、気になるなあ」

2人で謎のご褒美について考えながら、ゆづくづとクロックセオへの道を歩いていた。

・
・

第2クラスの教室を出てから数分後。

あれよあれよという間にコロッセオへと辿りつく。

ほとんどの学生たちは各自の教室で1時限目の講義を受けているため、屋外はとても静かなものだった。

「 よし、これで入って来れんだろう」

壮大な円形闘技場の真ん中で深呼吸していると、そんなクリス先生の声が耳に届く。

どうやら何かの魔法を使っていたようだが……。

「何をしていたんです？」

「いやなに、授業をサボつて覗きに来るような馬鹿どもが入って来れないように結界を張つておいたのさ」

「あなるほど……つて結界を！？」

あまりにもしつと言つものだから流してしまったになってしまった。

地球では全く解説されていなかつた光魔法。

その性質として空間操作や障壁魔法があるのだが、その難易度は他の魔法を遥かに凌駕している。

俺もこの世界に来て少しだけ知識を得たけれど、本当に小規模なものしか扱えない。

闇魔法も合わせて授業について行けないしな。

とにかくもそんな高度な魔法をこの巨大なコロッセオ全体に施したとなると……。

「（正氣の沙汰じゃねえ。いや、やつぱり教師だけはあるつてこと

かな)」「

すげえと感心しつつも「これから始まる進級試験に身震いをしてしまつ。

だつてこんな人と魔法決闘するんだぞ? どう考へても怖すぎる。

「そひ、準備も済んだことだし早速進級試験を始めよ!じやないか

生徒タクマ」

「は、はい。わかりました」

そんなことを考へている間に楽しそうなクリス先生の声が飛ぶ。
ぐつ、いよいよか。

「それで具体的に俺はどうすれば?」

「先週に言つたとおり私と魔法決闘するだけでいい。まあもつともお前は私の攻撃魔法に当たらないように逃げまわるしか無いわけだから、これと言つて決闘にはならんのだがな」

ニヤリと相変わらず嫌らしい笑みを浮かべながら中央の一際大きなコートへ足を進める金髪少女。

決闘にもならない、か。この先生もなかなかキツいこと言つてくださるな。

言い返せないので乾いた愛想笑いで彼女の後に続いていく。

さて、歩いている間にこの進級試験の内容をもう一度おさらいしておこう。

田標はホテルの高密度顯現体、通称ラファーゼの生成だ。

先生と魔法決闘を行い、痛みというシンプルな刺激で生成できる力を呼び覚ます、らしく。

失敗すれば4月から新一年生として留年になってしまふが、逆に合格すれば転入前の単位とは関係なく一年生へ進級できる。

「（トウカを倒すためにも留年するわけにはいかん。絶対に合格するぞ）」

そんな決意を抱いてクリス先生から数メートルの距離を取つて対峙する。

一昨日ニアから教わった空間魔法で魔法銃を取り出し、戦闘の準備は完了だ。

「準備はいいようだな。ならばさつそく
「えつ、ちよつ！？」

試験開始の合図かかるまでと力を抜いてリラックスしていると、唐突にそんな声が響く。

嫌な予感に目を見開けば、いつのまにか展開された青い魔法陣と妖しく微笑む金髪少女の姿があった。
おいおい嘘だろお！？

「ぐうつ、つうー。」

障壁魔法を張るという反射的な行動も間に合わず、紋章より放たれた氷の刃が俺の全身を貫通していく。

直後全身に襲い掛かる灼けるような痛みにギュッと顔をしかめた。

「ちょっと先生、いきなり攻撃なんてメチャクチャじゃないですか
つ！？」

「ふふつ、なら今のが試験開始の合図にしよう。まあ続けるぞ」

俺の非難をそつ一蹴りして、ちびっ子教師は次なる魔法を構える。
「けりの回復を待つてくれる気はさらさら無いらしい。

『くつ、遮断せよエーテルバリアッ！』

Ether Barrier

「なんだそのペラッペラの障壁は。防御体勢のつもりか？」

来るべき魔弾に光の障壁を張る俺を見て、クリス先生はつまらな
そうな声を漏らす。

彼女は溜息をついて詠唱を放棄すると、拳を握り。

「こんなもん魔法を使つまでもないな」

「んなツ！？」

そんな、バカなことが！？

目の先に突き立てられた小さな拳に田を疑う。

先生の放った右ストレートは、あろうことかエーテルバリアを突
き破ったのだ。

「グツ、ガハツ、ゴホツ！　くつそいつてえ……」

それだけではない。俺はその衝撃で後方へ吹き飛ばされる。
受身を取ることも叶わずに全身を強く打ちつけてしまった。
まったく、あのちっちゃな体のどこからこんなパワーが出てくる
んだ？

「ははっ、けりや予想してたよりはるかに圧倒的ですね。開始1分

でもうバテバテですよ俺は」

「やう言つなよ。まだウォーミングアップだろ？？」

悲鳴を上げる体に鞭を打つて立ち上がる。

すると金髪の吸血族少女はすぐ遠いところまで腕を組んでいた。
いや、俺がこんなところまで殴り飛ばされただけか。

「それに私も生徒相手に本気は出さないよ。あくまでも初歩的な魔法しか使わんから、精一杯抵抗してくれ」

「そりや言われなくとも抵抗しますけど、ラフアーゼ生成はどうです？」

「もつと痛めつけでボロボロになつてからだな。いい頃になつたら指示を出すわ」

なるほど、その指示が来るまでは先生直々の実戦訓練ということか。

勝てる気など全くしないが手加減はしてくれるみたいだし、少しひらげは抵抗できるかも知れないな。

『さて、お喋りはこのあたりにしておいて続きだ。貫け、蒼穹の魔雷』

思考する俺を他所に先生は魔力媒介もなしに素手で魔法陣を編み出した。

暗い大空に浮かび上がる巨大な紋章はバチバチと紫電を光らせる。

「（……上空からの電攻撃。速く動かないと撃ち抜かちゃうな）」

魔法陣から読み取れる構成式からその攻撃パターンを把握すると、こちらもすぐさま対策を実行へ移す。

『翼を授けよ、アーレクラージュ』

先週テオから教わった飛行魔法をかけ、急いで地を蹴り駆け出した。

これを使えば数倍の速さで移動できるしライトニングもなんとか撒けるはずだ。

すると案の定さつきまで立っていた位置に激しい魔雷が突き刺さる。

少しでも判断を誤つたり遅かつたりしていたら直撃していたな。安堵すると同時に右手に握る魔銃に力を込めた。

「次はこいつの番ですよ先生ッ！」

大きな声でそうクリス先生へ宣言し、飛行魔法の付加された体で高く空へと舞い上がる。

瞬く間に電撃を生み出している魔法陣の傍へ接近すると、まずそれをチャージしていた魔力弾で破壊した。

「ほお、破つたか。といふか知らん間に飛行魔法を習得していたのだな」

消滅した魔法陣を見てクリス先生はそんな感嘆の声とニヤリとした笑みを浮かべる。

これで少しあは成長したと思つてもらえたかな。

『まだまだ行きますよ、水魔力装填……』

数十メートル上空に陣取り、白銀の魔銃へ水の魔力をエンチャントしていく。

同時に脳内での得意な魔法構成式を組み立てて。

『氷精の宿いし飛礫よ、我が仇敵を切り裂き屠れ。氷結の跳弾ツ！』

Presented by
Freeze Project

高らかに強化の呪文とその魔法名を詠唱してトリガーを引く。直後生成された氷の飛礫は隙間ない密度でクリス先生へ襲いかかつた。

「（最大限の強化もしたし、一発ぐらい当たってくれればいいのだけど……）」

迫る氷の魔弾に未だ腕を組んで嫌らしい微笑を続けるクリス先生。一抹の不安とでも言ひべきか。その余裕な態度に嫌な予感が胸をよぎる。

対抗魔法で弾かれるか、それとも簡単に結界で防がれる？

そんな数多くの可能性を頭に浮かべながら俺は追撃の魔法を構えていた。

直後、田の前で起こるありえない現象に度肝を抜かれるのを知らないまま。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.5・5 【吸血姫より愛の鞭を】

Episode 5・5 【吸血姫より愛の鞭を】

地上の金髪少女を覆うように上空へ展開された青の魔法陣。その紋章より放たれた氷塊の魔弾が音もなく一気に降り注ぐ。

「（まだ、動かないのか？）」

数メートル上空で静止しながら相手の動きを静かに伺う。

一体どうするつもりなのだろう？

結界を張るにせよ対抗魔法を使用するにせよ、早く魔法式を編まないと間に合わない。

それなのに、この人は腕を組んでただ嫌らしく笑っているだけだ。

瞬く間に先生と魔力弾の距離は縮まっていくばかり。

そしていよいよ先頭の氷弾が彼女の体を捉えようとした、その時

。「えつ、なに！？」

思いがけないことが起こった。

クリス先生へ直撃する寸前で、氷の刃が突然ピタリと静止したのだ。

しかもその後ろに続く残りの魔弾まですべて空中で動かなくなってしまう。

な、なんだ？ 一体何が起こって

。

「ふふつ、そう驚くなよ。ただ私の固有結界に防がれたというだけの話だろ?」

「……固有結界、ですか」

楽しそうに見上げる金髪少女をキッと睨みつけて思考する。

固有結界といえば、無意識的に生成される魔力障壁だっけか。

「ああ。そして固有結界で防がれた魔法はその行使権が相手に移るのだよ」

「うわあそりや非道いですね。その魔力弾全部先生に乗っ取られたというわけですか」

「そのとおり、こんなふうになつ！」

高らかなクリス先生の掛け声で俺の目の前にあつた魔法陣が先生の手元へと転移する。

続いて彼女に向けられていた氷の刃の先端が、ぐるりと俺へと向けられた。

「こりゃマズいんじやないか……？」

『まあとにかく逃げるしかないよな。ファイアボルトッ！』

追撃のためにチャージしていた火炎弾を数発撃つてから後方へ飛び。

あの最大限に強化された氷の魔力弾、恐らく岩でも碎けるレベルだ。

先生は容易く受け止めたみたいだけど、当然そんなもの俺の魔力障壁では防ぎ切れん。

だからできるだけ遠いところで回避するしかないだろ?』

「甘いな生徒タクマ。いくら逃げようとも量があるのだから……。避けられんぞ」

全速力で空を駆けていると、そつと聞こえるクリス先生の念話が頭の中で響く。

「へり、もう来やがったか？」

嫌な予感に後ろを見やると氷の刃はすぐ後ろまで迫っていた。飛行魔法で加速してゐるのに。こそ、速すぎるだろ。

思いつ切り真横に進行方向を変えて魔弾をやり過ごす。そのまま外れた氷の飛礫はコートに張られた結界にぶつかり消滅した。だが安心は全くできない。先生が操れる魔力弾はまだ腐るほどあるのだから。

「えいっ、やっ、はっ、とー、ふう、キリがないな」「ほお、なかなかどうして頑張るじゃないか。そろそろ当たってくれてもいいのだぞ？」「んなもん全力でお断りですよ」

キッパリそう言い放つて延々と襲い来る魔弾を空中でかわしていく。

こんなもん当たつてなどたまるか。いくら結界の中でも直撃した時の痛みは計り知れない。

「だがこれで終わりや。試験合格のためにもここでダメージを受け

ておけ

そう言つてパチンと先生が指を鳴らすと急に氷の飛礫がその軌道を変える。

5つほど氷塊は今までの直線ではなく螺旋状に迫ってきたのだ。

「んなつ、ちよ、いんの避けられ　！？」

体を捻るだけでは避けきれないと判断し急いで降下するも、やはり遅かった。

自分で生成した氷弾は滑らかに俺自身の右胸を突き抜けてしまう。

「ぐあッ！？」

直後襲い来る激しい痛みに顔を歪め降り立った地に跪く。
この結界内ではいかなる攻撃も体をすり抜けるだけで負傷しない
が、ただ痛みだけは感じる。
それも体が内側から灼けるような嫌らしいモノだ。

「ハア、ハア、結構ダメージ受けちゃったな……」

「まだまだ動けるだろう。あと數十分は頑張つてもいいぞ」

「そんなちょっとぐらい休憩を　つてそれじゃ意味ないんだつた
な」

いつの間にか田の前に立つちびっ子教師へ文句を言おうとして止
める。

どうやら俺はもっと追い込まれないとラフアーゼを生成する力が
覚醒しないらしい。

果たしてその前に痛みのショックで失神しなければいいのだが。

・
：

クリス先生との魔法決闘が始まつてもう一時間の時が経つ。気付けば灰色の空もその雲の切れ間から僅かに陽の光を覗かせていた。

「（しつかし本当に勝てる気がしないとはこのことだな）」

被弾の痛みが残る体に鞭を打ち、もう一度先生との距離を十一分にとつて対峙する。

あれから何回も攻撃を仕掛けたが、どれもヒットせず返り討ちだ。

たつた今もファイアボルトの爆風に吹き飛ばされたばかりだし。

「ふふっ、どうした？ 隨分とくたびれた顔じゃないか
「どうしたも何も……」

アンタがやつたんだろう。

クククと嫌味な笑みを浮かべる彼女にもう何度目かわからない溜息を吐いた。

「つか先生、もう十分にダメージを受けましたよ俺。そろそろ次の段階へ進んでもいいんじゃないですか？」

「いや、まだ僅かに足りぬ。あと一発ぐらい喰らひもらおうか
「うつそ！？ ちょっと、これ以上やつたら本当に倒れちゃいますつてー！」

流石にもう終わりだろうと尋ねたのに予想外の答えが返ってきた

な。

くそ、まだ続けさせらる奴なのか！」の鬼畜教師め。

「やう言つな。たまにはそのへりこの無茶も必要だろ？お前は若いのだから」

「へえへえ」

見た田ギリギリ中等部生のアンタに若いつて言われても説得力があレだけど……。

ん、いやもう何も言ひまへよ。

「！」今まで氣張つた褒美だ。最後は私の得意な闇魔法を見せてやるう

「うげつ、それ今のところ一番の苦手分野なんですか？」

「そうかそうか。ならば補習といつ意味でもちよづどいいな」

あからざめに不満な顔をしてみたが逆効果だつたようだ。
口元を二ヤリと歪ませたクリス先生は早々に魔法構成式を組み立てていく。

漆黒に染まる闇の魔法陣。その不気味な紋章は瞬く間に少女の足元へ展開していった。

『いつ死んでみる氣で避け切つてみせる。闇夜の煉獄に散れ、
月下影刃ッ！』

「ぬわッ！？」

今は朝ですよと突つ込もうとしたが、全身を包む黒い予感にすぐさま横に地を蹴る。

最近は思考より先に感覚で動いてしまつよつになつたな。

だがその感覚と行動は何も間違つてはいない。

なぜなら今さつきまで俺が立っていたところには

地に映える影より伸びた真っ黒な何かで、四方八方から突き立て

られているのだから。

「ちょっとあれ当たつてたら串刺しじゃないですか。趣味悪いなあ」

必死に走りながら苦笑を浮かべる。

闇魔法、ね。光と並んでその知識が欠けている俺にはあまりよく分からぬ魔法だ。

「ふふふ、第一波は無事に避けてくれたか。まだ元気に動けるようだし、やはり今一度踊つてもらおう」「そんな勝手に決めないで つてつざやあッ！？」

先生の足元の小さな影が怪しく蠢き、長い槍となつてこちらへ飛んでくる。

急いで地に伏せ頭のすぐ上を突き抜けていくそれを紙一重でやり過ごした。

つたく、じつちの体力はもう全然残つてないつてのに！

「絶対イジメですねこれ。最後にこんなえげつない魔法を」

「ふん、何を言つ。これが俗に言つ愛の鞭さ。そういうわけでもう一発ツ！」

「くつともう何なのこの人！？」

『愛の鞭』てオイ。

悪魔のように晒しながら攻撃を放つその姿はどう考へても悪者にしか見えませんよ。

しかしそんな文句はあいにく受け付けていないのか。

影の刃がありとあらゆる方向から解き放たれ、クリス先生の猛攻は止むことなく俺を襲う。

長い。いつまで持続してるんだこの攻撃魔法は。

「（いい加減）のままじゃジリ貧だぞ……」

もともと疲労の溜まっていた俺のステップはすでにその爽快さを失いつつある。

ギリギリでやり過げてしまふ今のうちに何か別の手を考えないと。

……とは言つても、いつやつて逃げまわる以外何ができる？

精神力的に飛行魔法はもう使えないし、当然強大な攻撃魔法も擊てない。

つかそもそもあのちびっ子先生には俺の攻撃全ツ然効かないし！

「つをおやべえ何も思いつかねえ！？」

結局口から漏れたのはそんなお手上げの言葉。

ヤケクソになつて適当な魔力弾で迎撃してみるも、その黒い闇に呑まれて相殺すら叶わない。

「ちいシ、ダメか」

「ふむ。どうやらこれ以上長引かせても意味はなさそうだな」

終わりにしてやるかというクリス先生の声が耳に溶けてから数秒後。

体力の限界に動きの鈍さが許されないレベルまでに達してしまつ。

「うへ、しまつ　　ー？」

そうなってしまえば後はただただ一方的。

影の刃は静かに俺の体を捉え切り裂き、そして刺し貫いていく。痛みと悪意の闇に視界が黒く染まる中、僅かに覗けたのはそれはそれは満足そうな担任の笑みだった。

クリス先生、やっぱりあなた悪者の顔に見えますわ。

・
：

金髪少女の必殺攻撃に地へ伏せられてから数分後。

「あいたたた……。もひ、ほんつとうに容赦無いですね」

あれがミンチにされるときの痛みか。もう絶対に味わいたくないな。

やう心の中で咳きながら眼前に立つクリス先生をじっと睨んだ。

「阿呆、こんなもんで音を上げてどうするか。お前より年下の女子生徒でももう少しは粘つてくれるべ」

「うぐつ！？ や、それを言つてしまわないとぐださこよ」

ギロリと光る深紅の瞳とキツい言葉にもはやぐうの面も出ない。嘘だと信じたいが、やっぱり本当のコトなんだよな。

「まあいい。それより進級試験はまだ終わっていないだ。ひとつとラフアーゼを顕現させてしまえ」

「あっ、そうでしたね」

あまりにも激しすぎる魔法決闘に本来の目的を忘れていた。

「 そうだ、まだ進級試験は終わっていない。」

「 でも本当に成功できますかね？ 正直めっちゃ不安なんんですけど」

ゆづくじと立ち上がりながら隣の先生へ尋ねてみる。

「ふふつ、さあてどうだかな。私はこれ以上ない最高級のお膳立てをしてやつたつもりだが、最後はやはりお前の気力次第だろ？」「気力次第とはそれまた曖昧な」

「ま、私を含めせいぜい皆の期待を裏切ってくれるなよ。タクマ＝ミツルギ」

耳元でそれだけ言い捨てる、クリス先生は小さな手で俺の背中を押す。

そして集中の邪魔になるからと後ろへ下がって視界から消えていった。

「（……期待、期待ね。あんまりされても困るんけど）」

彼女の言葉に少し嬉しさを感じながら、俺は気付かれないようこ頬を緩めるのだった。

「すう、はあ……。よし、やるぞ」

数回大きな深呼吸をして瞳を開ける。

あともうひと頑張り。全力を出せばこの試験を突破できるはずだ。

そう強く覚悟を決めてから右手を真っ直ぐ前へ伸ばす。

「まずエーテルを体の一点に集めるんだつたよな」

先週クリス先生に教わったことを思い出すよつとして小さく呟く。
すると生命力であるエーテルは俺の意思によつて静かに収束を始めたのだが。

「（あ、あれ？）」

なんだ、この妙な感じは？

前に職務室で試した時とは手応えが全然違う。
あの時と比べてはるかに多くの量のエーテルが手の先に集まつていくのだ。

……先生の愛の鞭、本当に効果があつたんだな。
最後まで凝つっていてスンマセンでした。

クリス先生へ謝罪の言葉を心中で紡ぐとすぐさまエーテルの操作に集中しなおす。

「よし、あとはこれを体の外へ押し出せば……」

熱を秘めた右拳に力を込めるど、これまた苦戦していた前回が嘘だつたかのようにエーテルが体外へ放出された。

白い光の粒子なり圧倒的な勢いで溢れ出していくエーテルの嵐。
そこから発生させるエネルギーは空間に霧散する魔力を激しく搖さぶつた。

「うう、くう……。あと、もう少しどつー！」

ラストスパートと言わんばかりに更なるエーテルを外へと押し出す。

もう右手なんかは灼け溶けてしまいそうな感覚だ。

「なんか知らんがこれは行ける予感！ うおおッ！！」

大きな声で叫びながら、最後の力を振り絞る その時だつた。進るエーテルの嵐は爆発的にその勢いを強め、真っ白に視界を塗り替え潰す。

くつ、身体全体が熱い。視界も焼けたみたいに何も見えないぞ……。

そんな困惑も束の間、次第につつすらとだけ目に落ち着いた景色が戻ってきて。

「 ッ！？ これ、は……」

右手に残る何かの感覚に視線を飛ばすと、そこには 。

一本の、ほんのりと青みのかかつた細身の長剣が握られていた。

- coming soon next story ! -

Ep.5・6 【夢幻の予感】

Episode 5・6 【夢幻の予感】

天空より降り注ぐ陽の光に輝く青白色の長剣をじっと見つめる。いつの間にか暗雲は蒼穹に塗り潰され、空は紛うこと無き快晴に変わっていた。

「これが俺のラファーゼ……か。なんだ、魔法銃じゃなかつたんだな」

てっきり今の今まで銃か魔法杖だと思い込んでいたのだけど。
それがまさかこんなたいそうな刀剣が出てくるなんて……。

射撃系の攻撃魔法が得意で近接戦に滅法弱い俺には到底似合わない魔力媒介だろう。

「うーん。って、あれ？」

どうしたものかと戸惑いの笑みを浮かべていると、ふとある「」
に気付いた。

「（少し軽すぎやしないかこれ？　ぶんぶん振り回せね）」

軽量化の付加魔法も行使していないのに、1メートルはありそつな細身のそれは重さを全く感じさせない。

ベタに言えば羽根のように軽いといった具合だ。
むむ、こんなので剣圧の方は大丈夫なのだろうか？

ま、別に今それはいいとして。

「なんとか終わりましたよクリス先生」

「うむ、よからう。生徒タクマ＝ミツルギの進級試験、その合格を認めようぢやないか」

「ありがとうございます！　いやあよかつた合格できて」

何の文句を付けられたることもなく後ろに立つ金髪少女からその文字を貢えて頬を緩ませる。

ふう、なんとかこれで最初の壁は突破できたな。

「それで先生、これからどう　ぐつー？」

どうしましようかと口にしようとしたが、いきなり視界がぐにゃりと歪む。

全身の力が抜けてしまい思わず冷たい石畳の上に崩れ落ちた。か、体が動かない？　一体なにが起こって…？

「つとと、おいおい大丈夫か？」

「す、すみません。急に目眩が……。それになんだか、眠く……」

駆け寄つて支えてくれる先生へ意識をつなぎ止めて言葉を紡ぎ、うとする。

しかし襲い掛かる強烈な目眩と眠気に自然とその気力も失せてしまう。

結局抵抗の甲斐も虚しく、俺の意識は早急に深淵の闇へと落ちていった。

「なるほど、少しホテルを放出しそうだ。全く世話のかか

る坊やだ

倒れ込む黒髪の少年を支えながらクリスはやれやれと溜息をつく。意識を失ったせいか、彼がたった今生成した剣状のラファーゼは光の粒子となつて霧散していた。

「ま、コイツは後で部屋に運んでおくとして……」

健康的な寝息を立てるタクマを静かに地へ寝かせて顔を上げる。紅い瞳を細め、クリスは一見何もない空間をギロリと睨みつけた。

「見つかっていないとでも思うか？　いい加減出てこい不良ども」「……あっちゃん、やっぱりバレてましたか。いやはや参ったねえ」「ホントです。テミスの隠密魔法も大したものではありませんわね」

クリスの威圧感のある声に2人の少女は観念したのかその姿を現す。

鮮やかな桜色の髪を持つエルザと長い緑髪を一つに結ぶテミス。闇魔法で姿を消していくようだが、このクリス様にはお見通しだつたようだ。

「まったく、結界まで破つて覗き見とは『苦労なことじやないか？』
「それは申し訳ありません。わたくしたちのこつもの悪い癖ですわ」「そうそう。こんな面白そうなイベントがあるので、この私たちが動かない理由ないじやないですか～」

2人のまるで悪びれてない様子にクリスは心底呆れる。

さしつけめテミスは学園新聞に載せる写真やら映像を撮りに、そしてエルザは単なる興味心で侵入して来たのだろう。

「（）おんのバカタレビもめ。ふふつ、少し炎をそえてやらんとな

」

そう決めるや否や呆れ顔から一変、クリスは不敵な笑みに表情を歪ませる。

すると田にも留まらぬ速さで彼女の手から黒の魔力弾が2人へ解き放たれた。

いきなりの襲撃に当然エルザとテミスは田を見開く。

「　えい、やつ、はああツー。」

が、さすがエリート学園の学生会長と言つたところか。

間一髪エルザは透き通つた声を上げて魔弾をすべて弾く。手にはその髪と同じ鮮やかな桜色の映える長剣が握られていた。

「あらあら、今のも俗に言つて愛の鞭なのでしょうか先生？」
「……そう。お前もよく知つてているだろ、昔から私は教育熱心なのだよ」

「それはもちろん。中等部の頃から大変良くしていただいていますわ」

迫る闇を切り裂いたエルザはけろりと笑みを浮かべて剣を霧散させる。

当然ながら金髪少女のチッと大人気ない舌打ちがコートに響いたが。

「さてさて美味しいネタはたくさん頂いたことだし、このテミスめはそろそろ撤収しますかね。それでは失礼クリス先生

そう横から口を挟んだと同時にその姿をくらますパパラッチ。

恐らく部屋に籠つて学園新聞の夕刊記事を練り上げるつもりなの
だろ？

もはや彼女に今日の講義を受ける気などあるはずもない。

「ちつ、アイツめ逃げたか。まあいい、お前もやつさと教室へ戻れ
エルザ」

「あら、よろしければお仕事お手伝いしますわよ？」

しかし颯爽と命令を無視してエルザはそんな提案を口元した。

「タクマ、いつまでもこんなところで寝かしておくれることはできません
せんし」

そしてクリスの足元に寝転がる黒髪少年を細い手で見やる。
つまりは彼の面倒をみたいという要求なのだろ？

「そのことなら心配いらん。今から直接私が部屋に送り届けて
」

「いえクリス先生は学園長に試験結果をお伝えしなければならない
のでしょうか？ ですから彼のことはわたくしにお任せ下さい」

「……はあ、言つても聞く耳なしか。わかつたよ、生徒タクマのこ
とは頼んだぞ」

これ以上は時間の無駄だと判断したクリスはそれだけ言つて闘技場のエントランスへ歩き出す。

その後姿を一礼して見送ると、エルザは優しくタクマを腕の中へ
と抱き込んだ。

「つづふ、わあ行きましょ。いろんなじひて寝てこては本当に風邪を引いてしまいますから」

くすぐすと微笑みながら、撫子色の髪を靡かせる少女は転移の魔法式を編み出す。

そして抱きかかえる少年ともども魔法陣の中へと消えてしまった。

本来は転移駅以外で転移魔法を使用してはならぬのだが、彼を運ぶため今回は特別であったといつ。

・

真っ白。何もかもがとにかく白。

田の前に広がる世界はどう表現しようとも日本語で、ましてや深渊の黒も同然だ。

そんな中ふわりと宙を舞つていいような感覚が心を揺らす。

あるのか無いのか動かない体に、寝起きのよじこぼんやりとした頭。

そして極めつばかりの不思議空間ときた。これではまるで……。

「（……夢、なのかな？）

ああ、夢だ。むしろこんな状況が夢以外にあってたまるものか。

おぼつかない頭でそう確信すると共に、純白の世界が小さく揺れた。

何もない夢幻の空間に僅かな色がぼつと浮かび上がってきたのだ。

「の真っ白で虚無なる世界へ意味を付け足すよつ。」

そしてうつすうじと赤い色に染められて現れた景色は、一面のお花畠だった。

「の鼻をくすぐるのは甘い香りはその花のものなのだらうか。どこまでも果てなく広がる庭園とクラクラする甘い香りに何か懐かしいものを感じる。

俺は、「の場所を。

「ツ！？ ってあれ、」「は？」

何かを思い出せうとしたその時、無意識に俺は上半身をガバッと起き上がらせていた。

見渡せばふかふかのベッド、純白のソファーやカーテンが目に映る。

間違いない。これは俺のよく見知っている場所だ。

「俺の部屋……。でもどうして「」で寝てるんだろう？」

髪の毛を搔きながら自分の置かれている状況を整理する。
ええっと、どうなってるんだっけ。確かラフアーゼを生成してから……。

「あ、あ、あ、机嫌よつ……。って、ハ、ハルザ会長！？」

動きの遅い寝起きの頭で思考していると、これまたよく知る美人

が部屋の奥から現れた。

腰まで届く濃い桜色の髪。この学園の学生会長にしてリラのお姉さんだ。

そんな人がなんで俺の部屋にいるんだ？

「うふふ。まあまあ落ち着きなさい。今から説明してあげますから」「は、はあ……」

イマイチ現状の把握が追い付いていない俺をベッドの上に座らせたまま、エルザ会長は近くにあった純白のソファーへ上品に腰掛けた。

そして綺麗な瑠璃色の瞳を開くと、相も変わらず丁寧なお嬢様言葉を紡ぎ出した。

「あつ、そりだつたんですか。すみませんお手数をお掛けして」

会長に言われてだんだん気を失う寸前の記憶が戻ってきたが、彼女曰く俺は試験終了後の数分も経たないうちに氣絶してしまったらしい。

なぜエルザ会長がそのことを知っているかといふと、面白そうだとことこので実は試験の様子を物陰からずっと見ていたそうで。最後にはクリス先生に見つかり呆れられたそうだが、先生に代わってわざわざ俺をここまで運んでくれたと言つわけだ。

「いえいえ。それより体の具合はどうです？ 頭痛や痛む所は？」
「ん、ちょっとだけ怠い気はしますけど特に問題はないですね」

その言葉を聞いた学生会長様はよかつたですわと微笑む。

『気怠いのも寝起きのせいだらうし、それもすぐ良くなるだらう。』

「ちなみにその田畠ですが、恐らく原因は急なエーテルの消耗だと思われます」

「エーテルですか？」

「はい、今日は不慣れにも大量に放出してしまったようですからね。身体が拒絶反応を起こしたのでしょ？」

なるほど、ラファーゼを生成するのに無茶しそぎたか。

そこに魔法決闘の疲労も重なつて田畠といつ形で返ってきたんだうつむ。

「こんなところで状況の把握はできましたか？」

「おかげさまで、本当にわざわざありがとうございます」

ベッドの上に正座しながら頭を下げる。

やつぱりいい人だなあエルザさん。まあ授業をサボつてまで覗きに来るのはどうかと思つけど。

しかもクリス先生の張つた結界を越えてなんて。。ん、待てよ？

「（あの結界魔法、遠目から見ただけだけどかなり強力だったような……）」

結界とは他者からの干渉を防ぐためのもの。

そりや強力じやないわけがない。その術者があの鬼畜ちびっ子教師なら尚更だ。

それはすなほり、このエルザ会長はそれを……越えてきたのか？

「うふふ、わたくしは学生会長ですから。いへりクリス先生が施した結界でも簡単に素通りできるんですよ」

「どんな関係があるんですそれ」

学生会長だからってアンタ。

少し誇らしげに富んだ胸を張る会長に苦笑いを向けておく。

しかしどんな手を使ったのかは別にせよ、実際破ってきたんだよなこの人。

やはり冬^{トウカ}露^{ロウ}やクリス先生同様なかなかに手強い相手らしい。

こいつかはこの学生会長様とも魔法決闘する機会があるのでどうつか。

・

その後もしばらく談笑を交わしていると、あつとこいつ間に正午を跨いでしまっていた。

流石に午後の授業までサボるわけにはいかないのか、学生会長様はもうお帰りのようで。

「…………それではわたくしは学園へ戻ります。あとお食いほんのことですが、寮母さんが用意してくださるそつなので30分には食堂へ向かってくださいね」

「30分ですね、わかりました。それではまた今度」

「ええまた今夜に。うふふ、待ち遠しいですわねえ」

「へ、今夜?」

一礼して扉をぐぐるエルザ会長を見送っていると、奇妙な言葉が頭に残る。

今夜だって? 一体どうこうことだらうか。

尋ねようつと思つて顔を上げるも、既に扉は閉まつてしまつていて。

わざわざ呼び止めるのも面倒なので、首を傾げつつも部屋の奥へと床る。

単なる聞き間違いだつたのかもしれないし、あまり気にしないでおひい。

「少し早いかも知れないけど、あと数分したら食堂へ行こうかな」

特にあるじともないし退屈だからな。

ガラス張りの窓から覗ける蒼い空を見上げ、そんなことを呟いた。

そしてこの頃には、つい先程まで見ていた夢のことなど綺麗をつぱり忘却の彼方へと飛んでしまつっていた。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep・5・7 【親愛の宴と祝福を】

Episode 5・7 【親愛の宴と祝福を】

エルザ先輩が部屋を去つてから数分後。

しわの入った制服を部屋着に着替えた俺は、寮の食堂へ向かい昼食をとつていた。

朝と夜は大勢の男子生徒で賑わっているのだが、学園のある昼間、つまり今は見る影もなく閑散としている。

「ふう、『J駆走様でした。わざわざ作つてもうりつてありがとJ様います』

そんな広い食堂の端、たくさん盛つてもうりつた炒め物やサラダを余すことなく堪能した俺は、頬を緩ませて眼前の女性へ頭を下げる。午前中に激しく体を張ったためか、普段より自分でも驚くほど食が進んだ。

「いえいえお粗末さま。それにしても、少し多すぎるかと思つたんだけど綺麗に平らげて。おばさんちょつとビックリよ」

「あはは……。結構お腹空いてましたから」

「そりゃいいJと。タクマちゃんぐらいの年頃が一番の食べ盛りだからねえ」

空になつた食器を片付けながら優しく微笑むのは大体30代後半ぐらいの女性。

少しふくよかな体に純白のエプロンを纏つこの人をアマリエさんと言つ。

彼女は我が第3男子寮の寮母さんの一人で、何か知らんけど入寮

した日から気に入られてい。

「しつかしアンタ合格できてよかつたじやないの。エルザちゃんに
抱ぎ込まれて来たときほてつきりダメだつたのかと思つたけど」

「そうですね、何はともあれ無事留年せずに済みました」

冷水の注がれたグラスに口をつけ、改めて安堵の声を漏らす。
無理無茶無謀なクリス先生との魔法決闘を氣張つた甲斐はあつた
よつだ。

「それで今日はこれからどうあるつもつ？ 報告とかで学園には行
かないの？」

「えつ？ ああ、大人しく部屋で休んできますよ。エルザ会長にもそ
う言わされましたんで」

「……そつ、それじゃまた後でね。あつ、今日の夕食はすんといか
ら期待していいわよん」

はいと軽く会釈をして俺は席を立ち皿廻へと足を進ませる。
ご馳走なのだろうか。唯でさえこの食事はハズレが無いから樂
しみだ。

「 ホント、面白くて良い子が入つてくれたわ。うふふ」

黒髪の少年が食堂から見えなくなると同時に、アマリHのせん
な咳きが漏れる。

彼がこじりへやつてきて一ヶ用が経とじているが、寮や学園生
活に馴染んでいるのは一目瞭然。

それはこの寮母の目から見ても十一分に明らかだった。

「いや 今夜はなかなかに盛大なパーティーになっちゃうねえ」と。

クスクスと笑いながら、アマリエは寮母の仕事と宴の準備に戻るのだった。

・
：

食堂から部屋に戻つてからあつといつ間に時間は過ぎてしまつて。窓から覗ける空はまだ青いが、日はやじやこ傾いてこんなふうに見える。

「ん、もうこんな時間か。そろそろ帰つてくる頃かなアイツら」

15時過ぎを示す生徒証の時計を手にして漏れる欠伸と背伸び。ベッドに寝転がりながら教科書やローカルな情報誌を読んでいるともうこんな時間になつてしまつた。

学園も終わつた後だらうし、用事が残つていない学生たちは寮へと戻つてくるだろう。

「ずっとここに籠つてるのもアレだし、表に出て出迎えでもしようかな」

ひょつとしたら既に帰つてきてるかも知れないが、外の空気を吸うためにもいいだらう。

そんな思い付きでベッドから跳ね起き、早速銀のドアノブに手をかける。

「つをあー? なな、なんだなんだあー?」

すると同時に、ドンドンドンと無駄に荒々しいノックが響き渡つた。

突然のことに思わず仰け反って尻餅を付いてしまつ。くわ、いてえ。

「え、ええっと。ど、どちらさまでしょうか？」

「どうりでまつてお前、ラグナ様だよタクマつむ」

恐る恐る扉の向こうへ声をかけてみると、よく知っている男の声とその名前。

同じクラスメートにしてクラシメンバー、寮の部屋は向かい同士の赤毛ドッグン。

なんだお前ラグナかよ。驚かせやがつて。

「つたぐ、何でまたそんな激しいノックを」

立ち上がり呆ながら扉を開けると、その先の光景に一瞬だけ言葉を失う。

なぜなら扉に先の廊下には、ラグナだけではなくクラスの20人ぐらいが集まっていたのだから。

しかも女の子もいる。男子寮なのにな。

「ど、どうしたんだ？ こんなに大勢で」

2・3秒フリーズしていた舌を動かし、少し引き気味に声をかけてみる。

「どうしたとは失敬ね。倒れたつて言つからわざわざ様子見に来てやつたのに」

「あはは、でも普通に元気そうで何よりだよタクマくん」

言い方が気に食わなかつたのか不機嫌な冬霞トウカと朗らかな笑みを浮かべるテオ。

つまりはみんな心配してわざわざ来てくれたようだ。

「まあな。少し眠つたら見ての通りだ。あとちゃんと試験も受かつたぞ」

「はい、ちゃんとクリス先生から聞きましたよ。おめでとうござります」

うふふと天使の笑みでニアがお祝いの言葉を贈つてくれる。
それに続いて他の奴らからも同じような言葉や拍手が届いた。
ん、なんか少し感動かも。

「ありがとみんな。とりあえず留年はせずに済んだんで、新学期からもよろしく」

「くうー、じつは期末試験が来週に迫つてるので…」「ホントだぜまつたく」

余裕な俺の挨拶に、ミリオムとラグナが膨れている。

そう。俺はあの試験で2年生へ上がれたのだが、ここに至りにはそれが受講している科目のテストがあるのだ。

その結果、つまり総合成績が悪ければ……。言つまでもない。

もつとも聞いてかつ見た話、我がクラスの留年候補はこの2人ぐらいらしいが。

「その話は置いておいてさ!!」
「ええ、そうですね。タクマくん、今朝話していたご褒美のこと覚えてますか?」

「あ、ああ覚えてるぞ。内容はサッパリだけど……」

阿呆2人を無視する方針で、話題が朝から気にかかつっていたことへと変わる。

なんでもクラス一同からの褒美だつたけか。

「ふふんっ、喜びなさいタクマ。歓迎会よ歓迎会ー。今夜はオールナイトで宴なのっ！」

「いや、まつたくもつて意味分かんないから」

割り込んできた上に意味不明なミリオムへ突っ込む。

そもそも歓迎会って誰の あつ。

「もしかしてそれ、俺なの？」

「アンタ以外のだつたら一体誰のだつてんのよ」

「返す言葉も『ゼ』こません」

気付くのが若干遅れた俺に呆れた視線を送る銀髪少女。
なるほど、その歓迎会がご褒美だつたわけね。

さつきエルザ会長が言つてた『また夜に』つてのも恐らくこのことなのだろう。

「うふふ、そういうことです。では私たちは会場や料理の準備をしますので、タクマくんは呼びに来るまでここで待っていてください
「あ、ちょっと待つて。そんな悪いし俺も 」

そう言い残して立ち去るつとある旨を引き止めるが、いきなりトウカに口を塞がれる。

当然目を丸くして藻掻いていると、彼女は静かに瞳を覗き込んで語りかけてきた。

「あなたは主賓なの。この意味が分からぬほど馬鹿じゃないわよね？」

銀髪少女だけでなく、周りの奴らからも降り注ぐ威圧感に黙つて頷く。

確かに俺が手伝いに行つたら意味ないよな。

「……わかったよ。ここに籠つて大人しく暇潰しちゃいます」

「分かればよろしい」

トウカとそう話をつけると、部屋の前に溜まっていたクラスメートたちが散つっていく。

「ねえタクマ、暇なら私が一緒に遊んであげ

「君は僕たちと会場の飾り付けだよねミリオムさん？」

「うげつ！？ わ、わかつてるわよ……」

黒いオーラを纏わせるテオの肩を叩きこみ、ミリオムはしょぼんとした表情を浮かべて頃垂れた。

どうやらサボろうとしていたみたいだ。にしても飾り付けって…。

嬉しいけど、そんな大仰にやつてもらわなくともいいんだけどなあ。

「それじゃあ頃合いになつたら僕が呼びに来るから

「あ、ああ。わかつたよ」

テオに引きずられていいくサキュバス少女を眺めて苦笑を浮かべながら、扉を静かに閉める。

「こりゃ大人しく情報誌の続きでも読んでもくべきだらう。歓迎会、ね。なかなか嬉しいことしてくれるじゃないか。」

・
・

笑顔の圧力で自室に幽閉されてから早夕飯時。
部屋に籠っているのは退屈かと思いきや、度々人が遊びに来ていたので意外にもそうではなかつた。

特に地獄の進級試験の感想をもう何十回語らさせられたことか。

そんなこんな間に準備は終わつたらしく、今やつとテオとトウ
力の2人に歓迎会の会場へと連れられたところだ。

「（こりゃまた盛大にやつてくれてるなあ）」

この俺、タクマ＝ミツルギの学園歓迎会はやはりこの第3男子寮
で行われていた。

普段は暇な男子生徒たちがくつろぐ、あの無駄に広いレクリエー
ションルーム全面を使って。

どうやって用意したのか、ホール内には色鮮やかな装飾で輝いて
いる。

嬉しいけど少し気合入れすぎだる。しかも……。

「なあ、なんか人の数多くないか？」

顔を寄せ隣のテオへぼそつと囁く。

歓迎会というものだからてっきりクラスメートや知り合いの同級

生、先輩ぐらいかなと思つてたのだが、明らかに見覚えのない人とかもたくさん集まつてるぞ。

「ははは、宴会の匂いに集まつてきたんだろうね。それとも君の人望かな？」

「んなまさか。それはあるはずがないわよテオ」

「……それは俺が否定することだと思つぞ」

横から颯爽と口を挟む銀髪少女に突っ込みを入れながら会場の中を進んでいく。

トウカと相変わらずなやり取りしていくも、すれ違う人に笑顔の会釈は忘れない。

「あっ、きたきた！」^ヒちよん本日の主賓様へ

「待ちくたびれたぜタクマッち。さあさあ楽しもうじやないかこの大宴を！」

しばらく歩いていると、部屋の真ん中らへんから元気な少年少女の声が耳に届いた。

ミリオムとラグナだ。つかアイシラもつ何か飲み食いし始めてるし。

「うわあ非道い、もうやつちゃつてるの！」の人たち？

「あうつ、私も止めたんですけど……。『めんなさい』

阿呆2人に呆れた目を向ける俺達にミアが頭を下げる。

いつも真面目だなこの娘は。

気にしてないよとミアに声をかけてから、どうやら俺が座るべきらしい席に腰を下ろすのだった。

それからしばらくした後、エルザ会長から乾杯の挨拶を促されてしまい全方向から注目を浴びていた。

くそ、もしかしてと恐れていたことが起きてしまった。

「ううこの辺の苦手なんだよなあ……」

「ええっと、その、こんな素敵なパーティーを開いてくれてありがとうございます。嬉しいよ、これからもよろしくお願ひします。で、いいのかな？」

とは言いつつもしつかりやる。が、横に座るトウカが一言。

「言つちや悪いけどセンスもクソないくらい普通ね
「う、うつむけいよッ！？」って、あ……」「

咄嗟に出た銀髪少女への突っ込みに早速しまつたと後悔。やべえ今のめちゃくちゃ恥ずかしいぞ。
しかし皮肉なことにも大きな笑い声が会場全体から湧き上がり、それを合図に歓迎会は始まってしまった。

んー、これは結果として良かったのだろうか？

複雑な気持ちでグラスの中のシャンパンを喉へ通す。

日本じゃダメだがリコミシアル界では中等部を卒業すれば飲酒しても良いそうだ。

最初は戸惑つたが、異世界だからの一言で解決してしまつため何も言つまい。

ちなみに俺は少しならないけどあまりゴクゴクは飲めない。

こんなところで酔つてもみつともないし、自重しておかないとな。

「ん、あれは？」

ピザつぽいものを頬張りながら、一段と騒がしい方向が気になつて視線を送る。

するとそこには大画面のスクリーンに今日の進級試験の様子が映し出されていた。

無論、クリス先生にボコボコにやられている俺の図である。

あれ誰が撮つたんだ？　いや、こんなことするのは一人ぐらいしかいないか。

「う、ごめんっ！　これまた姉さんが勝手に……」

「お前が謝るなって。まつ、ちょっと恥ずかしいけどな」

申し情けなさそうな声を出すテオにそう笑顔を見せながら画面を見つめる。

やはりテミス先輩らしい。エルザ会長と一緒に来てたんだな。

ちょうど今は先生の爆撃魔法を必死になつて避けているシーンだ。地面に赤い魔法陣が刻まれて、数秒経つたらそこが大爆発。目に見えたならすぐ逃げないと間に合わない。あつ、爆炎に巻き込まれた。

『今日は本当に疲れ様でした』

華麗に宙を舞う俺の映像を見ながら、酔つていらない学生たちはそう微笑みかけてくれる。
その一方、酔つてるラグナ達は……。

なんかもう大爆笑していらっしゃる。人生幸せそだなアイツら。

早いものでもう2時を回ったが、人が減ることではなく代わりに次々と美味しいそうな料理が運ばれてくる。

そんな会場の中心から見渡してみると、この宴会を楽しむ皆の様子がよく分かる。

エルザ会長率いる学生会組はすぐ隣で談笑にふけっているし、テオはアマリエさんたちの仕事を手伝っている。

ラグナとミリオムは 例の映像をまだ見てしているようだ。一体何周見るつもりなのだろう？

ま、なにはともあれ俺だけじゃなく皆楽しそうで何よりだ。

「なによ、一人で二ンマリして。何か面白い奴でも見つけた？」

「まあ、な。とってもいいものだよ」

「……そう」

話しかけてきたトウカはそれ以上何も聞いてこない。

「それよりグラスが空だぞ。ほら注いでやる

「珍しく気が利くわね。うふふ、ありがたく頂くわ」

微妙な空気になったのと他に相手が見当たらないのでこの銀髪少女と乾杯することに。

気に入った透明な紫紅色のお酒を手に取り、丁寧にグラスへと満たしていく。

この世界に来るまでは失つてしまっていたけれど。

気付かないうちに俺はもう取り戻してしまっていたようだ。
とても眩しくて、そして何よりも大切なモノを。

なにか熱いものを胸に抱きながら、グラスの中身を喉へ通した。

「ん、美味しい」

「　　ッ！？　そ、そうか。そりや良かったな」

稀に見る銀髪少女の悪意のない笑みに、少しどキッとしてしまつ

た。

うーん、少し酔い始めちゃってるのかな俺。

そして賑やかで温かく長いこの宴は、まだまだ終わるそにはない。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.6-1 【心の剣を携えて】

Episode 6-1 【心の剣を携えて】

清々しいまでの朝。かかとを鳴らして学園へと続く石畳の道を進んでいく。

蒼鷹より降り注ぐ陽の光は穏やかなはずなのに、自然にギュウッと目を細めてしまつ。

まだ目覚めてからそんなに時間経っていないしなあ。

「あはは、なかなか眠たそうだねタクマくん」

整った緑髪に乱れなく着飾った制服、男から見ても文句なしの好青年。

相変わらずそんな感じで隣を歩くテオが爽やかに微笑を浮かべる。どうやら不意に出た大きな欠伸を見られてしまつたらしい。

「ん、そうかも。やっぱり昨日は寝るの少し遅かったしな」「僕もだよ、会場の後片付けに1時間近くかかりちゃってねえ」

お互い欠伸の仕草をしてからやれやれと大きな溜息をつく。

昨晩の歓迎パーティーは日が変わつてから1時間ぐらいの後にお開きになつた。

流石にこれ以上はと解散するより寮母さんや学生会からの指導が入つたのである。

次の日、つまり今日は通常通りに学園と授業があるのである。

あの雰囲気じゃ本当に夜中を通り越して朝まで宴会を続けそうなノリだつたからな。

主賓の俺がいなくなる訳にはいかないし、あのくじこの時間帯でお開きになつたのが救いだ。

「……あーもうっ、もっと楽しみたかったのにあんなに早く終わるなんてつまんないわ」

「ミロオムさんよ。お前はひたすら酒に呑まれて酔いつぶれてただけだろ?」

前方で少し不機嫌そうに咳いたプロンド髪のお嬢さんと突っ込みを入れる。

最終的にはトウカとニアの2人がかりで女子寮へと連れ戻されて行つたつけ。

「ぐつ、酔つてなかつたわよ! ほんの少し気分が良くなつただけで」

「(それを酔つていると云つんじゃないのか?)」

顔を赤くして言い訳を垂れるサキュバス少女。

果たして昨晩の最後の方の記憶が残つてゐるのかどうかすら怪しいものだ。

魔族のお二人とそんなお喋りをしつつ、できるだけ近い道を通り学園内の高等部学舎前へと辿りつく。

そこからは早いもので、螺旋階段を淡々と上りあつといつ間に教室の中へ。

見渡せば昨晩は同じく遅かつたはずなのに、クラスメートの半分以上が教室内に揃つていた。

「おはよ、昨日は本当に楽しかったよ。だから、ええっと……あります」

その言葉を既に伝えたいたいのと妙に気恥ずかしい気持ちとのジレンマに駆られながらも、一応は大きな声で言つておく。
が、やはりその途端どうにも居た堪れない心情になってしまい、
わざわざと後方の自席へと駆け込んだ。

「おひ、自分で言つてメチャクチャ照れてやがるな」「うふふ。ホント顔真っ赤じゃないの~、タクマくん?」「……くつ

クスクスニヤーヤと楽しそうに笑う周りを伏せ田見て舌打ち。
その中には特に付き合いのあるトウカやミニアも混ざつていて、ますます顔が赤く染まつていぐのを鏡なしでも自覚する。
へへ、そのまま堂々としていれば良かつたか。

そんなじょもない後悔をしつつ、談笑に花が咲かされている教室を小さな笑みを浮かべて眺めていた。
何はともあれ、ちゃんと言葉に出せて良かつたな。

「おひお前、わたりたい席につけよ~」

聴きなれた鈴の音のチャイムが心地良く鳴り響く。

それと同時に小さな手をパンパンと叩くクリス先生の姿が見えた。

「あの先生、どうして昨日歓迎パーティー来なかつたんすか?」「そりや私も行きたいのは山々だつたのだがな。いろいろ仕事があつたのや」

「なるほど～。それじゃあ仕方ないですね」

気付いた生徒がそれぞれ自席に着く中、最前列のクラスメートAが放つた質問に苦笑して答える先生。

そう言えば確かに昨晚姿が見えなかつたな。
もつとも、教師である彼女が来ていたら少しややこしいことになつていたかも知れないが。

……いい意味でも悪い意味でも盛り上がつていたわけだし。

「さてと、昨晩はさぞお楽しみだつたんだろうが、今日からは氣を引き締め直して各自やるべきことを

「ゴホンと彼女の咳払いが響いたのと同時に朝のHRが始まる。
ちなみにHRとは遅刻者欠席者の確認、連絡事項や小話を担任がする時間に違いない。

「うん？　おい生徒タクマ、隣の阿呆はどうした？」
「んえつ…？　と、隣…？」

その小話をボーッと聞いていると唐突に声をかけられる。
思わず驚いて取り乱すも、左の空席を一瞥してすぐに何のことか理解した。

「（ああ、ラグナのことね）」

あの阿呆ドラゴン、もといラグナは恐らくまだ布団の中だらう。
歓迎会が終わつた後も自室に数人の酒豪を集めて飲み続けていたらしいからな。

ちなみにエルザ会長も混ざつていたらしく。

それは置いておくとしても、まあ気の利くフォローもできないわけ。

「 そんな感じでまだ寝てるんじゃないかと」

「呆れたな。誰か起こして……って、できたなら壁やうじていたか」

先生は言葉通り心底呆れた表情を浮かべ、これまた大きな溜息を漏らす。

そう、部屋の前で呼びかけてやつても簡単に起きてくれるよう奴ではないのだ。

「 よし、こりゃまたお仕置させねばならんな。ふふふ」

あんまり激しいのは止めてあげてくださいね、と。

黒い微笑を浮かべる彼女に口を出せる勇者などこの教室にはいないかった。

いや、同じくクククと邪悪に微笑んでいる銀髪少女はあえて言わなかつたのかも知れないけれど。

…………とにかく、寮に戻つたら必ずラグナの放尿を確かめないとな。

・

そのままラグナが教室へ現れることがなく、授業時間だけが過ぎて早くも時は昼休み。

学園食堂で美味しく毎食をとつた後、適当に歩いていたと担任に呼び止められていた。

「ええっ、まだ昼から迷宮探索続けさせんですかー?」「

「そうあからさまに嫌な顔をするな。もつと意地悪したくなるだう」

「

「やりと嫌らし笑みを浮かべて長い金髪ツインテールを揺らす。その口からたった今聞き捨てならない台詞を吐かれたような気がするが……。

「いや、だつてもう進級試験は終わつたでしょ?」ビリしてまた「たわけ。まだお前はラファーゼの扱い方を知らんだろうが」「えつ? そ、そりゃまだ顕現させただけですけど……」

無駄だと察しつつ文句をぶつけてみるも、やはりそんな一言で返り討ち。

頭に浮かぶのは昨日生成したラファーゼ、あの淡い青色をした長剣。

確かに俺はまだあれの扱い方を全く知らない。

刀剣なんて触ったのも昨日が初めてだしな。

「じゃあ文句ないだろ? お前が手にしたのは銃ではなく剣なのだから、今までとは違う立ち振る舞いが自ずと必要になつてくる。それに私はお前のことを想つて言つてやつてるんだがなあ。ふふふ

更に追い打ちをかけてくる鬼畜な吸血ちびっこ教師。

くそ、そんなこと言われたら首を振ることなんてできないじゃないか。

「……ぐ、わかりました。場所は仮想迷宮エントランスでいいんですね?」

「ククッ、良い子だ。待つていてやるからじばし残りの休み時間を楽しめ」

肩をポンポンと叩いてから背を向けて去っていく魔女。

見たまゝとしても可愛らしきのにて、じつしてあんな……。

いや、そんなことはいくら考えても無駄だろう。

それより心配なのはこれからダンジョン探索である。あれはものすごく疲れるし、ラフアーゼを上手く扱えるのかも不安だ。

「うふふ、頑張ってくださいね。タクマくん」

物陰から見ていたらしいミアが優しい声で応援してくれる。

心癒される天使の笑みを向けてくれる彼女だけが、今の俺の心の救いであった。

それから何をするでもなく昼休みを浪費してしまって。

不安な気持ちを抱いたまま俺はクリス先生のいるホントランスへと向かった。

すると既に先生はダンジョンへと続く転移魔法陣を用意していて。

今回ほどんな所かと尋ねる暇さえなくその中へと押し込まれてしまつた。

「 ょうとつと。ん、こには……懐かしい洞窟だな

先生が用意した魔法陣を抜けた先、すなわちダンジョンは見覚えのある場所だった。

俺が始めて入った長い長い迷路のように入り組んだ洞窟状の仮想迷宮だ。

この学園に転入して戦闘に慣れるまでの一週間はここで修行していたつけ。

『その通りだ。だから出現する魔物も弱いのばかりだから安心だろう？』

ナビから映し出されたモニターにクリス先生の小顔が映る。確かにスライムやゾンビ、オーガみたいな戦闘力も知能も低い奴らだったな。

「それでも不安なのは変りないですよ」

『その不安を乗り越えてこそ得られるものがあるのだよ』

「へえへえさいですか。ん、はあツ！」

画面の向こうで遠い田をするクリス先生を一瞥し、気合を入れて右手に力を込める。

エーテルを手元から押し出すと、拍子抜けするほど容易く光の長剣がその姿を現した。

「うわっ、ホントだ。一度成功すれば次からは簡単に出せるようになるんですね」

「前にそう伝えただろ？ つまらん杞憂をしていたようだな」

安堵する俺と対照的に呆れ気味な金髪少女。

もし今顕現させることができなかつたら進級試験の合格は取り消しちだらうからな。

クリス先生の言葉を疑っていたわけではなつたのだが、少し心配だつたのだ。

「では私は紅茶を啜りながら見物をせてもらおう」

「えつ、ちょっとー? コレの扱い方教えてくださいんですか
! ? 』

「ふふふ、知らないか生徒タクマ。剣は相手を叩き斬るためにある
のだよ』

誰でも知っているそんなことは、わざとやつてるなこの人。
俺が知りたいのは取り回し方や剣術のテクニックなのに。

『心配するな、まずは何でも手探りでやつてみる。それでもダメな
ら私が助けてやるさ』

『(……やつぱりいい加減だな)』

『何か言つたか、ああん?』

画面越しに覗けた閻魔大魔王を思い起しあせるまでの恐ろしい気
配に思わず身震い。

死んでも聞かれる訳にはいかないので惚けて誤魔化す。
さつ、変に詮索される前に次の行動に移ろう。

『せいつ、はつ、とうツ!』

とりあえずはデタラメに空を斬つてみる。

羽根のように軽いそれは明らかに速いスピードで振るひことがで
きた。

『……ほつ、思つたよりなかなか速い剣筋じゃないか
めつちや軽いんですよコレ。威力あるのか甚だ疑問です』

珍しく感心した顔をするクリス先生へそう笑いかける。

いくら早斬りができるても剣圧がなければ意味がない。

『ふむ、切れ味を確かめたいなら前方ににょいとい標的がいるぞ』

「標的つて……ま、まさかっ！？」

覚えのある既視感に前方へと目を凝らすと、そこには青い球体が。

「な、なんだスライムか。柔らかそうであんまり斬れそうじゃないんですけど」

鈍いスピードでこっちに迫つてくる相変わらず可愛らしい魔物。心が痛むのであまり戦いたくないのだが、居合わせた以上倒さねばならない。

「お前に恨みはないが、覚悟してくれ。でいやッ！」

渋々掛け声を上げてスライムの体を右から左へと切り裂く。ショパンツと景気のいい音が鳴つて、青い球体は文字通り一刀両断になってしまった。

おおつ、すげえめっちゃ斬れるじゃないこの長剣。

光の粒子となつて消えるスライムを見送り、感慨深く右手に光るそれに見惚れた。

「うん、とにかく今日ほいの剣を振つて魔物を斬ることに慣れようか」

剣技やテクニックはまた今度でいいだろ。よし、そうと決まればさっさと先へ進もう。

「 ッ！？」

足を踏み出そうとした瞬間、遙か遠い暗闇の奥から何か強大な力を感じた。

な、なんだ今のは？ 魔物、だろうか？

氣のせいかも知れないが、あの先生のことだから何かヤバい魔物を用意したのかも知れない。

一応その辺も気を付けて進まないとな。

淡青色の聖剣をしっかりと握り直し、俺は薄暗い洞窟の奥へと駆け出した。

-Coming Soon Next Story ! -

Ep.6 - 2 【ホライズンブルーの軌跡】

Episode 6 - 2 【ホライズンブルーの軌跡】

セピア色の灯火が怪しく照らす不気味な洞窟。

その狭く長い通路にはあとほんの少しの魔物しか残つていなかつた。

じりじりと俺が迫つていくと、前に蠢く影はやはりその牙を剥いて襲い掛つてくる。

「 やつ、でえいッ！」

飛びかかつってきたスライムをタイミングよく真上から斬り落として。

さりに両手の中の長剣を右に持ち替え、今度は足を跳躍させて奥に潜んでいたもう一匹を薙ぎ払った。

美麗に光る淡青色の軌跡が滑らかに虚空へと映える。

「ハア、これでこの通路は全部か。とりあえず対スライムは楽勝だな」

淡い光となつて消えていく魔物の姿を振り返り際に見ながら呟く。何と言つてもたつた一撃で戦闘不能に追い込めるんだからな。相変わらず動きも単純で鈍いし、こちらがダメージを受けることはまずない。

おかげでダンジョンを進み始めて数十分、対峙したスライム相手に剣での大まかな立ち回り方は習得することができた。この分なら今日は苦労することなく。

『 ッ――』

「ん、この咆哮って確か……オウガか？」

唐突に暗闇の奥から届いた獣の叫び声に思わず身構える。この先もスライムばかりだったらと想っていた矢先にこれだ。antzを相手にするとなれば、少し気合を入れ直さないといけない。

小さく溜息を吐いてから剣を握り締め、グネグネと折れ曲がる細長い通路を進む。

するとやがて視界の奥に開けた小部屋のよつな場所が映った。

「（ま、）いらっしゃんに数体いると考えるのが妥当かねえ）」

伏せて慎重に中の様子を伺うと、予想通りあの巨人はいた。

暗緑色の皮膚に2メートルは下らない巨体。

最初に見たときはその威圧感に圧倒されたものだ。

「（数は……3体か。できれば魔法銃で一気に奇襲をかけたいところだけど）」

今回はなるべくこの剣主体で戦うことが目的なのであって、あまり魔法銃に頼るわけにはいかない。だけど……。

あの中に真正面から斬りかかっていくのは気が引けるな。つか嫌だ。

「（一体だけ魔力弾で潰すか。残った2体は……気合で斬るしかないよなあ）」

そんないい加減な作戦を立つつ、時空間操作魔法で小さな亜空間を再現する。

早々に左手を中心へ突つ込んで白銀に輝く魔法銃を取り出した。

「よし、いくぞっ！」

気合と適当な魔力を銃口に込めて魔弾をチャージ。

そして物陰から完全に無防備なオーガへ目掛けて解き放つ。

激しい爆発音が響き、腹に命中した巨人は真後ろに吹き飛んでいた。

突然のことに狼狽える2体のオーガの隙を見逃さず、俺は考えるよりも早く地を蹴る。

「せいつ、たああッ！」

飛行魔法で小さく身体を浮かせ、自分より倍はある巨体を袈裟斬りにする。

本来ならば切断面から血やらグロテスクなものが飛び散るのだろうが、あくまでもこの仮想迷宮の魔物は“作り物”なのでその心配は必要ない。

代わりに美しい光の粒子が溢れ、その白に包まれ消え行くだけだ。

『グヴァルルガア、フウガア　ツー！』

「つととー？ 少し余韻に浸る暇もくれないんだなつー！」

その視界の端で最後の一體が大きく腕を上げるモーションが見えた。

太い腕、手の先には鋭く凶爪が光る。無論餌食になるわけにはい

かない。

振り下ろされた爪を剣先で弾き、一歩下がつて間合いを取る。

「やつ、とおりやつ、ハアツ！」

大きくバランスを崩したオーガへ三段斬りを叩き込む。

右腕を飛ばし、真横へ斬り裂き、そして最後に強く斬り上げる。

その必殺剣はすべて致命傷になつたらしく、縁の巨人は虚しい叫びを上げて崩れ落ちた。

「……はあ、はあ。ゼロ距離でやり合つたのは初めてだけど、なかに怖いねえ」

短いけれど激しい戦闘に肩で息をしながら吐き捨てる。

そりや今まで“ある程度の距離をとつての攻撃魔法”だったからな。

リアル化け物を至近距離にして当然の感想だらつ。

『ふふふ、そういうお前も随分と軽く剣を振るえていいではないか

近くの岩に腰を降りして息を整えていると、胸ポケットの生徒証ナビに通信が入る。

クリス先生からだ。やっぱりモニタリングされていたらしい。

「まあ不思議なもので。敵を前にすると体が自然に動くと言いますか」

『そりや、ならば特に問題はないようだな』

「え、ええ。一応のところは……」

あははと苦笑しながらも、自分の放った言葉に一つ疑問が頭に浮かんでいた。

スライムと戦っていた時は気にならなかつたが、たつた今オウガと対峙した時。

あまりにも剣の扱いが上手く出来過ぎているように感じたのだ。頭がすこいスピードで回つて、本当に体が自然に動いたようだ。

なんか剣の上達、少し早すぎやしないだろ？

単に才能と片付けてしまえばオシマイだが、どうも釈然としない。

『ん、どうした浮かない顔をして』

「えつ…？」あ、いや

「

咄嗟に何でもないと続けようとした口を閉じる。

「」の先生なら何か知っているかもしねないな。

そう踏んで、代わりに俺は疑問の言葉をクリス先生へと紡いだ。

『ふむ、それはそんなに難しい話ではないぞ』

剣を振るつてこいるときの僅かな違和感について話してみると、先生はそんな言葉を返してきた。

「ということはやはり何かじらのワケがあるらしい。」

『生徒タクマよ、お前の持つその剣は一体何でできてる？』
「何でできてる？……」

少し間をおいてから出された問い掛けに頭を働かせる。

高密度エーテル顯現体、ラファーザ。

言葉の通り個人のエーテルを魔力媒介として実体化させたものだ。

「俺の記憶と理解が正しければ自分のエーテルの塊ですよね？」

『ああその通りだ。なら次、そのエーテルとは何だ?』

「そりや魔力に干渉できる靈的な物質で、生物の生命力じゃ……あ

つ

知つてゐる知識を振り絞つて答えていた、途中ではつと氣付いた。
今言葉にした通りエーテルは生命力であり、魂と言い換えてもいい。

つまりラフアーゼ、俺のエーテルで構成されているこの剣は……。

「俺の心、魂でできた剣なんですね」

『気付いたようだな。そうだ、お前の魂なのだから扱えないわけがないのだよ』

声だけで嫌らしく笑みを浮かべている金髪少女の様子が目に浮かぶ。

そうか、原初的に知つていたんだな俺は、この剣の扱い方を。

そういうことなら、以前冬霞トウカかテオが話していた『扱えないラフアーゼを生成した者はいない』というのも納得だ。

『ま、あくまでも感覚的なものだけなのだがな』

『つまり完全には納得できていないってわけですか』

『そういうことだ。ほら、分かつたらさっさと進め。急がないと時間内に終わらんぞ?』

音声通信を切ったのか、それだけ壱つと少女の声は途絶えてしまった。

「……まったく、本当にキツい人だな」

苦笑いを浮かべて腰掛けている岩から立ち上がる。
なるほど、魂の剣か。

心の中で小さく呟いて、淡青色のセイバーを見つめていた。

・

立ちはだかる魔物を斬り払い、あるいは魔弾で撃ち抜いて。
光る長剣と魔法銃を手に暗い闇を駆け抜けしていく。
やつやつといのつちに氣付けば洞窟のかなり最深部まで近付いて
いるようだった。

とこりうか、そろそろ終わって欲しい。

「ええっと時間はと……ん、あと30分ってこりうか

ナビ生徒証に映し出された数字に小さな笑みが自然と浮かぶ。
あともう少しここの仮想迷宮から解放されるのだからな。

「（こしてもやつぱつ）の剣すぐえわ……」

ここまで来る途中に魔物相手にいろいろ実験していたのだが、この剣の特徴をいくつか見つけた。

まず刀身がある程度の長さまでなら俺の意思で伸び縮みが利くこと。

最長で2メートルほどだが、巨大な敵を斬るときには使えそうだ。これは元が靈的な物質であるエーテルならではの特徴だろうな。

んで次。この剣を握っていると、身を守る固有結界が強化されるらしい。

さっきもオーガの爪を喰らいそうになつたとき、触れる寸前で魔法障壁が発動して跳ね返したのだ。

エーテルバリア並の耐久度はあるのかも知れない。

攻撃を捌き切れない時や不意打ちはこれで防げそうだ。

そして最後に魔法との相性。

刀剣の形をしているが一応これも優秀な魔力媒介だからな。当然魔力をエンチャントして魔法を行使することができる。

例えば火の魔力を付与して剣身に炎を纏わせることも可能だ。魔物に関わらず生命には致命的なダメージを与えられそうだし、これから使っていくことは多いだろう。

ちなみに射撃系の攻撃魔法についてだが、どうやら一点収束型の射撃には大きな適性があるらしい。

エレクトリックスピアやチャージ魔力弾はこの剣で行使した方がいいだろうな。

その逆にファイアボルト系の散弾型はあまり向いていないようだけど。

ま、そこは魔法銃で補つから問題ない。

「……って、思つてゐる間にもう『ホール地点みたいだな

ラフアーゼのことに向かつていた気持ちを現実の風景へと連れ戻す。

辿り着いたのは洞窟最深部と思われる広い空間。

「（こつものパターンなら、ボス級の魔物か雑魚の大群が召喚されるはずなんだけど）」

今日は果たしてどちらだらうか？

もつとも、かなり疲れるからどちらも嫌なのは違ひないが。

「……あ、れ？　何も起こらない？」

しばらくセイバーと銃を両手に身構えていたが、虚しい風だけが吹き付ける。

む、これは一体どうこうことだね？
もしかして今日はこれでオシマイとか？

ちょうどそんな甘い考えが頭を支配し、安堵の息を吐いつとしたその時だった。

『クククッ、残念だな。まだ迷宮探索は終わつていな『生徒タク

マ』

「うわあつー！」

唐突に悪魔の凜々しい声が俺の心臓を突き刺した。

くそつ、一体なんなんだこの人は！？

毎度毎度絶対わかつてやつているな……。

とまあ言いたい文句は山ほどあるが、ここは心を落ち着かせよ。』

「『ホン』『ホン』、終わってないってどうこう」とぞしょいつか?』

『よく見てみる、このダンジョンにはまだ続きがあるのや』

「…………なんですか?』

クリス先生の言葉に田を丸くして前方の闇を見やる。
すると確かに、一本の細い通路がまだ奥へと続いていた。

「(これ以上まだ奥があったのか。知らなかつたな)』

どうやら緩やかな上り坂になつてゐるらしく道に田を細める。
今まで探索してきた洞窟型ダンジョンの最終地点は全部この広い
ホールのような空間だつたのに。

さうにその奥があつたことなんて、今まで初めてのことだ。

『やうこつわけだから、あともう少し頑張ってくれ』
「ああ、つかつと!』

黙つてこると一方的に通話を切られてしまつた。
どうやら進むことしか俺に選択肢はないらしい。

「つ、熱ツ…………!』

・

最後の道に足を踏み出すと、ある異常が俺の身に襲いかかつた。
さつきまで冷たかった吹き付ける風が熱風に変わっていたのだ。
それだけじゃない、気温が高くなつたのを感じる。

「（火の魔力が、暴走している？）」

「どうこうことだと精神を集中させてみると、一応の理由は推測できた。

この付近の火の魔力がすごい勢いで暴れ回っているのだ。
普通魔力というのは非常に緩やかなスピードで大気中に漂つているものなのに……。

となれば、奥にいるのであらう魔物がその原因となつていて可能性が高い。

おそらく火を操る、結構強大なヤツだ。
俺に対処できるのかは……わからない。

「あの光は……地上に出られるのか？」

妙に憂鬱な気分で前方を見やると白く輝く光が覗けた。
吹き込む熱風に目を細めながら、俺はその光の先へ足を進めた。

「いや、どう考えても嫌な予感しかしませんね。はてさてどんなえげつない魔物が出てくるのやら……」

優雅に紅茶を飲みながらモニタリングしているのだろう担任へ聞こえるように呟く。

薄暗い洞窟を越えて待ち構えていた場所は赤の空間だった。
地は焼けた土で焦茶が広がり、見上げる空は夕焼けのように赤く染まっている。

いや、そんな穏やかな感じじゃないな。

まるでこの世の終わりのような、禍々しく血生臭い赤色にだ。

「熱い、な。」**ここ**はどういつた場所なんだろ？」

いつの間にか額に浮かぶ汗を拭つて焰獄を探索する。

火の魔力の暴走はかばつ敵へとなつてゐる。

で斯うは妙にいかかつたくない戦つのも兼なのさうが。

しは全くおいていたと脣突は耳を覆いたくなつて、な呻嘆が重い
来る。

あまりの怖気に顔をしかめながら辺りを伺つた。
くそ、どこにいる？ どこからくる？

四一

う、上か!?」

再度聞こえた熱い咆哮に首を上げる。

「んな、ななななつ！？」

直後目に映つた敵に俺の思考は停止。

地が揺れるよつた咆哮を放つたそいつは、やはり燃える空にいた。

数十メートルはありそつた全身を宙に浮かせこじらを見下す。聖炎を思い起させる美しい真紅の鱗と対の大翼。それでいて思わず後ずさつてしまひほどの威圧感。

「チツ、こんな奴と戦えつて仰るんですか先生はっ！」

金髪少女へ非難の声を上げてからセイバーの柄を力強く握り締める。

俺の心の緊張に反応したのか、その剣はより鮮やかなホライズンブルーに染まつていつた。

「いや、もう一頑張りとかそういうレベルの相手じゃない。

空を飛ぶ、大型の飛行生物。

そう、眼前の敵は紛う事無き竜ドラゴンだった。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.6・3 【ドラゴン・シクファイト】

Episode 6・3 【ドラゴン・シクファイト】

紅蓮に染まつた空に重なるおつきな赤き影。

この世の果てと言つても何ら不自然ではない炎獄で、俺とソイツは対峙していた。

睨みつける目の横を浮かんだ汗がたらりと流れ落ちていく。

「（ひつかしじリ）」とは参つたな……。じつじゆうてんだ）」

すぐ前方の上空を豪快に羽ばたく巨大な赤竜。

少しばかり冷静になつた頭を回転させてどうするべきか思索してみると、もつともこの大型飛行生物の習性や攻撃の手数を俺は全く知らないが。

あいにく本物のドラゴンを目にしたのはこれが初めてなのだ。
竜人とは毎日顔を合わしているんだけどなあ。

「（おいおい何も思い付かないぞ）」

辛うじて頭に浮かんだのはヤツの攻撃手段ぐらいい。
恐らく近接しているとあの鋭い爪か牙で斬り裂いてくるだらう。
あとこれは勝手な想像だが、何かしらの攻撃魔法も行使してきそうだ。

炎のブレスを吐いたりな。おどき話の中じやザリにある話。

『ガフウツ、キシャアルルウ

ツ！』

「チツ、時間切れつてか」

結局芳しい作戦は浮かばないまま状況は動き出してしまった。

人の数十倍は下らない巨体が奇声を上げて地上に降り立つ。

その衝撃で地は揺れ、衝撃波は熱風と成して強く俺へと吹き付けた。

「うぐつ！？」

咄嗟に両腕で顔を覆つてその場にしゃがみ込む。

砂塵が激しく舞い自然と視界を奪われてしまった。

くつそ少し動くだけでこの迫力なのか。

「（いよいよヤバいな。とりあえずは牽制でもしてみるか？）」

このまま立ち呆けていても埒が明かないし。

それにここはあくまでも仮想の空間だからな。

たとえ鋭い爪で斬り裂かれようと頭から丸かじりにされようど、

死はない。

それは今までにもこの身を持つて体験済みだ。

ただしそなりの痛みを伴うのは違わないけどなッ！

半分ヤケになりつつも、前方にいるであらうドリラゴンへ魔銃を構える。

しかし視界を閉ざしていた砂嵐が徐々にその激しさを失っていくと

「ん、あ、あれっ？ どこいった？」

殺氣立つた気配も、そのシルエットすら。

まだ微妙に砂塵で視界は遮られているが、いたはずの赤竜が姿を消していた。

「（ええっと、一体どうなつてるわけ？）」

再び混乱し始めた頭をなんとか冷静に保つて意識の網を集中させる。

あの巨体がほんの数秒で消え去るなんて到底考えられない。
仮に上空へ飛び立つていたとしても敵である俺をまだ狙っているハズだ。

他にもたくさんの方々を浮かべながらドラゴンの気配を探す。
くそ、このちはもう疲れきってるんだから勘弁して欲しいもんだ。

「ち
「あ？ なあに人生に疲れ切った顔してんだよタクマつ
「ひ、つむわいによッ！？」って、え？」

どこからか聞こえてきた失敬な男の声。

反射的にそう言に返すと同時に俺は目を見開いて辺りを見渡す。
すると先程までドラゴンがいた地に、見知った顔が二三マリとこちらを覗いていた。

「ちよつ、ラグナ！？ オ前どつしていい……」

少し高めの身長にシンシンと立たせた真紅の髪。

こいつ、昨日酒に呑まれて今日は絶賛欠席中じゃなかつたのか？

「ハハハツ、話せば長いがまあいろいろとあつたんだよ」

「……はあ？」

元気に言い放った赤毛竜人にハテナマークを浮かべる。
つかあまりの超展開ぶりに付いて行けない。

ドリゴンがいきなり消えたと思つたら、今度はラグナが颯爽と現
れた。

まるで入れ替わるように……って、うん？ 待てよ。

「ラグナよ、つかぬ事を訊くがもしかして今の赤いドリゴンって…
…」

「ああもうひん俺だぞ。どうだ、お望みの真竜形態を見たご感想は
？」

「やつぱつお前がああッ！」

きつぱりと笑顔で答えるラグナに膝から崩れ落ちる。
何をやらかしてくれてるんだコイツは。

「な、なんだあ？ 今日はやけにテンション高いなお前」
「少なからずともお前のせいだぞ。緊張感溢れる空氣をぶつ壊しや
がつて」

「うちがどれだけ神経を尖らせていたと思ってるんだ。

「……はあ、もつここよ。んで？ 本当にじびつてこらえるんだ
よお前」

「なんかカマボコみたいな目になつてんぞタクマつち
「茶化すな疲れてんの。だから早く説明」

正確には呆れ疲れている目だが。

シリアス感が一気に崩壊してしまった仮想迷宮で、俺は大きな溜息を漏らした。

「実はな、毎前にクリス先生が俺を寮まで叩き起^{ハシ}しに来てよ」

「そりや大事件だな」

「ああ。鬼の形相でこいつどく教育的指導をなされたさ」

そりやそりや。酒に呑まれて寝過^{ハシ}し欠席なんて醜態、あの担任が許すわけがない。

朝も『お仕置きしてやる』と黒い眩きを漏らしていたしな。

「それで罰として、この仮想迷宮で魔物の相手をさせられてたってわけさ」

「なるほど。俺はそれと同じダンジョンに送り込まれてたわけね」

ラグナはこの地上で、俺はその地下で迷宮探索をしていたのか。先程まで魔力が乱れてたのは上でラグナが強力な魔法を行使していたからなんだろう。

なんだかつまらんオチだ。

「じゃあもう戻ろ^{ハシ}ぜ。見た限りじゃこのエリアの魔物は全部倒しちゃうだろ?」

「おおっと、確かにそうだがまだ帰るわけにはいかねえな

帰還用のポータルを呼びだそつとする俺をラグナが制する。な、なんだ? まだ何かやることでもあるのだろうか?

「気付けよタクマつち。俺はお前がここへやつて来ることを知つてたんだぞ?」

言いながら赤毛竜人は後ろに下がって俺と距離を取る。そしてこちらに手を向けると、真紅に輝くロッドを二つ両手に構えた。

あれは……わかる、ラグナのラファーゼだ。

何て言つんだっけこの形の武器……トンファー、だっけか？とにかくも、今からラグナがやるひつとしていることには見当がつく。

「なんだ、剣のお相手でもしてくれるのかい？」

「そういうこいつた。先生はお前の実力を、俺を使って確かめさせたいそうだぜ」

なるほど、だから同じダンジョンだ。

サプライズはいいから先に説明して欲しかったな。

「それに俺も前々からタクマっちには興味があつたしな。ラファーゼを手にして覚醒した力、存分に魅せてくれ」

「んな過度な期待はやめろつて。いかんせんまだまだ未熟者なんですね」

苦笑して俺も一旦消していた自分のラファーゼを再現させた。薄い青に光る剣先をラグナに向け、戦闘準備の完了を告げる。思えばラグナと魔法決闘するのはこれが初めてだ。

「さあ遠慮はいらないぜ。全力で打ち込んで来いタクマっちー。」「ああ、言われなくともっ」

魔法銃を亜空間へと戻し、セイバーだけを両手に携えて地を蹴る。そして言われた通り全力で剣を振り下ろした。

「どうやああッ！」

「んつ、やるな。なかなかに重い剣圧だぜ」

「そりゃどうもっ！」

2つのロッドを盾にしてその一撃を受け止めるラグナ。
「ひらは構わず続けざまに剣の乱舞を叩きこんでいく。

「やつ、ハアツ、でえいつ！」

剣先で淡青色の軌跡を描きながらラグナに挑む。
もともと体力を消耗している俺が、またもにやつてコイツに勝てるとは思えない。

だから、荒削りでも雑でも全力の攻撃を仕掛けたのだ。

「でもまだまだ甘い。俺はお前の剣筋が読めるぜ？」

「くつそ全然当たらん……」

が、やはり戦闘経験の差が違つのか。

いくら剣撃を飛ばしてもラグナの顔は余裕のままで。

息の続く限りの連續攻撃はすべて見事に弾かれてしまった。

流石に不利を悟った俺はすぐさま飛行魔法の効いたバックステップで大きく距離をとる。

なんとかして次の策を練らないとな。

『じゃあ次は俺から行くぜ。火魔力装填』

「くつ、魔法か！？」

しかしそれを待ってくれるわけもなく、早急に追撃態勢へと入る

ラグナ。

双方のロッドの先端に極小の陣が浮かび、火の魔力が集まっている。

やはりあのトンファーも魔力媒介として使えるらしい。

「（アイジどんな攻撃魔法を使つつもりだ？）」「

攻撃魔法と一口に言つてもその属性、系統は数多い。
死角からの襲撃系魔法あるいは正面からの射撃魔法か。
またその場合には散弾型か一点収束型か。それとも……。

「（相手の手数が分からぬ以上、どの可能性も捨てられないか）」

せめて分かるのは火属性の攻撃だということだけだ。

故に、ここは万能な障壁魔法を張つておくしか選択肢がない。

「なるほどエーテルバリアか。賢明な判断だが、それで俺の炎を搔き消せるかな？」

「な、なんだつて？」

『いひじうことや。燃やし尽くせ、炎竜の矢羽ツ！』

突き出されたラグナのロッドから無数の火の矢が解き放たれる。
見た限りでは普通のファイアボルトと変わらないが……。

「んなつ……？」

次の瞬間、自分の視力を疑うような光景が広がっていた。
地についた火矢は普通そのまま消えてオシマイなのだが、ラグナの放つたそれは違う。

触れた焦地から爆炎が吹き上がったのだ。

よく観察すると緋弾に込められた魔導力、つまり破壊力がまるで桁違い。

これもうファイアボルトじゃないぞ。もつともつと高度な攻撃魔法だ。

『てめえラグナツ、これ対軍用レベルの攻撃魔法じゃねーか！？』

降り注ぐ爆炎を必死に障壁で防ぎながら念話を飛ばす。
程度つてもんを知ってくれ。

『はははっ、俺は火の魔法だけは大得意でな。この分野だけはトウカつちを抜かして学年主席なのさ』

『しゅ、主席つてお前……』

『まあ他のお勉強は、からつきしだけどなあツ！』

情けない叫びと共に一際大きな火炎弾がまっすぐ俺へと迫る。
くつ、これは避けられないぞ！？

「うわああツ……」

容易く結界を破壊した火炎弾が俺の前で炸裂する。
無論爆炎の衝撃波に吹き飛ばされ地に転がされてしまった。

「（いたた、こりや想像以上の力だな……）」

火魔法の成績が学年主席とは初耳だった。

普段はあらゆる面で馬鹿丸出しだが、意外なところもあつたんだな。

なんて感心している場合じゃない！

「おつ、立ち上がったか。どうする、まだ続けるかい？」

「当たり前。これで終わりなんてお粗末にもほどがある。せめて一発喰らつても、うづく」

「ふふふつ、いいぜいいぜッ！ その言葉を待つてたんだッ」

負けじと吐いた俺の台詞に心底嬉しそうに笑い出すラグナ。すると今度は相手の方から飛びかかるように近接戦を仕掛けた。

2つのロジードを器用に操つて複雑な突きを繰り出していく。

「ハアツ、どうやあツ！ ほひせりむつとスパーク上げないと聞こ合わないぜ？」

「 ッ！？ ぐ、やつ、せあつー！」

青玉のセイバーと紅蓮のトンファーがぶつかり合つたび魔力の火花が舞う。

真紅の軌跡を描くロジードはかなり速く、それでいてとてもなく重かった。

しかもそれが2つ不規則に打ち込まれてくる。

いちらは一本の長剣でそれらを対処して行かなければならぬいため正直キツい。

「（）じりや見事なまでにジリ貧だな。隙を突いて反撃しないと……）

「

迫る攻撃を息を乱さぬように剣で弾き返しながら田を細める。

今こそなんとかラグナの動きについているが、いつまで持つかどうか。

「オラオラオラッ！」

「うう……ああっ！？ も、キツー……」

そればかりかさらに加速していく突きに思わず本音が漏れる。
くそったれ、このままじやダメだ。
やつぱり自分から斬り掛かりに行かないと…

そう強く思うのと同時に、俺の体は颯爽と動き出していた。

「うおおおっ、どうやっしゃいーッ！！」

「うどー？」

ロッドを弾いた直後、けつた的な気合と共にラグナの首元へ剣を突き出す。

いきなりの反撃に赤毛竜人は目を丸くするが、バックステップで避けられてしまった。

だがしかし俺の反撃はまだこれからだ。

「いくぞラグナっ、せあ ッ！！」

「ククシ、受けけてやるゼタクマッち。来やがれ！」

一人で笑い合ってから俺は淡青色の聖剣を振り上げる。
大きな袈裟斬りから入り、中段に薙ぎ払つてから足元を突く。
そんな速斬りの連続攻撃が今の俺には繰り出せていた。

「えいっ、やつ、ハアアッ！」

最大の威力とスピードで打ち込んだ剣を弾き返されながらも、諦めずにホライズンブルーの軌跡を紡ぎ続ける。

まさに完全捨て身なフルパワー連続攻撃。

その甲斐あつてか徐々にラグナの顔色から余裕が消えていく。

「（よし、なかなかに手応えはあるみたいだな）」

俺の体力も時間も残り少ないことだし、そろそろ決着を付けよう。そしてなにより、たった今良い策が思い付いたのだ。

胴体にセイバーの先を繰り出したのと同時に大きな回し蹴りをく れてやる。

が、あまりにも分かりやすいモーションなのであつせうとかわさ れた。

だけど構わない。いきなりのバックステップにラグナは態勢を崩 している。

そう、僅かなこの隙。これこそが俺の狙いだつた。

神速の如きスピードで長剣を片手に持ち替え、空いた手に魔法銃 を召喚させる。

その白銀に光る銃口を、しっかりとラグナへ向けて。

『貫け、氷結の散弾ッ！』

Freeze Bullet Cachet

この世界に来てもう何度も使った攻撃魔法を詠唱。

速さ重視のチャージで破壊力には劣るが、数十の魔力弾を解き放 つた。

「おおおうっ、こいつまた大量だぜー？ 挑み甲斐があるッ

反射的に迫った氷弾を2つのロッドで叩き潰していくラグナ。

よしつ、案の定かかりやがった！

魔弾の対応に夢中で他の防御が手薄になつてゐる今こそ、最初で最後のチャンス。

まあ早い話、フュイントだ。

左手の魔法銃を亞空間へと戻し、俺はセイバーだけを両手に構えて地を蹴る。

「セア ッ！」

「なつ、うげつ！？ くつそそつちが本命かよオイ！？」

「ハハッ、氣付くの遅えよ。悪いが決めさせてもううぞラグナッ！」

驚愕の表情を浮かべる赤毛竜人をそう笑い飛ばして。

戦闘不能を狙つた必殺剣を、本日最大威力で横薙ぎに繰り出した。

「そりは……そ、させるか、よおッ」

「な、わあッ、しまつ ー？」

しかしそまだ詰めが甘かつた。

ラグナは間一髪、左手のロッドで振り回された剣撃を防いだのだ。
ま、まずいつ、このままじゅ……！？

「今のはか～なりヒヤッとしたぜタクマッち。でも今日は、俺の勝ちだな」

「 ッ」

その言葉が耳をかすめた瞬間。

流れるとつたラグナの右カウンターが、しっかりと俺の腹を捉えていた。

重い一撃が固有結界を破り、意識が飛んでしまいそうな衝撃が体を巡る。

「がはつ、ゴホツー？　ぐあ……」

痛みに手放してしまった淡青色の長剣が光の粒子となつて霧散する。

つまりそれは俺の戦闘不能。敗北を意味していた。

「（うざい）今のは絶対決まつたと思ったのにい……」

胸に溢れる悔しさを噛み締めつつ。

俺は熱のこもる大地へ静かにゆっくりと崩れ落ちる。

その少し芝居がかつた倒れ方に、目の前で見ていた赤毛竜人は軽く吹き出していた。

-Coming Soon Next Story ! -

Ep.6-4 【一難去つて、また……？】

Episode 6-4 【一難去つて、また……？】

俺が異世界出身だからそう感じるのは別として。

この魔法学園の教育カリキュラムにはユニークな点が多くある。

例えば仮想迷宮や闘技場ダンジョン ロックヤードを使った実践かつ実戦的な授業がそれだ。しかも高度な結界空間魔法の影響で負傷の心配はなく安心安全。このリコミニシアル界ほどテクノロジーが発展していない地球では、再現できたとしても精々バーチャルゲームぐらいのレベルだらう。

まあその話は置いておくとして、他にも午後の講義科目が少し特殊だ。

と言つのも科目が選択制であり、通常よりハイレベルな授業が行われているそうで。

普通の魔法講義だけじゃなく薬学や鍊金術などの魔科学もあつたつけか。

どちらにせよ、生徒たちは自分の興味や適性に合つた勉強に励むことができる。

いつもその時間帯はクリス先生に鍛えられている俺も新学期、つまり2年生になってから参加できるとのことだ。

流石にどの講座を受けるかはまだ決められていないけど。

んで話を戻すと生徒たちはそれぞれの講義室へ移動しなければならない。

そりや講座は数十あるし場所分けしないといけないからな。

「（そういうわけで今この教室には誰もいないわけだ）」

自席の机に突っ伏してそんな自己解決を心の中で呟く。
授業終了のチャイムが鳴った直後の静寂な第2クラスの教室。
ここに居るのは鐘の音より先に戻った俺とラグナだけであった。

「しつかしホント、なかなかにやるじゃなねえかタクマつち

隣の席の赤毛竜人が不意に口を開く。

ちらりと田をやると自分と同じようなダラダラ態勢だった。

「そりゃどうも

「まつ、俺様の方が一回つも二回つも上だつたけどなー

「……さいですかい」

褒めてくれているのかと素直に喜ぼうと思つたらこれだ。
眠気と呆れに大きな欠伸が漏れる。

さきほどの迷宮探索の最後、唐突に現れて魔法決闘デイルーナを挑んできた
ラグナ。

長剣型のラフアーゼを使った決闘に初めてながらも全力をぶつけたのだが、惜しくも敗れてしまった。

クリス先生は『今の段階では上出来だ』と満足気だつたけれどやはり悔しい。

「もつと強くなつていつか絶対にぶつ倒してやるからなラグナ」

「へへ、そりや楽しみだぜ。もつとも

俺の宣言に上半身を起こし、紅い瞳でこちらを捉える赤毛竜人。

少しだけ真剣そうながらもラグナは笑みを浮かべて言葉を紡いだ。

「ラフアーゼを手に入れたことでタクマつちは今までよりも格段に強くなつてるぞ。今ならクラスの連中の数人は倒せるかも知れねえな」

「ん、それは言いすぎじゃないのか？ 流石に一日で皆を越えられたなんて……」

「ははっ、確かにそうかもな。でもミリオムぐらいなら余裕だと思ひうぜ」

小さく唸りながら名前が拳がつた少女を頭に浮かべる。
確か俺が来るまではあの娘がクラスで一番弱かつたんだつけ。
まあ1週間前に負けましたけどね俺。

……今なら勝てるのかなあ？

「たつだいま～つて、ありや？ なあに男一人で見つめ合つてんのよ氣色悪いわねえ」

「あつ、ミリオム。戻ってきたのか」

噂をすればなんとやら。

唐突に教室へ現れたのはそのサキュバス少女。本人だった。ブロンドの長い髪を揺らしてこちらを白い目で見つめている。

どうやらひとつもなく嫌なことを想像なされているらしい。

「えっ、ラグナ？ なんだキミ生きてたんだね」

「あら私もできりクリス先生に八つ裂きにされているのかと」

誤解を解こうと思つたら今度はテオとニアが戻ってきて。

気付けばもうクラスの皆が続々と教室へと帰つてきていた。

「まあ確かに先生にはぶつ殺されたが、それより乐しいことがあってな」

クククと口元を歪めながら俺に視線を向けるラグナ。

その怪しげな言動に興味を惹かれたらしい奴らが寄つてくる。

……「イツ、俺との決闘について話すつもりだな。

自然と赤毛竜人の行動が読めた俺は、誰かに聞かせるように大きな溜息を漏らした。

「 つてな感じでタクマっちと一緒に戦えてきたわけだ」

で、結局そんな俺の予想は見事に大当たり。

寄つてきたクラスメートたちにラグナは現在に至るまでの経緯を得意げに語つていた。

「それでどっちが勝ったのかしら？　ああ、拗ねてるアンタの顔を見ればわかるわね」

「拗ねてない！　つかてめえトウカ、お前今絶対分かつてて言ったよな！？」

「さあて、なんのことかしら」

相変わらず癖の悪い銀髪少女に噛み付くが軽くあしらわれてしまふ。

くそつたれめ、いつか絶対、ギャフンと言わせてやるや。

「あはは……でも凄いじゃないですかタクマくん」

「そりだよ。もう対人戦で使える 준비アーヴィングを扱えるようになつたんだね」

「ま、まあな。一応は接近戦でも困らなによくなつたよ」

暴れる気持ちを抑えてからテオとニアに向き直る。

まったく、この教室で俺の心に平穏が訪れるのはこの2人と話している時だけだ。

「……なあタクマよ、これから一緒に闘技場で爽やかな汗を流さないか?」

しかしそんな平和も束の間、遠回しに魔法決闘を申し込んでくるクラスメートA。

ラグナの語りに血でも騒いだのだろうか、その瞳はギラギラと輝いていた。

「……いや、頼むからそれだけは勘弁してくれ
「もう、それは残念」

フルフルと首を振りながら答えると肩を落とされてしまつ。

しかしこれどちら迷宮探索とラグナとの決闘ですっかり満身創痍。今日はもう剣を振おうといつぱ持ちにはなれなかつた。

「しかしどうするよミコト、もうタクマつやはお前を越えてるかも知れないぜ?」

「ふうん面白くじゃない。いいわ、明日の実戦授業で相手になつてあげるつー!」

ビシッと人差し指をこちらに向けてニヤリと微笑むサキュバス少

女。

おっ、こりゃ俺からコベンジを申し込む手間が省けたぜ。

「ああ、今度は負けないからな」

あの時とは違つて俺はラファーゼを手にしているし、更に多くの魔法を学んだ。

だからこそ強い意志込めて彼女にそう返すのだった。

・
：

「ハア、ハア、はあ……あと一階か

「コツコツと大きな螺旋階段の上に足を踏み出していく。

ここは学園の中でも最も高い7階建ての塔、通称中心塔と呼ばれている場所だ。

学生会室や職員室、食堂のある名前通り学園の中心部である。さらには学園内の各地と空間転移魔法のポータルで繋がれておりアクセスはまあ悪くない。

実際この俺も高等部の学舎からワープしてきたしな。

……それでも、3階分を足で上がらうとすれば結構くる。

最初は駆け足だったスピードも次第に衰え今ではすっかりスローペースだ。

そう、俺は今最上階の学園長室へと向かっている。
と言つのも先ほどこんな出来事があつたからで……。

それはHRが終わって放課になつたばかりのことだった。

『ああつと待て待て生徒タクマ

『ん、何でしじうかクリス先生?』

特に学園でやることはないので早速寮に戻ろつと廊下に出たところ、後ろからちつちつな少女に呼び止められる。

彼女は危ない危ないと2つに束ねた金髪を弄りながら。

『つい伝え忘れていたが学園長がお呼びだそうだ。今すぐ行け』
『……ハイ?』

そんなことをのたまつてから颯爽と先生は去つてしまつて。
用件も教えられないまま、俺はぜえぜえと息を切らして螺旋階段
を上つているわけだ。

「(一)体何の用なのかねえ? ホント珍しい)

というか転入日以来会つていないうな気がするぞ。
もつとも出向くべきような用事はこれと言つてなかつたのだけど。
うーん、何か嫌な予感がするんだよなあ……。

「ま、そんなこんな言つてる間に着いたわけだが

長い螺旋階段を越えた後に整然とした回廊を進むとあつといつ間で。

田の前に立つ魔法で“学園長室”と文字が浮かんでいる木製扉。

懐かしいなあ、一ヶ月ほど前トウカに連れてこられた場所だ。

「おひこひつしゃこタクマ君。待っていましたよ、わあわあひかりへ

ノックを済ませて部屋に足を踏み入れると、やはりあの女性はいた。

腰まで伸びる黒髪を靡かせちらつを見ながら優しく微笑んでいる。

「どうもお久しぶりですリリス学園。お会いするのは初日以来ですよね？」

「ええ、かれこれ2週間ぶりと言つたといひでしょ？」

「……早いものですね。おかげさまで上手くやつて行けています」

感謝の気持ちを込めて一度深く頭を下げてから対談用の席に着く。

「そのようですね、先生方や学生会の皆さんからも伺っていますよ。進級試験も無事に合格できたよう何よりですわ」

反対側に座る学園長はそう言つてうふふと頬を緩ませる。やはりこの人には何でもお見通しのようだつた。

「ええっと、それで学園長。今日俺を呼んだのは一体？」

しばらべ自分の生活状況を報告してから気になる本題を突く。「のまま世間話をしていたら口が暮れてしまいそうだしな。

「うふふ、別に深刻なお話ではありますんで安心して下さって」と

「そうですか？ ならないんですけど……」

「あ、でも少しは頑張つてもらわないといけません

安堵の息を吐こうとする俺を学園長の声が遮る。

思わず咳き込んでしまい、その様子を見てクスクスと彼女はさうに話を続けた。

「来週に期末試験が控えているのはご存知ですね」

「そりゃもちろん。俺も参加しますから」

3月の初めにある学年最後の実力試験。

各人が取っている授業講座のほとんどが対象で、進級にも大きく関わっている大切な試験らしい。

確かに俺は午前中に受けている魔法学や数学だけでよかつたはずだ。

もつともクリス先生の取計らいで俺は試験の結果に関わらず進級できるそうだけど。

「やはり平均点より半分はとらないと留年とか?」

「いえいえ、そういうわけじゃないんですよ。確かにそうしていただけばこの上ないのですが」

「あはは……」

まあ無理だろう。特に闇光の魔法講義は完全に遅れをとってしまっているからな。

魔科学の分野も地球にはなかつた技術があつて結構マズい。

それらの穴は今後の補習で何とか埋めていかなければならぬだろ。

しかし点数のことじやないのか。なら学園長は一体何を?

「一つだけ特別な筆記試験を受けてもらいたんですよ

考えていると、学園長はそつまつて一冊の薄い本を手渡してきた。タイトルには『リコillacアルの手引き』とある。これって……。

「名前の通りこのリコillacアル界の基本知識が記されている学生用の資料です」

「はい、見たことがありますよコレ。ナビの中に入りましたから」

確かにこの世界の政治体制や組織、地理的なことまで割と詳しく載っていたはずだ。

もつとも学園生活が慌ただしくてじつくつとは疋を通じていなが。

最後の方のページには簡単な問題も合わせてあつたはず……って。

「まさかこの問題集の部分を試験にする、とか？」

「あら、察しのよいしげ。この試験は最終日に実施するように手配しておきますわ」

「わあマジなのか。

薄いとこでも50ページはある本を左手に引きついた笑みを浮かべてしまう。

最終日といふことは、残された時間はあと一週間と数日だけだ。

この本の中の知識で俺が持っているのは3割がいいといだらう

……。

「（いやなかなかに厄介だぞ）」「

特に地名なんて全然知らない。

といふか俺はそういうのを覚えるのが苦手な方なのだ。

魔法関連は結構すんなりと頭に入るんだけどな。

「やはり」の世界で生きていいく以上、その程度の知識はあって当然のものですか?」「わかつてますよ。一生懸命覚えてきます」

「うふふ、頑張ってくださいね」

ま、なんとかなるだろ。

どう考へてもあのラファーゼ生成試験よりはマシなはずだし。

「それではお話はこれだけですか?」

「ああ後……いえ、やはりこれはまた別の機会にしておきましょう」「ちょ、ちょっと何ですかそれ。めっちゃ気になるんですけどー?」

ものすげ意味ありげだつたぞ。

「やうですねえ、一つ言えることは……何か異常を感じたときは障壁を張つておくといいでしょ?」

「はあ、よくわかりませんけど実践できるようにしておきますよ。では失礼しました」

「ええ。何かあればまた呼びますね」

そもそも異常ってなんだ、と訊いても答えて貰えなやうなので部屋を後にす。

今は試験に向けて勉強しないとな。将来のためにも。

この時俺は学園長の言葉の意味を全く理解していないまま、すっかり茜色に染まつた大空を高い窓から見上げていた。

そんな御剣拓磨と同じ夕暮れを黒髪の女性も田を細めて覗いていた。

誰に話しかけるのでもなく、ただ彼女は静かに呟く。

「もうそろそろ時が満ちる頃。気を付けるのですよ、タクマへさ

それは彼に襲い掛かる本当の意味での戦い。

今までとは違う、命を賭けなければならぬほどのもの。彼にはあまりにも荷が重すぎるかも知れないが。

ただ、あの黒髪の少年が上手くやってくれることを。不安になるような言葉とは裏腹に彼女は確信していた。

- Coming Soon Next Story ! -

Episode 6 - 5 【負けてばかりじゃ】

「（こしててもやつぱり地理が覚えづらくなあ）」

ええっと中央政府^{ソレイユ}と治安維持局^{ヴィルム}、それから外世界統括機関^{ギル}の3大組織を合わせてトリニティ、だつたけか？……「うん、よしよし合つてるな」

学園長から新たな試験課題をもらつた次の日の朝。

いつになく早く教室へと辿り着いた俺は穴埋め問題を解きながら時間を潰していた。

試験範囲の問題数は100を超えるのだから、暇な時間を割いて暗記していくかないと。

「（こしててもやつぱり地理が覚えづらくなあ）」

流石にすべての山川や島、街の名称ではなく有名所だけが問われているのだが、やはりそれでもキツい。

大陸の形を始めとしてゼロから覚えないといけないのだから。こればかりは何度も地図を確認するしかないようだ。

正直こういった系の暗記は苦手なのだけれど……。

他の異世界出身の奴らは既に通つた道。俺も負けてはいられない。

「んっ？ ああ、もうこんな時間か」

不意を突いた心地よいチャイムの音。ホームルーム開始の予鈴である。

集中しているとあつとこいつ間に時間は過ぎ去つてしまつもんだ。

大きな欠伸をしてから半田で辺りを見回すと机に向かうクラスメート達の姿が映る。

やはり試験が直前に迫っているだけあって皆勉強しているようだ。まつ、両隣に寝ている赤毛竜人とサキュバス少女は別らしいが。

「おい、ラグナにミリオム。お前ら試験勉強はいいのか？」

「んえ？ 私は週末に本気出すから心配はご無用よ」

「同じく俺もだぜ。追い込まれてからのほうが燃えるだろお？」

両サイドから眠たそうな口調で返つて来るそんな声。

こっちも人を心配している余裕はないが、何だか不安になつてくるな。

「…………まあお前ら注目、朝のホームルームを始めるぞ」

半ば呆れていると、今度は逆に凛とした少女の声が教室に響く。気付かぬうちにクリス先生が訪れていたようだ。

「（今日は確か実習訓練があつたよな。気合入れないと）」

また今回もたくさん勝負を申し込まれているわけだし。
なんとか先週の雪辱を晴らすことができればいいな。

今日も頑張れよと笑みを浮かべるちびっ子教師の言葉に耳を傾けつつ、俺はそんな鬪気を胸に抱いていた。

・
：

魔法工学と鍊金魔術の講義が終わつた後、瞳に映る景色は教室ではなかつた。

見る者を圧倒させる壮大な橢円状のドーム

「ロジカオ
闘技場。」

内部は色鮮やかに洒落た造りに仕上がっており学園自慢の施設だといつ。

午前後半の授業は「」のロゴセオを舞台にした魔法決闘の実戦訓練だ。

もつとも各自それぞれ戦いたい奴と戦うだけなので授業とは言えなかかも知れなけれど。

「それじゃあいつも通り昼休みまでフリーバトルな。んでこの講座、実は今日で1年生最後だから頑張れよ～」

そう男性教師が合図をすると同時に人が動き始める。
つか今日が最終日だったのかよこの講座。
まあ2年生になつてからもあるだろうから気にはしないが。

「（最後は最後だしね。少しごらいはいい結果を残さないとな）

よしぷと氣合を入れて昨日最初に勝負の約束をしたあの少女を探す。

ええっと、どこのったんだアイツは……？

「　うりやー！　うふふ、さてワタシは誰でしょう～」
「ぬわっー～」

田を細めて人混みの中を覗いていると、不意に後ろからギュッと抱きしめられる。

何事だと首を回せば真後ろにしてやつたりと微笑む少女が一人。

「なんだミリオムそこにいたのか。あんまり驚かせないでくれ……」

「甘いわね、驚かせたくてやつたんじゃないの。クスクス」「まったくワケが分からん。おかげで変な声が出たぞ」

体を捻って拘束を振り解こうとする前に、パッと腕を放して距離を取るミリオム。

くつ、妙に素早いヤツめ。

小さな溜息を吐いてふと視線を戻すと、既に彼女は戦闘態勢に入っていた。

可愛らしげな黒翼と尻尾を顕現させてサキュバス化。

さりにタクト状の黒きラフファーゼもその手に握られている。

「さあさあ、アンタがどれくらい強くなつたのか見せてもらひや」「もちろんだ。こないだの借りをたっぷり利子付きで返してやる」

お互い楽しそうにそつそつ言い放つて最寄りの戦闘用のホールへ歩き出す。

「おつおつ早速来たか。おーい皆、タクタクのソベンジが始まるぜー」「

「ちよつ、何当然のよう人に人寄してんだお前は」

「へへへ、いいじゃねーかよ別に。見られて興奮するだろ?」

石畠のホールへ立つ姿を見たラグナが嫌らしく笑う。これから決闘するのに興奮させてどうするつもりだ。いや、そもそも俺はそんな変態じみた性癖はないし。

「つて、言つてる間にみんな集まつちやつたわよ?」

「恥ずかしいなあ。勘弁してくれよホント」

ミリオムの声に視線を横にずらすとまた言葉通り。

クラスの大半、いやほぼ全員がコートの周りに佇んでいた。その中には当然トウカやミア、テオの姿も紛れていって。

しかもなんか端の方で先生まで興味深げにこっちは見てるしこりやみつともないとこりは見せられないぞ……。

『ハアツー』

刀身が青白く光るその長剣に加え、片手には白銀の魔法銃を。苦笑いの顔に冷や汗を垂らしながら俺も声を上げて武器を構える。

もうラフナーの顕現は呼吸をするかのようにお手の物だ。

「ジャッジはこのラグナ様が務めるぜ。まあ一人とも準備はいいか？」

「見ての通りよ」

「俺もだ、いつでも始められるだ」

「良い返事だぜ。んじゃいざ尋常に、決闘開始ツ！」

ラグナのじでかい声を会図に俺とミリオムの目が光る。

彼女は早くも空へと舞い上がりお得意の攻撃魔法を詠唱し始めた。

アイツは武器の形状から考えても近接向きではない。

なら、ここには剣を持つてる俺が一気に叩き込むべきだろ？

『翼を授けよ、アーレクラージュツ！』

俺も早急に飛行加速魔法を詠唱して自身の身体能力を向上させる。テオからもらったこの魔法、早速使う機会が来たようだ。

『まずは一発目行くわよ！ 燃え尽きなさい、魔火の矢F i r e B o l tッ！』
「（おひ、これは何とか障壁で防げそつだな）」

空から降り注ぐ火炎弾の魔導力を見て笑みを浮かべる。少なくとも昨日喰らったラグナの爆撃よりは数百倍マシだ。俺はエーテルバリアを左手に展開して迫る魔弾に挑む。

すると読み通り張られた光の壁に触れた火炎弾が消滅していった。よつしゃこれで！

「行くぞミリオム、セア ッ！…」「んなつ！？ ちょ、ちょっと待けなさいよー…？」

誰が待つものかと。

慌てた声を上げるミリオムへ念話を飛ばしてやる。ニヤリと口元を歪め、俺は光るセイバーをまっすぐ彼女へ突き立てた。

「勝負ありじゃないかいミリオムさん？」
「ぐ、ぬぬ……」

俺は鋭い剣先を彼女の細い首元で静止させていた。

ここは例の結界空間魔法の中なので負傷の心配はない。だから別にこのまま叩き斬ってやっても良かつたのだが、やはり女の子が相手じゃどうもやりづらいからな。
それにどちらにせよ、俺の勝利は搖るがないだろう。

「……奉制で前みたく射撃戦に持ち込むつもりだったのに、まさかそれを打ち消して突っ込んでくるなんて」

驚きまた感心したような瞳をこちらに向けるリオム。
どうだ、結構いい具合に一勝田を飾れたんじゃないか？

「でも、まだまだ甘いわねタクマッ！」

「なッ！？」

心中でほつと胸を撫で下ろしてると、いきなり少女の鋭い声
が飛んだ。

田を見開くと黒いタクトを振り上げてくるリオムの姿が映る。
「、こいつ！？」

「まだまだ私は戦えるしね。はっ、せこやッ！」

「ぐつ、危ねえつ！？」

鞭のよじに迫る指揮棒を咄嗟に引き抜いた剣で弾く。
チツ、なかなかに重いな。このタクト近接戦でも使えたのか。
唐突な反撃に不利を悟った俺は一旦地上に降りて体勢を整え直す
ことに。

「あはは、残念だったねタクマくん。リオムさんはギブアップし
ないみたいだよ？」

「そちらしいな。まあ今のは確かに俺が甘かったわ」

すぐ後方のコート外から飛ぶテオの声に苦笑いを浮かべてうな垂
れる。

「いや心を鬼にしてでも叩き斬つておけば良かつたんだ。」

「ミリオム、次は容赦無く斬り伏せるからな」「嫌ねそんな怖い目しちゃって。もつともアンタに次はないけどー。」

キツと宙に浮かぶサキュバス少女を睨みつけて身構える。

次の瞬間彼女の持つ漆黒のタクトから複雑な紋章が浮かび上がり始めた。

早速次の手を撃ち込んでくるつもりらしい。

「これは……闇属性の攻撃魔法だな？」

『ええ、そして私の必殺技よ。果たしてアンタに見切れるかしらね、
淫魔の黒夢ツ！』

高らかな魔法名の詠唱と共に漆黒の魔弾が解き放たれる。

咄嗟に魔法陣に含まれる構成式を見た限りじや、どうやら追尾性
のある魔力弾みたいだが……。

なんて考えている間に3つの黒弾はすぐ目の前にー？

「飛んで撒くしかないかツ」

足早に地を蹴り未だに継続している飛行魔法で空中へと回避。
しかしミリオムの魔力弾も同じように方向転換して俺へと迫る。

「いくら逃げても無駄無駄あ！ 大人しく被弾しちゃいなさいな
「チイツ！？」

宙で高スピードの動きをして避けてみるが、3つの魔弾はミリオムの言う通りしつこく後に続いてくる。
くわめ、これじゃあ埒が明かない。

「（やつときみたいに障壁で打ち消せればいいんだけど……）」

今回の魔法は前のファイアボルトと比べて魔導力が大きすぎる。
彼女曰く必殺技とはどうやら過言じゃないようだ。
魔力属性も俺の苦手な闇だしねえ。

全力で障壁を張つても貫通されてしまうリスクの方が高いだろ？。

「となりや、コレを使って対処するしかないよな」

激しい風の中、右手に光る長剣を見やつて小さく呟く。
少し不安だけどこの剣を、自分を信じるとしよう。

「…………」

魔弾の一つが真下を掠めた直後、俺は腹の底から咆哮を上げて長剣を振り下ろす。

返つてくる確かな手応えに込める力をさらに強めて。

バレーボールのような黒弾を、そのまま真つ二つに斬り分けた。

「うづつ、嘘お！？」

その光景を真正面から見ていたミリオムの口から叫びが漏れる。
クラスメートたちがいる地上からも大きな歓声が耳に届いた。
よつし成功！ 次のも上手くやるぞ。

「せえい、やああッ！…」

今度は両サイドから同時に襲いかかってくる2つの魔弾。
俺はまず右手側の方に加速し、横薙ぎに剣を振るう。

破れて消滅する魔弾を確認してからすぐさま逆に方向転換。

すぐ目の前まで迫っていた最後の一撃を真上に斬り上げた。

「ククッ、今度こそ決めさせてもらひついつオム」

高速で動かした体をそのままに、長剣を振り上げてただ呆然とする少女へ駆ける。

するとその彼女はハッと慌てた色を顔に浮かべて。

「あわわ……ギ、ギブギブッ！ 私の負けよタクマー！？」「ふうんそーカい。でも、この一撃だけは貰つておけッ！」

その言葉を放った直後、勝負は決まった。

青白色に輝く刀身は今度こそ彼女の体を捉えたのだ。
もつとも、結界の中だから彼女の体をすり抜けただけだけど。

「こいつっ……。ラグナの言ひとおり、本当に負けちゃったわね

しかしやはり灼けるような痛みは感じるようだ。
笑みを浮かべながらもその顔は少し苦しそうだ。

「ふらふらだなオイ。大丈夫か？ ほら

そのままでは流石にいたたまれないので体を支えてやる。

「ん、大したことないわよこれぐらい。でも……ありがと」

何だか照れくさそうに微笑むリオム。

む、そんな顔をされではいつまでも恥ずかしくなるじゃないか。

「（あ、でも無事に初勝利を飾れて良かったな）」

途中ヒヤッとする事が続いたが上出来だろ。この調子で次の相手ともいい勝負ができるばいいんだけどね。……少し休憩が欲しいかもだけど。

熱くなる心の興奮が確かに残る中、クラスメートたちの歓声に溢れる地上へゆっくりと降りていった。

- Coming Soon Next Story ! -

Ep.6-6 【少しあづけたかな?】

Episode 6-6 【少しあづけたかな?】

珍しい次期に異界からやつてきた転入生、御剣拓磨ミヅルギ タクマ。

そんな彼が初めて得た魔法決闘の勝利から少しばかりの時間が過ぎた頃。

「あら、また勝負するんですかタクマくん?」

「もう一戦だけな。時間的にはこれで最後になりそうだし」

「そ、そですか……頑張ってね」

黒髪の少年はおつと楽しそうに答えて足早にホールへ駆け出していく。

その後ろ姿を田で追いながらニアはそよ風に桜髪を揺さぶられていた。

「あはは、結構火が付いてるみたいだね彼」

「少し張り切りすぎている気もしますけど。もう二人目ですよ」

ロツドに跨りながら真上を浮遊するテオへ言葉を返しながら。少女は虚空間から小さな椅子を取り出して静かに座す。

どうもこの魔人と天使は2人ともその場で次の勝負を見守るらしい。

「相手は……アッシュくんか。彼のラフアーゼは確か大剣だっけ」「ええ。戦績も悪くなかったと思いますから、タクマくん苦戦するかも」

「同じタイプの武器でもやっぱり熟練度が違うからねえ」

確かにラファーゼは本人に最も適した形状の魔力媒介だ。

その使い方もある程度は原初的に理解し習得している。

だが、テオの言つとおり熟練度としての差は当然付いてしまう。

少なくとも1年以上は「」のラファーゼと付き合つて『』いる彼らと、つい先日創り上げたばかりのタクマとではどうしても距離が開いてしまっているのだ。

もちろんこれは戦闘だけではなく、日々の経験値についても言えることだが。

「そういう意味ではなかなかやるよねタクマくん。今のところ3勝3敗だしさ」

「ですねえ～。昨日のラグナくんの話、私は正直脚色かと思つてたんだけど

「いやあ実は僕も。少し大げさに言つ癖があるからねラグナは」

そんな談笑を交えつつ。

2人は石畳のコートで青白色の長剣を構える少年に視線を向け直す。

もう試合は始まっていたのだ。

「飛ばしていくぜ。俺の太刀筋、どこまでお前に見切れるかな！」

「さあね。まつ、できるところまで受けたやるよ

最初に攻撃を仕掛けたのはアッシュショであった。

身の丈ほどある巨大な両手剣を軽々と振りかざし、相手の首を狙つて斬り掛かる。

だがしかしタクマはその軌跡を手に持つ剣でしっかりと受け止め。

「ふん、随分と軽い攻撃だな。これくらいなら余裕だぞ？」

相手の大剣を難なく弾き返してそう軽口を吐いてみせた。

その姿にアツシユは片目を閉じて後ろへ下がり、体勢を立て直す。

「……なるほど。やはり先週とはまるで別人みたいだ」「ああ、このラファーゼのおかげで接近戦の手立てもできたからな」「ククッ、いいねいいねえ。その調子でもっと俺を楽しませてくれやツ」

嬉しそうに口元を歪ませ、今度は素早い連続斬撃を解き放つアツシユ。

タクマはハツと目を見開くと先程と同じように長剣でその軌跡を捌いていった。

刀身から魔力の火花が飛び散るほどの中防は、さぞ互いの腕に強い衝撃を走らせていることだろう。

「まるで別人……ですか。確かに言われてみれば」もともとですね

そんな決闘の様子を腰掛けながら眺めるニアは感慨深げに小さく頷いた。

ラピスラズリの瞳に映るのはやはり先週までのタクマではなかつたのだ。

「（ラファーゼの覚醒に影響されたのは分かるけど……想像以上の成長具合だわ）」

基礎的な身体能力や相手の動きへの反応速度。

そして身を守る固有結界と魔法を使ふるスピードに魔導力。

彼のそんな能力はこの世界での平均的なレベルにまで向上しつつある。

ラフアーゼを持たず、主要武器が魔法銃だけだった先週までのタクマ。

クラシックメンバーとしてその戦い方を多く見てきたニアやテオには彼の成長具合がよく見えていた。

「…………もつとも、まだまだ荒削りと言つたところだけどね」「んえっ！？」

アッシュの斬撃に必死になつて対抗しているタクマの姿に少しだけ見入つていると、腰掛けたニアの背後から不意に彼女のよく知る声が届いた。

「トウカじやない。わきまで姿が見えなかつたけど？」

「向こうのほうで挑戦を受けてきたのよ。20秒で終わらしてきたわ」

右手に光る黒い短剣を光の粒子に戻して。

まったくつまらなさうに吐き捨てながらニアの隣へ並ぶ銀髪少女。どうやらこの1年間で彼女に勝てたクラスメートは一人もいなかつたらしい。

「久しぶりに私が相手になるつか？ 最近あまり体動かしていないから

「ん~、めんどくしさバス。今はアイツの戦いを見させてもらひつ」とにするわ」

「……あつそ」

振られてしまつたが、と。

残念そうな溜息を春風に乗せ、ミラは意識を「一歩の中へと戻すのだった。

・

本日最後の相手をしてくれているのはアッシュと云うクラスメート。

実は心中で勝手にクラスメートAと変なあだ名を付けていた彼だ。

このアッシュとは先週にも戦つたけど、確か全然勝負にならなかつたんだよな。

でも今回は何とか相手の動きについて行けてはいる。

「なかなかにいい反応だ転入生。ハツ、せえい！」
「くつ……」

次々と繰り出されるのはギラギラと光沢を放つ刃。
そのモーションに合わせて手の中の長剣で弾き返すのだが、そろ限界に近い。

彼の剣は速いだけではなくかなりの重さもあつたからだ。
剣と剣がぶつかり合うたびにその握る手がだんだんと痺れしていく。
最初の軽い一撃が挨拶つてのはどうやら本当だつたみたいだな。

「（にしてもジリ貧だ。いい加減流れを変えないと……！）

そう決め込むや斬撃を受け流した直後、タイミングよく回し蹴り

を放つた。

アッシュは甘いなど笑みを浮かべてバックステップ。難なく避けられてしまう。

だが、構わない。

「この距離なら手を伸ばせばツ、届くから！」

「喰らいやがれツ！」

「うおつ、やつべえつーつ！」

伸ばされた刀身が横薙ぎに繰り出される青白色の軌跡。

目の前に迫る光景にアッシュは余裕の笑みを崩す。

その次の瞬間、リーチの長い斬撃は惜しくも相手の腹を掠めた。

「あ、危ねえ……もう少しで持つてかれるとこだつたぞ」

お腹を摩りながら危ない危ないと笑みを向けてくるアッシュ。くつそ外したか。どうもダメージはあまり受けていないらしい。

「少しば氣を使つて当たつてくれれてもいいんじやないのかい、アッシュ殿？」

「そりや無茶な注文だぜ田那。俺はそこまで甘くない男なのぞ」

「……ハハツ、そりや残念」

そんな冗談を軽く交えながら。

お互い距離を取り、息が整つまで少しばかりの休憩タイム。

「ん~、そもそも決着付けないと授業時間が終わっちゃうな……よしつ」

間もなく生徒証の時計を確認するとさう漏らして立ち上がるアッシュ。
そして黒のブロードソードを天に掲げ、ニヤリと表情を歪ませた。

な、何だかすつしく邪悪なことを考えているような顔だなオイ。

「じゃあ時間切れってわけで引き分けにでもするか？」

「アホかねお前は。そんなわけないだろ！」

「で、ですよね……」

嫌な予感に少しふざけてみるも、あっせりと流れされ勝負が再開される。

「ずっと斬り合いつてのも味気ねえし、最後くらいは派手に決めて

やる

「派手つて、お前一体何を

尋ねようとした瞬間、天を向くアッシュの大剣に火の魔力が宿つた。

ただ轟々と燃え盛る赤がその巨大な刀身に纏わり付いていく。

なるほど、派手つてのは魔法剣技のことね。

「さあどうする転入生？ 僕は次の一撃で決着を付けるつもりだが」「どうするつて、迎え討つしかないだろ！」

構える長剣へ相手と同じ付加魔法を行使しながらそう吐き捨てる。エンチャントされた火の魔力が青白い刀身を炎の色に染め上げた。

「なんだ、別にギブアップしてもいいんだぞ？」

「嫌だよ。一年生最後の決闘がそんな終わり方なんて恥ずかしい」

「それもそうか。じゃ、恥にならないようせいけい足搔いてくれッ

！」

観客もいるしと首を横に振る俺をその大きな瞳に映して。アツシユはそんな決め台詞を張り上げ、颯爽と地を蹴り駆け出していく。

「んな」と言われなくともっ」

こちらもただ突つ立つてているだけなんてありえない。

振り下ろされる火炎剣の軌跡を読んで俺も横に刃を繰り出す。すると炎を纏つた剣と剣が重なり、同時に光る火粉が激しく飛び散つた。

それらは危うく顔や手の肌に付着しそうになるが、不可視の障壁によつて遮られる。

身を守る固有結界はこのくらいのダメージなら打ち消すことができるのだ。

「やるなあ転人生、いやタクマ。たつた数週間でここまで力をつけるとは」

「ぐつ、そりゃクリス先生に随分と鍛えられたしなつ」

爆せる魔力のすさまじい圧力を両手に感じながら。

まだまだ余裕を覗かせるアツシユに強気な顔と言葉を返してみせる。

だがしかし相手のブロードソードは確実に俺の剣を押し返してきていた。

「、こりやなかなかにキツいかも。

少なくともこのままの状況では勝利が見えない。

「フツフツフ、残念だがそろそろ潮時だぞ」

「ぐぬぬ…………い、いや、まだ少しばかり手はある」

「なんだって？」

口から漏れた俺の言葉にハテナマークを浮かべるアッシュ。するとそのせいか彼の剣圧が少しだけ弱くなつたのを感じた。当然、俺はこの隙を逃すまいと思い付いた反撃へ体を動かす。

強く握る長剣を右手だけに任せ、空いた片手に小さな塊を召喚させた。

白い光りに包まれて手に宿つたそれは白銀の魔法銃。

「へへっ、忘れたか？　俺の武器はラフアーゼだけじゃないッ！」

まだこれが残っているんだ、と。

不敵に口元を歪めつつ早急に周りの魔力をチャージする。この距離じゃ流石に外すわけがないだろ？

「まつ、いいアイデアだが……俺の攻撃の方が速いと思つかせ？」

「んなつ！？」

魔力の装填は完了し、あとはトリガーを引いて魔弾を解き放つだけ。

そんな瞬間にアッシュの握るブロードソードがさらに赤く燃え上がつたのだ。

やがてその炎の先端は丸い魔力弾へと姿を変え、一いつ瞬く一斉に襲い掛かる。

「覚えとけよタクマ。剣にはこういう使い方もあるってなー！」

アッシュの声を合図に至近距離で炎の魔力弾、つまりはファイアボルトが炸裂。

その強大な衝撃に俺の固有結界は破れ、体ごと真後ろに吹き飛ばされてしまった。

「（ぐ、くそつ、また相手のほうが一枚上手だつたわけか…？）

アイツは剣にエンチャントした魔力を魔力弾として再利用したんだな。

当然俺のように魔法銃で一から魔力を集めるより速いわけだ。これは良い経験と言つか、発見をさせてもうつたな。

「つざやつー？ つー、いてて……」

そんな反省をしているとあつという間に地面へ転がり落ちて尻餅をつく。

受身を取るぐらいの余裕はあつたけど、流石にこれ以上は無理っぽい。

なので青白色に輝く剣を光の粒子へ戻し、俺は潔く参りましたと白旗を揚げる。

偶然にもその声に続いてチャイムが鳴り響き、最後の実戦授業は幕を閉じたのだった。

「（でも、少しばかりに戦えるようになつてきたんだよな）

3勝4敗という今日の戦績に俺はそんな確信を胸に抱いていた。

今のアッシュショウやラグナのようにまだ届かない相手もいるナビ。
なんとかミリオムぐらいなら越すことができたんだ。

時間はあり余っているのだし。少しずつ、今の差を埋めていけばいいだろ？。

そして、いつかはあの銀髪少女に。

「お~いタクマっち！ そんな所に突っ立ってないで、せつないと飯食いに行こうぜ？」

「あつ……」、言われなくてわかつてゐつてのー。」

いかんいかん、少し自分の世界に入り込んでいたか。

闘技場のエントランス前で大声を張り上げるラグナの姿が目に映る。

さうによく見るとトウカニミア、テオもその隣に佇んでいて。

どうやら今日はクラシックメンバー全員で食堂へ向かうとしている。今日は随分と張り切ったことだし当然お腹は一段と空いている。何の定食を選ぶかは決めていないが、それでも箸はよく進むことだろう。

「()この時ぐらいは試験のことを見忘れていたいな……」

そういうわけにもいかないと知りつつも。

暖かな春の陽射しとそよ風に包まれる中、俺はみんなの元へ地を蹴っていた。

- Coming Soon Next Story ! -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0366q/>

マジ レボ！ ~剣と魔法と革命と~

2011年11月6日21時30分発行